

博士学位論文

主査 野口芳子教授

日本における「ハーメルンの笛吹き男」の受容

2021年6月

蚊野千尋

## 論文要旨

### 日本における「ハーメルンの笛吹き男」の受容

蚊野千尋

本論の目的はドイツの伝説である「ハーメルンの笛吹き男」が日本でどのように受容されているかを明らかにすることである。この話についての研究はこれまで、伝説の背景に何があったのかという点に焦点を当てた歴史的な研究が主流であり、日本における受容研究は皆無に等しかった。受容に焦点を当てた包括的な研究は筆者が書いた2本の論文のみである。本論では、それらを包括し、さらなる調査を重ねた結果、発見した資料も加えて、明治、大正、昭和、平成の全時代を通して、この話の受容について考察していく。

第1章では、研究の目的、研究方法、先行研究について述べる。研究対象は文字資料のみとする。日本への受容については鳥越信、平倫子、小泉直美が研究の一部分で触れているにすぎず、取り上げている邦訳も数話のみである。

第2章では、この伝説の類話のうち、日本で主として紹介されている3つの類話について述べる。3つの類話とは、グリム兄弟が収集した話「ハーメルンの子どもたち」（以下、グリム兄弟版）、イギリス人ロバート・ブラウニングの詩「ハーメルンの色とりどりの服を着た笛吹き男」（以下、ブラウニング版）、イギリスの民俗学者アンドルー・ラングの「ネズミ捕り男」（以下、ラング版）である。これら3つの類話では、笛吹き男が町へ来る日付、笛吹き男の服装、笛吹き男が要求する報酬の金額、町に戻ってくる子どもの数や容姿などがそれぞれ異なっており、ここから邦訳の底本を推測することができる。

第3章では明治期における受容について述べる。明治期に日本に紹介された「ハーメルンの笛吹き男」は2話存在する。日本で最初の邦訳は、1896年に出版されたドイツ語教科書の訳本に収録された「ハーメルンニ迄ノ小兒」で、グリム兄弟版を忠実に訳したものである。2番目の紹介は1912年に出版された「ハメルンの鼠取」で、フリードリヒ・ホフマンが「ハーメルンの笛吹き男」伝説をもとに書いたオペラを紹介したものである。明治期に受容されたこれらの話は、のちの受容にさほど大きな影響を与えなかった。当時、ドイツ語やオペラを学んでいたのは知識層や上流階層の人々であったため、この2話を目にするのは限られた人々であったと考えられる。明治期には「ハーメルンの笛吹き男」は一般の人々にはまだ普及していなかったのである。

第4章では大正期の受容について述べる。邦訳は7話存在し、そのうち5話が子ども向けの本や雑誌に収録されている。大正期には子ども向けの雑誌や本が相次いで創刊され、そのなかに「ハーメルンの笛吹き男」の邦訳も収録されたのである。子ども向けの話で最初の邦訳は、1916年に出版された『幼年百譚 お話の庫』秋の巻所収の「笛吹き爺さん」である。訳者は少年通俗教育会だが、調査の結果、執筆者は児童雑誌『少年世界』の編者新井弘城であることが判明した。「ハーメルンの笛吹き男」は大正期になって本格的に受容され始めたのである。

第5章では昭和期の受容について述べる。昭和期は長いので3期に分けて考察する。昭和第1期（1926～1945）には邦訳は4話しか存在しない。これらの邦訳では人々はネズミの害を解決できない市長を批判したり、脅したりはしない。戦時中にあたるこの時期では、一

般大衆が為政者を批判するということが許されなかったからであろう。戦争が激化した1941年の邦訳では子どもたちは全員無事で笑顔で帰宅する。戦争に駆り出された子どもたちが無事に凱旋するよう願った親たちの願望が読みとれるような内容になっているのである。

昭和第2期（1946～1967）は邦訳数をもっとも多く、41話もの邦訳が出版される。当時の学校劇ブームと紙芝居ブームの影響からか、この話は戯曲や紙芝居という媒体でも受容されるようになる。話の内容も戦時中のものから大きく変わり、笛吹き男が報復する話から、笛吹き男が子どもたちを救出する話に改変されている。笛吹き男は報酬をもらえなかった報復として子どもたちを連れ去るのではなく、約束を守らないような大人のもとで暮らすと悪影響を受けるので、子どもたちを連れ去るのである。市長は話の最後で子どもが消えた責任を人々から厳しく追及される。戦時中の内容とは異なり、一般大衆が為政者を批判するのである。戦時中の反省から、為政者に対して間違っていることは間違っていると指摘すべきであるという人々の反省が、改変内容から読み取れる。

昭和第3期（1968～1989）には40話の邦訳が存在する。絵本の黄金期を迎えたこの時期になると、それまで主として児童雑誌に収録されていたこの話が、一気に絵本として出版されるようになる。高度経済成長が訪れたこの時期では、日本の家族のあり方が変わって「近代家族」となり、子どもが家族の中心である社会になった。邦訳でも「子どもは大切である」ということを強調する表現が目立つようになる。また、母親と父親の反応が区別して描かれ、子どもたちが消え去った後「女（母親）は泣き、男（父親）は怒る」というジェンダーによる反応の相違が加筆される。近代家族が要求する「女らしさ」と「男らしさ」が付け加えられたのである。

第6章では平成期の受容について述べる。平成期の邦訳51話のうち、20話は極端に簡略化されている。これらの話は1ページないし2ページに収められた短い邦訳で、1日1話ずつ子どもに読み聞かせることが前提で作られた物語集に収録されている。そこでは母親が子どもに読み聞かせた後、母子で話の内容について語り合うことが推奨されている。感想などを話し合うなかで物語について補完することができるため、あらすじのような短い内容でもよいと考えられたのかもしれない。この話は子どもに約束を守ることの大切さを教える話として、家庭教育に利用されるようになったのである。物語集以外の邦訳は、絵本、単行本、戯曲、雑誌のかたちで出版される。絵本はブラウニング改変版が多く、単行本はそれぞれの版に忠実に訳されることが多い。雑誌ではいずれの邦訳も話は短くされている。戯曲は小学生用の学校劇のためのものであるため、クラスの子どもたち全員に役が与えられるように登場人物が増やされ、道徳的な内容になるよう改変された改作版になっている。2010年にはグリム兄弟版に忠実な絵本が初めて出現する。明治期から平成期まで、グリム兄弟版に忠実な絵本はこの池田香代子訳の絵本のみであり、ドイツ語から訳されたこの絵本が持つ意味は大きいといえる。

第7章の結論では、明治期から平成期までの邦訳を通観し、改めて日本における受容について考察する。明治期には主として知識層に紹介された「ハーメルンの笛吹き男」は、大正期になると一気に子どもたちへと広まっていく。大正期以降、いずれの時代の邦訳も、1番多いのがブラウニング版である。その理由は、大正期のブラウニングブームの他に、ブラウニング版の内容が子どもに提供するのに適していると考えられたからである

う。3つの類話のうち、グリム兄弟版は資料として集められた話であり、子ども向けのものではない。ブラウニング版とラング版はいずれも子ども向けのものであるが、話の結末が異なる。ラング版では子どもたちの行き先は不明であるが、ブラウニング版では子どもたちは素晴らしい楽園へ行ったと語られる。読者である子どもにとっては、ブラウニング版のほうが魅力的だと判断されたのであろう。さらにブラウニング版には話の最後に、「約束は守らないといけない」という教訓が付記されている。大正期以降、主として子ども向けの媒体で出版された「ハーメルンの笛吹き男」は、昭和期には美しい挿絵入りの絵本になり、家庭で主として子どもに受容されるようになる。学校でも学校劇や教科書に採用され、約束を守ることの大切さを説く教訓話として道徳教育に利用されるようになる。

平成期には「おやすみ前に母に読み聞かせてもらおう話」としてダイジェスト版になった「ハーメルンの笛吹き男」が、広く一般の人々に普及するようになる。しかし、それによって危惧されることは、子どもどころダイジェスト版でかじっただけで、この伝説を知っていると思いついでいる人々が増えることである。それらの人々はもしかすると、本来の西洋の伝説を知ることなく、一生を終えるのではないだろうか。このような筆者の危惧が、単なる杞憂であることを祈る。

## 目次

第1章 序論 .....	1
1. 研究の目的 .....	1
2. 研究方法 .....	2
3. 先行研究について .....	2
1) 概要 .....	2
2) 鳥越信の表（1975年） .....	2
3) 平倫子の論文（1987年） .....	3
4) 小泉直美の論文（2020年） .....	4
4. 「ハーメルンの笛吹き男」伝説について .....	5
第2章 日本で主として紹介されている「ハーメルンの笛吹き男」の類話 .....	6
1. 概要 .....	6
2. グリム兄弟版「ハーメルンの子どもたち」 .....	6
1) 概要 .....	6
2) あらすじ .....	6
3) 底本について .....	7
3. ブラウニング版「ハーメルンの色とりどりの服を着た笛吹き男」 .....	8
1) 概要 .....	8
2) あらすじ .....	9
3) 底本について .....	10
4. ラング版「ネズミ捕り男」 .....	11
1) 概要 .....	11
2) あらすじ .....	11
3) 底本について .....	12
5. グリム兄弟版、ブラウニング版、ラング版の比較 .....	14
第3章 明治期における「ハーメルンの笛吹き男」 .....	16
1. 概要 .....	16
2. 「ハーメルンの笛吹き男」の最初の邦訳について .....	16
1) 概要 .....	16
2) 中村訳 <sup>1)</sup> と原典の比較 .....	16
3) 中村が使用した辞書 .....	19
4) 邦訳者について .....	21
5) 『エンゲリン読本』について .....	23

(1) 概要.....	23
(2) 使用していた学校 .....	24
3. 柴田環訳「ハメルンの鼠取」 .....	25
1) 概要.....	25
2) あらすじ.....	25
3) 内容について.....	26
4) 発行の目的.....	26
5) 著者について.....	27
4. 明治期における受容のまとめ .....	28
第4章 大正期における「ハーメルンの笛吹き男」 .....	31
1. 邦訳された「ハーメルンの笛吹き男」 .....	31
1) 概要.....	31
2) 少年通俗教育會訳「笛吹き爺さん」 <sup>③</sup> (1916 (大正5) 年10月) .....	31
(1) 邦訳の内容について .....	31
(2) 「笛吹き爺さん」 <sup>③</sup> とラング版の比較表【表7】 .....	32
(3) 表の分析と考察 .....	32
(4) 訳者について .....	33
3) 水谷勝訳「魔法の笛」 <sup>④</sup> (1919 (大正8) 年12月) .....	34
(1) 邦訳の内容について .....	34
(2) 訳者について .....	35
(3) 挿絵について .....	36
4) 文献書院訳「ハメルンの斑衣の笛吹」 <sup>⑤</sup> (1923 (大正12) 年1月) .....	36
5) 矢崎忠蔵訳「笛吹き翁さん」 <sup>⑥</sup> (1923 (大正12) 年9月) .....	37
6) 岡邊白夜著「鼠捕りの男」 <sup>⑦</sup> (1925 (大正14) 年2月) .....	38
7) 近藤宗男訳「ハムリンの『斑の笛吹き』」 <sup>⑧</sup> (1925 (大正14) 年11月) .....	39
8) 雑賀忠義訳「ハメルンのまんだら笛吹」 <sup>⑨</sup> (1926 (大正15) 年11月) .....	39
9) 大正期の邦訳のまとめ.....	40
2. 教科書における「ハーメルンの笛吹き男」 .....	41
1) 概要.....	41
2) 「ハーメルンの笛吹き男」を掲載している教科書の一覧表【表8】 .....	41
3) ドイツ語教科書で紹介された「ハーメルンの笛吹き男」 .....	41
(1) <i>Neues Deutsches Lesebuch mit Anmerkungen</i> エラー! ブックマークが定義されていません。	
(2) <i>Deutsche Prosa, I</i> .....	43
4) 英語教科書で紹介された「ハーメルンの笛吹き男」 .....	44
(1) <i>The Laurel Readers, Book Three</i> .....	44

(2) <i>A School manual of English Composition, vol.1</i> .....	44
(3) <i>Inouye's New English Readers</i> .....	45
(4) <i>A Teachers' Manual of Notes on The Pacific Readers, No.4</i> .....	45
(5) <i>The Pacific Readers, No.3 revised</i> .....	46
(6) <i>The Pacific Readers, No.4 revised</i> .....	46
(7) <i>The Rose Readers for Girls' Schools, bk.4</i> .....	46
(8) 教科書のまとめ .....	47
3. 大正期における受容のまとめ .....	47
第5章 昭和期における「ハーメルンの笛吹き男」 .....	49
1. 邦訳の概観 .....	49
2. 第1期（1926－1945）の邦訳 .....	49
1) 邦訳の概観 .....	49
2) 昭和第1期の邦訳の一覧表【表10】 .....	49
3) それぞれの邦訳の概要と改変箇所について .....	49
(1) 第1A期 .....	49
① 「斑の笛吹」 ⑩（1928（昭和3）年8月） .....	49
② 「魔法の笛」 ⑪（1934（昭和9）年11月） .....	50
③ 「魔法の笛」 ⑫（1938（昭和13）年1月） .....	51
(2) 第1B期 .....	52
① 「魔法の笛」 ⑬（1941（昭和16）年4月） .....	52
4) 分析と考察 .....	52
(1) 出版数が著しく減少した理由について .....	52
(2) 話の内容の改変について .....	53
3. 第2期（1946－1967）の邦訳 .....	55
1) 邦訳の概観 .....	55
2) 昭和第2期の邦訳の一覧表【表11】 .....	56
3) それぞれの邦訳の概要と改変箇所について .....	58
(1) 「ブラウニング版」の邦訳（21話） .....	58
① 忠実な邦訳について（6話） .....	58
② 改変された邦訳について（7話） .....	60
③ 改作された邦訳について（8話） .....	61
(2) 「グリム兄弟版」の邦訳（7話） .....	64
① 忠実な邦訳について（5話） .....	64
② 改変された邦訳について（2話） .....	66
(3) 「ラング版」の邦訳（5話） .....	66

①忠実な邦訳について（2話）	66
②改変された邦訳について（2話）	67
③改作された邦訳について（1話）	67
(4) いずれの版にも分類できない不明版（8話）	68
4) 分析と考察	70
(1) 邦訳が掲載されている媒体について	70
(2) 単行本と雑誌が増えた理由について	70
(3) 雑誌と単行本の話の長さの傾向について	71
(4) 戯曲が出現する理由について	73
(5) 紙芝居が出現する理由について	74
(6) 話の内容の改変について	75
4. 第3期（1968－1989）の邦訳	77
1) 邦訳の概観	77
2) 昭和第3期の邦訳の一覧表【表13】	78
3) それぞれの邦訳の概要と改変箇所について	80
(1) ブラウニング版の内容の話（15話）	80
①忠実な邦訳について（8話）	80
②改変された話について（5話）	82
③改作された話について（2話）	84
(2) ラング版の内容の話（11話）	85
①忠実な邦訳について（1話）	85
②改変された話について（2話）	85
③改作された話について（8話）	85
(3) グリム兄弟版の内容の話（7話）	88
①忠実な邦訳について（2話）	88
②改変された話について（3話）	89
③改作された話について（2話）	89
(4) いずれの版にも分類できない不明版（7話）	90
4) 分析と考察	93
(1) 邦訳が掲載されている媒体について	93
(2) 石油ショックの影響について	94
(3) 話の内容の改変について	95
①改変の特徴	95
②子ども観の変容	95
③ジェンダー観の刷り込み	98
5. 昭和期全体における受容のまとめ	99



第6章 平成期における「ハーメルンの笛吹き男」	102
1. 邦訳の概観	102
2. 平成期の邦訳の一覧表【表14】	102
3. それぞれの邦訳の概要と改変箇所について	105
1) 「ブラウニング版」の邦訳（25話）	105
(1) 忠実な邦訳について（5話）	105
(2) 改変された話について（14話）	106
(3) 改作された話について（6話）	109
2) 「グリム兄弟版」の邦訳（4話）	111
(1) 忠実な邦訳について（2話）	111
(2) 改変された話について（2話）	112
3) 「ラング版」の邦訳（4話）	112
(1) 忠実な邦訳について（2話）	112
(2) 改変された話について（2話）	113
4) いずれの版にも分類できない不明版（18話）	113
4. 分析と考察	117
1) 邦訳が掲載されている媒体について	117
2) 物語集が出現する理由について	117
2) 物語集以外の邦訳について	120
3) 話の内容の改変について	122
(1) 改変の特徴	122
(2) 話の簡略化とコメントの付与	122
(3) 「思いやり」の強調	124
5. 平成期における受容のまとめ	125
第7章 結論	128
謝辞	131
注	132
参考文献	147
図版出所一覧	156
【巻末資料1】邦訳の一覧表	157
【巻末資料2】邦訳の分類表	164

## 第1章 序論

### 1. 研究の目的

本研究の目的は、ドイツの伝説である「ハーメルンの笛吹き男」(Der Rattenfänger von Hameln)が日本でどのように受容されているかを明らかにすることである。

「ハーメルンの笛吹き男」は北ドイツの都市であるハーメルン(Hameln)を舞台にした伝説である。内容は、色とりどり(bunt)の布でできた服を着た笛吹き男が、ハーメルンの町にやってきてネズミを退治するが、約束の報酬を支払ってもらえなかったため、報復として130人の町の子どもたちを連れ去るというものである。これは1284年6月26日に実際に起こったことであるとされており、ハーメルンには子どもたちが連れ去られた際に通ったといわれる通りが実在する。笛吹き男が笛を吹いて子どもたちを連れ去ったことから、この通りは今でも楽器の演奏が禁じられており、舞楽禁止通り(Bungelosestraße)と呼ばれている。この伝説はグリム兄弟(兄ヤーコプ・グリムJacob Grimm, 1785-1863、弟ヴィルヘルムWilhelm Grimm, 1786-1859)が編纂した『ドイツ伝説集』(Deutsche Sagen, 上巻1816)の245番目に「ハーメルンの子どもたち」(Die Kinder zu Hameln)(以下、グリム兄弟版)という題名で収録されており、世界的に有名なドイツの伝説の1つである。

この伝説についての研究はこれまで、伝説の背景に何があったのかという点に焦点を当てた歴史的な研究が主流であった<sup>1</sup>。笛吹き男の正体や子どもたちが消えた本当の理由などについて、多くの説が唱えられてきた<sup>2</sup>。この伝説についての研究として日本でよく知られている阿部謹也の『ハーメルンの笛吹き男 ―伝説とその世界―』<sup>3</sup>も、伝説を歴史的な背景から読み解こうとするものである。

一方、この伝説そのものがどのように日本に受け入れられたかという受容研究は皆無に等しい。この伝説の邦訳作品について述べている論文や書籍は3点存在するが、いずれも一部の作品を簡単に紹介しているにすぎない<sup>4</sup>。邦訳の本文を分析し、日本での受容に焦点を当てた包括的な研究としては、拙論「日本における『ハーメルンの笛吹き男』の受容―大正期(1912-1926年)を中心に―」<sup>5</sup>と「日本における『ハーメルンの笛吹き男』の受容―明治期から昭和期まで―」<sup>6</sup>のみである。この博士論文はこれら2つの研究を包括し、新たに発見した資料を加えて内容をより掘り下げて考察したものである。

受容研究が乏しいのは「ハーメルンの笛吹き男」だけではない。グリム兄弟の『ドイツ伝説集』に収録されている伝説については、いずれもこれまで受容研究がされてこなかった。これは、同じグリム兄弟が編纂した『子どもと家庭のメルヒェン集』(Kinder- und Hausmärchen, 初版1812)(以下、『グリム童話集』)の受容研究が数多く存在するのは、対照的である。これまで『グリム童話集』にばかり焦点が当てられていたグリム研究に、本論は一石を投じるものといえよう。

本論では、「ハーメルンの笛吹き男」について下記の3つの点に焦点を当てて考察する。1つ目は、この伝説がいつから日本に紹介されたのかということである。2つ目は、この伝説が日本でどのように改変されたのかということである。3つ目は、この伝説が日本で改変された理由は何かということである。これらについて、もっとも古いと考えられる邦訳が出版された明治期から、平成期までの邦訳を順に分析し、社会的、文化的、歴史的視点から考察していくことにする。

## 2. 研究方法

明治期から平成期までに出版された145話の「ハーメルンの笛吹き男」について、その内容を分析し、考察していく。改変の有無および改変の内容を明らかにした後、それらの資料を時代ごとに明治期、大正期、昭和期、平成期に分け、資料が出版された時代背景と照らし合わせながら、この伝説が日本でどのように受容されているかについて考察する。

本研究では主として、小説、絵本、戯曲などの文字資料を研究対象として扱う。日本には「ハーメルンの笛吹き男」伝説を題材にした漫画、アニメ、ゲーム、ドラマ、楽曲なども存在するが、いずれも話の筋や舞台設定が元の伝説と著しく異なるパロディ作品が多いため、研究対象から除外することにする<sup>7</sup>。また、単行本、絵本、戯曲であっても、「笛吹き男」や「子どもを連れ去る」といった話のモチーフのみを借用しているものは、研究対象から除外する。たとえば、講談社の青い鳥文庫から出版されている『笛吹き男とサクセス塾の秘密』には、「有名進学塾のサクセス塾の合宿に参加している130人の生徒を消す」と予告する笛吹き男が登場する。この話のモチーフが「ハーメルンの笛吹き男」伝説から借用されているのは明らかだが、話の中心は主人公の夢水清志郎と語り手の岩崎三姉妹であり、話の内容は伝説の内容とまったく異なっている。それゆえこの種の話は研究対象から除外することにする<sup>8</sup>。

筆者の調査により現在、日本には145話の「ハーメルンの笛吹き男」が存在することが確認された。これらの資料は国立国会図書館、大阪府立中央図書館国際児童文学館、公益財団法人三康文化研究所附属三康図書館、公益財団法人日本近代文学館などでの複写、書店やインターネット上の店舗での購入という方法で収集した<sup>9</sup>。話の題名は時代によって「笛吹き爺さん」、「鼠取りの男」、「魔法の笛」というように改変されているが、本文から話の内容が「ハーメルンの笛吹き男」であると判断した場合は研究対象とした。「ハメリンの笛吹」、「ハンメルンのふえふき」などの表記の揺れがみられるものも「ハーメルンの笛吹き男」であるとして、研究対象に含めている。

日本での受容について考察する際、ドイツ語教科書や英語教科書の影響を無視することはできない。そのため、明治期と大正期は邦訳作品だけでなく、ドイツ語や英語で表記された教科書も考察の対象とする。

まず各時代の邦訳の傾向を明らかにし、それらの邦訳のうち特筆すべきものに焦点を当て、当時の社会の情勢が邦訳にどのように反映されているのかについて考察する。

## 3. 先行研究について

### 1) 概要

「ハーメルンの笛吹き男」の日本での受容についての先行研究は3点存在する。鳥越信の『日本児童文学史年表』<sup>10</sup>、平倫子の論文「『ハーメルンの笛吹き』伝説と子ども」<sup>11</sup>、小泉直美の論文「『エンゲリン讀本』における邦訳されたグリム童話とドイツ伝説 ―初出の邦訳を中心に―」<sup>12</sup>である。これらはいずれも、先行研究というより先行調査というべき内容である。そこでまず、それらの内容について順を追って見ていくことにする。

### 2) 鳥越信の表 (1975年)

鳥越信の『日本児童文学史年表』は、1868 (明治元) 年1月から1945 (昭和20) 年8月15

日までに出版された児童文学作品を表にまとめたものである。本書の冒頭にある「凡例」で鳥越が「本年表は、日本の児童文学に関連するあらゆる事象を、総合的・網羅的にとりあげ、それを編年体の表に示そうと試みたもの」<sup>13</sup>と述べているように、各作品を表にまとめることが目的であるため、作品内容には触れられていない。

表は出版年月ごとに分かれており、さらにそれぞれが小説や翻訳といったジャンルに分けられている。表のなかに記されているのは、作者、作品の題名、書名、出版社、出版日のみである。

『日本児童文学史年表』に掲載されている「ハーメルンの笛吹き男」の邦訳についての情報は3箇所のみである。それらの情報をわかりやすくまとめると下記の【表1】のようになる。

【表1】『日本児童文学史年表』に掲載されている「ハーメルンの笛吹き男」の邦訳についての情報

出版年月日	掲載ジャンル	掲載内容
1916（大正5）年10月15日	翻訳	少年通俗教育会編『幼年百譚お話の庫』秋の巻 博文館 <sup>14</sup>
1923（大正12）年9月1日	翻訳	「笛吹き翁さん」 <sup>ブラウニング</sup> 矢崎 忠蔵 「少年文学」 <sup>15</sup>
1925（大正14）年11月20日	翻訳	近藤宗男『白鳥の騎士』一児童図書館叢書一 アイデア書院 <sup>16</sup>

鳥越の表に掲載されているのは大正期に出版されたもののみである。いずれの邦訳も翻訳の欄に掲載されているため、これらの話が外国のものを訳したものであるということだけは確かである。しかし、それぞれの作品がどの国のどの話の翻訳であるかは、表からは読み取ることができない。上記の3冊が「ハーメルンの笛吹き男」の邦訳であると断定できるのは、各作品の本文を筆者が実際に確認したからである。

鳥越の表は先行研究というには情報が少なすぎる。しかし、「ハーメルンの笛吹き男」の邦訳が大正期に存在していたという事実を1975（昭和50）年に明らかにしていた点は評価すべきである。

鳥越のこの表を参考にして「ハーメルンの笛吹き男」の日本への最初の移入は1923（大正12）年の「笛吹き翁さん」であると述べたのが、平である。

### 3) 平倫子の論文（1987年）

平は論文「『ハーメルンの笛吹き』伝説と子ども」で「ハーメルンの笛吹き男」の受容について下記のように述べている（下線は筆者による）。

『日本児童文学史年表』I（鳥越信編、明治書院、1975）によれば、この伝説の日本への最初の移入と思われるものは、1923年（大正12年）の、ブラウニング作、矢崎忠蔵訳「笛吹き翁さん」（「少年文学」）である。これはブラウニングの十五連の詩の一連ずつを一話にまとめ、十五話からなる物語に仕立てている。次に1934年（昭和9年）浜田広介訳、耳野卯三郎画「魔法の笛」（「幼年倶楽部」）があるが、これは上、下からなる物語で、教訓もついておらず、グリム原典のものと考えられる。さらに『出版年鑑』（出版ニュース社、1965）によれば、子どもの本としてではなく『ブ

ラウニング詩選集』(1923年)のなかに「ハメルンの笛吹き男」(訳者不詳、文献書院)が出ており、さらに1928年(昭和3年)『世界の神話伝説大系』の中の「ドイツの神話伝説II」(松村武雄篇)に『斑の笛吹き』がみられる。グリム兄弟著、河村隆史編・訳『ドイツ伝説集・タンホイザー』(東洋文化社、1981年)では「ハーメルンの子供たち」になっている<sup>17</sup>。

平が挙げている邦訳の数は、鳥越の3話よりも多く5話である。しかし、話の内容については概略を述べているにすぎない。

平の記述には正確さに欠ける箇所が複数存在する。まず、矢崎訳「笛吹き翁さん」について、平は15話からなると述べている。しかし、実際にはこの話は1つの話で、15節に分けられているにすぎない<sup>18</sup>。次に平は浜田訳「魔法の笛」の底本はグリム兄弟版であろうと述べているが、実際はグリム兄弟版ではなくブラウニング版である<sup>19</sup>。ブラウニング版とは、「ハーメルンの笛吹き男」の類話の1つで、イギリスの詩人ロバート・ブラウニング(Robert Browning, 1812-1889)の詩「ハーメルンの色とりどりの服を着た笛吹き男」(The Pied Piper of Hamelin) (以下、ブラウニング版)のことである<sup>20</sup>。この詩は15連に分かれており、詩の最後には教訓が付記されている。一方、「魔法の笛」には15連の詩もなく、教訓もない。そのため平は、ブラウニング版ではなくグリム兄弟版であろうと判断したと思われる。しかし、内容を見るとむしろブラウニング版を改変した内容になっている。平はおそらくグリム兄弟版の話の内容もブラウニング版の話の内容も詳しく知らなかったのであろう。

平の論文も先行研究というには情報が少なすぎて、内容も不正確である。しかし、2020(令和2)年まで「ハーメルンの笛吹き男」の邦訳について述べている論文がないことを踏まえると、平の論文は無視できない存在であるといえよう。鳥越の表よりも邦訳を2話多く紹介した点、それら5話が「ハーメルンの笛吹き男」の邦訳であると述べた点は評価すべきである。

#### 4) 小泉直美の論文(2020年)

小泉の論文は平の論文から約30年後のものである。小泉は明治期に使用されていたドイツ語教科書『エンゲリン讀本』にグリム童話とドイツの伝説が収録されていることを発見し、それらの初出の邦訳を紹介した。そのなかに「ハーメルンの笛吹き男」も収録されており、「ハーメルンニ迄ノ小兒等」という題名であることとその内容の概略が紹介されている<sup>21</sup>。該当の箇所は3章の3節で、「『ドイツ伝説集』のなかの訳文『DS245ハーメルンの子どもたち』との比較」という題名で次のように紹介されている。

「ハーメルンニ迄ノ小兒等」は、1896(明治29)年に出版された中村訳『エンゲリン第二讀本獨學自在』上巻に収録されているものである。中村は原文にほぼ忠実に訳しているが、笛吹き男が子どもたちを連れ去る月日が異なっている。原文では6月26日(Am 26. Juni)なのだが、中村訳では1か月後の7月26日になっている。ドイツ語の7月はJuliで、6月はJuniであり、似ているのでおそらく間違えたのであろう<sup>22</sup>。

小泉は「ハーメルンニ迄ノ小兒等」について、出版年、訳者、収録文献を明らかにし、訳文についても日付が誤訳されていることを指摘している。論文の文字数が上限があるためか、小泉は主として『エンゲリン讀本』に収録されている話のうち、初出となるグリム童話にのみ焦点を当てて紹介している。そのため「ハーメルンニ迄ノ小兒等」の内容について述べているのはこの箇所のみであるが、それまで初出とされていた1923（大正12）年を大きく塗り替えたという点で、貴重な発見をした論文と位置づけることができる。

#### 4. 「ハーメルンの笛吹き男」伝説について

「ハーメルンの笛吹き男」伝説は、ハーメルンで実際に起こった出来事が語られたものとされている。ハーメルンの中央にあるマルクト教会にはかつてこの伝説についてのガラス絵がはめられており、その横にガラス絵に関する碑文が添えられていたという。このガラス絵がいつから存在したのかは判明していないが、1300年ごろに教会の改築が行われた際にはすでに存在していたとされ、このガラス絵と碑文が「ハーメルンの笛吹き男」伝説を伝える最古の資料であるといわれている<sup>23</sup>。ガラス絵とその碑文が伝えているのは、ヨハネとパウロの日、つまり6月26日に笛吹き男に連れられて130人の子どもたちがハーメルンの町から出ていき、カルワリオ<sup>24</sup>の方へと向かいコッペン山で姿を消したという内容である<sup>25</sup>。事件が起こったのは1284年6月26日と伝えられているが、事件が発生したとされる1284年当時書かれた資料は現存していない<sup>26</sup>。

この伝説はその後さまざまな文献で語られるが、伝説の内容は時代や文献によって変遷している。たとえば、1430年から1450年ごろに書かれたとみられているリューネブルクの手書本（Lüneburger Handschrift）では<sup>27</sup>、ハーメルンにやってきたのは上等な服を着た30歳くらいの男であったという<sup>28</sup>。1555年にはこの伝説について書かれた初めての印刷物が出版され<sup>29</sup>、これを皮切りに「ハーメルンの笛吹き男」伝説の類話はさらに増えていく。笛吹き男は主として「奇妙な」「風変わりな」人物であると語られるようになる。また、連れ去られた子どものうち2人だけが町に戻ってきたというエピソードが追加され、聾啞の子と盲目の子の2人だけ帰ってきたと語られる<sup>30</sup>。この伝説は人々を魅了し続け、1803年にはゲーテが、この伝説を元に「ネズミ捕り男」（Der Rattenfänger）という詩を書いている。

数多く存在する「ハーメルンの笛吹き男」の類話のうち、日本ではいずれの話が紹介されているのであろう。それらの話については、次章で述べることにする。

## 第2章 日本で主として紹介されている「ハーメルンの笛吹き男」の類話

### 1. 概要

「ハーメルンの笛吹き男」には多くの類話が存在する。邦訳の内容を精査した結果、主として3つの類話が底本として使用されていることが判明した。その類話とは、グリム兄弟が編纂した『ドイツ伝説集』に収録されている「ハーメルンの子どもたち」（以下、グリム兄弟版）<sup>31</sup>、イギリス人ロバート・ブラウニングの詩集『鈴とざくろ』（*Bells and Pomegranates*, 1842）に収録されている詩「ハーメルンの色とりどりの服を着た笛吹き男」（以下、ブラウニング版）<sup>32</sup>、イギリス人アンドルー・ラング（Andrew Lang, 1844-1912）の『あかいろの童話集』（*The Red Fairy Book*, 1890）に収録されている「ネズミ捕り男」（*The Ratcatcher*）（以下、ラング版）である<sup>33</sup>。これらをわかりやすくまとめると、下記の【表2】のようになる。

【表2】日本で主として紹介されている「ハーメルンの笛吹き男」の類話

出版年	話の題名	著者／編者	収録本の題名	本文の言語
1816年	「ハーメルンの子どもたち」 (Die Kinder zu Hamelen)	グリム兄弟	『ドイツ伝説集』 ( <i>Deutsche Sagen</i> )	ドイツ語
1842年	「ハーメルンの色とりどりの服 を着た笛吹き男」 (The Pied Piper of Hamelin)	ロバート・ブラウニング	『鈴とざくろ』 ( <i>Bells and Pomegranates</i> )	英語
1890年	「ネズミ捕り男」 (The Ratcatcher)	アンドルー・ラング	『あかいろの童話集』 ( <i>The Red Fairy Book</i> )	英語

3つの類話のうち、1番古いのはグリム兄弟版、2番目に古いのはブラウニング版、3番目に古いのはラング版である。グリム兄弟版のみがドイツ語で書かれ、ブラウニング版とラング版は英語で書かれている。それぞれの話について、順を追って見ていくことにする。

### 2. グリム兄弟版「ハーメルンの子どもたち」

#### 1) 概要

「ハーメルンの子どもたち」はグリム兄弟が編纂した『ドイツ伝説集』上巻の245番目に収録されている。『ドイツ伝説集』に収録されている話は主として書物から収集されており、「ハーメルンの子どもたち」も同様に書物から収集されたものである。この本は家庭での読み物として出版された『グリム童話集』とは異なり、主として歴史的資料集として出版された<sup>34</sup>。グリム兄弟は「ハーメルンの子どもたち」の出典として10冊の本の題名を付記している<sup>35</sup>。

#### 2) あらすじ

グリム兄弟版のあらすじは、下記のようなものである。

1284年、ハーメルンに奇妙な男が現れる。この男はさまざま色が混じった布でできた上着を着ているので、「まだら男（ブンティング）」と呼ばれているという。男はネズミ捕り男を自称し、いくらかの代金をもらえれば町からすべてのネズミを退治すると約束する。市民たちは男に一定の報酬を支払うことを約束する。ネズミ捕り男が小さな笛を取り

出して吹くと、すべての家々からネズミが出てきて男の周りに集まる。町にいるネズミがすべて出てきたと思った男は町から出て行き、ネズミの大群もその後続く。男はヴェーザー川までネズミを連れて行くと、服をたくし上げて川の中に入る。ネズミは男の後を追って川に入り、すべて溺死する。市民たちはネズミの害から解放されると、約束した報酬を支払うのが惜しくなり、さまざまな口実を並べて支払いを拒否する。男は怒って町を去る。その後、6月26日のヨハネとパウロの日の早朝7時、もしくは別の言い伝えによると正午に、男は再び町に現れる。男は獵師の格好をして、恐ろしい形相をし、奇妙な赤い帽子を被っている。男が笛を鳴らすと、今度はネズミではなく、4歳以上の少年と少女が走り出てくる。そのなかには成人した市長の娘もいる。子どもたちの群れは男の後をついて行き、山に着くとそこで男と子どもたちは姿を消す。その様子を、子どもを抱いて後からついて行った子守の娘が目撃し、町に戻って人々に伝える。親たちは嘆き悲しみながら子どもたちを探し、母親たちは悲痛な叫び声を上げて泣く。ただちに、子どもたち全員かもしくはそのうちの数人を誰か見なかったかどうかを問い合わせるために、あらゆる所に使者が派遣される。町から消えた子どもたちは全部で130人である。幾人かが言うには、その後2人の子どもが町に帰って来たという。ひとは盲目で、もうひとは口がきけなかったという。盲目の子は子どもたちが消えた場所がどこであるかを示すことはできなかったが、子どもたちが笛吹き男にどのようにして行ったのかを説明し、口がきけない子どもは子どもたちが消えた場所を指し示したという。また、他の説によれば、ひとりの小さな男の子が下着のままついて行ったが、上着を取りに戻ったため災難から逃れたという。この男の子が再び山に戻った時には、他の子どもたちは穴の中に消えてしまっていたのだという。この穴は今でも見せてもらうことができる。子どもたちが市門から町を出て行く際に通った通りは「舞樂禁止通り」と名付けられ、音楽を鳴らしたり踊ったりすることが禁止されている。花嫁が楽隊を伴って教会へ行く時も、この路地を通る間、楽師は静かにしなければならない。子どもたちが姿を消したハーメルンの近郊の山はポッペンベルクと呼ばれ、山の左右には十字の形をした2つの石が立てられている。幾人かが言うには、子どもたちは穴の中へ連れて行かれ、その後ジーベンビュルゲンで再び姿を現したという。ハーメルンの市民はこの出来事を市政記録に書き留めさせ、公示の際には、子どもたちが消えた日から何日経ったのかを数えることにしたという。ザイフリートによれば、市政記録に記されている日付は6月26日ではなく6月22日であるという。市庁舎には、「キリスト生誕の後、1284年に、ハーメルンの130人の子どもたちが笛吹き男に連れ去られてコッペン山で姿を消した」という内容の詩が刻まれている。また、新門にはラテン語で「魔術師が130人の子どもを連れ去ってから272年後にこの門は建てられた」という内容の詩が刻まれている。1572年、市長はこの話を教会の窓に描かせ、文章を添えさせたが、その文章のほとんどは判読できなくなっている。また、この出来事にちなんだ貨幣も鑄造される<sup>36</sup>。

### 3) 底本について

グリム兄弟が出典として挙げているのは下記の10冊である。グリム兄弟が挙げている順番に、サミュエル・エーリッヒ (Samuel Erich, c.1620-1682) の『ハーメルンの子どもたちの失踪』 (*Exodus Hamelensis*, 1654)、テオドール・キルヒマイヤー (Theodor Kirchmaier, 1645-1715) の『ハーメルンの子どもたちの不幸な失踪』 (*Vom unglücklichlichen Ausgang*



*der hamelischen Kinder*, 1702)、ヨハン・ヴァイアー (Johann Weyer<sup>37</sup>, 1515-1588) の『悪魔の幻惑』 (*De praestigiis daemonum*, 1586)、ハインリッヒ・マイボーム (Heinrich Meibom, 1638 -1700) の『ドイツのこと』 (*Rerum germanicarum scriptores*, 1688<sup>38</sup>)、アンドレアス・ホンドルフ (Andreas Hondorf, 1530-1572) の『先例の庫』 (*Promptuarium exem-plorum*, 1568)、ヨハン・ベッヒャー (Johann Becherer, ?-1617) の『新チューリングゲンの歴史書』 (*Neue Thüringische Chronica*, 1601)、ヨハン・ハインリッヒ・ザイフリート (Johann Heinrich Seyfried, 1640-1715) の『不可思議な自然の奥底』 (*Medulla mirabilium naturae*, 1679)、ヨハン・ヒュプナー (Johann Hübner, 1668-1731) の『地理学全集』 (*Vollständige Geographie*, 1730)、リチャード・ヴェルステガン (Richard Verstegan, c.1550-1640) の『朽ちた知性の回復』 (*Restitution of Decayed Intelligence*, 1605)、そして著者不明の『ハーメルン歴史書』 (*Die hamelsche Chronik*<sup>39</sup>) である。それらの後に「その他」 (u. a. m.<sup>40</sup>) と書かれていることから、さらに他の資料を参照したと考えられるが、いずれにせよ題名が挙げられているこれら10冊が主要な出典であると考えられる。

グリム兄弟による注記は不完全で間違っていることが多い。書名の一部や出版年が省略されていたり、話の内容からみて直接使用していないと考えられる資料が列記されていたりする<sup>41</sup>。そのため、たとえばグリム研究家のウターやレレケはそれぞれ、『ドイツ伝説集』の出典を調べ直し、正しい注釈をつけ直している<sup>42</sup>。グリム兄弟版の出典と思われるすべての資料の内容を確認すると、グリム兄弟版に話の内容が酷似しているのはヴァイアーの『悪魔の幻惑』である。おそらくグリム兄弟はこの本を底本として使用したのだろう。「ハーメルンの子どもたち」の本文の後半には「ザイフリートによると」 (Nach Seyfried<sup>43</sup>) という記述がある。グリム兄弟版は『悪魔の幻惑』を主として底本に用い、その補足としてザイフリートの『不可思議な自然の奥底』も使用したのであると考えられる。

### 3. ブラウニング版「ハーメルンの色とりどりの服を着た笛吹き男」

#### 1) 概要

「ハーメルンの色とりどりの服を着た笛吹き男」は、1842年に出版された詩集『鈴とざくろ』第3巻の1番最後に掲載された作品である<sup>44</sup>。作者はイギリスの詩人ロバート・ブラウニングである。ブラウニングは、日本では主として上田敏が訳した詩「春の朝」の作者として知られている。

この「ハーメルンの色とりどりの服を着た笛吹き男」という詩はもともと、ブラウニングの友人マクリーディ (William Charles Macready, 1793-1873) の息子ウィリアム (William) のために執筆された。息子のウィリアムが風邪で長く病床にいたので、彼が絵を描けるような詩を書いてほしいとマクリーディに頼まれ、ブラウニングはこの詩を書いたのである<sup>45</sup>。そのため、この詩の内容は子ども向けで物語性に富んだものとなっている。

ブラウニングははじめ、この詩は出版するほどの作品ではないと考えていた。しかし友人のアルフレッド・ドメット (Alfred Domett, 1811-1887) がこの詩を称賛し、『鈴とざくろ』に入れるよう勧めたのである<sup>46</sup>。『鈴とざくろ』第3巻は詩の分量が不足していたこともあり、ブラウニングは「ハーメルンの色とりどりの服を着た笛吹き男」を『鈴とざく

る』に収録した<sup>47</sup>。その後、この詩は1888年にイギリスで、ケイト・グリーンナウェイ (Kate Greenaway, 1846-1901) の挿絵がつけられた絵本として出版された<sup>48</sup>。

## 2) あらすじ

ブラウニング版のあらすじは、下記のようなものである。

ブラウンシュヴァイクのハーメルン市は、有名なハノーヴァ市の近くにある。ヴェーザー川は深くて広い川で、ハーメルン市の南側を流れている。今から約500年前<sup>49</sup>、ハーメルンの人々は動物の害に大いに悩まされている。その動物とはネズミである。ネズミは、犬に噛みつき、猫を噛み殺し、揺り籠にいる赤子をかじり、桶の中のチーズを食べ、料理人が持っている柄杓の中のスープをすすり、塩漬けニシンの樽を噛み破り、男たちの外出用の帽子に巣を作り、女たちの喋り声を鳴き声で打ち消す。ハーメルンの人々は一丸となって市役所におしかけ、「市長の無能っぷりは明らかだ」「議員たちには呆れたものだ」「ネズミの害を何とかしなければ免職させるぞ」と市長と市会議員に詰め寄る。市長と市会議員たちはネズミの害を解決するための会議を行なうが、良い案が思い浮かばない。すると、誰かが会議室の扉を叩くので、市長は「入れ」と言う。部屋に入ってきたのは奇妙な身なりの男で、半分は黄色で半分は赤色の、足元まで届く長い服を身に纏っている。男は背が高くて瘠せていて、青く細い眼をしていて、明るい色の髪は整えられておらず、肌は浅黒く、髭はなく、唇には微笑が浮かんでいる。男は市長たちに「私は魔法でどんな生き物でも操ることができる。私はまだらの笛吹き男と呼ばれている。韃靼国<sup>だつたん</sup>ではブヨの群れを退治し、インドではコウモリの群れを退治した」と自己紹介をする。そして男が「ネズミを全部退治したら1000ギルダーもらえるか」と尋ねると、市長と市会議員たちは「5万ギルダーを払う」と約束する。男が笛を3度吹くと、家からすべてのネズミがでてくる。ネズミは笛吹き男の後についていく。男がネズミをヴェーザー川まで連れて行くと、ネズミは川で溺死する。1匹だけカエサルのように強いネズミが生き残って、ネズミの国にこの出来事を伝える。そのネズミが言うには、「最初に笛の音が聞こえたかと思うと、目の前にご馳走が現れた。そのご馳走を食べようとしたが、実際には川の中に落ちていた」という。ネズミがいなくなったのでハーメルンの人々は祝いの鐘を鳴らす。男が代金の1000ギルダーを要求すると、市長と議員たちは大金を支払うのが惜しくなり「1000ギルダーを支払うと言ったのは冗談で、50ギルダーなら払う」と言う。笛吹き男が「私を怒らせるのなら、別の音楽を吹く」と脅すと、市長は「吹けるものなら吹けば良い」と言う。笛吹き男が別の調べを吹くと、今度は子どもたちが楽しそうにやってきて笛吹き男の後に続く。市長と市会議員たちは動くことも声を出すこともできない。子どもたちを連れて笛吹き男がコッペルベルクの山へ向かうのを見て、市長と市会議員たちは「あの高い山を越すことはできないだろう。その時には笛を吹くのを止めるはずだから、子どもたちも帰って来るだろう」と思う。しかし、笛吹き男と子どもたちが山に辿り着くと、突然不思議な門が開いて、笛吹き男と子どもたちはその中へ入っていく。その後、門は閉じてしまう。足の悪い子がひとりだけ取り残される。数年が経過してもその足の悪い子は悲しそうな様子で「友達がいらない町はつまらない。笛吹き男が連れて行ってくれると言った楽しい国に、僕だけが行くことができなかった。その国には泉があり、木の実がなり、綺麗な花が咲き、スズメはクジャクよりも綺麗で、犬は鹿よりも速く走り、ミツバチには針がなく、

翼のある馬が生まれるという。そして、僕の悪い足もすぐに治るという。けれど僕だけが取り残されて、今でも足が悪いままだ」と嘆く。この出来事により、ハーメルンの人々は「金持ちが天国に入るよりも、ラクダが針の穴を通る方が簡単である」という聖書の1節を思い起こす。市長は東西南北に人を派遣し、笛吹き男を見つけた者には望みどおりの報酬を与え、笛吹き男が子どもを連れて戻ってきたら笛吹き男にも望みどおりの報酬を与えると周知させた。しかし、笛吹き男も子どもたちも戻ってこないで、町では布告が出され、今後、法律上の正規の文書には日付を記入した後に、1376年6月22日に起きたこの出来事から何日経ったかを必ず記入するよう定められる。失踪した子どもたちが通った通りは「笛吹き男通り」と名付けられ、その通りで笛や太鼓を演奏した者は仕事を失うことになる。宿屋も酒屋も、その通りを騒がせてはならない。子どもたちが消えた山の穴の反対側には、柱が立てられ、この出来事についての記録が刻まれる。教会の窓ガラスにも同様に、この出来事についての絵が描かれる。このステンドグラスは今でもそのまま残っている。この話にはまだ続きがあり、トランシルヴァニアには変わった人々がいて、その人々の服装や慣習は近郊に住む人々と異なっているという。それは、かつて彼らの先祖がブラウンシュヴァイクのハーメルンから連れ出され、閉じ込められていた地下牢から逃げ出してきた人々であるからだという。しかし、実際に何があったかは誰も知らない。

そして最後には「だから、ウィリー。お互いに、借りたお金は返しておこう——特に笛吹き男からのものは！ 笛を吹いてネズミやハツカネズミから自由にしてくれるからというより、一度約束したからには、その約束は守ろうね！」という教訓が書かれている<sup>50</sup>。

### 3) 底本について

ドイツの伝説であるこの話を、ブラウニングはどの文献から知ったのであろう。1881年、ブラウニングはフレデリック・ファーニバル (Frederick James Furnivall, 1825-1910) に、詩の題材をジェームス・ハウエル (James Howell, c.1594-1666) の『日常の書簡集』 (*Familiar Letters*, 1645) から取ったと述べている<sup>51</sup>。しかし、『日常の書簡集』に収録されている話の内容とブラウニングの詩の内容を比べてみると、異なる点が多数存在する。ブラウニングの詩に登場している足の不自由な少年や1匹だけ生き延びたネズミなどは『日常の書簡集』には登場せず、事件が起こった日付も異なっているのである<sup>52</sup>。

『日常の書簡集』よりもブラウニングの詩に近いのは1605年に出版されたりチャード・ヴェルステガンの『朽ちた知性の回復』である<sup>53</sup>。これは「ハーメルンの笛吹き男」の話が初めて英語で記述された文献である。しかしブラウニングは1881年に、ファーニバルに対して「ハーメルンの色とりどりの服を着た笛吹き男」を書くよりも以前にヴェルステガンを読んだことはないと述べている<sup>54</sup>。そのため、ブラウニングが参考にしたのはヴェルステガンの話ではなく、ナサニエル・ウォンリー (Nathaniel Wanley, 1634-1680) の『小さな世界の奇跡』 (*The Wonders of the Little World*, 1678<sup>55</sup>) であると主張する研究者もいる<sup>56</sup>。いずれにせよ、ブラウニングはこの伝説をドイツ語から直接知ったのではなく、英語に訳された本から知ったのである。

#### 4. ラング版「ネズミ捕り男」

##### 1) 概要

「ネズミ捕り男」は1890年に出版された『あかいろの童話集』に収録されている。イギリスの民話収集家アンドルー・ラングは各地の民話を収集し、童話集として出版した。それらの本は「色の童話集」シリーズと銘打たれ、それぞれの巻には色の名前が付けられている。『あおいろの童話集』に続いて出版された『あかいろの童話集』は、シリーズの2巻目にあたる本である。このシリーズは挿絵の入った単行本として出版された。

##### 2) あらすじ

ラング版のあらすじは、下記のようなものである。

むかし、ドイツのハーメルンという町に大量のネズミが現れる。これほど多くのネズミはこれまで誰も見たことがないし、これからは誰も見ないであろうほどである。ネズミは大胆にも昼間に通りを駆け抜け、家の中を走り回り、そのせいで人々はどこにも手や足を置くことができない。朝、服を着ようとするときズボンやペチコートやポケットや靴にネズミが入っている。何か食べようとしても、ネズミが地下室から屋根裏部屋まですべての食べ物を食べつくしている。夜はさらに酷く、明かりが消えるとネズミは天井、床、戸棚、扉などをかじり、あちこち走り回る。まるでペンチやノコギリで大きな音を出した時のように騒がしいので、耳の聞こえない人でも1時間も眠れないほどである。犬も、猫も、毒も、罨も、祈りも、聖人に捧げるロウソクも、いずれも無意味である。ある金曜日、ハーメルンの町に奇妙な顔をした男がやってくる。男はバグパイプを吹いて、「ネズミ捕り男がやってきた」と歌う。男はくすんだ色の髪、曲がった鼻、ネズミの尻尾のような口髭、大きく鋭い黄色い眼をしており、赤い羽根を指した大きなフェルトの帽子を被り、緑の上着に赤いズボンを着用し、革のベルトをしてサンダルを履いている。ちなみに、ハーメルンの教会には今日でもこの男の姿が描かれている。男は市庁舎の前にある中央広場に来ると、教会に背を向けてバグパイプを鳴らし、先ほどと同じように「ネズミ捕り男がやってきた」と歌う。そのころ市役所では、ネズミの害をどう解決すれば良いのかを議員たちが話し合っている。議員たちは、ネズミの害はまるで聖書で語られた「エジプトの災い」のように逃れることはできないものであるように思う。ネズミ捕り男は議員たちに「報酬を支払ってくれるのなら、夜中までにネズミをすべて退治する」と伝える。議員たちはネズミ捕り男のことを魔術師だと思ったので「用心しなければ」と言う。知恵者である町長が「ネズミを町に送りこんできたのはこのネズミ捕り男で、そのネズミを退治してお金をもらおうとしている。それならば、逆にこの悪魔を罨にかけて捕えないといけない。私に任せてくれ」と言う。そしてネズミ捕り男は会議室に呼び出される。男はネズミ退治の代金として、「ネズミ1匹につき1グロス」を要求する。議員たちはその金額が高すぎるので驚くが、町長はネズミ捕り男の要求を了承して契約する。その契約について知ったハーメルンの町の人々は、代金が高すぎると言って騒ぐが、その後人々と議員たちは町長にすべての判断を任せることにする。夜の9時ごろ、男は教会を背にして立ち、月が昇って来るとバグパイプを吹き始める。するとすべての家からネズミが姿を現し、ネズミ捕り男の元に集まる。男が歩き出すと、ネズミはその後ろをついて行く。男はハーメルンの傍に流れている川のところまで来ると、川を指差して「ホップ！（飛べ！）」とネズミに命令する。

ネズミは命令通り川へ飛び込む。1番最後に、大きな年寄りの白ネズミが現れる。このネズミはネズミの群れの王である。ネズミ捕り男が白ネズミにネズミの総数を聞くと、白ネズミは「99万9999匹」だと答え、川に飛び込む。ハーメルンの人々は3カ月ぶりにゆっくり眠ることができる。翌朝、9時にネズミ捕り男は市役所に行き代金を要求する。しかし町長は「ネズミの死骸1つと引き換えに、グロス銀貨1枚を支払う」と言う。ネズミは溺死したので、ネズミ捕り男はネズミの死骸を提示することができず、代金を支払ってもらうこともできない。町長は正式な代金の代わりに、フローリン金貨2500枚を支払おうとするが、怒った男は「約束を守る気がないのなら、相続人に払ってもらう」と言って町から立ち去る。次の日曜日、町の大人たちがミサを終えて教会から帰って来ると、子どもが全員いなくなっている。大人たちは「子どもたち、どこにいる？」と叫ぶ。その時、町の東の門から3人の男の子が泣きながら戻ってきて、何が起こったのかを話す。それによると、大人たちが教会に行っている間に素晴らしい音楽が聞こえてきたので、町中の子どもたちが広場へ集まるとネズミ男がバグパイプを吹いていたという。子どもたちは男の後に続いて町から出て、山に辿り着く。そこには裂け目があり、笛吹き男と子どもたちがその中に入ると裂け目は閉じたという。町に戻ってきた3人の子どもは、1人はガニ股なので早く走ることができず、1人は急いで家を出たため片足が裸足で、その足を石で怪我してしまったので上手く歩くことができず、1人は列の1番最後にいたが、裂け目に早く入ろうと慌てたせいで岩の壁にぶつかり仰向けに転んでしまい、そのせいで山の裂け目に入れなかったのだという。親たちは悲しみ、叫び、鍬やツルハシをもって山に向かい、子どもたちが消えた裂け目を探す。しかし、日が暮れるまで探しても見つけることはできない。夜になったので大人たちは町に戻る。誰よりも悲惨な目にあったのは町長で、町長は3人の息子と2人の娘を失ったうえ、町の人々から激しく責められる。町の人々は、自分たちが町長の判断を支持したことを忘れていた。子どもたちはその後どうなったのであろう。親たちは、「子どもたちが生きていますように。ネズミ捕り男は山を抜けて子どもたちを自分の国に連れて行ってくださいますように」と祈り、それから数年間、様々な国に使者を遣わせて子どもたちの行方を調べさせる。しかし、子どもたちのことを知っている人は誰もいない。それから約150年後のある日の夜、ハーメルンの町にブレーメンの商人たちがやってくる。商人たちは、ハンガリーでトランシルヴァニアという町に立ち寄ったこと、その町の周りではハンガリー語しか話されていないのにトランシルヴァニアの人々はドイツ語しか話さないこと、彼らが自らの祖先はドイツから来たが、どうやって来たのかは知らないと言っていたことを伝える。ブレーメンの商人は「トランシルヴァニアの町の人々はハーメルンから消えた子どもたちの子孫に違いない」と言い、ハーメルンの町の人々もそのことを信じる。その日以来、ハーメルンの町の人々は、トランシルヴァニアに住む人々は自分たちの国の子孫で、ネズミ捕り男に連れて行かれた子どもたちの子孫に違いないと信じている<sup>57</sup>。

### 3) 底本について

ラング版の「ネズミ捕り男」はグリム兄弟版ともブラウニング版とも異なる。バクパイプや白いネズミの王はいったいどこから生まれたのであろう。ラングが『ももいろの童話集』（「色の童話集」シリーズ5巻）、『べにいろの童話集』（8巻）、『だいたいいろの

童話集』（11巻）の序文で繰り返し述べているように、「色の童話集」に収録されている話はいずれも、ラングの創作によるものではなく、ラングが他の本から集めたものである。ラングはあくまで監修者に過ぎず、実際に話を翻訳したのはラングの妻やラングの友人などであった。

ラングは『あかいろの童話集』の前書きで下記のように述べている。

The Editor has to thank his friend, M. Charles Marelles, for permission to reproduce his versions of the 'Pied Piper,' of 'Drakestail,' and of 'Little Golden Hood' from the French ...<sup>58</sup>

編者 [ラング] は友人のM・シャルル・マレルに、彼のフランス語版「笛吹き男」、「ドレイクステイル」、「金ずきんちゃん」の複製を許可してくれたことに對して…感謝しなければならない（拙訳）<sup>59</sup>

ここでラングが言っている「笛吹き男」（Pied Piper）とは「ネズミ捕り男」（Ratcatcher）のことである。「ネズミ捕り男」の本文の後には「Ch. Marelles」という名前が書かれている<sup>60</sup>。この「Ch. Marelles」は、序文でラングが感謝を述べていた、友人のシャルル・マリー・マレル（Charles Marie Marelle, 1827-1903?）のことであると考えられる。

マレルは1888年に『猿のしっぽなどーフランスと外国の民話の類話』（*Affenschwanz, et cetera: Variantes orales de contes populaires français et étrangers*）というフランス語の本を出版した<sup>61</sup>。この本には昔話が8話と詩が6話収録されており、ラングが使用したのはこの本の8話目に収録されている「ネズミ捕り男」（Le preneur de rats）である<sup>62</sup>。本の題名は本題『猿のしっぽ』がドイツ語で、副題がフランス語で表記されている。マレルは1821年2月2日にフランスで生まれ、その後フンボルトアカデミー（現フンボルト大学ベルリン、通称ベルリン大学）でフランス文学の教授に就任した。詩人であり、民俗学者でもあった<sup>63</sup>。ドイツ語が堪能だったようで、1868年には『ギュスターヴ・ドレが挿絵を描いたシャルル・ペローのフランス童話』（*Die französischen Märchen von Perrault, von Gustave Doré illustrirt*）というドイツ語の本を出版している<sup>64</sup>。マレルの70歳の誕生日である1897年2月2日には、ベルリンの主要新聞である国民新聞（National Zeitung）にマレルについて「民話や歌についての彼の著作によって、シャルル・マレルはフランスだけでなくドイツでも高い評価を得ている」という論評が掲載された<sup>65</sup>。

ラング版「ネズミ捕り男」（Ratcatcher）とマレル版「ネズミ捕り男」（Le preneur de rats）の内容はまったく同じで、ラング版はマレル版を忠実に訳したものであるといえる。ラング版でネズミ捕り男は、「生きているものは見るだろう。ここにいますは、ネズミ捕り男！」（'Qui vivra verra: Le voila, Le preneur des rats.!'）とフランス語で歌いながら町へやってくる。この台詞はマレル版のものとまったく同じである。ネズミ捕り男が川へ向かうネズミたちを「ホップ、ホップ！」（hop! hop!）と囃し立て、最後に現れた白いネズミの王に「ブランシェ」（Blanchet）と呼びかけるのも同じである。帰ってくる子どもも男の子が3人である。

マレル版とグリム兄弟版で異なっているのは、マレル版には2か所に注釈がつけられているということである。1つ目はネズミ退治の報酬の「1グロス」につけられた注釈で、ドイツの古い貨幣の「グロッシェン」かもしくは16世紀のフランスで2スー6デニールの価値

があったフランス貨幣「グロッシュン」のことであろうと述べられている<sup>66</sup>。2つ目はネズミを退治したと言うネズミ捕り男に対して、市長が代金を計算するためにはネズミの死骸の頭を数える必要があると言う場面につけられた注釈で、マレルの知る限り、市長が使用したこの策略はドイツ語の文献では語られないと述べている<sup>67</sup>。ラングは童話集を編纂する時に、これらの注釈は余計だとして削除したのであろう。

マレルはどのように「ネズミ捕り男」を知ったのであろう。イギリスの文系総合学術誌『ノーツ・アンド・クエリーズ』(Notes and Queries)に掲載されている報告によれば、マレルは10歳の時にこの話を叔父から読み聞かせで聞いたという<sup>68</sup>。マレルの叔父はM・バギン・デュ・ジョンコイ(M. Bagin du Jonquoy)と言い<sup>69</sup>、セーヌ川沿いのムリーの紡績工場の所有者であった<sup>70</sup>。ジョンコイは若いころパリの友人からこの話を聞き、その友人はアルザス生まれの母親から聞いたという<sup>71</sup>。

## 5. グリム兄弟版、ブラウニング版、ラング版の比較

グリム兄弟版(1816)とブラウニング版(1842)とラング版(1890)の内容を表にまとめると下記の【表3】のようになる。

【表3】3つの版の比較表

	グリム兄弟版	ブラウニング版	ラング版
出版年	1816年	1842年	1890年
題名	ハーメルンの子どもたち	ハーメルンの色とりどりの服を着た笛吹き男	ネズミ捕り男
日付	①1284年 ②6月26日(ヨハネとパウロの日)の早朝7時もしくは正午	今(1842)から約500年前 1376年7月22日	①金曜日 ②日曜日
笛吹き男の服装	①さまざまな色が入り混じった布でできた上着。 ②狩人の格好。赤い奇妙な帽子。	赤色と黄色が半分ずつの縦じまの服	真っ赤な羽をつけた大きなフェルトの帽子、緑のジャケット、皮のベルト、赤いズボン
報酬	一定の代金	(笛吹き男) 1000ギルダー (市長) 5万ギルダー	ネズミ1匹につき1グロス
約束を反故にした人物	町の人々	市長	町長
失踪した子ども	4歳から上の男の子と女の子、市長の成人した娘	男の子と女の子たち	男の子と女の子たち
帰還する子ども	4人(子守の娘、盲目の子、口のきけない子、上着を取りに帰った子)	1人 足の悪い子	3人(ガニ股の子、片方靴を忘れた子、列の1番最後の子)
結末	子どもたちはジーベンビュルゲンで再び姿を現したという。	子どもたちは楽園へ行く。(教訓) 一度した約束は守らなくてはならない。	市長が責められる。子どもたちはトランシルヴァニアで新しい町を造ったと言われている。

話の題名はグリム兄弟版が「ハーメルンの子どもたち」、ブラウニング版が「ハーメルンの色とりどりの服を着た笛吹き男」、ラング版が「ネズミ捕り男」である。グリム兄弟

版は消えてしまった子どもたちに焦点を当て、ブラウニングは奇妙な服装をした笛吹き男に焦点を当て、ラング版は町にやってきた男が笛を吹く点ではなくネズミを退治する点に焦点を当てている。

男がハーメルンの町にやってきた日時は、グリム兄弟版では古い資料に残されている日付と同じ1284年で、子どもたちが連れ去られる日は6月26日である。ブラウニング版では、ヴェルステガン版の影響により、ヴェルステガン版と同じ1376年7月22日である。ラング版では具体的な年月日は不明であるが、男が1度目にやって来るのは金曜日で、子どもたちが連れ去られるのは日曜日である。子どもたちが連れ去られる時、町の大人たちは教会でのミサに出席しているため子どもたちが連れ去られることに気が付かなかったのである。

笛吹き男の服装は、グリム兄弟版では1度目はさまざまな色が入り混じった布でできた上着で、2度目では狩人の格好をして赤い奇妙な帽子を被っている。ブラウニング版では赤色と黄色が半分ずつの縦じまの服を着ている。ラング版では真っ赤な羽をつけた大きなフェルトの帽子、緑のジャケット、皮のベルト、赤いズボンを身につけている。

ネズミ退治の報酬について、グリム兄弟版では具体的な金額は明らかにされていない。ブラウニング版では笛吹き男が「1000ギルダー」を要求すると、市長が「5万ギルダーを支払おう」と言って自ら金額を高くする。ラング版では男が代金として「ネズミ1匹につき1グロス」を提示し、町長がその条件を承諾する。

ネズミが退治された後、笛吹き男に代金を支払おうとしないのは、グリム兄弟版では町の人々で、ブラウニング版とラング版では市長もしくは町長である。ただし、ブラウニング版とラング版でも、ハーメルンの人々は市長もしくは町長に賛同する。

町から連れ去られる子どもたちについて、グリム兄弟版では「4歳から上の男の子と女の子」というように子どもの年齢が語られ、さらに市長の成人した娘も一緒であったとされている。ブラウニング版とラング版では「男の子と女の子たち」と述べられているのみである。

町に戻ってくる子どもは、グリム兄弟版では子守の娘、盲目の子、口のきけない子、上着を取りに帰った子の4人である。ブラウニング版では足の悪い子がひとりだけで、ラング版ではガニ股の子、片方靴を忘れた子、列の1番最後の子の3人が町に戻ってくる。

話の結末もそれぞれ異なり、グリム兄弟版では、子どもたちはジーベンビュルゲンで再び姿を現したとされる。ブラウニング版では子どもたちは楽園へ行く。そこでは綺麗な花が咲き、羽の生えた馬がいて、不自由な足も完治するという。また、最後に「一度した約束は守らなくてはならない」という教訓が述べられる。ラング版では残された町の人たちに焦点が当てられ人々が市長を責める場面が語られた後で、子どもたちは遠く離れたブラウンシュヴァイクに辿り着き新しい町を作ったとされる。

グリム兄弟版、ブラウニング版、ラング版は、いずれも「ハーメルンの笛吹き男」伝説を語っているが、内容をみるとそれぞれ異なっていることがわかる。これらの内容の違いから、日本で出版されている邦訳がいずれの版を元に行っているのかを推測することができる。



### 第3章 明治期における「ハーメルンの笛吹き男」

#### 1. 概要

「ハーメルンの笛吹き男」が日本で紹介されたのは明治期になってからである。日本で初めて「ハーメルンの笛吹き男」が紹介されたのは、1896（明治29）年8月に出版されたドイツ語の教科書『エンゲリン第二讀本獨學自在』においてであり、話の題名は「ハーメルンニ迄ノ小兒」<sup>[1]</sup><sup>72</sup>である。明治期に紹介された「ハーメルンの笛吹き男」はもう1話あり、それは1972（明治45）年5月に出版された『世界のオペラ』に収録されている「ハーメルンの鼠取」<sup>[2]</sup>である。

#### 2. 「ハーメルンの笛吹き男」の最初の邦訳について

##### 1) 概要

日本で最初の邦訳は、1896（明治29）年8月に出版された『エンゲリン第二讀本獨學自在』上巻に収録されている「ハーメルンニ迄ノ小兒等」<sup>[1]</sup>であろう。訳者は中村道夫であり、奥付では中村道四郎と表記されている。『エンゲリン第二讀本獨學自在』上巻はアウグスト・エンゲリン<sup>73</sup>（August Karl Hermann Engelién, 1832-1903）とハインリッヒ・フェヒナー（Heinrich Fechner, 1845-1909）が書いた『ドイツ語読本—原典からの収集』（*Deutsches Lesebuch: Aus den Quellen zusammengestellt*<sup>74</sup>）を邦訳したものである<sup>75</sup>。小泉は『エンゲリン第二讀本獨學自在』に「ハーメルンの笛吹き男」が訳出され、この邦訳が日本で初出のものになると述べている<sup>76</sup>。調査の結果、この本に収録された「ハーメルンニ迄ノ小兒等」<sup>[1]</sup>は日本でもっとも古い邦訳であり、しかも原文に忠実な訳であることが判明した。ここでは、小泉の論文でほとんど触れられていない「ハーメルンニ迄ノ小兒等」<sup>[1]</sup>の訳文について、原文と照らし合わせながら詳細に検討していく。

##### 2) 中村訳<sup>[1]</sup>と原典の比較

「ハーメルンニ迄ノ小兒等」<sup>[1]</sup>は『エンゲリン第二讀本獨學自在』上巻の第89章にあたる<sup>77</sup>。カタカナと漢字で書かれた邦訳のみが掲載されており、出典は明記されていない。底本の『ドイツ語読本—原典からの収集』ではこの話は「ハーメルンの子どもたち」（Die Kinder zu Hameln）という題名で89番目に収録されており<sup>78</sup>、出典について下記のように記載されている。

Die Brüder (Jakob und Wilhelm) Grimm

Deutsche Sagen. I. Teil. 1. Aufl. Berlin. 1816. Nr. 244. S.330

グリム（ヤーコプとヴィルヘルム）兄弟

『ドイツ伝説集』、1巻、1版、ベルリン、1816年、244番、330頁（拙訳）

『ドイツ語読本—原典からの収集』は副題に「原典からの収集」とあるように、複数の文献から集められた話が収録されている教科書である。ここでは、„Die Kinder zu Hameln“はグリム兄弟版から採られたと書かれている。話の番号が245番ではなく「244番」であるのは、これが『ドイツ伝説集』の初版から取られたものだからである。『ドイツ伝説集』はグリム兄弟の死後、ヴィルヘルム・グリムの息子ヘルマン・グリム（Herman

Grimm, 1828-1901) によって2版と3版が出版される。2版からは収録話数が6話増え、1版では244番だった「ハーメルンの子どもたち」は245番になるのである。

『ドイツ語読本—原典からの収集』の原文, „Die Kinder zu Hameln“ (ハーメルンの子どもたち) と中村の邦訳を比較すると、中村訳<sup>1</sup>は原文に忠実な訳であり、恣意的な改変などはなされていないことがわかる。ただし、わずかだが誤訳も存在する。

それでは『ドイツ語読本—原典からの収集』の, „Die Kinder zu Hameln“ (ハーメルンの子どもたち) と中村の邦訳を比較していく。一重下線と二重下線は中村によるものであり、波線は筆者によるものである。中村の誤訳は2箇所ある。

1箇所目は、笛吹き男が再び町に現れる日付である。

七月二十六日ニヨハニス祭及ビパウリー祭日ノ上ニ朝早ク七時 (中村訳166頁)

Am 26. Juni auf Johannis- und Pauli Tag, morgens früh sieben Uhr, (原文 S.92)

6月26日、ヨハネとパウロの祭日の早朝7時 (拙訳)

Juniは「6月」という意味であるが、中村は「7月」と訳している。当時の独和辞典にJuniは「第六月」であると正しく記載されているため<sup>79</sup>、当時の日本人はJuniが6月であると理解していたはずである。しかしJuni (6月) とJuli (7月) が似ているため中村は間違えて訳してしまったのか、あるいは旧暦で考えて7月と訳したのかもしれない。

2箇所目は、後から子どもが帰ってくる場面である。

或ルモノガ云フ如クニツガ片目ノモノハ場所ヲ示シ能ハナンダ<sup>7</sup>ホド左様ニ二人ハ片目デー一人ハ聾デアリタコロニ遅滞シ而シテ立チ戻リテアルデアラウ、然シナガラ如何ニ彼レ等ガ遊人ニ随ツテアリエガシ、聾ハ然シナガラ場所ヲ示メシタカラ、夫レガ直チニ何モ爲サヌカヲ恐ラク物語ル。(中村訳166頁)

Zwei sollen, wie einige sagen, sich verspätet und zurückgekommen sein, wovon aber das eine blind, das andere stumm gewesen sei, also daß das blinde den Ort nicht hat zeigen können, aber wohl erzählen, wie sie dem Spielmanne gefolgt wären, das stumme aber den Ort gewiesen, ob es gleich nichts gehört. (原文 S.92)

何人かが言うには、2人が遅れて帰ってきたという。一人は盲目の子でもう一人は聾啞の子であった。そのため盲目の子は場所を示すことはできなかったが、子どもたちがどのように楽師について行ったかを語ることはできた。聾啞の子は何も聞いてはいなかったが、場所を指し示した (拙訳)

ここでは、帰ってきた子どもは2人でそのうち一人が盲目の子で、もう一人が聾啞の子である。しかし中村訳<sup>1</sup>では帰ってきた子どもは片目の子が2人と、聾の子がひとりとなっている。関係代名詞wasに前置詞vonをつけるとwovonという形になり、その先行詞はzweiとなる。そのためこの文は、zwei (2人) のうち一人がdas eine blind (盲目の子) で、もう一人がdas andere stumm (聾啞の子) であったとするのが正しい訳である。中村はこのwovonを正しく理解できていなかったと考えられる。

以上の2箇所が中村による誤訳である。次に、前置詞の訳し方を見る。

而シテ彼レ等ハ彼レヲ彼レガ怒リテ而シテ困シテ行去リシヲホド左様ニ各種ノ隱遁ノ元ニ男ニ否ミシ。(中村訳165-166頁)

und sie verweigerten ihm dem Mann unter allerlei Ausflüchten, so daß er zornig und erbittert wegging. (原文 S.92)

そして彼らはさまざまな口実をつけて支払いを拒否したため、笛吹き男は憤慨して町から出ていった(拙訳)

unter allerlei Ausflüchtenは「さまざまな口実で」という意味であるが、中村は「各種ノ隱遁ノ元ニ」と訳している。前置詞のunterはここでは「～でもって」という意味合いで訳すべきである。ここでのunterはmitと同じ意味だが、中村はunterを位置関係を示す「下」という意味を使用して「元」と訳している。位置関係を示す意味は前置詞のもっとも基本的な意味で、辞書でも各項目の1番目に書かれている。中村は他の前置詞も、たとえ熟語であっても位置関係を表す意味で訳しており、前置詞への理解が浅かったと考えられる。次の文も、前置詞に関するものである。

然リ、モシ花嫁オンナガ音楽ト其ニ寺院ニ迄持來サレシナラバ遊人ハ道ヲ越エテ沈黙セ子バナラヌ。(中村訳166頁)

Ja, wenn eine Braut mit Musik zur Kirche gebracht ward, mußten die Spielleute über die Gasse hin stillschweigen. (原文 S.92)

そうだ。花嫁が音楽に伴われて教会へ行く時、楽師たちはこの路地を通る間、沈黙を守らねばならなかった(拙訳)

中村はüberを、もっとも基本的な意味である「越エテ」と訳しているが、静かにしなければならないのは路地にいる間であるから、ここでは「～を通して」の意味で訳すべきである。中村が使用したと考えられるドイツ語辞書『挿圖和譯独逸字彙』でüberを引いてみると<sup>80</sup>、「上ニ」のほかに「其ヲ越エテ」という意味が掲載されている<sup>81</sup>。おそらく中村はこれを使用したのであろう。

これらの前置詞unterとüberについて、辞書では位置関係以外の意味も紹介されている。unterには「下ニ」のほかに「往々」「時トシテ」という意味が掲載されており<sup>82</sup>、überには「上ニ」のほかに「通シテ」という意味が掲載されている<sup>83</sup>。当時の日本では前置詞の意味について位置関係以外の意味も知られていたため、前置詞の誤訳は中村個人によるものであるといえよう。以上のように、中村訳①の特徴としては、前置詞と関係代名詞に誤訳があることが挙げられる。

中村訳①は誤訳はあるものの、グリム兄弟版に忠実な内容である。中村訳①の原典であるエンゲリンの『ドイツ語読本—原典からの収集』の「ハーメルンの子どもたち」は、出典に明記されているとおり、グリム兄弟版の原文をほとんどそのまま収録している。グリム兄弟版と異なっているのは、句読点の種類や単語のスペルなど、話の内容に影響を与えない部分のみである。そのためこの話を忠実に訳した中村訳①もグリム兄弟

版に忠実な邦訳となっているのである。ただし、話は途中で終わっており、子どもたちが失踪した日を基準に公示を行なうようになったこと、ハーメルンの市庁舎と市門に銘文が刻まれたこと、教会の窓にこの出来事についての絵が描かれ銘文が添えられたこと、この出来事にちなんだ貨幣が鋳造されたことなどは訳されていない。これは原典の『ドイツ語読本一原典からの収集』ですでに省略されており、中村による改変ではない。

### 3) 中村が使用した辞書

中村訳<sup>[1]</sup>には誤訳と思われる箇所がさらに2箇所ある。それらはいずれも単語の訳で、中村はTuch（布地）を「羅紗」、wunderlich（奇妙な、風変わりな）を「驚クベキ」と訳している。同じ『エンゲリン第二読本獨学自在』上巻に収録された「ドルンレースヘン」<sup>84</sup>においても、誤訳と考えられる箇所がある。それはFlachs（亜麻）を「麻」（Hanf）と訳している点である<sup>85</sup>。これらの訳は中村による誤訳であろうか、それとも、当時の辞書がそもそも間違っていたのであろうか。

日本における最初の独和辞典は1872（明治5）年8月出版の『<sup>はいわしゅうちんじしよ</sup>幸和袖珍字書』<sup>[辞1]</sup>で<sup>86</sup>、その後さらに13冊の独和辞典が1896（明治29）年8月までに出版されている。古いものから順に1872（明治5）年9月に出版された『袖珍幸語譯囊』<sup>[辞2]</sup><sup>87</sup>、同年10月に出版された『和譯獨逸辭典』<sup>[辞3]</sup><sup>88</sup>、1873（明治6）年5月に出版された『獨和字典』<sup>[辞4]</sup><sup>89</sup>、同年9年に出版された『和譯獨逸辭書』<sup>[辞5]</sup><sup>90</sup>、1883（明治16）年4月に出版された『獸彙辭彙』<sup>[辞6]</sup><sup>91</sup>、1884（明治17）年7月に出版された『獨逸文典字彙』<sup>[辞7]</sup><sup>92</sup>、1885（明治18）年6月に出版された『挿入圖畫獨彙字典大全』<sup>[辞8]</sup><sup>93</sup>、同年12月に出版された『獨和袖珍字彙』<sup>[辞9]</sup><sup>94</sup>、1887（明治20）年に出版された『明治獨和字典』<sup>[辞10]</sup><sup>95</sup>、1889（明治22）年に出版された『挿圖和譯獨逸字彙』<sup>[辞11]</sup><sup>96</sup>、1890（明治23）年に出版された『挿入圖画獨和字書大全』<sup>[辞12]</sup><sup>97</sup>、1892（明治25）年に出版された『掌中獨和字彙』<sup>[辞13]</sup><sup>98</sup>、1893（明治26）年に出版された『袖珍獨和字典』<sup>[辞14]</sup>（後の『改正増補獨和字典』）である<sup>99</sup>。

これら14冊の辞書の訳語をそれぞれまとめたものが下記の【表4】である。

【表4】独和辞書における訳語一覧

番号	書名	Tuch 布地	wunderlich 奇妙な、風変わりな	Flachs 亜麻
[1]	1896（明治29）年8月 『エンゲリン第二読本獨学自在』	羅紗	驚クベキ	麻
[辞1]	1872（明治5）年8月 『幸和袖珍字書』	ランヤ羅紗。ヌノ布。織物の總名	キミヤウナ奇妙。フシギナ不思議。マレナ。オドロクベキ可驚。メヅラシキ珍	アサ麻
[辞2]	1872（明治5）年9月 『袖珍幸語譯囊』	羅紗、布（亞麻ニテ製タル）	（なし）	苧麻
[辞3]	1872（明治5）年10月 『和譯獨逸辭典』	羅紗、亞麻、着物	異ナル、稀ナル、法外ニ	麻、裂キタル麻
[辞4]	1873（明治6）年5月 『獨和字典』	羅紗。一反（織物ノ）。織物。切	奇妙ナル。格別ナル。驚クベキ	麻

辞5	1873 (明治6) 年9月 『和譯獨逸辭書』 <sup>100</sup>	木綿 羅紗	(なし)	麻
辞6	1883 (明治16) 年4月 『獸齋辭彙』	絨ラシヤ、織布	驚クベキ、奇ナル、稀ナル、奇異ニ、妙ニ	亞麻
辞7	1884 (明治17) 年7月 『獨逸文典字彙』	羅紗、ラシヤ、キレ	(なし)	麻
辞8	1885 (明治18) 年6月 『挿入圖畫獨逸字典大全』	布。反物。毛布。	驚クヘキ。稀ナル。奇異ナル。	麻 [アサ]
辞9	1885 (明治18) 年12月 『獨和袖珍字彙』	ラシヤ。イツタン (フリモノノ)。フリモノ。キレ	キミヨウナル。カクベツナル。ヲドロクベキ	アサ (フリモノニセイヌル)
辞10	1887 (明治20) 年 『明治獨和字典』	ラシヤ、ハナフキ、フキン 絨布、鼻巾、振布	驚クベキ、奇ナル、稀ナル、(副) 奇異ニ、妙ニ	亞麻
辞11	1889 (明治22) 年 『挿圖和譯獨逸字彙』	絨 [ラシヤ]、織布、手袋巾、襟巻。	(ウンデルパール、ラウエヒゼルトザムヲ見ヨ) wunderbar 驚クヘキ、奇ナル	麻 [アサ]
辞12	1890 (明治23) 年 『挿入圖畫獨和字書大全』	ラシヤ 絨、織布 (襟巻等ノ)、絨疋	驚クベキ、奇妙ナル、稀代ナル、不思議ナル	亞麻
辞13	1892 (明治25) 年 『掌中獨和字典』 <sup>101</sup>	フリモノ。キレ	キミヨウナル。ヲドロクベキ	アサ (キノナ)
辞14	1893 (明治26) 年 『袖珍獨和字典』	布、反物、毛布。	奇異ナル、驚クヘキ、異常ノ。	亞麻

14冊のうち、Tuch (布地) の訳語に「羅紗」(もしくはラシヤ)が含まれるのは『倅和袖珍字書』辞1、『袖珍字語譯彙』辞2、『和譯獨逸辭典』辞3、『獨和字典』辞4、『和譯獨逸辭書』辞5、『獸齋辭彙』辞6、『獨逸文典字彙』辞7、『獨和袖珍字彙』辞9、『明治獨和字典』辞10、『挿圖和譯獨逸字彙』辞11、『挿入圖畫獨和字書大全』辞12の11冊である。

そのうち、wunderlichの訳語に「驚クベキ」(驚クヘキ、ヲドロクベキ)が含まれるのは、『倅和袖珍字書』辞1、『獨和字典』辞4、『獸齋辭彙』辞6、『獨和袖珍字彙』辞9、『明治獨和字典』辞10、『挿圖和譯獨逸字彙』辞11、『挿入圖畫獨和字書大全』辞12の7冊である。中村は前置詞を訳出する際、各単語の1番最初に書かれた訳をそのまま使用している。そのため、wunderlichを訳す際にも1番目の訳を使用したと考えられる。上記の7冊のうち、「驚クベキ」(驚クヘキ、ヲドロクベキ)が1番目に記載されているのは、『獸齋辭彙』辞6、『明治獨和字典』辞10、『挿圖和譯獨逸字彙』辞11、『挿入圖畫獨和字書大全』辞12の4冊である。

それら4冊のうち、Flachsの訳語が「麻」であるのは『挿圖和譯獨逸字彙』辞11のみであるため、中村はこの辞書を使用したと考えられる。

しかし中村はTuchを辞書に記載されている「絨」ではなく、「羅紗」の漢字を使用して訳出している。明治期の国語辞典をみると、『和漢雅俗いろは辞典』には「らしや (名) 羅紗、けおりもの<sup>102</sup>、羅絨、氈氈<sup>103</sup>、『ことばのはやし』には「らしや ナ<sup>104</sup>。羅紗。けをもておりたる、ひとつのおりもの<sup>105</sup>と書かれている。いずれもラシヤの

漢字は「羅紗」である。当時は「羅紗」の表記の方が一般に使われていたようである。そのため、中村も「絨」ではなく「羅紗」と訳したのであろう。

Tuch (布地)、wunderlich (奇妙な、風変わりな)、Flachs (亜麻) の訳が中村訳と同じ「羅紗 (ラシヤ)」、「驚クベキ」、「麻」となっている辞書が存在するという事は、これらの訳は中村による誤訳ではなく、使用した辞書における誤記といえる。

#### 4) 邦訳者について

邦訳者の中村道夫 (道四郎) の詳しい素性は不明である。『ゴルドン將軍傳直譯注釈』下巻をはじめ、複数の本に記載されている広告によると、中村は「英獨ノ間ニ長ク留學シテ」<sup>106</sup>いたという。この広告が初めて掲載されたのは1896 (明治29) 年であるため、中村はそれ以前にイギリスとドイツに留学していたということになる。「長ク」とあることから、少なくとも1年以上留学していたと考えられる。

別の広告で「英獨語學ヲ以テ天下ニ鳴ル中村道夫先生」<sup>107</sup>と紹介されているように、中村はドイツ語と英語が堪能だったようで、ドイツ語だけでなく英語の本も訳している。中村の訳本は全部で15冊存在し、8冊がドイツ語を、7冊が英語を訳したものである。それらをまとめたのが、下記の【表5】である。

【表5】中村道夫 (道四郎) の訳本一覧

出版年月日	書名	出版社	原典の言語	本の種類
1895 (明治28) 年3月	『ボック氏第一讀本獨案内』	金刺芳流堂	ドイツ語	語学教科書
1895 (明治28) 年、月不明	『ボック氏第二讀本獨案内』下巻	金刺芳流堂	ドイツ語	語学教科書
1896 (明治29) 年8月	『エンゲリン第二讀本獨学自在』上巻	金刺芳流堂	ドイツ語	語学教科書
1896 (明治29) 年10月	『ゴルドン將軍傳直譯註釋』上巻	金刺芳流堂	英語	小説
1897 (明治30) 年1月	『ゴルドン將軍傳直譯註釋』下巻	金刺芳流堂	英語	小説
1897 (明治30) 年4月13日	『エンゲリン第二讀本獨学自在』下巻	金刺芳流堂	ドイツ語	語学教科書
1897 (明治30) 年4月16日	『エンゲリン第一讀本獨学自在』	金刺芳流堂	ドイツ語	語学教科書
1898 (明治31) 年3月	『エンゲリン第三讀本直訳註解』上巻	金刺芳流堂	ドイツ語	語学教科書
1898 (明治31) 年8月	『ボック氏第三讀本直訳註解』上之巻	金刺芳流堂	ドイツ語	語学教科書
1898 (明治31) 年9月	『エンゲリン第三讀本直訳註解』下巻	金刺芳流堂	ドイツ語	語学教科書
1899 (明治32) 年9月	『すたんれー亞弗利加探検譚直譯註釋』	金刺芳流堂	英語	小説
1900 (明治33) 年3月	『ねすふいーど氏第一讀本獨案内』	金刺芳流堂	英語	語学教科書
1900 (明治33) 年11月	『ねすふいーど氏第二讀本獨案内』	金刺芳流堂	英語	語学教科書
1901 (明治34) 年5月	『ねすふいーど第四讀本直譯意識』	金刺芳流堂	英語	語学教科書
1901 (明治34) 年10月	『ニューナショナル第三讀本直譯講義』	金刺芳流堂	英語	語学教科書

中村の訳本15冊のうち、12冊が教科書を訳したもので、3冊が小説を訳したものである。このうち2冊は同じ話を上下巻に分けたものであるから、中村が訳した文学作品は2作品ということになる。中村は文学の翻訳にはあまり携わらなかったようである。

明治期にドイツ語を学ぶ人物は、主として医学や自然科学を専攻する人物であった。留

学生は、明治初期では主として、医学、鉱山学、林学、工学など自然科学を学ぶためにドイツに行った。その後、明治中期になると法律学、政治学、哲学、教育学などの社会科学や人文科学を学ぶために留学する人物も現れるが、ドイツ語やドイツ文学を学ぶために留学する人物が登場するのは明治30年代になってからである<sup>108</sup>。おそらく中村は、教科書の訳本を多数出していることから教育学を学ぶために留学したのではないだろうか。

中村は複数の筆名を使用している。訳本の扉では「中村道夫」、奥付では「中村道四郎」を使用し、『すたんれー亞弗利加探検譚直譯注釋』でのみ、扉で「推移道人」、奥付で「中村道四郎」の名義を使用している<sup>109</sup>。中村の本名はいずれであろうか。

扉と奥付の名前が異なっている場合、明治期では奥付に記載されているほうが本名であると決められていた。1869（明治2）年5月、明治政府は出版条例を出し、「著述者出版人売弘所ノ姓名住所等ヲ記載ス可シ」<sup>110</sup>と定めた。これにより奥付に本名を記載しなかった場合、その人物に罰則が科されるようになったのである<sup>111</sup>。奥付に筆名や雅号を記載するのが当たり前になるのは明治末期から大正末期までの過渡期を経てからのことである<sup>112</sup>。奥付に書かれた「中村道四郎」と「推移道人」のうち、「推移道人」は明らかに筆名であると考えられるので、「中村道四郎」が中村の本名である可能性は高い。さらに中村は1901（明治34）年に「中村道四郎」の名で『仮名の鏡』という本を出版している<sup>113</sup>。これらのことから、やはり「中村道四郎」が本名であると思われる。

ただしこの他にも中村と思われる人物の名前が2つ存在する。1つが「中村道太郎」、もう1つが「武田芦鴻」である。「中村道太郎」は1898（明治31）年の金刺芳流堂の本の巻末に出現する<sup>114</sup>。金刺芳流堂は本の扉に「東京書林」と掲げているように、書籍組合である「東京書林」に参加していた。そのため、金刺芳流堂の本の巻末には「東京書林」に参加している書店もしくは店主の名前と住所の一覧が記載されている。この一覧に「中村道太郎」が出現するのである。初めて出現するのは1898（明治31）年8月17日出版の『ボックス氏第三讀本直訳註解』の巻末においてである。中村道太郎の住所は、東京市神田区今川小路2丁目で<sup>115</sup>、これは他の訳本の奥付に書かれた中村道夫（道四郎）の住所と一致する。しかし、住所が一致したからといって中村道夫（道四郎）と中村道太郎が同一人物であるとは限らない。道太郎が同居家族である可能性もある。ただ、東京書林組合一覧に名前が掲載されるのは書物問屋関係者のみである。前述のとおり中村道夫（道四郎）は1901（明治34）年に発行者兼印刷社として本の出版に携わっていた。道太郎も出版関係者である可能性は皆無ではないが、このことから道太郎が道夫（道四郎）の別名義である可能性は高いと考えられる。

「武田芦鴻」は別の本に出現する。中村の訳本は前述の15冊の他にもう1冊発刊が予定されていたようである。1897（明治30）年1月の広告には「中村道夫先生」訳として『ロングマン第三讀本獨案内意譯附』（以下、『中村ロングマン』）が紹介されている<sup>116</sup>。しかし調査したところ、この本は出版されていないことが判明した。ただし、似た題名で訳者が別の本は3冊出版されている。1895（明治28）年5月に出版された大島國千代訳『ロングマン氏第三讀本直訳註釋』（以下、『大島ロングマン』）<sup>117</sup>、武田芦鴻訳『ロングマン氏第三讀本獨案内意譯附』の上下巻（以下、『武田ロングマン』）である。『武田ロングマン』は1898（明治31）年9月に上巻が<sup>118</sup>、1899（明治32）年6月に下巻が出版された<sup>119</sup>。『中村ロングマン』が出版されていないことと、書名が酷似していることから、中村が名

義を変えて『武田ロングマン』を出版したという可能性も否定できない。

1897（明治30）年9月10日の奥付と1898（明治31）年6月7日の奥付によると、武田芦鴻（奥付では武田直助）は「京都市下京区烏丸通り六角下第廿二番戸」<sup>120</sup>に住んでいた。中村は東京に住んでいたため、中村と武田が同一人物である可能性は低いように思われる。しかし、金刺芳流堂の本をさらに見ていくと、中村の住所と「武田芳進堂」という書店の住所がまったく同じ「東京市牛込区肴町32番地」であることがわかる。肴町は現在の神楽坂にあたる場所である。1895（明治28）年3月10日の奥付によると、中村は肴町32番地に寄留していた<sup>121</sup>。その後1896（明治29）年8月5日の奥付からは「寄留」の文字が消え<sup>122</sup>、同年10月2日には東京市神田区今川小路2丁目4番地に住所を移している<sup>123</sup>。一方、武田芳進堂の住所については、1895（明治28）年3月10日の奥付では「牛込区肴町」<sup>124</sup>で番地は書かれておらず、1896（明治29）年8月5日の奥付では中村と同じ「牛込区肴町32番地」という住所が記載されている。戦後には1軒分左に移り、2021（令和3）年現在はJR飯田橋駅前のデパート「ラムラ」内に「芳進堂」という名で店を構えている<sup>125</sup>。金刺芳流堂と武田芳進堂は2つ合わせて金刺兄弟出版部を名乗っていた。武田芳進堂について『神楽坂まちの手帖』には「芳進堂 金刺兄弟出版部 肴町32 『最新東京学校案内』『初等英語独習自在』など」<sup>126</sup>（下線は筆者による）と書かれている。実際に、たとえば1907（明治40）年5月に出版された『植物学要解』の奥付には「金刺兄弟出版部 発行所 金刺芳流堂 武田芳進堂」<sup>127</sup>と書かれている。金刺芳流堂の店名は、店主である金刺源氏の姓からとったものだと考えられるため、兄弟店であり似た店名の武田芳進堂の店主は武田姓である可能性が高い。中村道夫（道四郎）の本名が武田芦鴻（直助）であると断定することはできないが、中村は武田と何かしらの関係があると考えられる。武田芳進堂に寄留していた中村は、武田芳進堂の兄弟分である金刺芳流堂とも交流があったのであろう。その結果、中村の邦訳はいずれも金刺芳流堂から出版されたのだと考えられる。中村道四郎は1903（明治36）年9月16日発行の東京市神田区の地図に、古書店「全利堂」店主としてその名が明記されており、住所は「東京市神田区今川小路二ノ四」と記載されている<sup>128</sup>。この住所は中村が武田芳進堂（牛込区肴町32番地）から転居した後の住所とまったく同じである。武田芳進堂で働いた中村が、その後独り立ちをして古書店を構えた可能性も考えられる。

## 5) 『エンゲリン読本』について

### (1) 概要

エンゲリンとフェヒナーの『ドイツ語読本—原典からの収集』は当時『エンゲリン読本』として知られていた。『ドイツ語読本—原典からの収集』には3つの版があり、A版が全5巻、B版が全3巻、C版が全2巻の合計10巻存在する<sup>129</sup>。そのうち、訳本が存在するのはA版の1巻から3巻までである。同じ巻を複数の訳者が訳しているため、A版1巻の邦訳は4冊、A版2巻の邦訳は2冊、A版3巻の邦訳は4冊ある。つまり『エンゲリン読本』の邦訳は全部で10冊存在するのである。

『エンゲリン読本』はドイツ語学習のための教科書であるが、『エンゲリン読本』以外のドイツ語教科書も当時複数存在していた。ドイツ語学者の山口小太郎（1867-1917）は「ドイツ語授業のための最良の読本」（Die besten Lesebücher zum Unterricht der deutschen Sprache）というドイツ語の論文で、ドイツ語を教える際にどのドイツ語教科書を選ぶべき



かについて述べている<sup>130</sup>。山口は18歳でドイツ語教師になった人物で、この論文を出した時は東京外国語学校ドイツ語科の主任教授であった。さらに独逸学協会中学と独逸語専修学校でもドイツ語を教えていた。ドイツ語界を代表する学者として知られ、大村仁太郎、谷口秀太郎と共にドイツ語の文法教科書を著した。この文法書は明治のドイツ語学習者たちに「三太郎文法」として広く親しまれた<sup>131</sup>。

山口が言うには、日本に導入されたドイツ語の読本ははじめは『ヘステル読本』や『ボック読本』であり、これらはドイツで5、6年ほどドイツ語を話したドイツの子ども向けの教科書を訳したものであったという。ドイツ人に母国語で事物に関する知識を与えるための本であり、語学授業のための教科書ではなかった。その後1880（明治13）年ごろになると、これらの事物の知識を授ける本は好まれなくなり、その代わりに『ホップフ読本』『ケーライン読本』『エンゲリン読本』などが教材に使われるようになったという<sup>132</sup>。明治期のドイツ語学者について研究している上村直己は、「エンゲリン読本はヘステル読本と並んで明治の独語リーダーとして最も有名である」<sup>133</sup>と述べている。上村によると、旧第五高等中学校の蔵書内に『エンゲリン読本』が多数おさめられているという<sup>134</sup>。

当時、『エンゲリン読本』だけでなく、エンゲリンの他の著作も知られていたようである。1896（明治29）年、「三太郎文法」つまり『独逸文法教科書』の第3版が、前後篇の2巻に分かれて出版された。その後編の「凡例」末尾に10冊のドイツ語読本が箇条書きで紹介されている<sup>135</sup>。そのうち2冊がエンゲリンの著作で、1冊目は『新高ドイツ語文法』（*Grammatik der neuhochdeutschen Sprache*）<sup>136</sup>、2冊目は『ドイツ語授業のための手引き』（*Leitfaden für den deutschen Sprachunterricht*）である<sup>137</sup>。この文法書は、とくに旧制高校でドイツ語の教科書として広く使われた<sup>138</sup>。昭和初期に至るまで、70以上の版を重ね<sup>139</sup>、上村は「およそ明治後半から昭和十年頃までの間にドイツ語を学んだ人でこの本の世話にならなかった人は少ないのではないか」<sup>140</sup>と述べている。学習者が「凡例」を最後までしっかりと読んだかどうかは不明だが、エンゲリンの本は『エンゲリン読本』以外のものも当時すでに知られていたようである。

## (2) 使用していた学校

『エンゲリン読本』は独逸学協会学校とその予備校、東京学院（元独逸専修学校、後の関東学院大学）、東京数学院、第五高等中学校（後の熊本大学）、第三高等学校（後の京都大学）で使用されていた<sup>141</sup>。

独逸学協会学校で使用されていたのは、『エンゲリン第3読本』と『エンゲリン第4読本』である<sup>142</sup>。

東京学院では設立時には『ヘステル読本』が主として使われていたが、1899（明治32）年には『ヘステル読本』は消えて『エンゲリン読本』が使用されるようになる。第1学年の前期で『エンゲリン第1読本』、後期で『エンゲリン第2読本』、第2学年の前期で『エンゲリン第3読本』、後期で『エンゲリン第4読本』『エンゲリン第5読本』が使用されていた<sup>143</sup>。

東京数学院では、1895（明治28）年9月からドイツ語科が開設され、教科書に『エンゲリン読本』5冊が用いられた。1年生が第1読本、2年生が第2読本、というように学年ごとに順番に学んでいき、最終学年である5年生で第5読本を学ぶといったカリキュラムであつ

た<sup>144</sup>。

第五高等中学校では、1890（明治23）年9月10日の記録によると予科第1級で『エンゲリン氏第二読本』が使用されていた<sup>145</sup>。小泉八雲は「ハーメルンの笛吹き男」の話を使って第五高等中学校で生徒に英語を教えていたという<sup>146</sup>。「ハーメルンの笛吹き男」の話は『ドイツ語読本—原典からの収集』のA版2巻に収録されており、これは邦訳された『エンゲリン読本』の第2読本にあたる。八雲はおそらくこの『エンゲリン読本』第2読本を使用したのであろう。その後1898（明治31）年には1年次の教科書に『エンゲリン第1読本』が用いられた<sup>147</sup>。

第三高等学校では1900（明治33）年に、3年生の授業で『エンゲリン第4読本』を使用していた記録が残っている<sup>148</sup>。

これらの学校で使用されていたエンゲリンの『ドイツ語読本—原典からの収集』は、日本の出版社からもまったく同じ内容で出版されている<sup>149</sup>。わざわざ日本で印刷するほど、エンゲリンの本は広く使用されていたのである。『エンゲリン読本』に収録されていた「ハーメルンの笛吹き男」についても、ドイツ語を学ぶ多くの学生が読んでいたと考えられる。

### 3. 柴田環訳「ハメルンの鼠取」

#### 1) 概要

「ハーメルンの笛吹き男」が日本で次に紹介されたのは、1912（明治45）年に出版された『世界のオペラ』に収録されている「ハメルンの鼠取」<sup>2</sup>であろう。この作品は、ヴィクトール・ネスラー（Victor Ernst Nessler, 1841-1890）が作曲し、フリードリヒ・ホフマン（Friedrich Hoffmann, 1813-1888）が作詞をした全5幕のオペラ「ハーメルンのネズミ捕り男」（Der Rattenfänger von Hameln）（以下、ホフマン版）である<sup>150</sup>。ホフマン版は1879（明治12）年にドイツのライプツィヒで初演が行われた。このオペラが日本で上演されたかどうかについての記録は、調査したが見つけることはできなかった。

柴田環の『世界のオペラ』には70のオペラが収録され、その概要が紹介されている。「ハメルンの鼠取」も、オペラのあらすじが紹介されているにすぎない。しかし、「ハーメルンの笛吹き男」が紹介されているという点、そしてそれがグリム兄弟版ではなくホフマン版であるという点で、この話は日本における「ハーメルンの笛吹き男」の受容史のなかで無視できない存在であるといえる。受容について語る際、翻案や抄訳を無視することはできない。同様に、ここでは「ハーメルンの笛吹き男」がオペラ用に変容され、日本で取り上げられたことについて、考察していく。

#### 2) あらすじ

下記は、柴田によるあらすじを要約したものである。

第1幕では、ハーメルンの市会議員たちが市の財政問題とネズミの問題について会議をしているところに、フノールド・ジングトという男が現れる。フノールドはネズミ退治を申し出て、市会議員たちはこの申し出を受ける。場面は変わり、学校長ヘルトルドスが市長の娘レギナと市長の従妹ドロテアと話をしている。ヘルトルドスは「もうすぐ息子のヘリベールが帰って来るので、レギナと早く結婚させたい」と話す。そこにヘリベールがや

って来て、後から市長と書記エテレルスがやって来る。

第2幕では、町の食堂でフノールドが歌を歌っていると、鍛冶屋のウルフとその婚約者ゲルトロッドがやってくる。フノールドとゲルトロッドは一目見て互いに惹かれあう。場面は変わり、湖畔の漁師小屋でウルフはフノールドに恋をしたゲルトロッドの目を覚まさせようとするが、無駄に終わる。ウルフはフノールドに復讐しようと思い、外へ出て行く。入れ違いにフノールドがやってきて、ゲルトロッドと密会する。

第3幕では、書記エテレルスが教会長リンベルグに「最近町にやってきた男が、女を誘惑している」と訴える。リンベルグが「いくらその男でも、市長の娘レギナにキスをするのは無理だろう」と話していると、フノールドがやってきて「市長の娘に口付けてみせる」と言う。場面は変わって、鍛冶屋ウルフは近所の人に、婚約者ゲルトロッドがフノールドに惹かれていると言って愚痴をこぼす。そこにフノールドが、夜のうちに捕まえていたネズミをヴェーゼル河に捨てるためにやってくる。ウルフはフノールドに喧嘩を仕掛けるが、負けてしまう。

第4幕では、ネズミが退治されたので人々は喜ぶが、町の男たちはフノールドが町の女たちから人気があることを妬んで金を払おうとしない。市長の娘レギナと市長の従妹ドロテアが「大きなネズミの王が残っている」と言うので、市民たちはフノールドに「ネズミを1匹残らず退治するという約束を破ったので払うお金はない」と言う。怒ったフノールドが「それなら市長の娘とキスをさせろ」と言うので、市民はさらに怒る。フノールドが歌を歌うと、その歌を気に入った市長の娘がフノールドにキスをする。町の人々は怒り、フノールドを捕える。

第5章では、魔術を使った罪でフノールドに死刑が宣告される。そうするとゲルトロッドがフノールドの身代わりを申し出る。法律によるとこの場合、身代わり人が死刑になり被告人が無罪になるか、2人とも追放されるかのいずれかであり、フノールドはゲルトロッドと共に追放される。町を出た後、ゲルトロッドは川に身投げする。ウルフは、ゲルトロッドの死を悲しむよりも、フノールドに復讐できたことを喜ぶ。そしてウルフはフノールドを減刑した町の人々を恨み、笛を吹いて子どもたちを山へ連れ去る<sup>151</sup>。

### 3) 内容について

以上の内容からわかるとおり、この「ハメルンの鼠取」<sup>2</sup>はグリム兄弟版とも、ブラウニング版とも、ラング版とも異なった内容である。ホフマンは「ハーメルンの笛吹き男」を基に、このオペラを創作したのである。「ハーメルンの笛吹き男」伝説は創作者の興味が掻き立てられるものであるらしく、1803年にはドイツの文学者ゲーテもこの伝説をもとにネズミ捕り男（Der Rattenfänger）という詩を創作している。

ホフマン版の笛吹き男には名前が付けられているが、「ジングト」はおそらくドイツ語のsingen（歌う）から付けられた名前であろう。ここでは笛吹き男は笛を吹かず、歌を歌う。笛を吹くのは鍛冶屋のウルフで、まったく異なる話に改変されているのである。

### 4) 発行の目的

『世界のオペラ』は、オペラ歌手の柴田環がオペラを日本に紹介する目的で出版された本である<sup>152</sup>。著者の柴田環はその後結婚して三浦環となり、「蝶々夫人」を歌ってオペラ

歌手として有名になる<sup>153</sup>。柴田が『世界のオペラ』で70のオペラについてその紹介文を書いたのは、これからの日本でオペラが流行すると信じたからであるという<sup>154</sup>。

『世界のオペラ』は明治40年代の二大音楽雑誌の『音楽界』と『音楽世界』に取り上げられた<sup>155</sup>。慶應義塾教授の妹尾幸陽（1892-1961）は『音楽界』で下記のように述べている（下線は筆者による）。

どうぞして日本にも日本語で書いた歌劇の梗概が欲しいものである、と云ふ事は私ばかりでなく世の好楽家全部の声であらうと思う...柴田環女史の手に依て七十の歌劇を修めた『世界のオペラ』なる本が楽界に生まれて来た事は何たる慶事であらう<sup>156</sup>。

日本に音楽鑑賞についての書籍が現れるのは明治後期になってからのことである。音楽評論家で音楽之友社の会長でもあった堀内敬三は、その理由として日露戦争以前は洋楽にかかわる者は教師ばかりであったからだと述べている<sup>157</sup>。音楽書と言えば、教科書や教授参考書以外に考えられなかったのである。その後一般の人々が洋楽に親しむようになると、技術以外の方面から音楽を説いたものが要求されるようになった。それらの本のなかでよく読まれたのは、東儀鉄笛の『音楽通解』（明治40年）、細貝邦太郎／有沢潤共著の『泰西音楽大家伝』（明治40年）そして柴田環の『世界のオペラ』（明治45年）であったという。『世界のオペラ』は1923（大正12）年までにすでに第5刷が出版されるほどで、音楽書としては異例の売れ行きであったといえる<sup>158</sup>。

##### 5) 著者について

柴田環は、一般に「三浦環」の名前で知られるオペラ歌手である。1903（明治36）年に日本人による初めてのオペラ公演に出演し<sup>159</sup>、1915（大正4）年にはイギリスのロンドンで「お蝶夫人」の主役を演じた<sup>160</sup>。柴田の「お蝶夫人」はニューヨーク・タイムズにも取り上げられ、その後柴田は1930（昭和5）年まで16年間、アメリカを中心に「お蝶夫人」を歌い続けた<sup>161</sup>。1937（昭和12）年に出版された柴田の『歌劇お蝶夫人』は、邦訳上演台本として「マダム・バタフライ」の訳の定本となった<sup>162</sup>。

柴田環の名義で出版された『世界のオペラ』だが、この本は実は三浦の著作ではない。『世界オペラ』の訳調がどうみても柴田らしくないと気付いたのは四谷左門（1901-1979）であった。四谷は三浦環の伝記を出版するために彼女の口述筆記に当たっていた人物である<sup>163</sup>。四谷は柴田の口から直接、『世界のオペラ』は三浦ではなく実際には千葉秀甫が書いたものであることを聞きだした<sup>164</sup>。このことが文献上で初めて明らかにされたのは、柴田が没した翌年であった<sup>165</sup>。『音楽芸術』が特集した「三浦環追憶」のページでは、柴田に近い人たちが招かれ、座談会という形で柴田について話し合っている。ここで四谷が『世界のオペラ』は、実際には千葉秀甫が書いたものであると発言したのである<sup>166</sup>。

千葉秀甫は新聞記者で、ドイツ語の先生でもあった<sup>167</sup>。語学生から畏怖されるほどの才覚があり、作家武者小路実篤の兄である武者小路公共は千葉の初対面の印象を下記のように述べている。

どんな方法で教えていただけるかと尋ねたところ、日本の新聞の記事を見ながらド

イツ語に翻訳するのがよいだろうというので、自分にはそんな力はないと言うと、すぐ手元の新聞を取り上げ、私に一記事を選択させそれをすらすらとドイツ語に訳していくのであった。日本にこんな先生がいるのかと驚いてすぐ弟子入りした<sup>168</sup>。

千葉は柴田が帝国劇場の出し物に出演できるよう尽力した<sup>169</sup>。そのため、柴田が帝国劇場を辞任する際には、柴田と千葉についてのゴシップ記事が巷をにぎわせたという<sup>170</sup>。柴田が帝国劇場に所属していたのは1911（明治44）年から1912（明治45、大正元）年までのことである。その後1913（大正2）年に柴田は2人目の夫である三浦政太郎と結婚する。柴田は結婚をせまる千葉から逃げて夫のいるシンガポールへ行ったが、千葉は後から柴田をシンガポールまで追いかけた<sup>171</sup>。柴田は生涯を通じて千葉との関係に触れられることを避け、『世界のオペラ』について語ることもしなかったという<sup>172</sup>。『世界のオペラ』が出版された1912（明治45）年ころは柴田と千葉の間柄は良好なものだったが、その後千葉がつきまとうようになったため、柴田にとって『世界のオペラ』は思い出したくないものとなったであろう。

#### 4. 明治期における受容のまとめ

明治期に紹介された「ハーメルンの笛吹き男」は2話のみで、1896（明治29）年での紹介が初めてである。『グリム童話集』のKHM184「釘」（Der Nagel）が1873（明治6）年に英語教科書の邦訳版のなかで紹介され<sup>173</sup>、1886（明治19）年にローマ字雑誌でKHM152「羊飼いの少年」（Der Hirtenbüblein）と1887（明治20）年にKHM18「ワラと炭とそら豆」（Strohalm, Kohle und Bohne）がローマ字で紹介され<sup>174</sup>、1887（明治20）年に『グリム童話集』の話を11話収録した邦訳本が出版されたことと比べると<sup>175</sup>、「ハーメルンの笛吹き男」の受容は『グリム童話集』より大きく遅れていることがわかる。これは「ハーメルンの笛吹き男」だけではなく、『ドイツ伝説集』の話一般にいえることである。『グリム童話集』210話のうち、155話が明治期に訳されている一方<sup>176</sup>、『ドイツ伝説集』579話のうち、明治期に訳されているのは10話のみである<sup>177</sup>。『グリム童話集』よりも『ドイツ伝説集』の方が話数は多いが、邦訳された話数はグリム童話の方が圧倒的に多いのである。また、『ドイツ伝説集』の初めての邦訳は、1984（明治27）年出版の『獨逸エンゲリン第三讀本直譯』上巻所収のもので<sup>178</sup>、『グリム童話集』の初訳よりも23年も後のことである。

明治期における『ドイツ伝説集』の邦訳は、ドイツ語教科書と児童雑誌に収録されている。ドイツ語教科書に収録されているのは7話で、1984（明治27）年7月の『獨逸エンゲリン第三讀本直譯』にDS1「クッテンベルクの3人の鋤夫」（Die drei Bergleute im Kuttenberg）、DS3「ハルツの山の修道士」（Der Bergmönch im Harz）、DS23「キュフホイザー山のフリードリヒ赤髭帝」（Friedrich Rotbart auf dem Kyffhäuser）が、10月の『エンゲリン第一讀本解譯』にDS126「ブレスラウの鐘造り」（Der Glockenguß zu Breslau）が、1896（明治29）年の『エンゲリン第二讀本獨學自在』にDS17「巨人のおもちゃ」（Das Riesenspielzeug）、DS234「ヒュットおばさん」（Frau Hütt）、DS245「ハーメルンの子どもたち」が掲載されている。『エンゲリン第1讀本』と『エンゲリン第3讀本』はそれぞれ、1897（明治30）年と1898（明治31）年にも別の訳者によって訳出されている<sup>179</sup>。児童

雑誌に収録されているのは4話で、1899（明治32）年の『女子之友』にDS493「ヴァインスペルクの女たち」（Die Weiber zu Weinsperg）が、1902（明治35）年にDS126「ブレスラウの鐘造り」、DS242「ビンゲンのネズミの塔」（Der Binger Mäuseturm）、DS556「堅く鍛えられた方伯」（Der hartgeschmiedete Landgraf）が掲載されている<sup>180</sup>。

グリム童話が日本で受容されるようになった理由として、ヘルバート派の影響は無視できない<sup>181</sup>。鎖国を解いた後の日本は、西洋に追い付くために教育を重視し、1887（明治20）年にヘルバート派のエミール・ハウスクネヒト（Emil Paul Karl Heinrich Hausknecht, 1853-1927）を招いた。ハウスクネヒトは東京大学での演習で教授指導書『第一学年』（*Das erste Schuljahr*）を使用した。ここにグリム童話が掲載されていたのである<sup>182</sup>。『第一学年』に掲載されたのは14話で、志操教育の教授材料として用いられた。国語、算数、理科、図工など、いずれの学科もその14話と関連して教えられるように構成されている<sup>183</sup>。ここで使用されるのはメルヒェンのみで、伝説は用いられなかった。『第三学年』になると、『ドイツ伝説集』に収録されている伝説も教材に加わるが、選ばれたのは主としてテューリング地方の領主たちの歴史伝説で<sup>184</sup>、「ハーメルンの笛吹き男」がそのなかに含まれることはなかった。

「ハーメルンの笛吹き男」は『ドイツ伝説集』以外の伝説集やメルヒェン集にも収録されている。そのうちの1つがフランツ・オットー（Johann Christian Gottlieb Franz Otto Spamer, 1820-1886）の『青少年の大好きなメルヒェンコレクション』（*Der Jugend Lieblings-Märchenschatz*）（以下、『オットーのメルヒェン集』）<sup>185</sup>である。この本は1880（明治13）年に、ドイツ留学中の兄から11歳の巖谷小波に贈られた<sup>186</sup>。巖谷小波は「明治時代に、日本における児童文学を確立した人」<sup>187</sup>と言われ、グリム童話の翻訳や翻案も多く行なった人物である。巖谷は『オットーのメルヒェン集』を大いに気に入ったらしく「僕がこの贈物を貰った時は、まだ本文は読めなかつた。然しその挿画の面白さは、夙く已に僕の好奇心を挑発して、学校の教科書を明けぬ日はあつても、オットウを手にはせぬ日は、殆ど無かつたと云つてよい位。実に僕の愛読——否、愛覧書の随一であつた」<sup>188</sup>と書いている。

しかし、それほど気に入った本であるにもかかわらず、巖谷は「ハーメルンの笛吹き男」を訳していない。それは、「ハーメルンの笛吹き男」の主役が子どもではないからであろう。この話では、子どもたちは最後に登場して笛吹き男に連れ去られてしまう。子どもが主役として困難に挑戦することも、決断することもない。そのうえ、大人たちの不道徳の罰として、どこかへ連れ去られてしまう。おそらく小波はこのような話は子どもには相応しくないと考えたのであろう。

明治期に紹介された「ハーメルンの笛吹き男」はいずれも、子ども向けのものではない。『エンゲリン第二讀本獨學自在』も『世界のオペラ』も、主として学生や大人に向けられたものである。これらはいずれも底本から改変されておらず、前者のグリム兄弟版は原文に忠実に訳され、後者のホフマン版も改変されることなくあらすじが紹介されている。文学としてではなく、語学やオペラを学ぶための材料として紹介されているため、明治期は主として底本が改変されない形で「ハーメルンの笛吹き男」は受容されたといえる。

教科書とオペラ紹介本に載せられたこれらの話は、のちの受容に影響を与えることはほ

とんどなかった。次にグリム兄弟版が出版されるのは昭和期のことであり、ホフマン版はその後出版されていない。『エンゲリン読本』が使用されていたのは、大学、大学に相当する機関、大学に進学するための予備校においてであった。当時ドイツ語を学んでいたのは、医師を志す者や、のちに官僚となる者など、いわゆる知識層であった。また、当時オペラを学んだりオペラに親しんだりしていたのは上流階層の人々であった。そのため、この2話を目にするのは限られた人々であったと考えられる。明治期には「ハーメルンの笛吹き男」は一般の人々にはまだ普及していなかったといえる。

## 第4章 大正期における「ハーメルンの笛吹き男」

### 1. 邦訳された「ハーメルンの笛吹き男」

#### 1) 概要

大正期は子ども向けの雑誌や本が相次いで創刊された時代である。1914（大正3）年に『少年倶楽部』が創刊され、1915（大正4）年に富山房による「模範家庭文庫」シリーズが出版された。1917（大正6）年には『幼年の友』などの子ども向け雑誌が創刊され、1918（大正7）年には『赤い鳥』が創刊された。さらに1919（大正8）年には『小学男生』と『小学女生』が、1922（大正11）年には小学館の雑誌『小学校五年生』と『小学校六年生』が創刊された<sup>189</sup>。それにともない、「ハーメルン笛吹き男」の邦訳もそれらの子ども向けの雑誌や本に収録されるようになる。

大正期には「ハーメルン笛吹き男」の邦訳が7話存在する。それらをまとめたのが、下記の【表6】である。それぞれの作品について順番に見ていく。

【表6】大正期の邦訳の一覧表

番号	出版年月	訳者	話の題名	収録本	出版社
3	1916（大正5）年10月	少年通俗教育會	「笛吹き爺さん」	『幼年百譚 お話の庫』	博文館
4	1919（大正8）年12月	水谷勝	「魔法の笛」	『世界童話寶玉集』	富山房
5	1923（大正12）年1月	文献書院	「ハメリンの笛吹」	『ブラウニング詩選集』	文献書院
6	1923（大正12）年9月	矢崎忠藏	「笛吹き翁さん」	『少年文学』	イデア書院
7	1925（大正14）年2月	岡邊白夜	「鼠捕りの男」	『山の大王』	宏文堂
8	1925（大正14）年11月	近藤宗男	「ハムリンの『斑の笛吹き』」	『西洋傳説 白鳥の騎士』	イデア書院
9	1926（大正15）年11月	雑賀忠義	「ハメリンのまんだら笛吹」	『英語研究』	研究社

#### 2) 少年通俗教育會訳「笛吹き爺さん」<sup>3</sup>（1916（大正5）年10月）

##### (1) 邦訳の内容について

大正期の「ハーメルンの笛吹き男」の邦訳で1番古いとされるのは、1916（大正5）年に博文館から出版された『幼年百譚 お話の庫』秋の巻に収録されている「笛吹き爺さん」<sup>3</sup>である。『幼年百譚 お話の庫』は児童を対象に出版された本であり、この話は「ハーメルンの笛吹き男」が児童文学として受容された初めてのものである。

本文は旧仮名遣いの散文で書かれたものである。底本については述べられていないが、笛吹き男が金曜日に現れること、笛吹き男が緑色の上着と赤色のズボンを着用し鳥の羽が付いた帽子をかぶっていること、代金として「鼠一匹に就きまして、お金を一厘づゝ」要求すること、川の傍で笛吹き男が「鼠の頭領」に質問をすること、退治したネズミの数は全部で99万9999匹であること、大人たちが日曜日に教会へ行っている間に笛吹き男が子どもたちを連れ去ることから、ラング版



図1 今関甫昭 絵



を使用したと考えられる。しかし、ラング版を忠実に訳したものではない。改変された箇所を表にをまとめたのが、下記の【表7】である。

(2) 「笛吹き爺さん」<sup>③</sup>とラング版の比較表【表7】

	ラング版	「笛吹き爺さん」 <sup>③</sup>
笛吹き男の楽器	バグパイプ	笛
笛吹き男を見た人々の反応	人々は、笛吹き男が魔術師でネズミを送り込んだ張本人だと思う。 市長は人々をなだめ、笛吹き男を畏にかけようとする。	(記述なし)
人々が集まる場所	教会	公会堂、お寺
報酬の金額に対して人々が抱く感想	高額だと思う。	高額だとは思わない。
ネズミの数	99万999匹	99万9999匹
ネズミ退治の後に市長が提示した報酬	50クローネ	100円9厘 (999円99銭9厘のうち899円99銭、減額してくれるよう頼む)
帰ってくる子ども	3人の男の子 (ガニ股で速く走れない子、片足だけ裸足だったので足を怪我してうまく歩けなかった子、山腹に入ろうとして岩にぶつかってしまった子)	1人の足の悪い男の子
消えた子どもたちの行方	山腹の裂け目の中へ消える。 トランシルヴァニアで新しい町を造ったと言われている。	川に飛び込み海へ流されて死んでしまう。
町長への罰	3人の息子と2人の娘を失い、さらに町の人々から子どもが連れ去られてしまったのは市長のせいだと責められる。	(記述なし)

(3) 表の分析と考察

「バグパイプ」が「笛」に変更されていたり、「教会」が「公会堂」や「お寺」に変更されていたりするの、日本の読者にわかりやすいよう配慮した改変といえよう。「笛吹き爺さん」が収録されている『幼年百譚 お話の庫』は主として子どものために編纂された本である。前書きにあたる「緒書」では読者に「幼年諸君」と呼びかけており<sup>190</sup>、広告欄には「学校の好参考、家庭團樂の良師友」とあることから<sup>191</sup>、就学児童を読者として想定していたと思われる。明治期の辞書にはchurch(教会)の訳語として「教会」がすでに掲載されていたので<sup>192</sup>、そのまま「教会」と訳すこともできた。しかし「バグパイプ」や「教会」などは子どもたちには到底理解できないと考え、改変したのであろう。ラング版では人々がネズミの害について話しあう場所も、日曜日に大人たちが集まる場所も、いずれも教会である。一方「笛吹き爺さん」では前者は「公会堂」、後者は「お寺」と訳されている。教会を日本人の身近にある建物に置き換えたのであろう。

笛吹き男が町に現れると、ラング版では町の人々は笛吹き男が魔術師(sorcerer)でネズミを町へ送り込んだ張本人だと思うが、「笛吹き爺さん」ではその箇所は省略されてい

る。「魔術師」という単語も子どもたちには理解できないと考えたのであろう。さらにラング版では、笛吹き男がネズミ退治の代金として提示する金額に対して、人々は高すぎると言うが、市長が人々を説得して笛吹き男にネズミ退治を依頼する。一方「笛吹き爺さん」③では、人々は「一匹一厘計りならさう澤山なお金も要るまい」と考えて笛吹き男にネズミ退治を依頼する。ラング版では笛吹き男が終始怪しい人物として描かれているのに対して、「笛吹き爺さん」③では奇妙な外観の人物だが別段怪しい人物だとは思われていない。笛吹き男は「鼻が曲つてみましたし、口髯は馬鹿に長いと云ふ、まことに氣味の悪い様な老人」であるにもかかわらず、人々はその申し出に対して疑念を抱かず素直にネズミ退治を依頼する。

ラング版では市長が率先して笛吹き男を畏にかけけるため、その罰として最後には市長は自分の子どもを失い、人々から責められる。一方「笛吹き爺さん」③では市長が人々をなだめたり、笛吹き男を畏にかけようとしたりする場面が削除されており、市長への罰も語られない。「笛吹き爺さん」③では市長は謀略をめぐらせていないため、最後に罰せられることもない。

ネズミの数はラング版では「99万999匹」(Nine hundred and ninety thousand, nine hundred and ninety-nine<sup>193</sup>)だが、「笛吹き爺さん」では「99万9999匹」である。英語では「Nine hundred and ninety」を繰り返すことで韻を踏んでいるが、この韻は日本語にすると消えてしまう。そのため「100万に1匹足りない」という内容に改変したのではないだろうか。正確な理由については不明である。

ラング版では3人の男の子が帰ってくるが、「笛吹き爺さん」③ではひとりの足の悪い男の子だけが帰ってくる。これはブラウニング版の結末と同じである。町から連れ去られた子どもたちは、ラング版では山腹の裂け目のなかへ消える。一方「笛吹き爺さん」③では子どもたちは川に飛び込んで海に流されて死んでしまう。

#### (4) 訳者について

訳者について本には「少年通俗教育會」とのみ記載されており、個人の名前は書かれていない。『幼年百譚 お話の庫』は博文館から、春の巻、夏の巻、秋の巻、冬の巻の4巻が順番に出版されている<sup>194</sup>。春の巻の緒言に「記事の大部分は、幼年世界記者新井弘城君の執筆を煩したものが多いのです」<sup>195</sup>とあることから、「少年通俗教育會」のメンバーに新井弘城がいたのは確かである。

新井弘城は本名を南部新一といい、他の筆名として南部亘国や新井胡蝶という名前を使用することもあった。京都府舞鶴市に生まれ、小学生時代から雑誌『少年世界』や『少年』などに親しんでいた<sup>196</sup>。当時のことを南部は下記のように述べている。

明治の終わり頃、ラジオやテレビどころか、その日の新聞さえ、翌日でないと見られないという、山陰地方の山寒村の少年にとって、月一回発行される『少年世界』がまちどうしくて、その魅力がどんなに強烈であったかは、明治生れの読者なら、みな覚えのあることであろう<sup>197</sup>。

小学生の新井は『少年世界』への投稿を何度もしており、「投稿少年」として木村小舟

と深いつきあいがあり、個人的に文通もしていたという。その後木村の推薦により、1915（大正4）年に博文館に入社した<sup>198</sup>。『幼年画報』や『幼年世界』などの編集に携わり、『少年世界』に寄稿もしていた<sup>199</sup>。

「少年通俗教育会」には他に誰が携わっていたのであろう。この会の代表者は木村小舟であると考えられる。『お話の庫』春の巻の緒言には個人名の代わりに「編者」という署名があり、下記のような記述がある。

お話の庫春の巻が出来ました、此の書は曩に出版したお話の種の姉妹篇とも云ふべきもので、其編纂の趣旨目的は、既に前書に記した通りでありますから、茲にはわざと書きません<sup>200</sup>。

このことから、『お話の庫』と『お話の種』の編集者は同一人物であると考えられる。『お話の種』上編の緒言には「編者木村小舟識」と記されており<sup>201</sup>、木村は半自叙伝『足跡』の著作目録に「お噺の種（全二冊）、お噺の庫（全四冊）」と記している<sup>202</sup>。新井弘城も「『少年譚海』創刊のころ」で木村小舟の仕事として『お話の種』と『お話の庫』を挙げている<sup>203</sup>。これらのことから、『お話の庫』の編者は木村小舟と推測することができる。しかし、木村は1914（大正3）年12月に博文館を退館しているため<sup>204</sup>、本文に主として携わったのは新井弘城であろう。新井は博文館に入る前から、雑誌への投稿を通じて木村と交流があった。新井が博文館に入ったのは、木村の推薦もあってのことだった。新井は木村を師として仰ぎ、木村の家を頻繁に訪ねたという<sup>205</sup>。訪問の頻度があまりに多かったため、木村は仕事部屋の入り口に「面会は30分以内に願います」という貼り紙をしたという。木村の次女のタカ子は「貼紙してあったのは、新井さん向けのもの」であったと言っている<sup>206</sup>。『お話の庫』についても、新井はおそらく木村から助言を受けていたと考えられる。『お話の種』の緒言で木村は下記のように述べている。

子供には、長編のお話が禁物です、かなり面白いものでも、あまり長いのになると、飽いてしまひます<sup>207</sup>。

「笛吹き爺さん」はラング版の内容と比べて話の結末が省略されている。子どもたちが消えた場面で話が終了し、その後の親たちの反応や、子どもたちがハンガリーで新しい町を造ったという噂は削除されている。おそらく木村はこの箇所を蛇足であると考え、その助言を受けた新井がこの箇所を削除したのであろう。

### 3) 水谷勝訳「魔法の笛」<sup>[4]</sup>（1919（大正8）年12月）

#### (1) 邦訳の内容について

2番目の邦訳は、1919（大正8）年に富山房から出版された『世界童話寶玉集』に収録されている「魔法の笛」<sup>[4]</sup>である。目次にはこの話について下記のように書かれている。

魔法の笛（中世のドイツ傳説）

北ドイツのハンノーヴェル地方で十三世紀ごろあつた非常に有名な傳説を、イギリ

ス近世の大詩人ロバート・ブラウニングが歌に作ったもので、子供の詩としては古今の名作だといはれてゐるものです<sup>208</sup>。

「ハンノーヴェル地方」はハンノーヴァー地方のことで、「ロバート・ブラウニング」はロバート・ブラウニングのことであろう。元はドイツの伝説であり、それをブラウニングが詩にしたことが明記されている。

本文は旧仮名遣いでリズムカルな七五調の詩で書かれている。ブラウニング版をほぼ忠実に訳したものと見える。ただし「ユリウス・カエサル」や「バグダット」といった外国の人名や地名、聖書の言葉などは省略し、そのうえ外国の貨幣単位（1000ギルダー）を日本の貨幣単位（千圓）に変えて表記している。

話の最後の教訓は大幅に変更されている。ブラウニングの詩では話の最後に「だから、ウィリー。お互いに、借りたお金は返しておこう——特に笛吹き男からのものは！ 笛を吹いてネズミやハツカネズミから自由にしてくれるからというより、一度約束したからには、その約束は守ろうね！」<sup>209</sup>というブラウニングの友人の息子ウィリアムに宛てた教訓が添えられている。「魔法の笛」<sup>[4]</sup>では教訓はなく、代わりに下記のような表現で話が終わる。

これはまったく親たちが、  
約束破つたみせしめだ。  
けれど子供に罪はない、  
だから楽しい天国へ  
子供らだけが行ったのだ。

それと悟つた親たちは、  
すつかり心を入れかへて、  
笛吹男の話をば  
石にきざんで世にのこし、  
つみほろぼ  
罪 亡しをしたといふ<sup>210</sup>。

日付や通りについての話と教訓が削除され、両親が罪滅ぼしをしたという内容に変えられている。子どもに罪がないだけでなく、親も罪滅ぼしをしたとして、あたかも犯した罪が許されているかのように書かれているのである。これは『世界童話寶玉集』が「幼い人たちはいふまでもなく、いろ／＼に年齢のちがつた人たちをふくめた——すべての家庭に捧げたい」との思いから出版されたものだからであろう<sup>211</sup>。幼い子ども以外の人々も読者として想定しているため、子どもに向けられた教訓を削除し、親が悪役にならないようにしたのだと考えられる。

## (2) 訳者について

この本の編者は楠山正雄であるが、訳者は水谷勝である。本のはじめにある「おぼえがき」で楠山は「『魔法の笛』…は、編者のために、友人水谷勝君が特に書いてくれたもの

です」と述べている<sup>212</sup>。

水谷勝は童謡詩人であり、童話作家である。筆名は「水谷まさる」で、名前はひらがなで表記される。水谷が創作活動を始めたのは1921（大正10）年ごろからであり、この本が出版された1919（大正8）年にはまだ本格的な創作活動は始めていなかった<sup>213</sup>。「おぼえがき」で名前がひらがなでなく本名の漢字表記で記されているのは、まだ筆名が決まっていなかったためであろう。

出版社である富山房は、1886（明治19）年3月に創立された当初、古本の売買や、原著および翻訳書の小売りを行っていた。明治期末から大正期にかけては雑誌の創刊と事典類の刊行に力を注いでいた。その後、1923（大正12）年に起きた関東大震災以降は、教育と家庭のための出版に力を注ぐようになる<sup>214</sup>。

### (3) 挿絵について

「魔法の笛」<sup>4</sup>には挿絵が1つだけ挿入されている【図2】。絵は白黒で、羽根のついた尖った帽子を被り縦縞の服を着た笛吹き男が、二股に分かれた縦笛を吹いてネズミたちを率いている。これは岡本帰一が描いたものである。

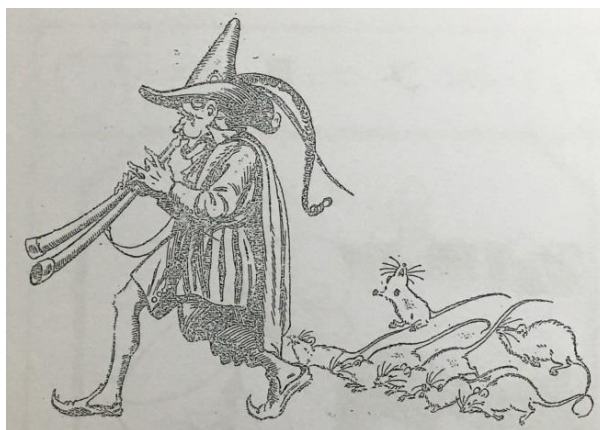


図2 岡本帰一 絵

岡本は本の編者である楠山と深い交流があった。1914（大正3）年、岡本は結婚し転居した先で、隣家に住む楠山正雄の知遇を得る<sup>215</sup>。楠山は児童文学の翻訳者として知られ、長く富山房の編集を務めた人物でもある。岡本に「模範家庭文庫」の装丁や挿絵の仕事を紹介したのが楠山であった<sup>216</sup>。岡本がこの本の挿絵を描いたのはこういった経緯からであろう。

### 4) 文献書院訳「ハメリンの斑衣の笛吹」<sup>5</sup>（1923（大正12）年1月）

3番目の邦訳は1923（大正12）年に文献書院から出版された『ブラウニング詩選』に収録されている「ハメリンの斑衣の笛吹」<sup>5</sup>である。訳者については「文献書院」とだけ書かれており、詳細は不明である。ブラウニングの詩を忠実に訳している作品で、本文は文語調の詩で書かれている。笛吹き男が自身の経歴を述べる場面、1匹だけ生き残ったネズミについての場面、聖書の1節を引用している場面、教訓などがすべて正確に訳出されている。それはこの本がブラウニングの詩を紹介することを目的としているからであろう。序には、「原詩と対照して読んで下されば本當の妙味を捉へることが出来るでせう」<sup>217</sup>と書かれている。ブラウニングの詩を紹介することに主眼がおかれているため、できるだけ正確に直訳されているのである。

物語が始まる直前のページには「ハメリンの笛吹解説」という解説文が2ページにわたって掲載されている<sup>218</sup>。解説には「独逸の伝説に材料を取つたものでブラウニングが友人の子ウ井リー、マックレディーを喜ばすために書いたものである」<sup>219</sup>と書かれ、作品が生

まれた背景と「ハーメルンの笛吹き男」伝説の要約が記されている<sup>220</sup>。

訳者は本の序で、欧米ではブラウニング研究が盛んに行われ書籍も多数出版されているのに対して、日本では本として出版されているのは2冊しかないと述べている<sup>221</sup>。訳者が誰であるかは不明のままだが、日本におけるブラウニング研究者として斎藤勇、帆足理一郎、厨川白村の3名を挙げていることから、訳者は英文学研究に詳しい人物であると考えられる。

#### 5) 矢崎忠蔵訳「笛吹き翁さん」<sup>6</sup> (1923 (大正12) 年9月)

4番目の邦訳は1923 (大正12) 年にアイデア書院から出版された雑誌『少年文学』第4号に収録されている「笛吹き翁さん」<sup>6</sup>である。訳者は矢崎忠蔵であり、作者はロバート・ブラウニングだと明記されている<sup>222</sup>。本文は旧仮名遣いの散文で書かれており、15連で書かれているブラウニングの詩と同じように、本文は15の節に分けられ、忠実に訳されている。しかし、最後の教訓は下記のように書き換えられている。

さて皆さん、私達はこの街の人々の<sup>あやまち</sup>過失を責めてはなりません。まして笛吹きを恨むことは出来ないのです。たゞ私達はお互に注意して、笛吹き（それは神様であるかも知れません）が私たちの爲めにこの後何か悪いことを除いて呉れたなら、屹度それに酬いだけのことを致しませう<sup>223</sup>。

この書き換えは、『少年文学』が子どもの教育を目的として出版された雑誌だからであろう<sup>224</sup>。『少年文学』を出版したアイデア書院は、小原国芳によって1922 (大正11) 年12月25日に設立された。小原は玉川学園の創設者で、大正期の新教育運動で先導的役割を果たした人物である<sup>225</sup>。新教育運動とは、従来の教師中心、大人中心の教育に対し、児童中心で自発的な学びを良しとする運動のことである。小原は知識教育に偏っている風潮のなかで、教育には豊かな人格形成も必要であるとして「全人教育」を唱えた<sup>226</sup>。アイデア出版の設立は小原の新教育運動の一端であり、『少年文学』は高学年向けの雑誌として出版された。小原は『少年文学』第4号の前書きで、「日本の子供たちへ」として読者である子どもたちに下記のように呼びかけている。

私は子供が、すきで／＼たまりませぬ。一生の間、皆さんのお友達になりたいと祈って居ります。

「少年文學」も、皆さんのお友達になりたいためにはじめました<sup>227</sup>。

続けて小原は、西洋を見習って日本人も多読する必要があるため、『少年文學』では世



図3 不明 絵

界の有名な文学を紹介すると述べている<sup>228</sup>。

「笛吹き翁さん」の教訓から「ウィリー」という個人名を無くし「皆さん」と呼びかける表現にしたのは、読者である子どもたちひとりひとりに呼びかけようとしたからであろう。教訓の内容も料金の不払いに対してではなく、「何か悪いことを除いて呉れたなら、屹度それに酬いだけのことを致しませう」<sup>229</sup>というように恩返しを薦める内容に変更されている。ここでは、約束の履行の大切さではなく、報恩について説かれているのである。

訳者の矢崎忠蔵に関しては、詳細は不明である。「矢崎忠蔵」という人物について唯一見つかった資料は、海軍の出張記録のみである。同姓同名の人物が1936（昭和11）年に満州への出張命令を受けているが<sup>230</sup>、この人物が訳者と同一人物であるかどうかは不明である。

#### 6) 岡邊白夜著「鼠捕りの男」<sup>[7]</sup>（1925（大正14）年2月）

5番目の邦訳は1925（大正14）年に宏文堂から出版された『山の大王』に収録されている「鼠捕りの男」<sup>[7]</sup>である。訳者は岡邊白夜で詳細は不明である。本文は旧仮名遣いの散文で書かれており、底本については述べられていない。『山の大王』は子ども向けの単行本であり、「宏文堂童話集」シリーズ全4巻のうちの、3巻目である。この本には下記のような広告文が添えられている。

児童の心性に悪しき影響を及ぼさないやうに  
訳著者の充分なる注意によりて改補され話かへ  
られてありますから、親たちが安心して子女に  
讀ませることの出来るものであることを斷言いた  
します<sup>231</sup>。

広告では、話は改変されていると述べられているが、「鼠捕りの男」<sup>[7]</sup>はラング版の内容とまったく同じである。「魔術師」を「術を使ふ奴」と訳したり、「1グロス」を「1圓」と訳したりしているものの、ラング版にほぼ忠実な訳といえる。挿絵は松政英輝とあるが、ラング版に入れられている挿絵を着色しそのまま使用している。



図4 松政英輝 絵

子ども向けの童話集は評判が良かったのか、「宏文堂童話集」シリーズが完結した翌年から「おもしろいおとぎばなし」シリーズが出版されはじめる。「おもしろいおとぎばなし」の広告欄に「宏文堂のおもしろいおとぎばなし叢書はもう四冊できました」<sup>232</sup>と書かれているが、この4冊は「宏文堂童話集」の話の順番を入れ替えただけで内容はまったく同じものである。「鼠捕りの男」<sup>[7]</sup>は「おもしろいおとぎばなし」シリーズ2巻目の『磐の王子』に収録されており、『山の大王』所収の「鼠捕りの男」と一字一句同じものである。

訳者の岡邊白夜はおそらく筆名であろう。岡邊は「宏文堂童話集」と「おもしろいおと

ぎばなし」の他に、雑誌『雄弁』の1921（大正10）年7月号から9月号まで小説を寄稿している<sup>233</sup>。作品名は「悪魔の足」（探偵奇譚）である。調査の結果、この話はコナン・ドイルのシャーロック・ホームズシリーズの翻案であることが判明した。イギリス文学であるホームズシリーズを訳していることから、岡邊はやはり英語のラング版から「ハーメルンの笛吹き男」を訳したと考えられる。

7) 近藤宗男訳「ハムリンの『斑の笛吹き』」<sup>8</sup>（1925（大正14）年11月）

6番目の邦訳は1925（大正14）年にイデア書院から出版された『西洋傳説 白鳥の騎士』に収録されている「ハムリンの『斑の笛吹き』」<sup>8</sup>で、訳者は近藤宗男である。本文は旧仮名遣いの散文で書かれている。底本については述べられていないが、話の内容はブラウニング版を大幅に省略したものである。省略されている場面は、市長と市参事会員が解決策を話し合う場面と1匹のネズミが生き残る場面である。また、子どもが失踪した日付を記録するようになったという説明と、子どもたちが通った通りが舞樂禁止通りになったという説明も削除されている。

笛吹き男に報酬の支払いを約束するのも、その報酬を払おうとしないのも、市長の行動ではなく「町の人々」の行動に変更されている。結末の教訓はなく、代わりに「私〔訳者〕としましては、その『笛吹き』は、約束通りに子供たちを不思議な國へ連れて行き、子供たちは、其處で今日までも、楽しく遊んで居るのだと考え度いのです」<sup>234</sup>という言葉で締めくくられている。

「ハムリンの『斑の笛吹き』」<sup>8</sup>は「笛吹き翁さん」<sup>6</sup>と同様にイデア出版から出版されている。奥付の後ろに「児童の爲めの優良読み物を出版いたします」<sup>235</sup>とあるように、この本は子ども向けの本である。この話は1930（昭和5）年にまったく同じ内容で『どうして此世に冬が来たか』という題名の本に収録され、玉川学園出版部から出版される<sup>236</sup>。玉川学園出版部はイデア出版の後継にあたるものである。『どうして此世に冬が来たか』は小学3年生向けの本であるため、同じ内容の「ハムリンの『斑の笛吹き』」<sup>8</sup>も児童を読者に想定していたと考えられる。

訳者の近藤宗男は文学士で『西洋傳説 白鳥の騎士』の他にも、同じくイデア書院から子ども向けの本としてメーテルリンクの『青い鳥』<sup>237</sup>、シェイクスピアの戯曲<sup>238</sup>、ラ・フォンテーヌの寓話などを出版している<sup>239</sup>。1930（昭和5）年には小学3年生用の教材として『どうして此世に冬が来たか』を<sup>240</sup>、小学4年生用の教材として『白鳥の騎士』を<sup>241</sup>、小学5年生用の教材として『聖ジョージと龍』を出し<sup>242</sup>、それらを玉川学園の学園長である小原国芳が監修している。上記の理由から近藤は学校の教員ではないかと推測できる。近藤宗男は1937（昭和12）年、雑誌『學習研究』に「読方學習態度建設の基礎問題」を寄稿している<sup>243</sup>。その雑誌の「學習研究会会員名」のなかに近藤宗男の名前と、当時の所属として「岐阜縣師範學校附属小學校」と記載されている<sup>244</sup>。やはり近藤は教員であったと考えられる。

8) 雑賀忠義訳「ハメルンのまんだら笛吹」<sup>9</sup>（1926（大正15）年11月）

大正期の最後の邦訳は1926（大正15）年に研究社から出版された『英語研究』第19巻第8号に収録されている「ハメルンのまんだら笛吹」<sup>9</sup>である。訳者は雑賀忠義である。ブラ



ウニングの英詩との対訳で、ブラウニング版を忠実に翻訳している。

『英語研究』は英語や英文学についての学術雑誌である。第19巻第8号は「ブラウニング號」と銘打たれ、雑誌の紙面のうち過半数のページがブラウニングに関する内容である。奥付に「『パイド・パイパ』は英米の少年で知らぬものなき程に有名であるため、長くはあるが、特にその全譯を掲げて置いた」<sup>245</sup>と記されているとおり、ブラウニングの詩を省略せずに載せている。本文の下には単語や文法についての注も付記されている。

訳者の雑賀忠義は京都大学英文科を卒業した英文学者で、1924（大正13）年から広島高校の教授として働いた<sup>246</sup>。『英語研究』の目次には、「広島高等學校教授」と書かれている<sup>247</sup>。被爆者であり、広島市平和記念公園の原爆慰霊碑文に「安らかに眠って下さい 過ちは繰返させぬから」と揮毫した人物である<sup>248</sup>。

## 9) 大正期の邦訳のまとめ

子ども向けの作品がなかった明治期と比べ、大正期は7話のうち5話が子ども向けの雑誌および単行本に収録されている。大正期は子ども向けの雑誌や子ども向けの本が多く出版された時代であった。1914（大正3）年に子ども向けの歯磨き粉が販売され、1921（大正10）年に資生堂が子ども服を初めて百貨店で陳列して大盛況になった<sup>249</sup>。大正期は子どものためのものが市場に出回るようになった時代なのである。その流れのなかで「ハーメルンの笛吹き男」も児童書として出版されたのである。子ども向けに書かれたそれらの話では、「教会」が「寺」に変更され、お金の単位が「ギルダー」や「グロス」といった外国のものから日本の「圓」に変更されている。読者である日本の子どもたちに馴染みのある言葉に改変されているのである。「バグダット」や「ユリウス・カエサル」などの外国の地名や人名が省かれているのも、子どもたちに馴染みがないからであろう。ただし、改変箇所は主として語句に関するものであり、極端な日本化はなされていない。これらの話は、海外の物語を集めた本に収録されている。あくまでも海外の話をも日本の読者に紹介することに価値が置かれていたのである。

さらに英語研究や英文学研究の場でもこの話は取り上げられる。7話中残りの2話がそれである。いずれもブラウニング版であり、原文に忠実な訳である。1910年代から20年代にかけて英文学者の間でブラウニングへの関心が高まり、多くの作品が翻訳されるようになる<sup>250</sup>。内容が改変されないのは、ブラウニングの作品を紹介することが主たる目的だからであろう。

大正期にグリム兄弟版の邦訳は1話もない。7話のうち、5話がブラウニング版で2話がラング版である。明治期には「ハーメルンの笛吹き男」はドイツ語経由で受容されていたが、大正期には英語経由で受容されていく。明治期にグリム兄弟版の「ハーメルンの笛吹き男」が受容されていたのに、大正期の子ども向けの本にはグリム兄弟版が使用されることはなかった。グリム兄弟版は『ドイツ伝説集』に収録されている。物語としてではなく資料として集められた話であり、子ども向けのものではない。一方、ブラウニング版はブラウニングの友人の息子に宛てて書かれた詩であり、ラング版は子ども向けの「色の童話集」シリーズに収録された話である。子どもに与える物語として魅力的であるのはグリム兄弟版ではなく、ブラウニング版やラング版であると判断されたのであろう。

## 2. 教科書における「ハーメルンの笛吹き男」

### 1) 概要

大正期には「ハーメルンの笛吹き男」を英語もしくはドイツ語で掲載している教科書が9冊存在する。7冊が英語教科書で、2冊がドイツ語教科書である。いずれの教科書にも邦訳はなく、邦訳版の教科書も発見されていない。それらの教科書をまとめて一覧にしたのが下記の【表8】である。それぞれの教科書について順番に見ていく。

### 2) 「ハーメルンの笛吹き男」を掲載している教科書の一覧表【表8】

番号	出版年月	著者／編者	話の題名	教科書名	出版社	言語
教1	1913（大正2）年3月	小島伊佐美	Der Rattenfänger von Hameln	<i>Neues Deutsches Lesebuch mit Anmerkungen</i>	南江堂	ドイツ語
教2	1914（大正3）年10月	岡倉由三郎	The Pied Piper of Hamelin	<i>The Laurel Readers, Book Three</i>	大日本図書	英語
教3	1914（大正3）年11月	石川林四郎 石黒魯平	The Pied Piper of Hamelin	<i>A School manual of English Composition, vol.1</i>	興文社	英語
教4	1916（大正5）年4月	金田鬼一	Die Kinder zu Hameln	<i>Deutsche Prosa, I</i>	大日本図書	ドイツ語
教5	1916（大正5）年11月	井上十吉	The Pied Piper I, II, III	<i>Inouye's New English Readers, No.3.</i>	金港堂	英語
教6	1920（大正9）年1月	石川林四郎 石黒魯平	The Pied Piper of Hamelin	<i>A Teachers' Manual of Notes on The Pacific Readers, No.4</i>	興文社	英語
教7	1920（大正9）年 10月31日	石川林四郎 石黒魯平	The Pied Piper of Hamelin	<i>The Pacific Readers, No.3 revised</i>	興文社	英語
教8	1920（大正9）年 10月31日	石川林四郎 石黒魯平	The Pied Piper of Hamelin	<i>The Pacific Readers, No.4 revised</i>	興文社	英語
教9	1922（大正11）年 11月 <sup>251</sup>	豊田実	The Pied Piper of Hamelin	<i>The Rose Readers for Girls' Schools, bk.4</i>	富山房	英語

### 3) ドイツ語教科書で紹介された「ハーメルンの笛吹き男」

#### (1) *Neues Deutsches Lesebuch mit Anmerkungen*

大正期の教科書9冊のうち1番古いのは1913（大正2）年3月に南江堂から出版されたドイツ語教科書*Neues Deutsches Lesebuch mit Anmerkungen*<sup>教1</sup>で、奥付には『獨逸新讀本』という日本語の書名が記されている<sup>252</sup>。編者は小島伊佐美（伊左美）（1875-1945）である<sup>253</sup>。

小島はドイツ語教師で、熊本の第五高等学校で44年間ドイツ語を教えた人物である。1875（明治8）年、石川県金沢市に生まれた小島は、1893（明治26）年に第四高等中学校の本科第1年級に入学し、そこで初めてドイツ語を学んだ。その後、1895（明治28）年に東京帝国大学文科大学独逸文学科に入学し、主任教授のカール・フローレンツ（Karl August Florenz, 1865- 1937）の薫陶を受けた。そして1898（明治31）年7月に大学を卒業すると、同年8月から熊本の第五高等学校で独語囑託講師として働き始めた<sup>254</sup>。当時小島は24歳であった。その後1944（昭和19）年まで第五高等学校で教鞭を取り続けた<sup>255</sup>。

明治期と大正期のドイツ語学者について研究している上村直己は「小島は明治三十四年に大学予科独語主任を務めたのを最初として、その後何度も第五学科（ドイツ語科）の主

任を務めており、文字通り五高ドイツ語科のシンボリック的存在であった」と評している<sup>256</sup>。

小島は『獨逸新讀本』を出版する2年前、1911（明治44）年に*Lesebuch des Deutschen*（以下、『獨逸語教本』）という教科書を出した<sup>257</sup>。この教科書は初心者向けの内容で、アルファベットの読み方と書き方から接続詞までの文法の説明がされている。『獨逸新讀本』はおそらくこの『獨逸語教本』の続編であり、全文ドイツ語の散文が収録されている。ドイツ語の書名に„mit Anmerkungen“（注釈付き）と書かれているように、本文の下部には単語や文法についての注釈がつけられている。収録されている30話はギリシアやドイツの古代の伝説や文学についての話である。そのなかで、「ハーメルンの笛吹き男」は„Der Rattenfänger von Hameln“（ハーメルンのネズミ捕り男）という題名で11話目に置かれている。

„Der Rattenfänger von Hameln“の内容はグリム兄弟版の内容とほぼ同じである。しかし、話の題名はグリム兄弟版の題名„Kinder zu Hameln“（ハーメルンの子どもたち）ではない。内容もグリム兄弟版の本文と比べると、改変されている箇所はあるが、それらは主として表記の違いである。たとえば、グリム兄弟版でセミコロンの箇所が小島教科書<sup>教1</sup>ではコロンに変えられていたり、„Johannes und Paulitag“（ヨハネとパウロの日）が„Johannes und Pauli Tag“に変えられていたりする。さらに、話の最後にあるラテン語表記も省略されている。

これらの変更は小島によるものと言うよりも、原典によるものであろう。„Der Rattenfänger von Hameln“<sup>教1</sup>の本文の末尾には出典として„Grimm“（グリム）ではなく„Bäbler“（ベスラー）と明記されている<sup>258</sup>。これはエルンスト・フェルディナント・ベスラー（Ernst Ferdinand Bäbler, 1816 - 1879）のことであろう。ベスラーは教師で聖職者でもあった<sup>259</sup>。ベスラーの著作は10冊以上あるが、調査の結果、いずれの著作にも「ハーメルンの笛吹き男」の話は収録されていないことが判明した。小島はどの本から„Der Rattenfänger von Hameln“<sup>教1</sup>を採取したのであろう。

1899（明治32）年出版の*Deutsches Lesebuch für höhere Lehranstalten*（高等教育機関用ドイツ語読本）に、ベスラーによる„Der Rattenfänger von Hameln“が収録されている<sup>260</sup>。小島教科書<sup>教1</sup>の本文と比較すると、異なるのは下線部の4箇所のみである（下線と波線は筆者による）。

Von Stund' an wurden Boden zu Wasser und zu Lande an alle Orte herumgeschickt, zu erkundigen, ob man die Kindern oder auch nur etliche gesehen habe; (小島教科書<sup>教1</sup>)

そして、誰かが子どもたち全員もしくはそのうちの数人を見ていないかどうかを問い合わせるために、使者が陸路や水路を使ってあらゆる場所に遣わされた（拙訳）

Von Stund an wurden Boden zu Wasser und zu Lande an alle Orte herumgeschickt, um zu erforschen, ob man die Kindern oder auch nur etliche gesehen habe; (ベスラー)

そして、誰かが子どもたち全員もしくはそのうちの数人を見ていないかどうかを調査するために、使者が陸路と水路を使ってあらゆる場所に遣わされた（拙訳）

Die Straße, durch welche die Kinder zum Thore hinausgegangen, (小島教科書<sup>教1</sup>)

Die Straße, durch welche die Kinder zum Tore hinausgegangen, (ベスラー)

子どもたち全員が門へ向かって出て行った時に通った通り（拙訳）

前者の文はハーメルンの町から子どもたちが消えた後子どもを探したそうと町の人々が使者を派遣する場面で、後者の文は舞楽禁止通りについて説明する場面である。„Thore“と„Tore“はいずれも「門」であり、hの有無は旧正書法と新正書法の違いである<sup>261</sup>。ベスラー版は小島教科書<sup>教1</sup>と同様、話の最後のラテン語が省略され、同じ内容の注釈が付加されている。おそらく小島はこのベスラー版を使用したのであろう。

小島は東京帝国大学文科大学独逸文学科で、ドイツ人のお雇い外国人カール・フローレンツ（Karl Adolf Florenz, 1865-1939）に学んだ<sup>262</sup>。フローレンツの教授法は暗記と暗唱を重視するもので、『グリム童話集』の「赤ずきん」を学生たちに暗記させたという<sup>263</sup>。小島の先輩である登張竹風によると<sup>264</sup>、その際にフローレンツは下記のように語ったという。

一メールヒェンに全力を注ぐことは、即ちまたファウストやワレンシュタインに全力を注ぐ所以である。メールヒェンは文芸の珠玉である。之を軽んずる者は文芸そのものを軽んずるものである云々<sup>265</sup>。

フローレンツはメルヒェンの他に、ドイツの伝説である「ヴィルヘルム・テル」や「ファウスト」も教材として使用していた<sup>266</sup>。フローレンツの薫陶を受けた小島も、自分が作製した教科書にドイツの伝説である「ハーメルンの笛吹き男」を採用したのである。

## (2) *Deutsche Prosa, I*

ドイツ語教科書の2番目は1916（大正5）年4月に出版された*Deutsche Prosa*の1巻<sup>教4</sup>である。大正期の教科書全体では4番目にあたる。奥付には『獨逸散文集』という日本語の書名が記されており<sup>267</sup>、編者は金田鬼一である。

「ハーメルンの笛吹き男」は„Die Kinder zu Hameln“（ハーメルンの子どもたち）という題名で、本文の最後には出典として„Gedr. Grimm“（グリム兄弟）と明記されている。金田教科書<sup>教4</sup>は話の題名も内容もグリム兄弟版と同じであるが、内容とは関係のない改変箇所が複数ある。長すぎる文を2つに分けたり、話の筋に不要と思われる箇所を省略したりしている。省略されているのはたとえば、„Am 26. Juni auf Johannes und Paulitag“（6月26日、つまりヨハネとパウロの日）の„auf Johannes und Paulitag“など、話の枝葉の部分であり、省略しても話の筋に影響を与えない部分である。さらに舞楽禁止通りに関する箇所、ハーメルンの町では公文書に子どもたちが消えた日を基準にした日付を書くことになったという箇所、碑文のラテン語などが省略されている。

編者の金田鬼一は東京帝国大学独文科を1909（明治42）年に卒業した後、金沢の第四高等学校の教授となった。金田教科書<sup>教2</sup>は金田が第四高等学校に勤めていた時に出版した教科書であり、教科書にも「大正四年十二月 第四高等學校ニテ 編者」と明記されている<sup>268</sup>。この教科書は「高等學校並ニコレト同程度ノ學校ニ於ケル第一年級用獨語教科書トシテ編纂」されたもので、編者の金田は「平易ナル文章ヲ先ニシ初學者ニトリテ稍難解ナル文章ヲバ漸進的ニ排列セント試ミタ」という<sup>269</sup>。話の骨子に関係のない最後の部分が大幅に省略されているのはそのためであろう。

#### 4) 英語教科書で紹介された「ハーメルンの笛吹き男」

##### (1) *The Laurel Readers, Book Three*

英語教科書で1番目は1914（大正3）年10月に出版された*The Laurel Readers*の3巻<sup>教2</sup>である。教科書全体では2番目にあたる。奥付には『ろおれる・りいだ』という日本語の書名が記されており<sup>270</sup>、著者は岡倉由三郎（1868-1936）である。

岡倉は岡倉天心の弟で英語教師である。1877（明治10）年に外国語学校に入学してドイツ語を専攻するが、病気のため3ヶ月で退学する。その後英学塾での勉強を経て1885（明治18）年に帝国大学文科大学に入学する<sup>271</sup>。1902（明治34）年に文部省外国留学生としてイギリスとドイツへ留学し、1905（明治38）年に帰国する<sup>272</sup>。留学で英語学と語学教授法について学んだ岡倉は帰国後、「日本語、朝鮮語、英語」についての本を執筆する<sup>273</sup>。

「ハーメルンの笛吹き男」は”*The Pied Piper of Hamelin*”という題名で補遺（APPENDIX）として収録されている。話の冒頭で「いつか君は、イギリスの偉大な詩人ロバート・ブラウニングが詩のなかで語った [このまちについての] 話を読むかもしれない」

（some day you may read it as it is told in verse by one of the greatest English poets, Robert Browning）というふうに紹介されており、話の内容もブラウニング版に即しているが、改変箇所もある。

本文ではネズミ退治の代金が1000ギルダーではなく100ポンド（a hundred pounds）に改変されている。市長と評議員たちについて、彼らが年寄りで、太っていて怠惰である（the mayor and the rest of them were all old, and fat, and lazy）という表現が書き加えられ、子どもたちが消えた理由について「これは市長のいやしさと笛吹き男との取り引きに対する彼の不誠実さのせいである」（it was all because of the meanness of the mayor and his dishonest dealing with the piper）と書かれている。子どもが消えた責任は市長にあるということが強調されているのである。話の最後に教訓はない。

##### (2) *A School manual of English Composition, vol.1*

英語教科書の2番目は1914（大正3）年11月に出版された*A School manual of English Composition*の1巻<sup>教3</sup>である。教科書全体では3番目にあたる。緒言には『中學校用英作文書』という日本語の書名が記されており<sup>274</sup>、著者は石川林四郎（1879-1939）と石黒魯平（1885-1956）である。

石川は英文学者であり、ブラウニングの詩を多数翻訳していた人物である。東京帝国大学英文科で小泉八雲のもとで学んだ。帝大卒業後は東京高等師範学校、第六高等学校、東京文理科大学で教鞭をとり、アメリカとイギリスに留学した<sup>275</sup>。言語学者であり、「標準語の父」と言われる人物である。彼は東京帝国大学で井上十吉の教え子であった<sup>276</sup>。

「ハーメルンの笛吹き男」は”*Pied Piper of Hamelin*”という題名で7課目に収録されている。目次で題名のすぐ後ろに「書取」と書かれており、本文でも題名の次の行に「書き取りをするための準備をせよ」（Be ready to write from dictation）とあることから、この話は書き取りの練習のための教材であったことがわかる。書き取りやすくするためか、本文は散文で、1ページのみの話に短縮されている。内容はブラウニング版だが、ネズミ退治の報酬の額、笛吹き男の服装や容貌、ネズミたちや子どもたちについての描写、舞楽禁止通りについての話、日付の話、子どもたちの行方についての話などが省略されている。

この教科書<sup>教3</sup>の緒言で石川と石黒は編纂の趣旨を次のように述べている。当時、英語学習の教授法の発展がめざましかったため、石川と石黒も教授法に対する案を提案したいというのである<sup>277</sup>。英語を学ぶにあたり、文法はもちろん大切であるが、文法ばかりに気を取られてしまうと英作文が「生命を失ひ」、英語の楽しみを理解できなくなるので、それを回避するためには日常に見聞きする程度の短い話を使って練習することが大切であると述べている。日本語の文を書いてから英訳をすると、英語を直感的に使うことができなくなるとも述べている<sup>278</sup>。「ハーメルンの笛吹き男」を書き取り用に短い話に改変したのはそのためであろう。

### (3) *Inouye's New English Readers, No.3*

英語教科書の3番目は1916（大正5）年に出版された英語教科書*Inouye's New English Readers*の3巻<sup>教5</sup>である。教科書全体では5番目にあたる。著者の井上十吉（1862-1929）は英語学者であった。父親の高格は英学に強い関心と興味を抱いていたので、息子たちに英語を学ばせた。井上も1871（明治4）年に9歳で慶応義塾に入学し、1873（明治6）年4月にわずか10歳3か月で渡英する<sup>279</sup>。井上は幼少のころから優秀であったので、徳島藩で最年少の藩費留学生に選ばれた<sup>280</sup>。10年間の留学の後、1883（明治16）年に帰国し、その後大学予備門、第一高等中学校、東京専門学校、高等商業学校などで教鞭を取った<sup>281</sup>。

「ハーメルンの笛吹き男」は“The Pied Piper”という題名で27課から29課までの3課に分けて掲載されている。笛吹き男の服装はブラウニング版では赤と黄の裾の長い服だが、ここでは片袖が黒でもう片袖が白の、赤と黄のコートを着て、色とりどり（many colours）の帽子を被っている。この話には市参事会員も、1匹だけ生き残るネズミも登場しない。ネズミ捕りの報酬は1000ギルダー（a thousand guilders）ではなく金貨1000枚（a thousand pieces of gold）に変更されている。最後は子どもたちが全員、山腹の中に消えてしまい、その後子どもたちを見た者はいないという内容で終わっている。子どもたちが通った通りが舞楽禁止通りになったということ、子どもたちが消えた日付を基準に公文書が書かれるようになったということ、ハンガリーに類似の名前の村があり、その村の人々はドイツ語を話すということなどはすべて省略されている。

井上は英語の学習法として「自分として確信して後進生に御薦めの出来るのは学力以下の本で自分の趣味に適したものを成るべく沢山読む事」というふうに、多読の重要性を説いている<sup>282</sup>。“The Pied Piper”で省略されているネズミが生き残る場面、舞楽禁止通りの話、日付の話、ブラウンシュヴァイクの町の話はいわば余談である。そのため、多読しやすいように余談を省略し、骨子のみのお話にしたのであろう。

### (4) *A Teachers' Manual of Notes on The Pacific Readers, No.4*

英語教科書の4番目は1920（大正9）年1月に出版された*A Teachers' Manual of Notes on The Pacific Reader*の4巻<sup>教6</sup>である。教科書全体では6番目にあたる。奥付には『パシフィック、リーダーズ教師用』という日本語の書名が記されており<sup>283</sup>、著者は石川林四郎と石黒魯平である。

「ハーメルンの笛吹き男」は“The Pied Piper of Hamelin”という題名で補遺に収録されている。各ページには、英語教科書*The Pacific Readers*の紙面が4分の1の大きさに縮小されて

掲載され、その周りを囲うように語句や文法の説明が書かれている。数行省略されているが、ブラウニング版の詩をそのまま引用したものである。

書名に「教師用」とあるとおり、この教科書<sup>教6</sup>は教師のためのものであり、奥付には下記のように記されている。

此の冊子は教官諸賢の参考資料なれば教官以外には決して頒たず故に學生等の目に觸れざる様特に御注意あらんことを切望す

この教科書<sup>教6</sup>の生徒用にあたるものが後に述べる*The Pacific Readers*の改訂版3巻<sup>教8</sup>である。

#### (5) *The Pacific Readers*, No.3 revised

英語教科書の5番目は1921（大正10）年10月31日に出版された*The Pacific Readers*の改訂版3巻<sup>教7</sup>である。教科書全体では7番目にあたる。奥付には『ザ パシフィック リーダーズ』という日本語の書名が記されており<sup>284</sup>、著者は石川林四郎と石黒魯平である。

「ハーメルンの笛吹き男」は”*The Pied Piper of Hamelin*”という題名で7課目に収録されており、散文の作品である。ブラウニング版の内容だが、改変された箇所もある。ネズミ退治の報酬が1000ギルダーではなく金貨1000枚（a thousand pieces of gold）に変更され、ネズミ退治について市長と話し合うのは市参事会員ではなく賢者たち（the wise men）となっている。話の最後の少年ウィリーに向けた教訓は省略されている。

#### (6) *The Pacific Readers*, No.4 revised

英語教科書の6番目は1921（大正10）年10月31日に出版された*The Pacific Readers*の改訂版4巻<sup>教8</sup>である。教科書全体では8番目にあたる。奥付には『ザ パシフィック リーダーズ』という日本語の書名が記されており<sup>285</sup>、著者は石川林四郎と石黒魯平である。

「ハーメルンの笛吹き男」は”*The Pied Piper of Hamelin*”という題名で補遺に収録されている。生徒用の*The Pacific Readers*であり、『パシフィック、リーダーズ教師用』<sup>教6</sup>に紙面が縮小されて掲載されている。内容はブラウニング版で、詩である。連番号は省略され、各場面で数行省略されている。

#### (7) *The Rose Readers for Girls' Schools*, bk. 4

英語教科書の7番目は、1922（大正11）年11月出版の*The Rose Readers for Girls' Schools*の4巻<sup>教9</sup>である。教科書全体では9番目にあたる。奥付には『ザ ローズ リーダーズ』という日本語の書名が記されており<sup>286</sup>、著者は豊田実（1885-1972）である。豊田は英語学者で、東京帝国大学の英文科を卒業後、青山学院、東京女子高等師範学校で教鞭を取った人物である。

「ハーメルンの笛吹き男」は”*The Pied Piper of Hamelin*”のIとIIという題名で、6課目と7課目に収録されている。出典は明記されていないが、内容はブラウニング版である。ただし、改変箇所もある。市長と共に会議をするのが市参事会員ではなく賢者（wise men）となっている。話の最後にある教訓はウィリーに向けてのものではなく、市長と賢者たちに

向けてのものになっている。「市長と賢者たちは笛吹き男との約束は守るべきだということ学んだ」と書かれている。

### (8) 教科書のまとめ

大正期の教科書9冊のうち、ドイツ語教科書2冊[教1][教4]はいずれもグリム兄弟版であるが、出典はそれぞれ、グリム兄弟の原典とベスラーの原典である。ベスラーの本文をグリム兄弟の本文と比較すると、文章はほぼ同じで、異なっているのは細かい表記方法のみである。おそらくベスラーはグリム兄弟の原典から文章を転載したのであろう。それゆえ大正期のドイツ語教科書に収録されている「ハーメルンの笛吹き男」はいずれもグリム兄弟版のものであるといえる。小島教科書[教1]も金田教科書[教4]も、原典の文章をほとんど改変することなく収録している。学習者にわかりやすいように話の枝葉を多少省略してはいるが、内容はまったく変えられていない。明治期のドイツ語教科書『エンゲリン読本』と同様に、大正期の教科書もドイツのグリム兄弟版に忠実な内容を学習者に紹介しているのである。

英語教科書7冊は、いずれもブラウニング版の内容である。大正期の教科書にラング版は採用されなかったようである。ブラウニング版の方がラング版よりも内容が優れているからというより、当時、英文学者の間でブラウニングへの関心が高まっていたからであろう<sup>287</sup>。ブラウニングは1875（明治8）年に中村正直（1832-1891）によって初めて日本に活字で紹介された<sup>288</sup>。その後しばらくして、1910年代から20年代にかけてブラウニングに対する英文学者の関心が高まり、ブラウニングの著作品の邦訳や論文が多数出版されるようになった<sup>289</sup>。英語教科書にブラウニング版が掲載されたのもそのためであろう。

### 3. 大正期における受容のまとめ

「ハーメルンの笛吹き男」は明治期にはドイツ語教科書1冊とオペラの紹介本1冊の合計2冊にしか収録されていない。一方、大正期になるとこの話は雑誌や教科書に何度も収録されるようになる。邦訳では5話が子ども向けの雑誌や単行本に収録され、2話が英文学についての雑誌や単行本に収録される。教科書にはドイツ語のものが2話、英語のものが7話収録される。「ハーメルンの笛吹き男」は大正期になって初めて本格的に受容されるようになったのである。明治期では主としてドイツ語やオペラを学ぶ学識層のみがこの話に触れていたが、大正期になると一般の人々にも普及するようになったのである。

大正期の邦訳7話と教科書9話の内容をみると、ブラウニング版の内容がもっとも多く12話である。その次がラング版で2話、その次がグリム兄弟版1話とベスラー版1話である。この内容をわかりやすくまとめたのが、下記の【表9】である。

【表9】大正期の邦訳と教科書の内容一覧表

番号	出版年月	明記されている出典	実際の内容
[教1]	1913（大正2）年3月	ベスラー	ベスラー版 （グリム兄弟版、短縮版）
[教2]	1914（大正3）年10月	ロバート・ブラウニング	ブラウニング版（改変版）
[教3]	1914（大正3）年11月	（明記なし）	ブラウニング版（短縮版）



教4	1916 (大正5) 年4月	グリム兄弟	グリム兄弟版 (短縮版)
3	1916 (大正5) 年10月	(明記なし)	ラング版 (改変版)
教5	1916 (大正5) 年11月	(明記なし)	ブラウニング版 (改変版)
4	1919 (大正8) 年12月	ロバート・ブラウニング	ブラウニング版 (改変版)
教6	1920 (大正9) 年1月	ロバート・ブラウニング	ブラウニング版 (忠実)
教7	1920 (大正9) 年10月31日	(明記なし)	ブラウニング版 (改変版)
教8	1920 (大正9) 年10月31日	ロバート・ブラウニング	ブラウニング版 (忠実)
教9	1922 (大正11) 年11月	(明記なし)	ブラウニング版 (改変版)
5	1923 (大正12) 年1月	ブラウニング	ブラウニング版 (忠実)
6	1923 (大正12) 年9月	ロバート・ブラウニング	ブラウニング版 (改変版)
7	1925 (大正14) 年2月	(明記なし)	ラング版 (忠実)
8	1925 (大正14) 年11月	(明記なし)	ブラウニング版 (省略版)
9	1926 (大正15) 年11月	ロバート・ブラウニング	ブラウニング版 (忠実)

ベスラー版はグリム兄弟版と内容がほぼ同じであるため、実際にはラング版とグリム兄弟版がそれぞれ2話ずつとなる。ブラウニング版が圧倒的に多いのは、「ハーメルンの笛吹き男」が英文学に関する雑誌や本、英語教科書に収録されていたからである。

ブラウニングはイギリスの有名な詩人であり、英文学者が関心を寄せていた人物であった。一方、ラングは英文学者の研究対象ではなかった。それゆえ、ラング版は英語教科書に収録されなかったのであろう。グリム兄弟版はドイツ語教科書のみ収録されており、子ども向けの本には収録されていない。また、グリム兄弟版は大正期前半（1916（大正5）年）にのみ収録されており、それ以降の収録はない。大正期において、「ハーメルンの笛吹き男」はドイツ語から離れて英語で紹介され、グリム兄弟版ではなくブラウニング版で普及するようになるのである。

## 第5章 昭和期における「ハーメルンの笛吹き男」

### 1. 邦訳の概観

昭和期には85話の邦訳が存在する。邦訳の数が著しく増えるため、昭和期からは主として邦訳のみを分析の対象とする。

昭和期は64年と長いため、約20年ずつに分けて考察することにする<sup>290</sup>。1926（昭和元）年から1945（昭和20）年までを第1期、1946（昭和21）年から1967（昭和42）年までを第2期、1968（昭和43）年から1989（昭和64）年までを第3期とする。時代の移り変わりを無視して一律に20年で区切るのは、昭和第1期、第2期、第3期に出版された邦訳の数をそれぞれ比較しやすくするためである。ただし戦前および戦中を含む昭和第1期はABに分けて表記する。なぜなら1938（昭和13）年10月に政府より「児童読物改善ニ関スル指示要綱」が發布されるので、それ以前をA、それ以後をBに分ける必要があるからである。第1A期には3話、第1B期には1話しかないが、戦後になると一気に増えて第2期には41話、第3期には40話存在する。

### 2. 第1期（1926－1945）の邦訳

#### 1) 邦訳の概観

第1期に「ハーメルンの笛吹き男」の邦訳は4話存在する。第1A期が3話で、第1B期が1話である。戦中戦後を含むこの時期の出版は統制前であるにもかかわらず少ない。それは1927（昭和2）年に世界恐慌がおこり不況のため児童文学の出版が激減するからである。4話中3話はいずれも政府寄りの大日本雄弁会講談社から出されたものである。大日本雄弁会講談社（現在の講談社）は昭和の戦前期に強い影響力を持っていた出版社で「私設文部省」と称されるほどであった<sup>291</sup>。戦時中には軍隊に協力して、海軍省の後援で『海軍』、陸軍省の後援で『若桜』という児童雑誌を創刊した<sup>292</sup>。政府寄りの出版物を作成していた大日本雄弁会講談社だからこそ、戦時中にも邦訳を出版できたのであろう。

邦訳は、1941（昭和16）年4月に出版されたのが最後で、その後の出版はない。それら4話をまとめたのが、下記の【表10】である。それぞれの作品について順番に見ていく。

#### 2) 昭和第1期の邦訳の一覧表【表10】

番号	出版年月	訳者／編者	話の題名	収録本	出版社
10	1928(昭和3)年8月	松村武雄	「斑の笛吹」	『獨逸神話傳説集』	近代社
11	1934(昭和9)年11月	濱田廣介 (1冊目)	「魔法の笛」	『幼年倶楽部』	大日本雄弁会講談社
12	1938(昭和13)年1月	楠山正雄	「魔法の笛」	『世界お伽噺』	大日本雄弁会講談社
13	1941(昭和16)年4月	北村壽夫	「魔法の笛」	『黄金ノ鷲鳥ト繪話』	大日本雄弁会講談社

#### 3) それぞれの邦訳の概要と改変箇所について

##### (1) 第1A期

##### ① 「斑の笛吹」 10（1928（昭和3）年8月）

昭和期で最初の邦訳は、1928（昭和3）年8月に近代社から出版された松村武雄編『ドイツの神話伝説II』に収録されている「斑の笛吹」10である。この本は「神話伝説大系」シ

リーズの6巻「ドイツ編」として出版された後、複数の出版社から何度も出版されている。1933（昭和8）年に誠文堂と太洋社出版部から、1935（昭和10）年に趣味の教育普及会から、1980（昭和55）年に名著普及会から出版されており、多くの人々に読まれたと考えられる。名著普及会版（1980）で漢字が旧漢字から新漢字に改められている以外は、前書きも含め、まったく同じ内容でそのまま再版されている。

内容はブラウニング版の内容で、散文である。ただし、ブラウニング版と異なっている箇所もある。市参事会員は登場せず、市長のみが笛吹き男と話す。笛吹き男が自己紹介をする場面で、他の国でバッタなどを退治したという内容は省略されている。お金の単位は「ギニー」になっている。ブラウニング版では1匹だけネズミが生き残るが、ここではすべてのネズミが溺死する。市長はネズミ退治の報酬として、1000ギニーではなく「一本の煙管と甘い食物」を与えようと言う。連れ去られた子どもたちの人数は「幾万」人であり、ひとりも残らず全員が岩山の中へと消える。子どもが消えた後の様子はすべて省略されている。

松村訳<sup>⑩</sup>は本の題名にドイツの伝説と銘打っているにもかかわらず、グリム兄弟版ではなくブラウニング版の内容である。これは松村が英語の本を底本としたからである。松村は序にあたる「獨逸神話傳説集改題」で、「本書を編著するに當つて、自分が種本としたのは、主として次の書著作である」<sup>293</sup>として10冊の本を挙げている。そのうち、6冊が英語の本で4冊がドイツ語の本である。調査の結果、「ハーメルンの笛吹き男」が収録されていたのはそれらのうち、『中世の奇妙な神話』（*Curious Myths of the Middle Ages*）のみであることが判明した<sup>294</sup>。この本は1866年に1巻が、1868年に2巻が出版され、その後人気を博したため1914年までに35版を数えた<sup>295</sup>。題名からわかるとおり、英語の本である。ブラウニングの詩の一部分とグリム兄弟版の一部分がそれぞれ引用されており、さらに説明文が付け足されている。この本では話の最後に盲目の子、聾啞の子、足の悪い子が登場する。しかし、松村訳<sup>⑩</sup>では子どもたちは全員連れ去られてしまい、グリム兄弟版の内容は訳されていない。松村は『中世の奇妙な神話』をそのまま訳したのではなく、この本からブラウニング版の内容を採用し、自分で話をまとめたのであろう。

編者で訳者の松村武雄は熊本県生まれで、第五高等学校卒業後、東京帝国大学文科大学英文科に進学した人物である。神話学者で、ほかにも『欧州の伝説』、『北欧神話と伝説』、『インド・ペルシヤ神話と伝説』など、神話に関する著作を多数翻訳している。「ハーメルンの笛吹き男」を英語の本から訳したのは、ドイツ語より英語のほうが得意だったからだと考えられる。松村はたしかに、底本にドイツ語の本を挙げてはいるが、もしドイツ語に明るければ「ハーメルンの笛吹き男」がドイツの伝説であろうと気付いて、ドイツ語から直接訳そうとしたはずである。

## ②「魔法の笛」<sup>⑪</sup>（1934（昭和9）年11月）

2番目は1934（昭和9）年11月に大日本雄弁会講談社から出版された『幼年倶楽部』11月号に収録されている濱田廣介（1冊目）の「魔法の笛」<sup>⑪</sup>である。散文で書かれ、上下2つの章に分けられている。話の内容はブラウニング版の内容で、改変箇所は下記の通りである。ドイツやブラウンシュヴァイクといった地名は略され、「むかし昔、大きな河のすぐそばに、ハメルンといふきれいな町がありました」という文から始まる。市民は市長にネ

ズミの害に対する責任を追及するのではなく、ネズミを退治してくれるよう嘆願する。市参事会員は「役所の人」に変えられている。笛吹き男の服装は「赤い長いマント」で、自己紹介の詳細は省略されている。ネズミ退治の報酬は「百圓」に変更され、ネズミは1匹残らず溺死する。子どもたちは全員山腹の中へ消えて、市長は涙を流して後悔する。「市参事会員」を「役所の人」と訳したり、お金の単位を「圓」に変えたりしているのは、読者である子どもたちが理解しやすいよう配慮したからであろう。

訳者の濱田廣介は、代表作の『泣いた赤鬼』でよく知られている童話作家である。早稲田大学英文科を卒業している。「魔法の笛」がブラウニング版であるのは、おそらく英語のブラウニング版を使用したからであろう。濱田は大学生時代に「魔法の笛」<sup>[4]</sup>の訳者である水谷勝と共に「屋上会」というグループを作って文学修業に励んでいた<sup>296</sup>。そのため、「ハーメルンの笛吹き男」の話を水谷から聞いていた可能性もある。

### ③「魔法の笛」<sup>[2]</sup> (1938 (昭和13) 年1月)

3番目は1938 (昭和13) 年1月1日に大日本雄弁会講談社から出版された『世界お伽噺』に収録されている楠山正雄の「魔法の笛」<sup>[2]</sup>である。本文は詩だが、話のはじめに「ドイツの子供なら、たれでも知ってゐる、むかしのむかしのお話」であるという紹介文がある。話の内容はブラウニング版にほぼ忠実である。ただし、退治されたネズミは1匹残るのではなくすべて溺死し、話の最後の教訓も下記のように改変されている。

恩をうけたらわすれず返せ、  
約束したらかならず守れ。  
子供たちには、でも罪はない、  
だから楽しい遠くの國へ  
子供だけが行けたのでせう。

それをさとった町の人たち、  
おそまきながら、心を入れかへ、  
まんだらマントの笛ふき男の、  
ふしぎな話を石にきざんで、  
世のみせしめにのこしました<sup>297</sup>。

この話は水谷訳<sup>[4]</sup>と酷似している。水谷訳<sup>[4]</sup>が収録されている『世界童話寶玉集』の編者は楠山である。楠山は友人である水谷の訳をほぼそのまま使って自分が編集する本に収録したと思われる。

訳者の楠山正雄は早稲田大学英文学科を卒業後、早稲田文芸社に入り編集者となった。その後読売新聞の文芸記者を経て、1911 (明治44) 年に富山房に入社し『模範家庭文庫』の企画編集を行なった<sup>298</sup>。楠山は独逸学協会学校でドイツ語を学んでいるにもかかわらず、ブラウニング版の内容で、水谷訳<sup>[4]</sup>をほぼそのまま使用している。おそらく、作家としてよりも、編集者としての意識の方が強かったのであろう。

## (2) 第1B期

### ①「魔法の笛」<sup>13</sup> (1941 (昭和16) 年4月)

第1B期の邦訳は、1941 (昭和16) 年4月に大日本雄弁会講談社から出版された『黄金ノ鷺鳥ト繪話』に収録されている北村壽夫の「魔法の笛」<sup>13</sup>のみである。訳者の北村壽夫は、本名を寿雄といい、児童文学作家である<sup>299</sup>。この本は「講談社の繪本」シリーズの175番目にあたる本である。内容はブラウニング版であり、改変箇所は下記の通りである。町の人々は「町長」を責めずに、「ねずみたいちをしてくださいよ」と毎日頼む。笛吹き男の服装は「あかいマント」に変更されている。話の最後には子どもたちが全員町に帰ってくる。子どもたちと共に再び姿を現した笛吹き男に、町の人たちは報酬を支払い、今後は決して約束を破らないと言う。

出版統制後の話であるので、為政者を責める箇所や子どもが消える箇所が改変されている。町の人々は町長に丁寧に頼み、笛吹き男は子どもを連れて町に戻ってくる。町長は仕事に対する報酬を支払い、約束を守ると誓う。為政者の悪行は削除され、子どもたちも連れ去られることのない話に改変されているので、出版規制に引っ掛からなかったのである。

## 4) 分析と考察

### (1) 出版数が著しく減少した理由について

第1期に出版された邦訳は4話のみであり、大正期15年間の邦訳7話と比べると、出版数が著しく減っている。第1A期には3話が出版されているが、第1B期には1話しか出版されていない。

第1期に出版数が減る理由は2つ考えられる。1つは出版物の統制が行なわれたからで、もう1つは外国の話積極的に広めることが許されなかったからである。いずれの理由も、第1期が戦時中を含む時期であったために生じたものである。

出版物の統制は1938 (昭和13) 年10月に行なわれた。1931 (昭和6) 年に満州事変が起こり、1937 (昭和12) 年には日中戦争が、1941 (昭和16) 年には太平洋戦争が勃発した。そして1938 (昭和13) 年10月、内務省警保局図書課により「児童読物改善ニ関スル指示要綱」が発表され、出版物の統制が行なわれたのである<sup>300</sup>。そのため、1938 (昭和13) 年10月以前の第1A期には3話出版できたが、出版物の統制後である第1B期には1話しか出版できなかったであろう。

出版物の統制が行なわれたにもかかわらず1941 (昭和16) 年4月に北村訳<sup>13</sup>が出版できたのは、この本が大日本雄弁講談社から出された「講談社の繪本」シリーズの1冊であったためであろう。このシリーズ繪本は「皇太子殿下の読み物」として「おもしろくて、ためになる」ことを目指して企画された。発行当初から皇国史観にそった、愛国心、忠孝の精神を路線にしていたため<sup>301</sup>、戦時中でもこのシリーズの繪本は出版されたのである。

ただし、北村訳<sup>13</sup>の内容は、改変されたものである。子どもたちは男に連れ去られたまま帰ってこないのではなく、全員笑顔で町に帰ってくる。戦争に駆り出された子どもが、勝利して必ず戻ってきて欲しいと願う国民感情に沿った改変と言うこともできよう。

その後、1941 (昭和16) 年6月21日に出版用紙配給割り当て規定が施行されると出版物は極端に少なくなる<sup>302</sup>。1941 (昭和16) 年6月から1946 (昭和21) 年まで出版が皆無なの

は、上記の出版統制と出版用紙配給割り当て規定の影響と考えられる。

出版数が少ないもう1つの理由としては、戦時中のため外国の話積極的に広めることが許されなかったからであろう。太平洋戦争の戦時下の日本では英語は敵国語として禁止されていた<sup>303</sup>。英語の禁止措置が本格的に行なわれはじめたのは1940（昭和15）年であるが、その萌芽は1932（昭和7）年の満州国建国であった。満州国の建国はアメリカ、イギリスをはじめ、当時の国連加盟国すべてに反対された。1933（昭和8）年、国際連盟の総会で日本は満州から手を引くべしという決議が出され、日本は42対1で敗れたのである。日本はただちに国際連盟を脱退し、孤立への道を進んだ。翌年にはアメリカ、イギリスと結んでいたワシントン軍縮条約を破棄し、米英両国と日本との対立が激化していった<sup>304</sup>。1939（昭和14）年4月、中国の天津においてイギリス租界にいる殺人犯の引き渡しを日本軍が要求したにもかかわらず、イギリス軍がこれを拒否するという事件が起きたので、陸軍内では対英強硬論が強くなっていった。「イギリス討つべし」のムードは国民の間にも広がり、同年7月には東京の日比谷公会堂で英国排撃市民大会が開かれたほどである。こういった流れから、1940（昭和15）年、英語禁止の具体的な措置が行なわれるようになったのである<sup>305</sup>。

嫌英ムードがみられたにもかかわらず、この話が紹介されたのは、この話がドイツを舞台にした話だからであろう。1940（昭和15）年、日本は日独伊三国軍事同盟を結び、ドイツと同盟国となった<sup>306</sup>。それ以前から日本陸軍は、設立当初からドイツ陸軍の影響を受けていたため、ドイツに対して親近感を抱いていたという。陸軍がイギリスに反感を持っていたのは、殺人犯引き渡し拒否事件の他に、イギリスがドイツと対立していたためでもあった<sup>307</sup>。1942（昭和17）年、東京大学教授の村川堅固は英語を教える中等学校を半減すべきであると訴え、英語のかわりにドイツ語、フランス語、中国語を教えるべきだと主張している<sup>308</sup>。第1期の4話の邦訳はいずれもブラウニング版の内容だが、出典に「ロバート・ブラウニング」とは明記されていない。イギリス人であるブラウニングの名前は排除され、題名も「ハーメルンの笛吹き男」ではなく「斑の笛吹」や「魔法の笛」にすることによって外国の話であることが分からないよう改変されている。

## (2) 話の内容の改変について

第1期の邦訳のうち、松村訳<sup>10</sup>を除いた3話<sup>11</sup> <sup>12</sup> <sup>13</sup>はいずれも子ども向けの話である。いずれもブラウニング版の内容で、子どもが理解しやすいように話を簡潔にまとめている。その結果、子どもたちになじみのない聖書を引用している箇所、笛吹き男の自己紹介、生き残ったネズミの話などの場面は省略されている。

昭和第1A期と昭和第1B期の邦訳に共通して興味深いのは、人々の市長への態度が改変されていることである。ブラウニング版では、ハーメルンの人々は市長に対して「ネズミによる被害を解決しないと市長を辞めさせるぞ」と言って怒る。一方、濱田訳<sup>11</sup>や北村訳<sup>13</sup>では人々は下記のように言う。

濱田訳<sup>11</sup>：

「ねずみをなんとかして下さい」（181頁）

北村訳<sup>13</sup>：

「町長さん 議員さん、はやく ねずみたいちをししてくださいよ」  
と、まいにち／＼ たのみました。

ここでは人々は市長を責めずに、ただ「ネズミを退治してください」と頼むだけである。為政者に対して、人々が責めたり怒ったり命令したりしないのである。濱田訳<sup>11</sup>は日中戦争勃発後に、北村訳<sup>13</sup>は太平洋戦争勃発の直前に出版された。戦時中、国民が国を批判することは許されなかった。同様に、たとえ物語のなかであろうと、一般大衆が為政者を批判することなどあってはならないことであるという考え方が反映されたのであろう。とくに北村訳<sup>13</sup>は『講談社の絵本』で、皇太子のための絵本である。大衆が為政者、つまり天皇に「辞めさせるぞ」と詰め寄るなど許されないことと判断されたのであろう。

さらに昭和第1A期の邦訳では、笛吹き男との約束を破ったせいで子どもが連れ去られてしまったことに対する責任の追及が弱腰になっている。楠山訳<sup>12</sup>は水谷訳<sup>4</sup>をほぼそのまま使用しているが、話の結末にある教訓が下記のように改変されている。左が水谷訳<sup>4</sup>、右が楠山訳<sup>12</sup>である。

水谷訳<sup>4</sup>：

これはまったく親たちが、  
約束破つたみせしめだ。  
けれど子供に罪はない、  
だから楽しい天國へ  
子供らだけが行つたのだ。

それと悟つた親たちは、  
すつかり心を入れかへて、  
笛吹男の話をば  
石にきざんで世にのこし、  
罪<sup>つみほろぼ</sup> 亡しをしたといふ<sup>309</sup>。

楠山訳<sup>12</sup>：

恩をうけたらわすれず返せ、  
約束したらかならず守れ。  
子供たちには、でも罪はない、  
だから楽しい遠くの國へ  
子供らだけが行けたのでせう。

それをさとつた町の人たち、  
おそまきながら、心を入れかへ、  
まんだらマントの笛ふき男の、  
ふしぎな話を石にきざんで、  
世のみせしめにのこしました<sup>310</sup>。

水谷訳<sup>4</sup>では最後の教訓部分の内容は、子どもたちが消えたのは人々が約束を破ったことのみせしめで、親たちは心を入れかえて、罪滅ぼしのためにこのことを石に刻むと明言している。楠山訳<sup>12</sup>では「約束を破った」「みせしめ」という断罪の語句は「恩を受けたらわすれず返せ、／約束したらかならず守れ」という一般論に改変され、親ではなく町の人たちがこの話を後世に残すために石に刻むとされている。ここでは石に刻むのは罪滅ぼしのためではなくなっているのである。楠山訳<sup>12</sup>が出版された前年は日中戦争が勃発した年である。国が一丸となって敵国と戦わなければならない時に、約束を破った親たちのせいで子どもが連れ去られるという話は、親や大人に対して子どもたちが不信を抱きかねないと考えて改変されたのではないだろうか。また、水谷訳<sup>4</sup>の「天國」が楠山訳<sup>12</sup>「遠くの國」に改変されているのは、「天國」だと子どもたちが死んだと解釈されるおそれがあ

るので、それを回避するため「遠くの國」に変えたのであろう。

戦争が激化していくと、話の結末はさらに改変される。第1B期の北村訳<sup>[3]</sup>では話の結末が下記のように改変されている。

「あゝ、わるかった。」とまちのひと／＼が かんがへたとき、やまは また さ  
っと二つにわれて、おもしろい ふえの音につれて、こどもたちが をどったり は  
ねたりしながら、たのしさうにかえってきました。

「あゝ、おもしろかった。きれいなおくにへ いったきた」

と、子どもたちは はなしました。

まちのひとは、さっそく、ふえふきに やくそくのおかねを はらいました。

大人たちが後悔していると子どもたちが踊ったり跳ねたりしながら楽しそうに帰ってくる。そして町の人たちは笛吹き男に約束したとおりの報酬を払う。市長や町の人々が約束を破ったことに対する罰は無く、人々は悔い改めて約束を履行するのである。

北村訳<sup>[3]</sup>は1941（昭和16）年に出版された。このころ、戦争は激しさを増していた。1940（昭和15）年8月には東京市内に「贅沢は敵だ」と書かれた立て看板が1500本立てられ婦人団体によって贅沢品の全廃が訴えられるほどであった<sup>311</sup>。人々は国の勝利のために一致団結して、節制などに取り組んだ。団結が求められる時代に、大人たちが約束を破った結果、子どもたちを失うという展開の話は、とうてい受け入れがたかったのであろう。逆に、子どもたちは全員無事に帰って来るという話にしている。つまり、戦争に駆り出された子どもたちが無事に凱旋するよう願った親たちの願望が反映された内容になっているのである。

小西正保は、『児童文学の伝統と創造』で「戦時中は国家による思想統制がきびしく戦争賛歌や戦争協力の作品を除けば、作家たちはほとんど作品を発表できるような状態にはなかったはずである」<sup>312</sup>と述べている。戦時中、作家たちは自由に話を書くことができなかった。この話でも、指導する立場にある人間が詐欺まがいのことをするという内容を教えること自体が、戦時中には問題視されたのであろう。市長や両親の言動は常に正しいものであって批判すること自体が悪とされ、封じ込められていたことがよくわかる改変といえよう。

### 3. 第2期（1946－1967）の邦訳

#### 1) 邦訳の概観

第2期に「ハーメルンの笛吹き男」の邦訳は41話<sup>[4]</sup>～<sup>[54]</sup>存在する。紙が配給制であった第1期の反動からか、第2期は昭和期のなかでもっとも多く邦訳が出版された時期である。41話のうち、1番多いのはブラウニング版で21話存在する。2番目に多いのはグリム兄弟版で7話存在し、3番目に多いのはラング版で5話存在する。また、話が著しく簡略化されたり、改変されたりして、グリム兄弟版、ブラウニング版、ラング版のいずれであるか判断できない不明版は8話存在する。

出版数が一気に増えた第2期では、「ハーメルンの笛吹き男」をそのまま忠実に訳出したものだけでなく、改変を加えたものも多く出現する。たとえば、話の骨子はブラウニン



グ版だが笛吹き男の服装やネズミ退治の報酬がラング版の内容である話や、ハーメルンの人々が市長を辞めさせて笛吹き男に市長になってもらおうとする話などが出現する。本論では改変されているそれらの邦訳のうち、改変の度合いが弱いものを改変版とし、改変の度合いが強いものを改作版とする。つまり、邦訳を次の10種類に分類しているのである。グリム忠実版、グリム改変版、グリム改作版、ブラウニング忠実版、ブラウニング改変版、ブラウニング改作版、ラング忠実版、ラング改変版、ラング改作版、いずれの版にも分類できない不明版の10種類である<sup>313</sup>。

第2期の邦訳をまとめて一覧にしたのが、下記の【表11】である。順番は出版年月順である。右端の「分類」欄では、グリム忠実版を「G忠実」、グリム改変版を「G改変」、グリム改作版を「G改作」、ブラウニング忠実版を「B忠実」、ブラウニング改変版を「B改変」、ブラウニング改作版を「B改作」、ラング忠実版を「L忠実」、ラング改変版を「L改変」、ラング改作版を「L改作」、いずれの版にも分類できない話を「不明」と表記する。

## 2) 昭和第2期の邦訳の一覧表【表11】

番号	出版年月	媒体	訳者／編者	話の題名	収録本	出版社	分類
14	1946年5月 (昭和21年)	雑誌	光吉夏彌	「ハメルンの笛吹き」	『少年クラブ』5月号	大日本雄弁 会講談社	B改変
15	1946年6月 (昭和21年)	雑誌	野上彰 (1冊目)	「ハンメルンの笛 吹き」	『少女の友』第29巻第5 号	実業之日本 社	B忠実
16	1947年6月 (昭和22年)	本	楠山正雄	「魔法の笛」	『思ひ出の國』（世界童 話集）	東西社	B忠実
17	1948年10月 (昭和23年)	雑誌	尾関岩二	「名作物語 ハメル ンの笛吹き」	『ひかりのくに 三・四 年生』10月号	ひかりのく に昭和出版	B忠実
18	1950年3月 (昭和25年)	本	福光えみ子 (1冊目)	「ハメルンのふえふ きおじさん」	『子供に読んで聞かせる お話の本』春の巻	羽田書店	B改作
19	1950年9月 (昭和25年)	本	小出正吾 (1冊目)	「ハンメルンの笛ふ き」	『お話十二か月 10-12月 の巻』（世界童話の泉）	実業之日本 社	B改作
20	1951年12月 (昭和26年)	本	由木明	「まんだらまんとの ふえふきおとこ」	『たからのこぼこ』	小峰書店	B改変
21	1952年1月1日 (昭和27年)	戯曲	青沼三朗	「笛吹き(ハメルン)」	『中学校劇全集』第1 巻	小学館	B改作
22	1952年1月10日 (昭和27年)	本	浜田廣介 (2冊目)	「ハメルンのふえふ き」	『カメレオンの王さま』 (ひろすけ家庭童話文庫)	主婦之友社	L改変
23	1952年9月1日 (昭和27年)	紙芝居	大川秀夫	「ハメルンの笛吹き おじさん」	(書名なし)	教育画劇	B改作
24	1952年9月1日 (昭和27年)	雑誌	宮脇紀雄	「ふしぎな ふ えふき」	『一年ブック』9月号 (第2巻第6号)	秀文社	B改変
25	1953年7月 (昭和28年)	雑誌	加藤省吾	「ふえふきおじさ ん」	『三年の学習』7月号 (第8巻第4号)	学習研究社	B改変
26	1953年9月 (昭和28年)	本	大木雄二 (1冊目)	「ふえふきおじさ ん」	『二年生の世界童話』 (世界童話名作選)	金の星出版	B改作
27	1954年2月 (昭和29年)	絵本	土家由岐雄 (1冊目)	「ふえふきおじさ ん」	『ふえふきおじさん』 (小学館の幼年絵本18)	小学館	不明

28	1954年9月 (昭和29年)	雑誌	(不明)	「ふしぎな ふうえふき」	『一年ブック』 9月号 (第4巻第9号)	学習研究社	不明
29	1955年12月 (昭和30年)	本	植田敏郎 (1冊目)	「ハメルンのネズミ どり」	『世界児童文学選1』 (日 本児童文庫47)	アルス	G忠実
30	1956年6月 (昭和31年)	本	植田敏郎 (2冊目)	「ハメルンの子ども たち」	『ドイツむかしばなし 五年生』	宝文館	G忠実
31	1956年11月1日 (昭和31年)	雑誌	寺脇信夫	「ふしぎなふうえ ふき」	『二年の学習』 11月号	学習研究社	不明
32	1956年11月25日 (昭和31年)	本	植田敏郎 (3冊目)	「はめるんのふうえ ふき」	『幼年おはなし宝玉集 世界編』	宝文館	G忠実
33	1956年12月 (昭和31年)	雑誌	大木雄二 (2冊目)	「ふしぎなふうえ ふき」	『幼稚園ブック』 12月号 (第8巻第13号)	学習研究社	不明
34	1957年2月 (昭和32年)	本	久保喬	「ハンメルンのふうえ ふき」	『世界のむかし話三年 生』	偕成社	B改作
35	1957年3月 (昭和32年)	本	大平千枝子	「魔法の笛」	『世界童話宝玉集』 下巻	宝文館	B忠実
36	1957年6月 (昭和32年)	雑誌	花山明	「ハンメルンのふうえ ふき男」	『たのしい三年生』 (第 1巻第7号)	大日本雄弁 会講談社	B改変
37	1957年10月 (昭和32年)	本	(不明)	「魔の笛」	『世界名著ものがたり (六年生)』	東西文明社	B忠実
38	1957年12月 (昭和32年)	本	山室静	「ハメルンの笛ふき 男」	『魔法つかいと子ども』 (世界のむかし話2)	ポプラ社	G改変
39	1958年6月 (昭和33年)	本	伊達豊	「ハメルンのふうえふ き男」	『世界伝説めぐり』 (私 たちの本だなシリーズ五 年生)	泰光堂	L改作
40	1958年8月 (昭和33年)	戯曲	安田浩	「ハメルンの笛吹 き」	『子ども人形劇集』	白眉社	B改作
41	1960年2月 (昭和35年)	本	藤原定	「魔法の笛にさ らわれた子ども たち」	『グリム伝説集II』	実業之日本 社	G忠実
42	1960年、月不明 (昭和35年)	本	土家由岐雄 (2冊目)	「ハメルンの笛吹 き」	『世界むかし話集』 (児 童世界文学全集12)	偕成社	L忠実
43	1961年6月 (昭和36年)	本	酒井朝彦	「はーめるんのふ えふき」	『世界むかし話集』 (幼 年世界文学全集12)	偕成社	B改変
44	1961年9月 (昭和36年)	雑誌	豊田次雄	「ふうえふきおじさ ん」	『ひかりのくに』 (第16 巻第9号)	ひかりのく に昭和出版	B改変
45	1962年、月不明 (昭和37年)	絵本	土家由岐雄 (3冊目)	(書名と同じ)	『ふうえふきおじさん』	小学館	不明
46	1963年12月 (昭和38年)	本	川崎大治	「ハメルンの ふうえふき」	『世界のおとぎ話』 (幼 年絵童話全集17)	偕成社	不明
47	1964年5月 (昭和39年)	雑誌	おのかおる	「ふしぎなふうえ ふき」	『あそび』	児童福祉会	不明
48	1964年6月 (昭和39年)	絵本	那須辰造	「ハンメルンのふうえ ふき」	『ドイツ童話集』 (世界 の童話8)	講談社	L改変

49	1964年、月不明 (昭和39年)	本	塩谷太郎	「ハメルンのネズミと り」	『オクスフォード 世界 の民話と伝説5 ドイツ 編』	講談社	G改変
50	1964年、月不明 (昭和39年)	本	堀尾青史	「ハンメルンのふえ ふき」	『はなの小人』(世界名 作童話全集36)	ポプラ社	L忠実
51	1965年4月 (昭和40年)	本	植田敏郎 (4冊目)	「はめるんのこども たち」	『白鳥のみずうみ』(世 界のどうわ19)	偕成社	G忠実
52	1965年11月 (昭和40年)	絵本	森いたる	「ふしぎな 笛吹 き」	『ふしぎな 笛吹き』 (講談社のディズニー絵 本69)	講談社	不明
53	1966年12月 (昭和41年)	雑誌	柴野民三	「ハメルンの ふえ ふき」	『キンダーブック』12月 号(第21集第9編)	フレーベル 館	B忠実
54	1967年3月 (昭和42年)	本	大川悦生 (1冊目)	「ハーメルンのふえ ふき」	『世界むかし話』(カラ ー版・世界の幼年文学 4)	偕成社	B改作

### 3) それぞれの邦訳の概要と改変箇所について

#### (1) 「ブラウニング版」の邦訳 (21話)

##### ① 忠実な邦訳について (6話)

第2期の邦訳で1番多いのは、ブラウニング版の内容のもので21話存在する。そのうち、ブラウニング版の内容に忠実、もしくはほぼ忠実な話は下記の6話<sup>13</sup><sup>14</sup><sup>17</sup><sup>53</sup><sup>57</sup><sup>59</sup>である。

野上彰(1冊目)の「ハンメルンの笛吹き」<sup>13</sup>は1946(昭和21)年6月に実業之日本社から出版された『少女の友』に収録されている。ブラウニング版の原文は詩で、野上も七五調の詩で書いている。話の最後の解説で野上は下記のように述べている。

僕の詩は、イギリスの有名な詩人ロバート・ブラウニングの”Pied piper of Hamelin”『ハメルンのだんだら模様の笛吹き』の構成にならつて、そのリズムとメロディを持たせ、その詩の幻想を僕が自由、勝手、わがままに廣げてしまつたのです<sup>314</sup>。

野上はブラウニングの詩を自由に書き換えたと述べているが、実際の内容はブラウニング版に忠実である。1匹だけネズミが生き残ること、消えた子どもたちが通った通りに名前が付けられたこと、教会にガラス絵が設置されたことなども忠実に訳出されている。

楠山正雄の「魔法の笛」<sup>14</sup>は1947(昭和22)年6月に東西社から出版された『思ひ出の國』に収録されている。この本は東西社の「世界童話集」シリーズの1冊である。このシリーズは全部で3冊あり、それぞれ低学年向け、中学年向け、高学年向けの本である<sup>315</sup>。『思ひ出の國』は3冊目で、高学年向けの本である。目次に「イギリス(ブラウニング)」とあり、本文は主として七文字ずつのリズムの詩で書かれている。楠山は1938(昭和13)年にもまったく同じ題名で「魔法の笛」<sup>12</sup>を書いている。内容は両作品とも同じだが、文章の表現は全体を通して変えられている。たとえば、ネズミの被害についての箇所を比較すると下記のように書き換えられている(傍点は訳者による)。

(1938 (昭和13) 年版 [4])

猫にや嘯みつく、犬にも負けぬ、  
ゆりかごにねた赤ちゃんもかじる、  
帽子にや巣をくふ、着物はやぶる  
かあさん達のおしやべりさへも、  
きい／＼聲で消されるさわぎ。

(1947 (昭和22) 年版 [6])

猫にやかみつく 赤んぼはかぢる、  
犬とけんくわも するあばれかた。  
帽子にや巣をくふ 着物はやぶる、  
奥さん方の おしやべりさへも、  
きいきいごゑで けされる始末。

内容はブラウニング版を忠実に訳しているが、省略されている箇所もある。笛吹き男の自己紹介の場面は簡略化され、聖書の1節などは省略されている。

尾関岩二の「ハムリンの笛吹き」 [7]は1948 (昭和23) 年10月にひかりのくに昭和出版から出版された『ひかりのくに 三・四年生』10月号に収録されている。この話は散文で書かれ、話の最後に「ロバート・ブラウニングの詩から」というようにブラウニングが底本として明記されている。笛吹き男が自身の経歴を話す場面、1匹だけ生き延びたネズミがネズミの国へ帰る場面、聖書の1節が引用される場面、話の最後の教訓などが省略されている。話は簡略化されているが、内容はブラウニング版に忠実な内容である。

大平千枝子の「魔法の笛」 [8]は1957 (昭和32) 年3月に宝文館から出版された『世界童話宝玉集』下巻に収録されている。この話は第2期の邦訳のなかで、もともとブラウニング版に忠実な内容である。本文の直前に出典としてブラウニングの名前が明記され、本文は七五調の詩で書かれている。省略されているのは聖書の1節のみである。巻末の解説ではロバート・ブラウニングはイギリスの詩人で、彼の詩「魔法の笛 (ハメルンの笛吹き男)」は有名であると紹介されている<sup>316</sup>。

訳者不明の「魔の笛」 [9]は1957 (昭和32) 年10月に東西文明社から出版された『世界名著ものがたり (六年生)』に収録されている。訳者が不明であるのは、この本が複数の筆者によって書かれたものだからである。複数の訳者のうち誰がこの話を書いたのかは明らかにされていない。目次には「ブラウニング (イギリス)」と明記され、内容はブラウニング版に忠実である。本文の後ろにはブラウニングの経歴についての簡単な説明がある。

柴野民三の「ハメルンの ふえふき」 [10]は1966 (昭和41) 年12月にフレーベル館から出版された『キンダーブック』12月号に収録されている。本文は七五調の詩で書かれ、ブラウニング版にほぼ忠実な内容である。解説には「このお話は、もともとドイツの民話のようですが…英国のロバート・ブラウニングがとりあげて童詩にしているのが有名になっているのは周知のことです」と書かれている<sup>317</sup>。

これら6話のうち、省略がほぼ無いのは大平千枝子の「魔法の笛」 [8]のみである。その他の5話では、複数の場面が省略されていたり、簡略化されていたりする。省略されたり簡

略化されたりする場面は主として、笛吹き男が自身の経歴を詳しく述べる場面、ネズミが1匹だけ生き延びてネズミの国へ帰る場面、子どもが消えた日を基準に年月が数えられるようになるという場面、子どもが消えた通りが舞楽禁止通りと名付けられる場面などである。ブラウニング版の原詩は全部で15連と長いため、話の骨子に不要だと判断された場面が削除されたのであろう。これらの話はいずれも、出典がブラウニングであると明記されている。

## ②改変された邦訳について（7話）

ブラウニング版の改変版は下記の7話<sup>14</sup><sup>20</sup><sup>24</sup><sup>23</sup><sup>36</sup><sup>43</sup><sup>44</sup>である。

光吉夏彌の「ハメリンの笛吹き」<sup>14</sup>は1946（昭和21）年5月に大日本雄弁会講談社から出版された『少年クラブ』に収録されている。ブラウニング版の内容だが、笛吹き男がネズミを溺死させる場面でネズミの王が登場する。これはラング版の内容である。話の最後は「…子どもたちは、笛吹きにつれられて、とほい、ふしぎな、そしていつも幸福なよろこびの國へいつて、そこで、みんなしらがのおぢいさんや、おばあさんになるまで、悲しみひとつしらず、しあはせにくらしました」と結ばれる。

由木明の「まんだらまんとのおふえふきおとこ」<sup>20</sup>は1951（昭和26）年12月に小峰書店から出版された『たからのこぼこ』に収録されている。ブラウニング版の内容をそのまま簡略化した内容である。ただし、笛吹き男は黄と赤の服を着た人物ではなく、「まんだらまんとをきてふえをもった、きたないおとこ」（23頁）に改変されている。話の最後で笛吹き男は「こどもをつれて、やくそくをまもるたのしいくにへ」（24頁）行く。帰ってくる子どもはひとりもない。

宮脇紀雄の「ふしぎなふえふき」<sup>24</sup>は1952（昭和27）年9月1日に秀文社から出版された『一年ブック』9月号に収録されている。ブラウニング版の内容を著しく簡略化した内容である。町にやってきた笛吹き男は「おかしなまんと」（7頁）を着ている。笛吹き男が笛を吹くと子どもたちが笛吹き男の後について全員どこかへ行ってしまう。そして話の最後は、子どもたちは「だれもしらない、たのしいところでゆかいにくらしたということです」（12-13頁）という文章で締めくくられている。この雑誌は小学1年生向けの雑誌であり、この話の本文はひらがなのみで書かれている。おそらく低学年の子どもに長い話は不適切であると考えられて、著しく簡略化されたのであろう。

加藤省吾の「ふえふきおじいさん」<sup>23</sup>は1953（昭和28）年7月に学習研究社から出版された『三年の学習』7月号に収録されている。これは散文ではなく歌詞であり、話は著しく簡略化されている。歌詞は全部で4番までである。1番では笛吹き男がネズミを川で溺死させ、2番では町の人たちが報酬の支払いを拒否し、3番では報酬をもらえなかった笛吹き男が笛を吹いて子どもたちを連れ去り、4番では子どもたちが笛吹き男と一緒に楽しく踊る。子どもたちが連れ去られた行き先については「こどものくには山の中／おもちゃやおかしのゆめのくに」（7頁）と述べられている。この歌詞には音楽も付けられており、レコードも販売されている<sup>318</sup>。

花山明の「ハンメルンのふえふき男」<sup>36</sup>は1957（昭和32）年6月に大日本雄弁会講談社から出版された『たのしい三年生』に収録されている。絵と文は見開き1ページに収められ、話は簡略化されている。笛吹き男は「赤いマント」（58頁）を着ている。子どもたち

は全員笛吹き男と共に、2つに割れた山の中の「きれいで たのしい、べつの国」(59頁)に行く。

酒井朝彦の「ハーメルンのふえふき」[43](#)は1961(昭和36)年6月に偕成社から出版された『世界むかし話集』に収録されている。ハーメルンの町に現れたネズミたちは、食べ物のほかにウサギや馬や牛までかじる。人々はいっそ町を捨ててどこかへ移り住もうと話す。そこに「とんがりぼうし」(37頁)を被った笛吹き男がやってくる。報酬をもらえなかった笛吹き男は子どもたちを全員連れ去る。

豊田次雄の「ふえふきおじさん」[44](#)は1961(昭和36)年9月にひかりのくにに昭和出版から出版された『ひかりのくに』に収録されている。ブラウニング版の内容だが、かなり簡略化されている。笛吹き男は「みすぼらしい ひとりの おじさん」(10頁)で「よわそうな おじさん」(10頁)である。報酬は袋いっぱい金貨に改変されている。笛吹き男は笛を「ぴっぴきび、ぴっぴきび、ぴーひゃらびー」(12頁)と吹く。帰ってくる子どもはひとりもおらず、「たのしい こどものくにへ、おじさんと 行って」しまう。そして「まちのひとは、うそをつくことを やめて、子どもたちが かえるひをまつことに」(14頁)する。

これら改変版における最大の改変は、子どもたちが全員ハーメルンの町から消えてしまうことである。これら7話では、足の悪い子どもは登場せず、帰ってくる子どもはひとりもない。ブラウニング版では、足の悪い子が自分だけ取り残されてしまったことを嘆く場面で終わる。改変された話ではそのような悲壮感は削除され、子どもたちは全員揃って楽園のような場所で幸せに暮らすのである。

### ③改作された邦訳について(8話)

ブラウニング版の改作版は下記の8話[18](#)[19](#)[21](#)[23](#)[26](#)[34](#)[40](#)[54](#)である。

福光えみ子(1冊目)の「ハメルンのふえふきおじいさん」[18](#)は1950(昭和25)年3月に羽田書店から出版された『子供に読んで聞かせるお話の本』春の巻に収録されている。話の最後に「ブラウニングの詩より」と書かれているが、内容はブラウニング版を大幅に作り変えたものである。話の冒頭は「三かくやねがありました。まあいやねもありました。いろんなおうちがならんで、それは、ハメルンという町でした」(323頁)という文で始まる。これはブラウニング版にも、グリム兄弟版にも、ラング版にもない表現である。笛吹き男は「トンガリぼうしをかぶった、おじさん」(326頁)で、「だぶだぶの、ふくろのようなズボン」(11頁)を履き、「ながっぼそい、さきがラッパのようにひらいたふえを、一ぽん」(326頁)持っている。笛吹き男「わたしは、子どももおとなも、みんなであそぶのがだいすきな、ふえふきです」(326頁)と自己紹介をする。市長はネズミ退治の報酬として、もし笛吹き男がネズミを1匹残らず退治できたら、笛吹き男を市長にするという。子どもたちが連れ去られた後、足の悪い子が帰ってくるが、この子どもには「ルネ」という名前が付けられている。子どもが消えた後、人々は市長を責める。そしてひとりの父親が、「こんなうそつき市長なんかやめさせて、ふえふきに、市長になってもらえばいいじゃないか」(334頁)と言う。町の人々はそれに賛同し、笛吹き男を探しに行く。話は「ふえふきおじさんが市長さんになったら…どんなにたのしいまちになるでしょうね」(334頁)という文で終わる。

小出正吾（1冊目）の「ハンメルンの笛ふき」<sup>㉒</sup>は1950（昭和25）年9月に実業之日本社から出版された『お話十二か月』に収録されている。話のはじめに「ブラウニングの詩から」と書かれているが、内容はブラウニング版を大幅に作り変えたものである。まず、町の被害の様子が「パンやさんにもパンがありません…肉屋さんにも肉がありません…」（214頁）というように、具体的に記述されている。笛吹き男が登場するよりも先に、市長はネズミ退治の報酬として袋いっぱいの金貨を渡すと言う。笛吹き男の服装はブラウニング版と同じで赤と黄色の服だが、「とんがりぼうしで、長い鳥のはね」（219頁）が付いた帽子を被っている。ネズミを退治して帰ってきた笛吹き男を、市長は市門の中に入れようとしなない。市長と市民たちが門の上に立って一斉に嘲るので、笛吹き男は「こんな、おとなの住む町で、かわいい子どもたちがそだてられたら、どんなに、ふこうかしれないぞ」（225頁）と言う。そして「やくそくやぶりの、うそつきたちから、かわいい子どもを、すくいだし、たのしい、たのしい、よい国へ」（226頁）連れて行くために、笛吹き男は笛を吹く。岩の山の中には「子どもの天国」（231頁）があり、木馬や滑り台やメリーゴランドがある。最後尾にいた足の悪い子も山の中へ消える。市長や議員や町の人は、嘘をついたり約束を破ったり恩人を馬鹿にしたりしたことを反省するが、子どもたちは全員消えたままで誰ひとり帰ってこない。笛吹き男は報復のためではなく、子どもたちを救うために笛を吹くのである。小出は話の最後の注釈で「ここでは、それ〔ブラウニングの詩〕をずっと自由に語りなおしました」と述べている<sup>319</sup>。ただしこれらの改変は小出自身によるものではなく、おそらくディズニーによる改変であろう。ウォルト・ディズニー・カンパニーは1933年（昭和8）年9月16日、「The Pied Piper」というアニメーション映画を公開した。この映画はディズニーの短編アニメーション映画シリーズ「シリー・シンフォニー（Silly Symphony）」の39作品目にあたる作品である<sup>320</sup>。この映画では、ハーメルンの市長は市門を閉じて笛吹き男を町に入れようとせず、笛吹き男は子どもを救うために笛を吹く。山の中は遊園地のようになっており、笛吹き男は最後尾の足の悪い子を待ってから一緒に山の中に入る。この映画は翌年1934（昭和9）年に絵本として出版されている<sup>321</sup>。おそらく小出はこの映画か絵本を知っていたのであろう。

青沼三朗の「笛吹き（ハメルン）」<sup>㉓</sup>は1952（昭和27）年1月1日に小学館から出版された『中学学校劇全集』に収録されている。この話は戯曲で、ブラウニング版の内容を元にしている。話は登場人物と語り手と合唱隊のセリフで進行していく。時代は13世紀ではなく1930年に改変されている。1匹のネズミがやってきて、ハーメルンの町を気に入り電話で仲間を呼ぶ。肉屋、仕立屋、軍人などが町長カールにそれぞれネズミの被害を訴える。笛吹き男がやってきてネズミを退治するが、町長が報酬を払わないので、笛吹き男は子どもたちを連れ去る。足の悪い子ヤンだけが帰ってくる。子どもがいなくなったハーメルンの町はさびれていき、最後には何もなくなってしまう。話の最後で合唱隊が「この事件の起ったのはあたりまえ、町長が約束を破ったから」（155頁）と歌い、約束は破ってはいけないと呼びかけて終わる。

大川秀夫の「ハメルンの笛吹きおじさん」<sup>㉔</sup>は1952（昭和27）年9月1日に教育画劇から発行された紙芝居である。「ハーメルンの笛吹き男」の初めての紙芝居である。外箱には「有名なブラウニングの詩を原作にしたそれは愉快な物語！」と書かれ、題名が書かれたページには「ロバートブラウニングの詩より」と明記されているが、内容はブラウニング

版を大幅に作り変えたものである。話は主として、登場人物の台詞と語りによって進められていく。話は「小さなお山や大きなお山、緑の森にかこまれて、さんかく屋根や、まるいお屋根、おもちやのようにかわいゝお家が、一ぱいならんで、こゝはハメルンという町です」という語りで始まる。医者、商人、学者などが市長にネズミの害を訴える。町にやってきた笛吹き男は「トンガリ帽子」(5頁)を被っている。笛吹き男は「私は子供たちと遊ぶのが大好きな、ふえふきおじさんですよ。私の好きな子供たちのために、ねずみどもを退治してあげようと思ってわざわざ遠くからやってきたんです」(5頁)と言う。市長はネズミ退治の報酬として、笛吹き男を市長にすると約束する。その約束を守ってもらえなかった笛吹き男は怒らず、ただ「かなしそうな顔」(11頁)をして笛を吹く。笛吹き男と共に子どもたちは山の向こうへ消え、足の悪い子だけが町に帰ってくる。人々は市長を責め、「こんなウソつきの市長をやめさせて、約束どおり、あの笛吹きおじさんに、市長さんになってもらおうじゃないか」(15頁)と言って、笛吹き男を探しに町の外に行く。話の最後は「子供の大好きな笛吹きおじさんが市長になったら、このハメルンの町は、前より、もっともっと、しづかな、たのしい町になることでしょう」という文で終わる。この話は前述の福光訳<sup>18</sup>に酷似している。

大木雄二(1冊目)の「ふえふきじいさん」<sup>26</sup>は1953(昭和28)年9月に金の星出版から出版された『二年生の世界童話』に収録されている。「ドイツの どうわから」と紹介されているが<sup>322</sup>、内容はイギリスのブラウニング版を基に書き変えたものである。ネズミの害についての描写がかなり詳しく書き足されている。ネズミを退治するために連れてこられたネコが、逆にネズミから逃げ出すのである。ネズミ退治の報酬をもらえなかった笛吹き男は、怒るところか「にやっと わらって」(105頁)外へ出ると笛を吹いて子どもたちを連れ去る。笛吹き男が、余裕があり一枚うわてな人物として描かれているのである。足の悪い子がひとりだけ取り残され、他の子どもたちの行方については語られない。最後は「町の 人は、なみだを こぼして なきました」(107頁)という文で話は終わる。大木はこの話について「この世でもっとも大切なのは子供たちということを教えていて、面白いと思います」と述べている<sup>323</sup>。

久保喬の「ハンメルンのふえふき」<sup>24</sup>は1957(昭和32)年2月に偕成社から出版された『世界のむかし話三年生』に収録されている。この話はブラウニング版を著しく改変したものである。話の内容は福光訳<sup>18</sup>とほぼ同じである。笛吹き男は「とんがりぼうし」(30頁)を被って「だぶだぶのふくろのようなズボン」(30頁)を履き、「ほそながくて、さきがラッパのようにひらいたふえを一ぽん」(30頁)持っている。福光訳<sup>18</sup>とまったく同じ服装と持ち物である。ネズミ退治の報酬は、福光訳<sup>18</sup>では市長にすることだが、ここでは袋いっぱい金貨である。笛の音色は、福光訳<sup>18</sup>では「ポップ、ポップ、ポップポポー」だがここでは「ピップ、ピップ、ポポーポー」となっている。足の悪い子どものルネだけが町に帰ってきて、町の人々が「ふえふき男とのやくそくをまもればよかった」(38頁)と泣きながら後悔する場面で話は終わる。あとがきにあたる「先生や、ご両親の皆さまへ」で久保は「約束を破った町の人びとが、子どもをうばわれたことは、ひどいばつでしたが、それだけにこのお話は、おもしろさの中に、なにか、ひとの心に深く残るものをふくんでいます」と述べている<sup>324</sup>。

安田浩の「ハメルンのふえふき」<sup>40</sup>は1958(昭和33)年8月に白眉社から出版された『子



ども人形劇集』に収録されている。この話は戯曲である。出典は「ブラウニングの詩より」と明記されている<sup>325</sup>。内容はブラウニング版を簡略化して作り変えたもので、福光訳[18]に酷似している表現がある。ハーメルンの町には「三かくやねや まるやね」（183頁）の家があり、人々はネズミの害に困っている。笛吹き男の笛の音は「ヒップ ヒップ ヒップー」（189頁）である。子どもは全員町からいなくなる。その後子どもがいなくなったハーメルンは寂しい町になったという。

大川悦生（1冊目）の「ハーメルンのふえふき」[53]は1967（昭和42）年3月に偕成社から出版された『世界むかし話』に収録されている。話の骨子はブラウニング版だが、細かい内容が自由に書き換えられている。笛吹き男は「いろんな色のまじった、てじなしみたいな、ふく」（23頁）を着て、「黒いぼうしをかぶり、とがったくつ」（23頁）を履いている。ハーメルンの町に帰ってくるのは行列に遅れた子どもがひとりだけである。大川は解説でこの話について「ドイツのハーメルン市につたわる古い傳説で、いなくなった子どものかずは、百三十人とも、三百三十人ともいわれています」と述べている<sup>326</sup>。330人という数字はおそらく、後述の植田訳（4冊目）[50]の影響を受けたのであろう。

これら8話の内容をみると、福光訳[18]に酷似している作品が3話[23][34][40]ある。ブラウニング改作版以外にも福光訳[18]を参考にしたと思われる作品は2話[46][53]ある。福光訳[18]が収録されている『子供に読んで聞かせるお話の本』は児童文学者協会によって出版された。児童文学者協会は、1946（昭和21）年に結成された児童文学者の団体である。その協会から出版されたこの本は、児童文学者たちにとって一種の手本となったと考えられる。福光訳[18]が多くの作品に影響を与えているのはそのためであろう。

## (2) 「グリム兄弟版」の邦訳（7話）

### ① 忠実な邦訳について（5話）

第2期の邦訳で次に多いのは、グリム兄弟版の話で7話ある。そのうち、グリム兄弟版の内容に忠実、もしくはほぼ忠実な話は下記の5話[29][30][32][41][51]である。

植田敏郎（1冊目）の「ハメルンのネズミとり」[29]は、1955（昭和30）年12月にアルスから出版された『世界児童文学選I』に収録されている。この本は「日本児童文庫」シリーズの47番目にあたる本である。話の最後に「グリム兄弟による」と明記され、グリム兄弟版の本文にほぼ忠実な訳である。ただし、子どもたちが連れ去られた場面で話は終わっており、連れ去られた子どもが130人であること、子どもたちが通った通りが舞楽禁止通りと名付けられたこと、子どもたちが消えた日付を基準に公文書が書かれるようになったということなどはすべて省略されている。また、出来事が起こったのが1284年であること、笛吹き男が子どもを連れ去ったのが6月26日のヨハネとパウロの日であることなども省略されている。子どもは全員消えて、帰ってくる子どもはひとりもない。

植田敏郎（2冊目）の「ハメルンの子どもたち」[30]は1956（昭和31）年6月に宝文館から出版された『ドイツむかしばなし 五年生』に収録されている。植田訳（1冊目）[29]の翌年に出版された本である。話の最後に「グリム」と明記されており、植田訳（1冊目）[29]と同様にグリム兄弟版に忠実な訳である。植田訳（1冊目）[29]よりもさらに忠実に訳されており、子どもたちが連れ去られたのが6月26日であること、その日がヨハネとパウロの日にあたること、連れ去られた子たちのなかに市長の成人した娘もいたこと、子守娘がその様

子を見ていたこと、消えた子どもたちは全員で130人であったこと、盲目の子と口のきけない子が後から町に帰ってきたこと、上着を取りに子どもがもうひとり帰ってくることもすべて訳出されている。ただし、植田訳（1冊目）[29](#)と同様に、町から出て行った子どもたちが通った通りが舞楽禁止通りと名付けられたこと、ハーメルンでは子どもが消えた日を基準に日付を数えるようになったことなどは省略されている。

植田敏郎（3冊目）の「はめるんの ふえふき」[32](#)は1956（昭和31）年11月25日に宝文館から出版された『幼年おはなし宝玉集 世界編』に収録されている。この本は植田訳（2冊目）[30](#)と同じ宝文館から出版されたものである。本の最後の「作品解説」で植田は「できるだけ原語に忠実に現したつもりですが、幼児のためにはそれにふさわしい表現を用いています」と述べている<sup>327</sup>。たしかに、この話は植田訳（2冊目）[30](#)よりもさらに細部が忠実に訳出されている。話の時代が1284年であること、笛吹き男が再び現れたのが朝の7時ごろであること、消えた子どもを探すために四方八方に使者が使わされたことなども訳出されている。植田訳（1冊目）[29](#)や植田訳（2冊目）[30](#)と同じく、舞楽禁止通りと名付けられたこと、子どもが消えた日を基準に日付を数えるようになったことなどは省略されている。1箇所だけ誤訳があり、笛吹き男が再び町にやってきた「『よはね』と『ぱうろ』の日」を「六がつ二十五にち」（116頁）と訳している。植田は2冊目[30](#)でヨハネとパウロの日を6月26日と正しく訳しているため、これはおそらく誤植と思われる。目次には「グリム」とあり、話の最後には「グリムの童話から」と書かれている。

藤原定の「魔法の笛にさらわれた子どもたち」[41](#)は1960（昭和35）年2月に実業之日本社から出版された『グリム伝説集II』に収録されている。この本の奥付に「グリム兄弟が…集めた、数多いドイツ民族の伝説の中から、…主要なものすべてを子ども向きに訳した、本邦初訳のグリム伝説集」と書かれているように<sup>328</sup>、内容はグリム兄弟の『ドイツ伝説集』第1巻を忠実に訳したものになっている。ただし、すべての話が訳出されているわけではない。本は全部で3巻である。1巻を山室静が、2巻を藤原定が、3巻を植田敏郎が訳している。この話はグリム兄弟版にもっとも忠実な訳で、省略されている箇所は皆無である。話の最後のラテン語の詩まで忠実に訳されている。

植田敏郎（4冊目）の「はめるんのこどもたち」[51](#)は1965（昭和40）年4月に偕成社から出版された『白鳥のみずうみ』に収録されている。この本は偕成社の「世界のどうわ」シリーズの19番目で、ドイツと北欧の話を受録している。グリム兄弟版に忠実な内容だが、省略されている箇所もある。話のはじめに語られる年号が省略され、グリム兄弟版で「ヨハネとパウロの日」と語られる箇所は、ここでは「さて、それから しばらく たった、ある あさのことです」（93頁）となっている。連れ去られる子どもの年齢についてや、市長の娘についても語られない。盲目の子、口のきけない子、上着を取りに帰ってきた子どもたちが町に帰ってきたところで話は終わる。舞楽禁止通りと名付けられたことや、子どもが消えた日を基準に日付を数えるようになったこと、ラテン語の碑文が刻まれたことなどはすべて省略されている。ここでは町から消えた子どもたちは全員で330人になっている。しかし、植田は「ハメルンの子どもたち」[50](#)では消えた子どもたちの人数を「130人」と正しく訳しているため、「330人」というのはおそらく誤植であろう。

グリム兄弟に忠実なこれら5話のうち、4話が植田敏郎による邦訳である。第2期では植田の邦訳以外のグリム兄弟版の話は、改変版と改作版を含めても3話しか存在しない。グ

リム兄弟版は子ども向けの詩であるブラウニング版や、子ども向けの散文であるラング版とは異なり、伝説の資料として集められた話である。子どもにとって魅力的な話ではないため、普及しなかったのであろう。

## ②改変された邦訳について（2話）

グリム兄弟版の改変版は下記の2話<sup>328</sup><sup>329</sup>である。いずれの話も改変されているのは一部分のみであり、グリム兄弟版を著しく書き換えたものではない。

山室静の「ハメルンの笛ふき男」<sup>328</sup>は1957（昭和32）年12月にポプラ社から出版された『魔法つかいと子ども』に収録されている。この本は「世界のむかし話全集」シリーズの2番目にあたり、「ドイツ篇」という副題が付けられている。「はじめに」にはグリム兄弟、ベヒシュタインについての簡単な説明がある<sup>329</sup>。植田敏郎が解説を担当しており、「本書には、グリム、ベヒシュタイン民話集や、その他の作家の蒐集したものの中から、いくつかを」取り上げて収録しているという<sup>330</sup>。話の内容は主としてグリム兄弟版の内容であるが、改変されている箇所もある。ここでは「赤や黄の、だんだらもようのうわぎ」（18頁）を着ている。グリム兄弟版では溺死するネズミについて詳しく語られていないが、ここでは「大ネズミも小ネズミも、ふとったネズミもおやせのネズミも」（20頁）というふうにネズミの様子が具体的に描写されている。笛吹き男の服装やネズミについての表現はいずれもブラウニング版の内容である。帰ってくる子どもはグリム兄弟版と同じく盲目の子、聾啞の子、上着を忘れた子である。舞楽禁止通りに関する説明、子どもが消えた日を基準に日付を数えるようになったことなどは省略されている。解説で植田は、この話について「約束をたがえることが、いかに道徳的によくないかをはっきり教えている」と述べている<sup>331</sup>。

塩谷太郎の「ハメルンのネズミとり」<sup>329</sup>は1964（昭和39）年に講談社から出版された『オクスフォード 世界の民話と伝説5 ドイツ編』に収録されている。グリム兄弟版の内容だが、改変されている箇所もある。グリム兄弟版ではネズミの害については語られないが、ここではネズミが食べ物を食べ尽くすので町の人々が「もうすぐわたしたちは、うえ死にするんだ」（131頁）と嘆く姿が語られている。ネズミを退治した笛吹き男に対して人々は、笛吹き男の「しごとはんぶんいじょうは、川がやってくれた」（135頁）から、払うのは約束の金額の半分以下で良いと言う。笛吹き男が再びやってくるのはヨハネとパウロの日ではなく、ここでは日曜日である。残った子どもは、朝寝坊をしたために遅れてついて行った2人だけである。

## (3) 「ラング版」の邦訳（5話）

### ①忠実な邦訳について（2話）

ラング版の内容に忠実、もしくはほぼ忠実な話は下記の2話<sup>332</sup><sup>333</sup>である。

土家由岐雄（2冊目）の「ハーメルンの笛吹き」<sup>332</sup>は1960（昭和35）年に偕成社から出版された『世界むかし話集』に収録されている。目次に「ハーメルンの笛吹き〔ドイツ〕」と書かれているが<sup>332</sup>、内容はイギリスのラング版の内容である。ラング版の内容にほぼ忠実だが、町の人々が笛吹き男を魔術師だと思う場面、町の人々が市長を責める場面、市長が自身の子どものことを思って嘆く場面などは省略されている。

堀尾青史の「ハンメルンの ふえふき」<sup>50</sup>は1964（昭和39）年にポプラ社から出版された『はなの小人』に収録されている。この本は「世界名作童話全集」シリーズの36冊目にあたる。「ラング作」と明記され、内容はラング版に忠実である。ハンガリーにドイツ語を話す人たちが暮らす村があり、消えた子どもたちがその村を作ったに違いないとハーメルンの人々が話す場面は省略されている。話の最後は「むかし むかし、ドイツの ハンメルンに あった、ふしぎな おはなしです」という文章で締めくくられている。本の後ろにある「ご両親や先生方へ」で堀尾はアンドルー・ラングのことを紹介し、「ハーメルンの笛吹き男」伝説について「グリムの採集によると、一二八四年のできごと」とであると説明している<sup>333</sup>。

## ② 改変された邦訳について（2話）

ラング版の改変版は下記の2話<sup>22</sup><sup>48</sup>である。

浜田廣介（2冊目）の「ハメルンのふえふき」<sup>22</sup>は1952（昭和27）年1月10日に主婦之友社から出版された『カメレオンの王さま』に収録されている。この本は浜田の「ひろすけ家庭童話文庫」シリーズの6巻目である。骨子はラング版の内容だが、改変されている箇所もある。ラング版では笛吹き男が吹くのはバグパイプだが、ここで吹くのは笛である。ネズミを退治するのはラング版では9時ごろだが、浜田訳<sup>22</sup>では11時になっている。ラング版では市長が笛吹き男を畏にはめようとするが、浜田訳<sup>22</sup>では市長は謀略をめぐらせず、笛吹き男を罵らない。子どもは全員消えて、帰ってくる子どもはひとりもない。浜田はあとがきにあたる「作者のことば」で、「ハメルンのふえふき」はドイツの有名な伝説であり、それを「自由に再話」したと述べている<sup>334</sup>。

那須辰造の「ハンメルンの笛吹き」<sup>48</sup>は1964（昭和39）年6月に講談社から出版された『ドイツ童話集』に収録されている。この本は「世界の童話」シリーズの8巻目である。出典は「ドイツ民話」と書かれているが<sup>335</sup>、内容はラング版の内容を改変し、簡略化したものである。笛吹き男は「わかい たびびと」（16頁）でバグパイプではなく笛を持っている。ネズミの王との会話は省略され、帰ってくる子どもはひとりもない。この話のなかでは「ちょうちょうさんは、ずるい ひとでした」（17頁）や「ずるい ちょうちょうさん」（21頁）というように、町長がずるい人間であることが強調して語られている。そして話の最後は、子どもたちは「ずるい ひとの いない、たのしい くにへ つれていかれたのでしょうか。／ほんとに ふしぎな ことですねえ」（22頁）という文章で締めくくられ、ハンガリーにドイツ語を話す人たちが暮らす村があるという場面は省略されている。

## ③ 改作された邦訳について（1話）

ラング版の改作版は下記の1話<sup>39</sup>のみである。

伊達豊の「ハメルンのふえふき男」<sup>39</sup>は1958（昭和33）年6月に泰光堂から出版された『世界傳説めぐり』に収録されている。話の骨子はラング版で、さらにブラウニング版が混成されている。笛吹き男はラング版と同じく歌を歌いながら町にやってくるが、その風貌はブラウニング版のものである。ネズミ退治の報酬は同じネズミ1匹につき100円で、笛吹き男は白いネズミの「親方」と話す。これはラング版の内容である。笛の音に誘われて

出てくる子どもたちの様子はブラウニング版の表現である。帰ってくる子どもはひとりもおらず、子どもたちが岩山に飲み込まれて話は終わる。ブラウニング版でもラング版でもない改変箇所があり、それは下記の場面である。白いネズミが笛吹き男に、1匹だけネズミが町に残っていてそれは市長であるが、市長はただのネズミじゃないから用心するようにと言う。巻末にはブラウニングについての簡単な人物紹介が掲載されている<sup>336</sup>。

#### (4) いずれの版にも分類できない不明版 (8話)

話が簡略化されすぎたり、改変されすぎたりして、いずれの版にも分類できない不明版は8話ある。そのうち、話の簡略化が著しいのが4話<sup>28</sup> <sup>31</sup> <sup>33</sup> <sup>47</sup>で、話の改変が著しいのが4話<sup>27</sup> <sup>43</sup> <sup>46</sup> <sup>52</sup>ある。まず話の簡略化が著しい話から内容を見ていく。

記者不明の「ふしぎな ふえふき」<sup>28</sup>は1954 (昭和29) 年9月に学習研究社から出版された『一年ブック』9月号に収録されている。短い話で内容が簡略化されているため、いずれの版を参考にしたのか判別できない。ネズミの害に悩む「はめりん」(4頁)の町に「ふしぎな ふえふき」がやってきてネズミを退治すると言う。町の人「おれいに なんでも」(6頁)やると約束するが、約束を守らず男に報酬を支払わない。笛吹き男が怒って笛を吹くと、子どもたちは全員笛吹き男について町から出て行く。話はこれで終わる。まるであらすじのような、簡略化された話である。

寺脇信夫の「ふしぎな ふえふき」<sup>31</sup>は1956 (昭和31) 年11月1日に学習研究社から出版された『二年の学習』11月号に収録されている。簡略化された短い話である。報酬は袋いっぱい金貨で、笛吹き男の服装についての描写はない。笛吹き男は「こんな うそつきの 町に子どもを おいて おくわけには いきません」(24頁)と言って笛を吹き、子どもを「どこかへ」(24頁)連れて行く。それ以降ハーメルンの町には子どもがひとりもいなくなったという場面で話は終わる。

大木雄二(2冊目)の「ふしぎなふえふき」<sup>33</sup>は1956 (昭和31) 年12月に学習研究社から出版された『幼稚園ブック』12月号に収録されている。「ドイツ民話」と書かれており、話は大幅に簡略化されている。笛吹き男は「だれも しらない おじさん」(36頁)であり、報酬の内容は具体的に示されず「おれいは どっさり」(36頁)とのみ記されている。報酬をもらえなかった笛吹き男が怒って再び笛を吹くと、子どもたちは笛吹き男と共にどこかへ消えてしまう。最後は「まちのひとは たいへん こまりました」(38頁)で話は終わる。

おのかおるの「ふしぎなふえふき」<sup>47</sup>は1964 (昭和39) 年5月に児童福祉会から出版された『あそび』に収録されている。この話は裏表紙に掲載されている。話が著しく短く、省略箇所が多いため、いずれの版であるか判断することはできない。笛吹き男の容貌は語られず、報酬は袋いっぱい金貨である。子どもたちは全員消えてしまい、「まちの ひとたち おどろき あわて、やくそく やぶって わかったと みんな みんな ふえふきおとこに あやまりました」(裏表紙)という文章で話は終わる。

次に、改変の著しい話を見ていく。

土家由岐雄(1冊目)の「ふえふきおじさん」<sup>27</sup>は1954 (昭和29) 年2月に小学館から出版された『ふえふきおじさん』に収録されている。ネズミの害に人々が困っていると「ふえふきおじさん」(1頁)が町にやってくる。町長は「ほうびを、たくさん あげるよ」

(3頁)と約束する。しかしその後、報酬を払ってもらえなかった笛吹き男は「ものいしだんに こしかけて」(9頁)待っているが、門番に「かえれ」と追い出されてしまう。笛吹き男は「つまらないなあ。おもしろい ふえでも ふいて、たのしく あるこう」(11頁)と独り言を言って笛を吹く。すると子どもたちが笛吹き男の後をついてくる。子どもには「とむ」や「めりい」という名前がつけられている。夕方になると笛吹き男は子どもたちを町に送り届ける。両親は喜び、町長は笛吹き男に謝る。この話では笛吹き男は市長と言い争いをせず、笛を吹くのは報復のためではない。自分を慰めるために笛を吹く男に、子どもたちが勝手について行っただけである。夕方になると笛吹き男は心配して子どもたちを町に送り届ける。ここでは笛吹き男は心優しい人物として描かれている。笛吹き男が報酬を受け取っていないにもかかわらず、市長が謝ったことで「めでたしめでたし」と言わんばかりの雰囲気では話が終わる。

この絵本の改訂版に当たるのが、土家由岐雄(3冊目)の『ふえふきおじさん』<sup>45</sup>である。これは1962(昭和37)年に小学館から出版された絵本である。土家(1冊目)<sup>27</sup>と比べると、文章は全体を通して書き換えられている。笛吹き男はまず「こどもたちを よろこばせて あげよう」(3頁)と思って町にやってくる。ネズミ退治の報酬をもらえなかった笛吹き男は怒らず、泣きそうになる。しかし「げんきを だして、こどもたちと たのしく あそぼうと おもつて、おもしろそうに」(16頁)笛を吹く。日が暮れてくると笛吹き男は子どもたちに家に帰るよう言う。市長は笛吹き男に謝罪し、子どもたちは全員町に戻る。笛吹き男は市長から褒美を、町の人から土産をもらい、町を去る。土家訳(1冊目)<sup>27</sup>と比べると、笛吹き男が子ども好きであることが強調されている。土家訳(1冊目)<sup>27</sup>では笛吹き男は報酬をもらえないが、ここでは市長から褒美をもらったうえに町の人からも土産をもらう。

川崎大治の「ハーメルンのふえふき」<sup>46</sup>は1963(昭和38)年12月に偕成社から出版された『世界のおとぎ話』に収録されている。この話には福光訳<sup>28</sup>に酷似した表現が出現する。笛吹き男は「とんがりぼうしを かぶって、だぶだぶの ズボンを はいた、ふしぎな おじいさん」(10頁)であり、「らっぱのように ひらいた、ほそながい ふえを一ぼん」(10頁)持っている。笛吹き男は笛を「ぴーぼー ぴーぼー、ぷっぼー ぼぼー」(11頁)と吹く。子どもたちが町から消えた後、人々は約束を破ったことを反省し、笛吹き男に約束の報酬である銀貨を届ける。すると子どもたちは全員無事に町に帰ってきて「まちなかは、また たのしそうな こどもたちの わらいごえで いっぱいに」(17頁)なる。この話でも、笛吹き男は報酬を受け取ることができるのである。

これらの話とまったく異なる改変をほどこしたのが森いたるの「ふしぎな 笛吹き」<sup>52</sup>である。これは1965(昭和40)年11月に講談社から出版された絵本で、グリム兄弟版でもブラウニング版でもラング版でもない、改変の著しい話である。この本は「講談社のディズニー絵本」シリーズの69番目にあたる絵本である。笛吹き男は笛を吹くと、ネズミたちを川ではなく町の門の外の野原へ連れて行く。そこには大きなチーズがあり、ネズミたちはそのチーズに群がる。笛吹き男が再び笛を吹くとチーズが溶けて、ネズミたちはチーズと共に川に流されてしまう。笛吹き男が町に戻ると、市長と町人は市門を閉めて笛吹き男を町から閉め出し、報酬として金貨1枚のみを城壁の上から放り投げる。怒った笛吹き男が笛を吹くと、門が壊れて中から子どもたちが出てくる。子どもたちは「おとなにかわ

って、いろいろな しごとを させられている、きのどくな こどもたち」(17頁)であるという。子どもたちは笛吹き男と共に山の内部にある遊園地に行く。列の1番最後にいた足の悪い子は、足が治って「ほかの こどもたちと いっしょに、なかよく ゆうえんちで」(20頁)暮らす。この作品は、1933年にディズニーが制作した短編アニメ「The Pied Piper」<sup>337</sup>を絵本にしたものである。「ふえふきは こどもたちを、わるい おとなから まもって やろうと かんがえたのです」(18頁)と書かれているとおり、ここでは大人たちが悪者で、子どもたちはハーメルンの町から山の中の遊園地、すなわち楽園へ脱出して幸せになるという内容になっている。遊園地を運営するディズニーならではの改変といえよう。

#### 4) 分析と考察

##### (1) 邦訳が掲載されている媒体について

邦訳を掲載している媒体に注目すると、子ども向けの単行本が22冊で1番多い。その次に多いのは児童雑誌で12冊で、その次が絵本で4冊ある。戯曲は2冊のみで、いずれの戯曲も子どもが演じることを想定している。紙芝居も1冊発行されている。第1期では児童雑誌が3冊、一般向けの単行本が1冊であった。第2期では、「ハーメルンの笛吹き男」はすべて子ども向けの媒体で出版されている。この話はなぜ様々な媒体に掲載されるようになったのであろう。その理由について考察していく。

##### (2) 単行本と雑誌が増えた理由について

第2期は、戦後の不況から復興に向かって好景気が訪れた時期である。1950(昭和25)年の朝鮮戦争による特需景気から始まり、1955(昭和30)年に神武景気が、1958(昭和33)年に岩戸景気が、1962(昭和37)年にオリンピック景気が、1965(昭和40)年にいざなぎ景気が起こった。

戦後の好景気と共に、第2期では児童雑誌や児童図書が相次いで出版されるようになる。戦争が終わって言論と出版の自由が戻った結果、出版の仕事が徐々に、やがて急激に活気を取り戻していくのである<sup>338</sup>。児童文学研究者の鳥越信は下記のように述べている。

一九四五年八月、日本の敗戦によって軍国主義の時代は終わり、平和と自由、民主主義が新しい価値観として登場した。戦時中、特に一九四四、五年には完全に息の根をとめられていた児童文学は、再びよみがえって活動を開始した<sup>339</sup>。

終戦直後の1945(昭和20)年の秋には、休刊していた講談社の『少年倶楽部』『少女倶楽部』『幼年倶楽部』が復刊される。講談社に続いて1946(昭和21)年には実業之日本社や学習研究社など複数の出版社が児童雑誌を発行する。1947(昭和22)年と1948(昭和23)年にも多くの出版社から児童雑誌が発刊される<sup>340</sup>。かつて新潮社で児童雑誌『銀河』の編集に携わっていた石川光男は、こういった児童雑誌が「戦後二、三年の間に、雨後のタケノコのごとく出た」と述懐している<sup>341</sup>。大空社などで児童雑誌の編集に携わっていた藤田圭雄も、戦後「二年間くらいは、とにかく、出したものは全部売れたという時代」と述べている<sup>342</sup>。また、小西正保は「敗戦の日を境にして、自由にもものが言え、書けるよう

になった。新旧の作家たちは、堰を切られた水のように、奔流のようにものを書きはじめた」と述べている<sup>343</sup>。

児童雑誌だけでなく児童図書も数多く出版された。とくに、仙花紙と呼ばれた粗悪な再生紙に印刷された童話集などが「羽が生えて飛ぶように売れた」という<sup>344</sup>。しかし、児童雑誌や児童図書の出版数が増えたからといって、「ハーメルンの笛吹き男」の邦訳が増えるとは限らない。第2期で「ハーメルンの笛吹き男」はなぜ題材として選ばれるようになったのであろう。

敗戦直後の児童向け出版物は、新作を避けて昔話や名作ものが多かった<sup>345</sup>。西田良子はその理由として「『敗戦』という未曾有の大きな事件に、作家も出版社も、どういう作品を出版してよいか戸惑っていたのだろう」と述べている<sup>346</sup>。「ハーメルンの笛吹き男」の邦訳が掲載されている児童図書を見てみると『二年生の世界童話』<sup>26</sup>、『幼年おはなし宝玉集 世界編』<sup>32</sup>、『世界のむかし話三年生』<sup>34</sup>、『世界伝説めぐり』<sup>39</sup>などである。西田が述べるように主として童話集や昔話集に掲載されているのである。

童話や昔話を取り上げられたのは児童図書だけではない。児童雑誌においても「名作童話」<sup>14</sup>、「名作物語」<sup>16</sup>、「名作どうわ」<sup>24</sup>といった枠組みが設けられ、そこで「ハーメルンの笛吹き男」が紹介されたのである。

この話の邦訳がひときわ多く出版されるのは1956（昭和31）年と1957（昭和32）年である。それぞれ4冊と5冊の邦訳が相次いで出版されている。これは、ちょうどその時期に児童図書の出版が活気を取り戻したからであろう。小西は「児童図書の出版が活気を取り戻すのは…一九五五年前後のこと」と述べている<sup>347</sup>。そのきっかけとなったのは、「学校図書館法」が1953（昭和28）年に公布され、翌年1954（昭和29）年に施行されたことである。この法律は、義務教育である小学校と中学校に必ず学校図書館を設置しなければならないというもので、世界に先駆けて施行された<sup>348</sup>。この流れに背中を押されるようにして、児童図書や児童雑誌に「ハーメルンの笛吹き男」の邦訳が収録されるようになったのである。

### (3) 雑誌と単行本の話の長さの傾向

#### ①雑誌

雑誌に掲載される場合、話は短くされる傾向がある。雑誌はページ数が限られるため、1つの話を短くまとめる必要があるのであろう。

雑誌12冊のうち、10冊<sup>17</sup><sup>24</sup><sup>25</sup><sup>28</sup><sup>31</sup><sup>33</sup><sup>36</sup><sup>44</sup><sup>47</sup><sup>53</sup>は内容が簡略化されたり、場面が省略されたりしている話である。これら10話が掲載されている雑誌は、下記のとおりである。幼児や園児向けの『幼稚園ブック』<sup>33</sup>、『ひかりのくに』<sup>44</sup>、『あそび』<sup>47</sup>、小学1年生向けの『一年ブック』<sup>24</sup><sup>28</sup>、『キンダーブック』<sup>53</sup>、小学2年生向けの『二年の学習』<sup>31</sup>、小学3年生向けの『三年の学習』<sup>25</sup>、『たのしい三年生』<sup>36</sup>、小学3、4年生向けの『ひかりの国三・四年生』<sup>17</sup>である。これら10冊の雑誌は、園児から小学4年生までの子どもを対象にした雑誌である。

一方、内容の省略がほぼみられないのは2話<sup>14</sup><sup>15</sup>存在する。これらはそれぞれ『少年クラブ』<sup>14</sup>と『少女の友』<sup>15</sup>に掲載された話である。『少年クラブ』は主として小学5年生から中学2年生までの男子を対象とした雑誌である<sup>349</sup>。『少女の友』は主として12歳から15歳ま



での女子を対象とした雑誌である<sup>350</sup>。

これら12冊の雑誌をまとめたものが下記の【表12】である。小学校中学年までを対象にした雑誌は挿絵や文字が大きいため、文字数が少なくなる。文字や絵が小さいものはページ数も少ないため、やはり文字数は少なくなる。幼い子どもに長い話は不適切と考えられたのであろう。小学校高学年以上の子どもを対象にした雑誌<sup>14</sup> <sup>15</sup>では、文字数がかなり多くなる。高学年になると長い話も読めると考えられたからであろう。

②雑誌の一覧表【表12】

番号	収録雑誌名	対象	ページ数	1ページあたりの文字の量 <sup>351</sup>	挿絵の大きさ	内容について
14	『少年クラブ』	およそ小学5年生～中学2年生	6	約1280字	小さい 紙面の4分の1以下	内容の省略はほぼない。
15	『少女の友』	主として12歳以上15歳以下	12	約830字	小さい 誌面の3分の1	内容の省略はほぼない。
17	『ひかりのくに三・四年生』	小学3、4年生	4	約830字	小さい 紙面の4分の1以下	複数の場面が省略されている。
24	『一年ブック』	小学1年生	8	約60字	大きい 紙面の4分の3以上	簡略化されている。
25	『三年の学習』	小学3年生	2	約80字	大きい 紙面の3分の2	簡略化されている。
28	『一年ブック』	小学1年生	6	約70字	大きい 紙面の4分の3以上	簡略化が著しい。
31	『二年の学習』	小学2年生	3	約150字	大きい 紙面の4分の3	簡略化が著しい。
33	『幼稚園ブック』	園児	6	約180字	大きい 紙面の5分の4以上	簡略化が著しい。
36	『たのしい三年生』	小学3年生	2	約270字	大きい 紙面の半分	簡略化されている。
44	『ひかりのくに』	園児	6	約210字	かなり大きい 紙面の3分の2以上	簡略化されている。
47	『あそび』	園児	1	約420字	かなり大きい 紙面の3分の2以上	簡略化されている。
53	『キンダーブック』	5~6歳	14	約216字	かなり大きい 紙面の5分の4	複数の場面が省略されている。

③単行本

単行本で出版された場合は、誌面に余裕があるためそれぞれの版に忠実な訳が多い。単

行本22冊のうち、それぞれの版に忠実な訳は10冊<sup>16</sup><sup>29</sup><sup>30</sup><sup>32</sup><sup>35</sup><sup>37</sup><sup>41</sup><sup>42</sup><sup>50</sup><sup>51</sup>ある。残りの12冊のうち11冊<sup>18</sup><sup>19</sup><sup>22</sup><sup>26</sup><sup>34</sup><sup>38</sup><sup>39</sup><sup>43</sup><sup>46</sup><sup>49</sup><sup>54</sup>は改変版や改作版であるが、いずれも書き換えられた結果、話が長くなっている。書き換えられた結果、話が短くなるのは1話<sup>20</sup>のみである。書き加えられるのは主として、ネズミの被害の様子や、笛吹き男の笛の音の描写などである。

#### (4) 戯曲が出現する理由について

1952（昭和27）年<sup>21</sup>と1958（昭和33）年<sup>40</sup>に「ハーメルンの笛吹き男」の戯曲が出版された。これはちょうど、1947（昭和22）年ごろから1960（昭和35）年ごろまで、学校劇が盛んだったからであろう。学校劇というのは、学校の学芸会などで生徒が行なう演劇活動のことである<sup>352</sup>。

戦後、戦時中の抑圧から解放された演劇界は空前の盛り上がりを見せた。その盛り上がりと呼応するように、学校劇も盛り上がっていった<sup>353</sup>。日本児童演劇協会は『日本の児童青少年演劇の歩み』で、戦後のこの時期について「年表のワクの中に収まりきらぬくらい、児童演劇・学校演劇のさかんな活動がくりひろげられた数年間」と述べている<sup>354</sup>。

学校劇の流行を後押ししたのは1947（昭和22）年に文部省から発表された『学習指導要領一般編』である。このなかで、学芸会が1年間の指導計画において配慮すべき活動のひとつとしてあげられた<sup>355</sup>。それまで国は演劇に教育的価値を見出してこなかった<sup>356</sup>。ここで初めて、学校劇は公にその価値を認められたのである。

その後、1948（昭和23）年から1949（昭和24）年にかけて、全国で大小さまざまな学校劇のコンクールが次々と開催された<sup>357</sup>。学校劇について研究している上田真弓と上間陽子は「この時期、学芸会における演劇は、戦後の新教育の花形的存在として全国の学校に浸透し普及していくのである」と述べている<sup>358</sup>。学校劇が盛り上がれば、必然的に学校劇で用いる戯曲の需要も高まる。その高まりのなかで「ハーメルンの笛吹き男」も戯曲の題材として用いられたのである。

それでは、なぜこの話が劇の題材として選ばれたのであろう。その理由の1つとして、ちょうどこの時期に、学校教育で笛が取り入れられたことが挙げられる。戦後、昭和20年代は、小学校の器楽指導の導入期であり<sup>359</sup>、ちょうど教育に笛が取り入れられた時期である。文部省は1947（昭和22）年の『学習指導要領音楽編（試案）昭和二十二年度』で、「第三学年への音楽指導」として小学3年生が授業で使用する楽器に笛を挙げている<sup>360</sup>。さらに1951（昭和26）年の改訂版でも、小学4年生と小学6年生へそれぞれ「たて笛」<sup>361</sup>と「横笛」<sup>362</sup>を導入することが明記されている。

昭和20年代は様々な形の笛が流通していたため、『学習指導要領』が制定された翌年1948（昭和23）年に、教育用楽器を審査するための基準設定が行なわれた<sup>363</sup>。戦後の復興期では、資材や人材の不足による混乱期のなかで、楽器の製作とまったく関係がなく、楽器製作の技術者もない店までもが玩具のようなものを教育用楽器と銘打って売り出していた<sup>364</sup>。そのため、この時期の笛にはいろいろな形態があるが、1954（昭和29）年に日本管楽器株式会社（現在のヤマハ）がリコーダー「スペリオパイプ」を製造し、販売したので、その後はリコーダーが主流となる<sup>365</sup>。

小学校におけるリコーダーの導入期についての研究者、山中によると、1949（昭和24）

年頃から音楽教育雑誌には、たて笛の指導法や、演奏法、楽器を選ぶポイントなどが掲載され始めたという<sup>366</sup>。1948（昭和23）年には文部省が器楽合奏のために発行した曲集である『合奏の本』で、たて笛が初めて取り上げられた。さらに検定教科書においても、1950（昭和25）年に出版された学校図書4年生の音楽科教科書『私たちの音楽4』を皮切りに、縦笛の導入が見られるようになる<sup>367</sup>。『私たちの音楽4』には、児童がたて笛を演奏している写真が掲載され、たて笛で吹くための歌唱曲の楽譜が掲載されている。

小学教育に笛が導入されたことについて、山中は下記のように述べている。

戦前から使用されていたハーモニカや横笛と並んで、たて笛が学校音楽教育に導入された根底には、たて笛に求められていた楽器としての特性が関係していたと考えられる。それらは、①息を使う楽器でありながら、発音が容易であること、②ピッチが定まっていることから、音程感覚を掴ませやすいこと、③たて笛の運指やタンギングの方法が、フルート・オーボエなどのオーケストラ楽器のそれと類似していること、という3点である<sup>368</sup>。

これらの理由から、小学校の学校教育にたて笛が導入されたのである。安田は『子ども人形劇集』<sup>40</sup>で「ふえふき男のふしぎな笛の音にひかれて、ねずみや子どもたちが、ぞろぞろとあつまってきたり、おどりまわったりするところが、この劇の一ばんのおもしろみです」と述べている<sup>369</sup>。この話が劇にされた理由は、劇中に笛が出現するからであろう。

また、学校劇では演技をするのは生徒であるが、指導の不完全さも相まって生徒の演技力は優れているとは言い難く<sup>370</sup>、演技力だけで劇の緩急などをつけるのは難しい。「ハーメルンの笛吹き男」では笛の音を鳴らして多少なりとも音楽を入れることができるため、工夫のある劇作りがしやすいと考えられたのであろう。

#### (5) 紙芝居が出現する理由について

1952（昭和27）年には「ハーメルンの笛吹き男」の紙芝居<sup>23</sup>が出版された。これは、昭和20年代がちょうど、保育紙芝居の隆盛期であったからであろう。昭和初期に低俗であると批判された紙芝居は、戦後になると保育現場に急速に普及した<sup>371</sup>。その度合いは「紙芝居中毒を起している」<sup>372</sup>と批判されるほどであった。

普及のきっかけは、1948（昭和23）年に文部省が『保育要領—幼児教育の手びき』のなかで、紙芝居を保育教材、保育教具として位置づけたことである<sup>373</sup>。この後、戦後の日本で教育紙芝居運動が本格化する。1950（昭和25）年には教育紙芝居研究会が発足し、保育紙芝居の普及に尽力したのである。

「ハーメルンの笛吹きおじさん」<sup>23</sup>を出版した教育画劇は、戦後の紙芝居業界において、中心となる出版社であった<sup>374</sup>。この「ハーメルンの笛吹き男」の紙芝居は「世界名作童話紙芝居全集」シリーズの2作目である。この紙芝居が出版される1952（昭和27）年までに「ハーメルンの笛吹き男」は、児童雑誌、児童図書、児童劇の戯曲として戦後だけでも9話出版されている。この話は当時、すでに広く知られた存在であると考えていいだろう。そのため教育画劇も、この話をシリーズの2作品目に採用したのであろう。

(6) 話の内容の改変について

第2期の邦訳の内容でもっとも注目に値するのは、「ハーメルンの笛吹き男」の話が笛吹き男が報復する話から、笛吹き男が子どもたちを救う話に改変されていることである。3話<sup>19</sup> <sup>31</sup> <sup>40</sup>で、報酬をもらえなかった笛吹き男はそれぞれ次のように言う（下線は筆者による）。

小出訳<sup>19</sup>：

「この、はじ知らずの、うそつき者め！ くるしいときには、ひとに、なきつき、たすけられたら、おんをわすれる。こんな、おとなの住む町で、可愛い子どもたちがそだてられたら、どんなに、ふこうかshれないぞ」（225頁）

「…やくそくやぶりの、うそつきたちから、かわいい子どもを、すくいだし、たのしい、たのしい、よい国へ、つれていこう…」（226頁）

寺脇訳<sup>31</sup>：

「こんな うそつきの 町に 子どもを おいて おく わけには いきません」（24頁）

安田訳<sup>40</sup>（戯曲）：

ふえふき男 さ、男の子も女の子も、みんな、もっといい町へいこう。うそつきなんかない町へね（192頁）

ここでは、笛吹き男は報酬をもらえなかった報復として子どもを連れ去るのではない。約束を守らないような大人のもとで暮らすと悪影響を受けるので、子どもたちを連れ去るのである。笛吹き男はむしろ、子どもたちを救う正義の味方として描かれているのである。

「ハーメルンのふえふき」<sup>48</sup>の筆者である那須は、作品の解説で下記のように述べている（下線は筆者による）。

おとなの現実社会は、ずるさ・ごまかし・うそでいっぱいです。それにレジスタンスする主人公の笛吹きは、むくな子供たちの心の代表者とっていいでしょう。おそらく、これを読む子供たちは、話の筋の愉快さとともに、自分たちの気持ちが書かれているように感じるでしょう。（裏見返し）

ここでも、笛吹き男は子どもたちを連れ去った怪しい人物ではなく、むしろ子どもたちの代弁者として描かれているのである。

第2期の邦訳で笛吹き男は、子どもと遊ぶのが好き<sup>18</sup> <sup>27</sup>で、子どもを喜ばせるために笛を吹く<sup>43</sup>。報酬をもらえないことに対して市長に「今に見てろ！」と捨て台詞を投げかけず、むしろ今にも泣きそうな悲しい顔をしたり<sup>23</sup>、泣きそうになったりする<sup>27</sup>。不思議な力を持つ不気味な異邦人ではなく、子ども好きな優しい男に改変されているのである。

笛吹き男の描かれ方が変化したのにもなって、市長の描かれ方も変化した。市長はよ

り悪者であるかのように描かれ、話の最後では子どもが消えた責任を人々から厳しく追及されるのである。5話<sup>18</sup> <sup>23</sup> <sup>27</sup> <sup>39</sup> <sup>50</sup>ではそれぞれ下記のように書かれている（下線は筆者による）。

福光訳<sup>18</sup>：

「市長さんがわるいんだ、市長さんのせいだ。」

…「そうだ、町じゅうの人で、こんなうそつき市長なんかやめさせて、ふえふきおじさんに、市長になってもらえばいいじゃないか…」

大川訳<sup>23</sup>：

「こりや、市長さんがウソついたんで、笛吹きおじさんが怒つたんだぞ！」…

「そうだ市長さんが悪いんだ！市長さんのせいだ！」

町の人たちはそういうと、みんなで、市長さんのところへおしかけました。

「このウソつき市長、私の子供をどうしてくれるんだ！」

「さあ、かえしておくれ、家の子供をかえしておくれ！」

土家訳（1冊目）<sup>27</sup>：

「ちょうちょうが、うそを つくからだ」

伊達訳<sup>39</sup>：

「これは、市長さんがやくそくをやぶったからだ。町のねずみをたいじしたらやるといったお金を、やらなかったからだ…」

堀尾訳<sup>50</sup>：

町の 人は、しちょうを つかまえて どなりました。

「おまえが わるいんだ。ねずみとりにおかねを やらなかったからだ。子どもを かせせ」

第1期の邦訳では、人々は市長を責めない。子どもが消えた責任を市長に問い詰めることもなければ、そもそもネズミの害を解決できないことを責めたりしない。しかし第2期では、「ネズミの害を解決しないと市長を辞めさせるぞ」と脅したり、「市長が嘘をついたから子どもたちが消えたのだ」と詰め寄ったり、「市長を辞めさせて笛吹き男を市長にしよう」と言ったりする。これらの改変には、戦争への反省が込められているのではないだろうか。組織の上に立つ者の誤った判断を厳しく追及するのは、国の指導者の誤った判断で戦争に突入し、日本に敗戦という不幸をもたらした多くの子どもを死亡させたという自責の念が存在するからであろう。指導者の嘘によって子どもを奪われ、人々に不幸をもたらした。この話は、人々に抗議の声をあげることの大切さを伝えるために、改変されて出版されたのであろう。

敗戦により、日本国内の状況は大きく変わった。それにより子どもに対する教育方針も大きく変わったのである。当時児童雑誌の編集者であった石川は下記のように述べている

(下線は筆者による)。

これはやはり当時の出版社、文化人が、皆そう思ったと思うけれども、要するに敗戦ということによって、めざめたわけだな。いろんな意味で。そしてその一つに、これから大事なのは教育である、児童文化であるという、子どもにこれからをたのむと いったような気持ちが相当に強かったと思うんです<sup>375</sup>。

児童雑誌や児童文化に携わる人々は、これからの日本を子どもたちに託そうとした。それは親や教師たちも同じであった。戦後、児童雑誌が相次いで創刊されるが、それは「親や教師が子どものためにより文化財を求めていた」からであり<sup>376</sup>、「子どもをしっかり育てたいという気持ちが旺盛」だったからである<sup>377</sup>。その様子を石川は「敗戦によって親も教師も一生懸命になっちゃったんでしょね、きっと」と表現している<sup>378</sup>。

戦時下では、言論統制などがあったため、一般大衆が為政者を批判することは難しかった。しかし、その結果、日本の敗戦を招いたのである。為政者に対して、間違っていることは間違っていると指摘すべきであったという反省が、この改変に表れているといえよう。そうすると、ひとりで市長を批判した笛吹き男はむしろ正しい行ないをした人間となる。町の人々が嘘つきの市長を辞めさせて笛吹き男に市長になってもらおうとするのはそのためであろう。

戦時中では国民が一致団結することが重要であった。外からやってきた笛吹き男は素性のわからない不気味な「よそ者」で、いわば敵ともいえる存在である。町の人々は市長を中心に団結して、異邦人である笛吹き男を撃退する必要があった。しかし、戦争が終わった後の日本では、人々は正しいことを正しい、間違っていることを間違っていると指摘することが大切であると認識されるのである。たとえ「よそ者」であったとしても、正しいことを主張し、行動しているのであれば、それは評価されるべきであるという考えが表現されたものといえよう。視点を変えれば、外国人であるアメリカのGHQの指導を正しいと認識して、それを守らねばならなかった日本社会の現状が児童教育という分野にも影響を与えていたという見方もできる。

#### 4. 第3期（1968－1989）の邦訳

##### 1) 邦訳の概観

昭和第3期に「ハーメルンの笛吹き男」の邦訳は40話<sup>53</sup>～<sup>94</sup>存在する。1番多いのはブラウニング版で15話存在する。2番目に多いのはラング版で11話存在し、3番目に多いのはグリム兄弟版と不明版でそれぞれ7話存在する。

第3期は、高度経済成長が続き、その後日本が2度の石油ショックに見舞われた時期である。いざなぎ景気が1970（昭和45）年7月まで続き、同年には大阪万博博覧会が開催された。経済が急速に発展する一方で、公害問題が起り、自然破壊をもたらした。その結果、人々の生活や子どもを取り巻く環境に大きな変化が起こった。子どもの遊び場が減り、学習塾に通う子ども増え、活字離れが問題になったのである<sup>379</sup>。そんななか、1960年代と1970年代は、児童文学が目を見はるような発展を遂げた<sup>380</sup>。

第3期に出版された邦訳をまとめたのが、次頁の【表13】である。昭和第2期と同様、出

版年月順に並べ、話の内容から10種類に分類している。

2) 昭和第3期の邦訳の一覧表【表13】

番号	出版年月	媒体	訳者／编者	話の題名	収録本	出版社	分類
55	1968年5月 (昭和43年)	本	大川悦生 (2冊目)	「ハメルンの笛吹き」	『きょうのおはなしなあに』冬の巻	ひかりのくに昭和出版	B改変
56	1968年7月 (昭和43年)	絵本	土家由岐雄 (4冊目)	「ふえふきおじさん」	『外国の絵話』(世界の童話30)	小学館	L改作
57	1969年10月 (昭和44年)	本	生源寺美子	「ハメルンのふえふき」	『お話の森3・4月』	牧書店	G改変
58	1969年12月 (昭和44年)	雑誌	間所ひさこ (1冊目)	「ハメルンのふえふき」	『たのしい幼稚園』12月号(第25巻第11号)	講談社	L改変
59	1970年、月不明 (昭和45年)	絵本	岸田耕造	(書名と同じ)	『ふえふきおじさん』	高橋書店	B改作
60	1973年、月不明 (昭和48年)	本	山主敏子	「ハメルンの笛吹き男」	『世界のこわい話』	偕成社	G改変
61	1973年5月 (昭和48年)	本	西本鶏介 (1冊目)	「ハーメルンの笛吹き男」	『世界昔話集』	芸術生活社	不明
62	1976年7月 (昭和51年)	本	浜田廣介 (3冊目)	「ハメルンのふえふき」	『浜田廣介全集』第10巻	集英社	L改変
63	1976年9月 (昭和51年)	絵本	矢川澄子	(書名と同じ)	『ハメルンの笛ふき』	文化出版局	B忠実
64	1977年3月 (昭和52年)	本	大庭千尋	「ハメルンの魔法の笛吹き 童詩 (W・M・少年のために)」	『ブラウニング詩集』	国文社	B忠実
65	1977年5月 (昭和52年)	絵本	不明	「ハーメルンのふえふき」	『フェアリー子ども世界名作シリーズ』24	TBSブリタニカ	B改変
66	1977年8月 (昭和52年)	戯曲	小池タミ子 (1冊目)	「ハメルンの笛吹き」	『たのしい劇あそび20選』(保育実用書シリーズ)	チャイルド本社	L改作
67	1977年、月不明 (昭和52年)	絵本	宮城まり子	(書名と同じ)	『ハメルンの笛ふき』(まんが世界昔ばなし11)	TBSブリタニカ	L改作
68	1978年2月 (昭和53年)	本	野上彰 (2冊目)	「ハンメルンの笛吹き」	『むらさきいろの童話集』(ラング世界童話集10)	偕成社	L忠実
69	1978年6月 (昭和53年)	本	瀬川昌男	「ハメルンのふえふき」	『しあわせのハンス』(世界のむかし話③ ドイツ編)	朝日ソノラマ	L改作
70	1978年9月 (昭和53年)	本	小川一枝	「ハメルンのふえふき」	『赤ひげとぶどう酒商人ほか』(世界の民話6 ドイツ編)	家の光協会	L改作

71	1978年11月 (昭和53年)	絵本	藤田圭雄	(書名と同じ)	『ハメルンの笛ふき』 (講談社の絵本3)	講談社	L改作
72	1979年7月 (昭和54年)	絵本	渡辺和雄 矢崎節夫文	「ハメルンのふえ ふき」	『ハメルンのふえふき』 (国際版少年少女世界童 話全集 第8巻)	小学館	B改変
73	1979年10月 (昭和54年)	絵本	村野四朗	(書名と同じ)	『ハーメルンのふえふき 男』(ファミリー絵本 27)	岩崎書店	B忠実
74	1979年11月 (昭和54年)	戯曲	小池タミ子 (2冊目)	「ハメルンの笛吹 き」	『もえろ天の火』(東書 児童劇シリーズ童話劇集 2)	東京書籍	L改作
75	1980年12月 (昭和55年)	絵本	早乙女忠 (1冊目)	(書名と同じ)	『ハーメルンのふえふ き』(世界のメルヘン絵 本27)	小学館	B忠実
76	1980年、月不明 (昭和55年)	絵本	石原ちひろ	「ハーメルンの笛 吹き男」	『ヒルダおばさんのおと ぎばなし 親指トム そ のほかのお話』	アスカコ ーポレー ション	B忠実
77	1980年、月不明 (昭和55年)	戯曲	牧房雄	「舞踊劇：ハメル ンの笛吹き」	『舞踊劇：ハメルンの笛 吹き 少年剣士 コザッ ク剣士とカチューシャ 娘』	東芝EMI	不明
78	1981年6月 (昭和56年)	本	河村隆史	「ハーメルンの子 供たち」	『ドイツ伝説集・タンホ イザー』(世界民話童話 翻訳シリーズ18)	東洋文化 社	G忠実
79	1981年10月 (昭和56年)	絵本	杉山經一	(書名と同じ)	『ハーメルンのふえふき おとこ』(絵本ファンタ ジア44)	コーキ出 版	不明
80	1982年9月 (昭和57年)	絵本	西本鶏介 (2冊目)	(書名と同じ)	『ハンメルンのふえふ き』	チャイル ド本社	B忠実
81	1982年10月 (昭和57年)	戯曲	筒井敬介	「ハーメルンの笛 吹き」	『何にでもなれる時間 筒井敬介児童劇集1』 (東書児童劇シリーズ)	東京書籍	不明
82	1983年12月 (昭和58年)	絵本	竹村早雄	「ハメルンの ふ えふき」	『ながぐつをはいたね こ』(母と子の幼稚園知 育百科名作コース3)	集英社	B忠実
83	1983年、月不明 (昭和58年)	絵本	建石修志	「ハメルンのふえ ふき」	『ハメルンのふえふき すなにもれたまち』 (創育の名作絵本6)	創育	不明
84	1984年3月 (昭和59年)	絵本	山下喬子	「ハメルンの笛吹 き」	『ハメルンのふえふき』 (学習版/世界名作童話 全集 第17巻)	小学館	B忠実
85	1984年4月 (昭和59年)	絵本	小暮正夫	「ハーメルンのふ えふき男」	『うそをついたらメメ のメの話』(愛蔵版 ふ れあい世界名作 1巻)	学習研究 社	G改作



86	1984年11月 (昭和59年)	本	上崎美恵子	(書名と同じ)	『はめるんのふえふき』 (せかいの名作ぶんこ 39)	金の星社	B改変
87	1985年3月 (昭和60年)	本	西本鶏介 (3冊目)	「ハーメルンのふ えふき男」	『名作百科』2巻(学研 こどもの本特選シリーズ 「世界の名作」下巻)	学習研究 社	不明
88	1985年10月 (昭和60年)	戯曲	平正夫	「ハメルンのふえ ふき」	『表現力を伸ばす劇あそ び脚本集』(月刊保育と カリキュラム10月号別 冊)	ひかりの くに	不明
89	1985年12月 (昭和60年)	絵本	おざわとしお	(書名と同じ)	『ハーメルンのふえふ き』	偕成社	G改作
90	1987年2月 (昭和62年)	本	望月正子	(書名と同じ)	『ハーメルンのふえふ き』	国土社	G改変
91	1987年4月 (昭和62年)	本	桜沢正勝 鍛冶哲郎	「ハーメルンの子 供たち」	『ドイツ伝説集(上)』	人文書院	G忠実
92	1987年10月 (昭和62年)	戯曲	生越嘉治 (1冊目)	「ハーメルンのふ えふき」	『こども・ミュージカル 世界名作』	あすなる 書房	B改作
93	1988年7月 (昭和63年)	本	小沢正	「ハメルンの笛吹 き」	『幼児に読んであげるお はなしのポケット』(世 界の名作選集)	ひかりの くに	B改変
94	1988年、月不明 (昭和63年)	教科書	小池タミ子 (3冊目)	「ハメルンのふえふ き」	『小学国語』4年下	大阪書籍	L改作

### 3) それぞれの邦訳の概要と改変箇所について

#### (1) ブラウニング版の内容の話 (15話)

##### ①忠実な邦訳について (8話)

第3期の邦訳でもっとも多いのは、ブラウニング版で15話存在する。そのうち、ブラウニング版の内容に忠実、もしくはほぼ忠実な話は下記の8話<sup>63</sup><sup>64</sup><sup>73</sup><sup>75</sup><sup>76</sup><sup>80</sup><sup>82</sup><sup>84</sup>である。

矢川澄子の『ハメルンの笛吹き』<sup>63</sup>は1976(昭和51)年9月に文化出版局から出版された絵本である。この絵本は1888(明治21)年にイギリスで出版されたブラウニングの絵本 *The Pied Piper of Hamelin* (以下、『ブラウニング絵本』)をそのまま邦訳したもので、絵、文章の配置、画面の配置などはいずれも『ブラウニング絵本』とまったく同じである。ただし、表紙のみ絵が差し替えられている。『ブラウニング絵本』の表紙は、初版では茶色の背景に笛を吹く男の姿が描かれているのみであるが、1903(明治36)年の新版では白い背景に笛を吹く男とその後ろを歩く子どもたちの姿が描かれている。新版の表紙の絵は、絵本の挿絵の一場面の絵とまったく同じものである。一方、矢川訳<sup>63</sup>の表紙はいずれの表紙とも異なっている。様々な花が咲き小川が流れている場所で笛吹き男が笛を吹き、その周りで子どもたちが楽しそうに遊んでいる場面が採用されているのである。また、裏表紙に新版の表紙と同じ絵が使われている。絵本の表裏両面をケイト・グリーンウェイの絵が飾っており、魅力的な装丁になっている。

大庭千尋の「ハメルンの魔法の笛吹き」<sup>64</sup>は1977(昭和52)年3月に国文社から出版された『ブラウニング詩集』に収録されている。副題も「童詩(W・M少年のために)」と訳

されている。書名からわかるように、この本はブラウニングの詩集で、内容はブラウニング版に忠実である。原詩と同じように15連に分けられた詩の形で訳されており、改変箇所や省略箇所は皆無である。

村野四郎の『ハーメルンのふえふき男』<sup>73</sup>は1979（昭和54）年10月に岩崎書店から出版された絵本である。「村野四郎 詩」とあるように、本文は詩で書かれている。底本についての説明はないが、ブラウニング版に忠実な絵本である。笛吹き男が自分の経歴について話す場面、話の最後で市長が事件のあらましを石に刻む場面など省略されることの多い場面も、簡略化されてはいるが語られている。ネズミが1匹だけ生き残る場面、舞楽禁止通りと名付けられる場面、子どもたちが消えた日から日時を数えるように決める場面などは削除されている。帰ってくる子は足の悪い子がひとりだけである。教訓もあり、「さあて みなさん／それだから／うそを ついては／いけません」（32頁）と書かれている。

早乙女忠（1冊目）の『ハーメルンのふえふき』<sup>74</sup>は1980（昭和55）年12月に小学館から出版された絵本で、「世界のメルヘン絵本」シリーズの27冊目にあたる。「R・ブラウニング 作」とあるように、ブラウニング版に忠実な内容である。本文は七七調の詩で書かれ、省略されている場面は皆無である。あとがきにあたる部分で早乙女は、ブラウニングについての詳細な解説を書き、その後で阿部謹也の『ハーメルンの笛吹き男』を紹介している。そして最後に「矢川澄子氏の訳（文化出版局）に多くの示唆を受けたことを記し、感謝を捧げます」（67頁）と述べている。

石原ちひろの「ハーメルンの笛吹き男」<sup>76</sup>は1980（昭和55）年にアスカコーポレーションから出版された『ヒルダおばさんのおとぎばなし 親指トム そのほかのお話』に収録されている。この本は1962年にイギリスで出版された絵本『ヒルダ・ボスウェルのおとぎ話の宝庫』（*Hilda Boswell's Treasury of Fairy Tales*）を、装丁が同じままで邦訳したものである。話の冒頭のみ、独自の描写が追加されているが、それ以降はブラウニング版に忠実な内容である。追加されている冒頭の表現は、ハーメルンの町に「アーチのついた古い家が立ち並びそのかわら屋根の上には、さらに高く教会のとんがり屋根が」（21頁）そびえているというものである。ネズミが1匹だけ生き残る場面も語られている。足の悪い男の子がひとりだけ帰ってきて、歳をとった後も自分の孫たちに笛吹き男について語り聞かせている。教訓は省略されている。

西本鶏介（2冊目）の『ハンメルンのふえふき』<sup>80</sup>は1982（昭和57）年にチャイルド本社から出版された絵本である。ブラウニング版に忠実だが、ネズミが1匹だけ生き残る場面は削除されている。残る子どもはブラウニング版と同様、足の悪い子がひとりだが、ここでは男の子であると明記されている。「僕もみんなと一緒に went かった」という子どもの嘆きは削除され、町から消えた子どもたちの行方は不明である。市長、議員、町の人々が毎日泣いている場面で話は終わり、教訓はない。

竹村早雄の「ハメルンのふえふき」<sup>82</sup>は1983（昭和58）年に集英社から出版された『ながぐつをはいたねこ』に収録されている。この本は「母と子の幼稚園 知育百科 名作コース」シリーズの3作目にあたる。ブラウニング版に忠実な内容だが、話は簡略化されている。笛吹き男は「きいろと あかの きみょうな ふく」（2頁）を着ている。ここでは、子どもたちが連れて行かれる時に母親のみが「かえって おいで！」（7頁）と叫ぶ。その後、夜遅くに、「あしの ふじゆうな こ」（9頁）がひとりだけ町に帰って来

る。町の大人たちは山に駆けつけるが子どもたちの姿はなく、「その ひから、ハメルンの まちは、ふかい ふかい かなしみに つつまれて しまいました」(9頁)という文章で終わる。竹村は巻末でブラウニングの生涯やブラウニング版の作成経緯について簡単に紹介し、この伝説がグリム兄弟の『ドイツ伝説集』に収録されていることも述べている。さらに参考資料として阿倍謹也、大庭千尋、河村隆史の本を挙げている。

山下喬子の「ハメルンのふえふき」<sup>84</sup>は1984(昭和59)年3月に小学館から出版された『ハメルンのふえふき』に収録されている。「原作／グリム兄弟」(5頁)と書かれているが、ブラウニング版に忠実な内容である。ネズミ退治の報酬について話し合う場面は簡略化され、1匹だけネズミが生き残る場面などは省略されているが、話の骨子はブラウニング版に忠実である。足の悪い子がひとりだけ町に戻ってきて、「みんなと 行きたかったなあ…楽しい 山おくの 国へ 行くんだって」(28頁)と嘆いている場面で話は終わり、教訓はない。

これら8話のうち、省略箇所がない話は3話、省略箇所が少しある話は5話である。第2期では、たとえブラウニング版に忠実な内容であったとしても、話の骨子に不要だと判断された場面は削除されることが多かった。一方、第3期になると、ブラウニング版の原詩をできるかぎり省略せず、忠実に訳そうとする傾向がみられる。

## ② 改変された話について (5話)

ブラウニング版の改変版は下記の5話<sup>53</sup><sup>63</sup><sup>72</sup><sup>86</sup><sup>93</sup>である。

大川悦生(2冊目)の「ハメルンの笛吹き」<sup>53</sup>は、1968(昭和43)年5月にひかりのくに昭和出版から出版された『good night story- winter きょうのおはなしなあに』の冬の巻に収録されている。この本はひかりのくに昭和出版によって出され、2ヶ月後にあたる同年7月にまったく同じ内容で再版された。見開き2ページごとに1話が収録され、1日に1話ずつ割り当てられている。話の内容はブラウニング版を改変したもので、笛吹き男が子どもを連れ去るのは、ネズミ退治をした当日ではなく、ラング版と同様、大人たちが教会へ行っている日曜日に変更されている。帰ってくる子どもはひとりもおらず、「そして、もうそれっきり、あの男も子どもたちも、出てこなかったそうですよ」(45頁)という文で話は終わる。2ページに収めるために、簡潔に語られている。

訳者不明の「ハーメルンのふえふき」<sup>63</sup>は1977(昭和52)年5月にTBSブリタニカから出版された『ファブリこども世界名作シリーズ』第24巻に収録されている。この本は1973年にイタリアのファブリ社から出版された絵本を邦訳したものである。扉に「ブラウニング」(1頁)と書かれているように、ブラウニング版の内容だが、改変されている箇所がある。ハーメルンの為政者たちがネズミの害の解決方法として「ネコに退治させよう」と話していると、その様子を聞いたネズミが笑う。町のネコはすべてネズミが食べてしまっているからである。ブラウニング版の内容で省略されがちな笛吹き男が自己紹介をする場面や、ネズミが1匹だけ生き残る場面は省略されずに語られている。ただし、ネズミが1匹だけ生き残ることができたのは、そのネズミは耳が聞こえなかったからだと改変されている。そのネズミは赤い本を持ってネズミの国に帰り、その本にはハーメルンにいたすべてのネズミの名前が書かれている。ネズミが退治された後、市長は何もしていないにもかかわらず、人々の前で「わしのちからで、ねずみを、たいじすることができた。わしのかん

がえは、正しかった」(14頁)と演説をする。その後怒った笛吹き男が笛を鳴らすと、その音色が子どもたちには「おいで、おいで、子どもたち。くだものは、たべほうだい。クリームたっぷり、チョコレートどっさり。ケーキやパイが、山ほどあって、みんな、みんなおまえたちのものなのさ」(19頁)という誘いの言葉に聞こえる。町に戻ってくるのは、足の悪い子がひとりだけである。町の人々は、市長が笛吹き男にネズミ退治の報酬を支払わなかったことを知らないで、子どもたちがなぜ連れ去れられてしまったのか、その理由を知らない。しかし話の最後で、町の人々は「市長が笛吹きを怒らせたからだろう」と言い、市長は町から逃げ出してしまふ。

渡辺和雄訳／矢崎節夫文の「ハメルンのふえふき」<sup>72)</sup>は1979(昭和54)年7月に小学館から出版された『ハメルンのふえふき』に収録されている。この本は「国際版少年少女世界童話全集」シリーズの8巻目にあたる。この本は1979年にイタリアで出版された本を、装丁も含めてまったく同じ本のまま邦訳したものである。目次に「原作／ブラウニング」と書かれているように、内容はブラウニング版に基づいたものである。ただし下記のように改変されている箇所も存在する。ハーメルンには城があり、町の傍に流れている川では子どもたちが魚釣りをしたり、花を摘んだりする。1匹だけ生き残るネズミにはマルマドックという名前が付けられている。町に残る子どもは足の不自由な男の子ひとりである。その後、市長は市役所の奥の部屋で、とんでもないことをしてしまったとぶるぶると震えて、何日も部屋に閉じこもる。

上崎美恵子の『はめるんのふえふき』<sup>73)</sup>は1984(昭和59)年11月に金の星社から出版された子ども向けの単行本である。「グリムさく」と書かれており、上崎はあとがきで、「グリム兄弟の『ドイツ伝説集』をもとにして、幼児向きのわかりやすい表現で話をすすめました」(78頁)と述べているが、内容はブラウニング版に基づいたものである。上崎はこの伝説をブラウニングが詩にしたことも知っている<sup>381)</sup>。1冊の単行本の分量にするためにはグリム兄弟版では短すぎるので、ブラウニング版に基づいたものにしたのであろう。改変されているのは下記の箇所である。笛吹き男は赤と黄の服の上にさらに赤いマントも身に着けている。ネズミは1匹残らず溺死する。笛吹き男が子どもを連れ去るのは、ネズミ退治をした日とは別の日で祭りの日である。子どもたちは、市長の娘も含め、130人が笛吹き男の後についていく。町に戻ってくる子どもは、身体が弱くて速く歩けない男の子ひとりである。母親たちは地面に座って泣き出し、父親たちは拳を震わせながら「子どもを返せ！」と叫ぶ。町の人々は別の町へ行って子どもたちの行方について尋ねるが、子どもたちの行方を知る人は誰もいない。人々は「やくそくを まもって、きんかを あげて いたらなあ」(74頁)と言って後悔する。太っていた市長は、責任を感じて痩せ細ってしまう。

小沢正の「ハメルンの笛吹き」<sup>74)</sup>は1988(昭和63)年7月にひかりのくにから出版された『幼児に読んであげるおはなしのポケット』に収録されている。短い話で、笛吹き男が自己紹介をする場面、ネズミが1匹だけ生き残る場面などは省略され、話も全体に簡略化されている。子どもは全員消えてしまふ。

これらの改変版では、子どもたちは全員ハーメルンの町に戻って来ない。子どもがひとりも帰ってこない話は、第2期以前にも存在している。第2期以前では、取り残されてしまった足の悪い子が嘆く場面を削除することで、話の結末から悲壮感を取り除き、子どもた

ちは楽園で幸せに暮らしているという明るい内容へと改変されている。一方、第3期の改変版では、話の結末が子どもたちの失踪ではなく、市長や親の反省や嘆きに移行している。とくに市長は、町の人々から怒られて逃げ出したり、部屋に閉じこもって出てこなかったり、責任を感じた結果やせ細ってしまったりする。

### ③改作された話について（2話）

ブラウニング版の改作版は下記の2話<sup>59</sup><sup>92</sup>である。

岸田耕造の『ふえふきおじさん』<sup>59</sup>は1970（昭和45）年に高橋書店から発行された絵本である。ブラウニング版を大幅に改作した作品で、笛吹き男は「あかい ふくをきて ながい ふえを」（6頁）持って町にやってくる。報酬を払ってもらえなかった笛吹き男は、怒るのではなく「しかたがないと あきらめて」（13頁）歩き出す。笛吹き男が気を取り直して笛を吹くと、子どもたちが笛吹き男の後を追いかける。夕方、足の悪い子どもがひとりだけ帰ってくる。話を聞いた大人たちは、「しちょうさんが やくそくを やぶったからだ」「いや、みんなも わるいのだ」と言って互いに反省する。市長は馬で笛吹き男のところに行って謝る。子どもたちは全員帰ってくる。「ふえふきおじさんの おかげでハンメルンのまちは また きれいな たのしい まちになりました」という文で話は終わる。文章では語られていないが、最後の場面の絵で市長が笛吹き男に報酬を支払っている姿が描かれている。岸田は1965（昭和40）年の植田訳（4冊目）<sup>51</sup>の挿絵を描いている。植田訳（4冊目）<sup>51</sup>はグリム兄弟版に忠実な内容であるため、岸田もグリム兄弟版の話を知っているはずだが、ここでは岸田はブラウニング版の話の筋を採用している。岸田訳<sup>59</sup>では報酬を支払ってもらえなかった笛吹き男は怒らず諦めるが、この内容は土家訳の1冊目<sup>27</sup>、2冊目<sup>42</sup>、3冊目<sup>43</sup>に酷似している。岸田は画家であるため、本文を書く際に複数の本を参考にしたのであろう。

生越嘉治（1冊目）の「ハーメルンのふえふき」<sup>92</sup>は1987（昭和62）年10月にあすなろ書房から出版された『こども・ミュージカル 世界名作』に収録されている。生越は「指導のポイント」で、グリム兄弟の『ドイツ伝説集』とブラウニングの詩の存在を紹介した後、「脚色にあたっては、素直にこの物語の大筋を生かしながら、『笛にまつわる不思議な物語』としてミュージカル化しました」<sup>382</sup>と述べている。この戯曲は、主としてブラウニング版に沿った内容であるが、笛吹き男は3人に増やされている。学芸会の児童劇などでは、同じ役を複数の子どもが演じることはよくあることである。生越は、この戯曲は児童劇のためのものであり、「一クラスでは足りないぐらいの多人数が出演できて、歌に踊りに一人ひとりが活躍」（5頁）できるように配慮したと述べている。笛吹き男は「ハーメルンの笛吹き男」の物語のなかで、重要な人物である。そのため、生越は笛吹き男の数を増やしたのであろう。この劇では子どもたちは全員消え、市長と町の人々の「こどもをかえしてくれ！」（21頁）という嘆きで話は終わる。生越は「町の人たちの不誠実さが報いを受けた、というような教訓や、笛吹きは魔法使いか、といった理屈は抜きにして、ファンタジーを楽しんでいただきたい」<sup>383</sup>と述べている。

## (2) ラング版の内容の話 (11話)

### ① 忠実な邦訳について (1話)

第3期の邦訳で次に多いのはラング版で11話ある。そのうちラング版に忠実な話は1話<sup>68</sup>のみである。

野上彰 (2冊目) の「ハンメル の 笛ふき」<sup>68</sup>は1978 (昭和53) 年2月に偕成社から出版された『むらさきいろの童話集』に収録されている。この本は「ラング世界童話集」シリーズの10巻目にあたる。ラング版をそのまま忠実に訳した話で省略箇所や改変箇所は皆無である。ラングの「色の童話集」の翻訳シリーズ本はこれまで、1958 (昭和33) 年から1956 (昭和34) 年にかけて東京創元社から、1977 (昭和53) 年から1978 (昭和54) 年にかけて偕成社から出版されている。野上訳 (2冊目) <sup>68</sup>はそれらの新装版にあたる。偕成社編集部は「今回新装版を出すにあたり、野上彰氏の著作権継承者である藤本ひかりさんの協力を得て、差別的表現を中心に全文を見直しました」<sup>384</sup>と述べている。

### ② 改変された話について (2話)

ラング版の改変版は下記の2話<sup>58</sup><sup>62</sup>である。

間所ひさこ (1冊目) の「ハメルンのふえふき」<sup>58</sup>は1969 (昭和44) 年12月に講談社から出版された『たのしい幼稚園』12月号に収録されている。七五調の軽快なリズムで書かれた短い話で、内容はラング版を簡略化したものである。笛吹き男がネズミの王と会話する場面は省略されている。話の最後は「どこへ いったか きえたのか、こどもの いない ハメルンは、さびしい まちに なりました」という文で終わる。子どもたちは全員消えて、帰ってくる子はひとりもない。話が簡略化されているのは、この雑誌が「三～六歳児向けの月刊教育絵雑誌」であり、低学年向けのものであるからであろう<sup>385</sup>。ここでは、笛吹き男はハーメルンの人間と契約をする前に勝手にネズミ退治を始めているため、厳密に言うと町の人々は約束を破ってはいない。この話は雑誌のなかで「魔法とふしぎの童話集」欄に収録されており、約束の不履行に対する罰というよりは、単なる不思議な話として語られている。

浜田廣介 (3冊目) の「ハメルンのふえふき」<sup>62</sup>は1976 (昭和51) 年9月に集英社から出版された『浜田廣介全集』の10巻に収録されている。浜田訳 (1冊目) <sup>62</sup>とまったく同じ内容で、ラング版を改変した内容である。笛吹き男はバグパイプではなく笛を吹き、ネズミを退治する時間が9時ごろから11時に改変され、市長は笛吹き男を罵らず、子どもはひとりも帰ってこない。

### ③ 改作された話について (8話)

ラングの改作版は下記の8話<sup>56</sup><sup>66</sup><sup>67</sup><sup>69</sup><sup>70</sup><sup>71</sup><sup>74</sup><sup>94</sup>である。

土家由岐雄 (4冊目) の「ふえふきおじさん」<sup>56</sup>は1968 (昭和43) 年7月に小学館から出版された『外国の絵話』に収録されている。この絵本は1962 (昭和37) 年に出版された土家訳 (3冊目) <sup>45</sup>の改訂版である。この話は、ラング版を大幅に書き変えたものである。冒頭に「おじさんは、まちの ひとたちに だまされました。／だました ひとたちは どう なったか、さあ、よみましょう」 (5頁) と付け足され、この話の主題が笛吹き男をだました人物がどうなるか、というものであると明記されている。笛吹き男は人々を喜ば

せようと思って笛を吹きながらハーメルンの町へやってくる。しかし、誰も自分の傍にや  
って来ないので「笛を吹くのが下手になったのだろうか」と自問する。その後、ラング版  
と同様に、町にやって来た笛吹き男は市長にネズミを退治すると言う。市長は喜び、ネズ  
ミ1匹につき1円払うと約束する。町の人々は「そんな ことを したら、まちに、おかね  
が いくら あっても たりません」(11頁)と騒ぐが、市長は考えがあるから任せてお  
けという。ここでは、ネズミの王は登場せず、退治したネズミの総数も不明のままであ  
る。そのため、市長はネズミの死骸がなくて報酬の計算ができないので、報酬を支払わな  
いと言う。報酬をもらえなかった笛吹き男は門番につまみ出されてしまう。笛吹き男は  
「あきらめよう」(18頁)と言って笛を吹きながら森へ向かう。すると子どもたちが「お  
もしろい ふえが きこえて くるぞ」(19頁)と言ってついてくる。ひとりの子どもが  
笛吹き男に、「おじさんは、どうして ふえが じょうずなの」(22頁)と尋ねると、笛  
吹き男は「いっしょうけんめいに けいこを したからだよ」(22頁)と答える。子ども  
たちは大きくなったら笛吹きになりたいと言う。町へ戻ってきた足の悪い子から話を聞い  
た人々と市長は反省する。市長は馬で笛吹き男のもとに駆けつけると、笛吹き男の手を握  
って「わたしが わるかった。ゆるして ください」(29頁)と言って謝る。町に戻った  
笛吹き男は市長から金貨の入った袋をもらい、町の人々から土産の包みももらう。笛吹き  
男はあちらこちらにお辞儀をしながら町を後にする。

小池タミ子(1冊目)の「ハメルンの笛吹き」[66](#)は1977(昭和52)年にチャイルド本社か  
ら出版された『たのしい劇あそび20選』に収録されている。この本は「保育実用書シリ  
ーズ」の1冊で保育士や幼稚園教諭のための本である。劇の演者は園児が想定されている。  
小池は「はじめに」で、普段生き生きとごっこ遊びをする子どもたちが発表会での劇にな  
るとあやつり人形のようにになってしまうという問題について触れ、その問題を解決するた  
めに20の話を選んだと述べている<sup>386</sup>。話の骨子はラング版だが、結末のみブラウニング版  
の内容になっている。話は語り手のセリフで進む。町の人々が市長にあきれていると、笛吹  
き男が歌いながらハーメルンの町へやってくる。市長は笛吹き男に、ネズミ1匹につき1万  
円を払うと約束する。ネズミの王は登場しないが、笛吹き男は退治したネズミは3333万  
3300匹いたという。報酬をもらえなかった笛吹き男は怒って子どもたちを山腹のなかに連  
れ去り、子どもたちはひとりも帰ってこない。町から連れ出された子どもたちは劇の最後  
で「花の下で おどろうよ／ことりといっしょに うたおうよ たのしい国で ぼくらの  
国で ラララララ」(120頁)というように、楽園で幸せそうに歌って踊る。

宮城まり子の『ハメルンの笛ふき』[67](#)は1977(昭和52)年5月にTBSブリタニカから出版  
された絵本である。この絵本は1976(昭和51)年11月11日にTBSのテレビ番組で放映され  
た「まんが世界昔ばなし」シリーズのアニメ絵本である。内容はラング版だが、次のよう  
に大幅に改変されている。話の冒頭でネズミの害に困っている町の人々が、このままでは  
餓死してしまうのではないかと心配する。市長は人々に、小麦がたくさん入った倉が10棟  
もあってそれを兵隊たちが守っているから安心するように言う。しかしその直後、兵士が  
やってきてネズミが倉の小麦をすべて食べてしまったと報告する。人々はネズミと一緒に  
町を焼くことにする。白ねずみは登場せず、退治したネズミの数を尋ねられた笛吹き男は  
答えることができない。最後に戻ってくる子どもは松葉杖をついている子がひとりだけで  
ある。6ヶ月前にテレビで放映された内容であるので、この改変版のストーリーは多くの

人々に共有されたと思われる。

瀬川昌男の「ハメルンの ふえふき」<sup>69</sup>は1978（昭和53）年6月に朝日ソノラマから出版された『しあわせのハンス』に収録されている。この話は主としてラング版の内容だが、改変箇所も多い。瀬川が付け足した表現が多く、さらにブラウニング版の内容も混成されている。ラング版の内容と同様に、笛吹き男は「赤いズボンに みどりの チョッキ」（31頁）をきているが、ここではさらに「赤い とんがりぼうし」（31頁）を被っている。退治されたネズミの描写はブラウニング版の内容で、町を去った笛吹き男が再び「朝の七時ごろ」（42頁）にやってくるのは、グリム兄弟版の内容である。子どもたちが山腹の中へ消えたのを「子どもたちのあとから おいかけていった おばあさんが見て」（44頁）いたというのも、グリム兄弟版の内容である。

小川一枝の「ハメルンのふえふき」<sup>70</sup>は1978（昭和53）年9月に家の光協会から出版された『赤ひげとぶどう酒商人ほか』に収録されている。この本は「世界の民話」シリーズ6巻の「ドイツ編」で、巻末にある解説で小川は「ハーメルンの笛吹き男」が『グリム伝説集』に収録され、ブラウニングの詩の題材になっていることを述べている<sup>387</sup>。話の骨子はラング版だが、大幅に改変されている。話の冒頭では「おかみさん」、病人、酒場の店主、仕立屋、鍛冶屋がそれぞれ、ネズミの被害について具体的な内容を挙げて嘆く（172-173頁）。グリム兄弟版の内容も混成されている。笛吹き男が「三十歳くらい」（179頁）で「赤、青、黄、緑のまじったみょうなまだらの上着」を着ていること、「六月末のある日」（186頁）に再び町にやってくること、笛吹き男が恐ろしい顔をして、狩人の格好をして、頭に赤い帽子を乗せていること、18歳の町長の娘が笛吹き男について行くことなどがそうである。ラング版に登場する白ねずみはここでも登場するが、笛吹き男との会話は省略されている。町に戻ってくるのは上着を取りに戻った子がひとりだけで、他の子どもたちは素晴らしい場所へ行ったから水汲みや火起こしなどの仕事をしなくていいと言ってうらやましがる。

藤田圭雄の『ハメルンの笛ふき』<sup>71</sup>は1978（昭和53）年11月に講談社から出版された絵本である。藤田は後書きで、この話がグリム兄弟の伝説集に収録され、ブラウニングが詩にしたと述べている<sup>388</sup>。また、阿部謹也の本のことも紹介している。藤田は下記のように述べている。

わたしが読んだだけでも、グリムやブラウニングの他に、オックスフォードの小学読本、クルト＝バウマンのもの、ラング世界童話全集のものなど、それぞれにおもしろい。しかもあちこち違った筋書きになっている。

…わたしはこの稿を作るに当たって、わたしが読んだ以上のような本を総合して、無理のない、そしてまたいちばんおもしろい物語にまとめる努力をした。ねずみ1匹の値段（ラングでは1グロス）やねずみの数、そして最後のまとめはラングに拠った。（後書き）

後書きで述べられているように話は主としてラング版の内容で、そこにグリム兄弟版やブラウニング版などが混成されている。グリム兄弟版の内容になっているのは、笛吹き男の服装、笛吹き男が再び町へやってくる日付、連れ去られる子どもたちの年齢と人数など



である。ブラウニング版の内容になっているのは最後に帰って来る子どもで、「足の わるい 子」(28頁)がひとりのみである点である。

小池タミ子(2冊目)の「ハメルンの笛吹き」<sup>74</sup>は1979(昭和54)年11月に東京書籍から出版された『もえろ天の火』に収録されている。この本は「東書児童劇」シリーズの2冊目で、子どものための戯曲である。1977(昭和52)年の小池訳(1冊目)<sup>66</sup>と内容は同じだが、台詞回しなどが1冊目<sup>66</sup>よりも大人びている。これは、1冊目<sup>66</sup>の対象者が「やさしいものでは三歳児位から、すこしむずかしいものでは、年長児から、小学校一、二年生位までの子どもたち」<sup>389</sup>であるのに対して、2冊目では小学生から中学生までを対象として想定しているからであろう<sup>390</sup>。

小池タミ子(3冊目)の「ハメルンのふえふき」<sup>74</sup>は1988(昭和63)年に大阪書籍から発行された教科書『小学国語』に収録されている。小池訳(1冊目)<sup>66</sup>と小池訳(2冊目)<sup>74</sup>を簡略化した内容である。最後はやはり、楽園で楽しそうに踊る子どもたちの姿で幕を閉じる。この邦訳は、小学校の教科書に初めて収録された「ハーメルンの笛吹き男」である。日本で出版されている「ハーメルンの笛吹き男」はブラウニング版が著しく多いにもかかわらず、教科書に採用されているのはラング版を大幅に改変した小池訳<sup>74</sup>なのである。

### (3) グリム兄弟版の内容の話(7話)

#### ① 忠実な邦訳について(2話)

グリム兄弟版は7話ある。そのうち、グリム兄弟版の内容に忠実、もしくはほぼ忠実な話は下記の2話<sup>78</sup><sup>79</sup>である。

河村隆史の「ハーメルンの子供たち」<sup>78</sup>は1981(昭和56)年6月に東洋文化社から出版された『ドイツ伝説集・タンホイザー』に収録されている。この本は『ドイツ伝説集』1巻から話をいくつか収録したもので、あとがきには下記のように底本が明記されている。

Deutsche Sagen hrsg. v. den Brüdern Grimm, 3. Aufl. besorgt v. Herman Grimm, Nicolaische =Verlags Buchhandlung, Berlin 1891 (208頁)

『ドイツ伝説集』グリム兄弟編、3版、ヘルマン・グリム監修、ニコライ出版社、ベルリン、1891年(拙訳)

『ドイツ伝説集・タンホイザー』に収録されている話は「巨人」「悪魔と魔女」などのテーマ別に分けられており、「ハーメルンの子供たち」は「魔法と妖精・妖怪」の章に収録されている。話の題名も含め、グリム兄弟版に忠実な内容である。ただし、上着を忘れた子についての記述、舞楽禁止通り、ラテン語の詩、貨幣が鑄造されたことなどは省略されている。これらの省略については河村が「あとがき」で、「原著では若干の話についている後日談、ないし類話の部分を適宜省略したことをお断りしておく」<sup>391</sup>と述べている。

桜沢正勝／鍛冶哲郎の「ハーメルンの子供たち」<sup>79</sup>は1987(昭和62)年4月に人文書院から出版された『ドイツ伝説集』上巻に収録されている。この本は書名のとおり、グリム兄弟の『ドイツ伝説集』を原文に忠実にすべて邦訳したものである。ラテン語の部分も、グリム兄弟による注も省略せず、すべて忠実に訳出されている。

これら2話は、いずれも子ども向けではなく一般向けの本に収録されている。ドイツの伝説をできるだけ正確に日本に紹介しようとしており、勝手な再話などはなされていない。

## ②改変された話について（3話）

グリム兄弟版の改変版は下記の3話<sup>57</sup><sup>60</sup><sup>90</sup>である。

生源寺美子の「ハメルンのふえふき」<sup>57</sup>は1969（昭和44）年10月に牧書店から出版された『お話の森 3・4月』に収録されている。話の骨子はグリム兄弟版だが、細部が改変されている。グリム兄弟版ではネズミの害について語られないが、ここではネズミが麦やパンやベーコンを食べることと町の人たちがネコやイヌを連れてきても無駄であったことが語られる。人々がこのままでは飢え死にしようとしていると、笛吹き男がやってくる。町を立ち去った笛吹き男が再び町にやってくるのは、ヨハネとパウロの日ではなく、大人たちが教会に行っている日曜日である。町に残る子どもは、朝寝坊をして一緒に行けなかった2人だけである。解説で「やくそくをまもらないずるいおとなたちに、きびしい罰をあたえて、いってしまった、ふしぎなふえふき男」と述べられている。

山主敏子の「ハメルンの笛ふき男」<sup>60</sup>は1973（昭和48）年に偕成社から出版された『世界のこわい話』に収録されている。話の骨子はグリム兄弟版だが、改変されている個所や、省略されている個所がある。改変されているのは笛吹き男の服装と話の結末である。2度目に町にやってきた笛吹き男はグリム兄弟版の狩人の格好ではなく、「赤や黄の、はでな横じまの上着をきて、赤いとんがりぼうしをかぶって」（66頁）いる。子どもたちは全員山腹の中へ消えてしまい、その様子を見ていた「おばあさん」（68頁）が町に知らせる。

望月正子の『ハーメルンのふえふき』<sup>90</sup>は1987（昭和62）年2月に国土社から出版された単行本である。「グリム原作」とあるように話の骨子はグリム兄弟版だが、改変されている箇所もある。話の冒頭では「ハーメルンは、ことりの うたや 子どもたちの わらいごえが きこえる、 のどかな 町」（2-3頁）であるといわれ、ネズミの害の内容も具体的に述べられている。笛吹き男は報酬を支払ってもらえなかったので町を立ち去り、教会の祭りの日に再び町へやってくる。グリム兄弟版と同様に笛吹き男は獵師のような格好をしているが、グリム兄弟版には出現しない「てっぽう」（51頁）を肩に担いでいる。子どもたちが笛吹き男に連れ去られる様子を、グリム兄弟版では子守りの娘が遠くから眺めているが、ここでは子守りの娘も一緒について行く。町からは、自分で歩けない赤ん坊以外の130人の子どもが消えたという。子どもたちの行方はわからないままで、ハーメルンは「子どもの いない さびしい 町」（69頁）になる。この出来事に責任を感じた市長は、ひと晩であご髭が真っ白になってしまう。人々は子どもが消えたことを忘れないように、役所の建物にこの出来事を刻んで語り伝えているという。

## ③改作された話について（2話）

グリム兄弟版の改作版は下記の2話<sup>83</sup><sup>89</sup>である。

小暮正夫の「ハーメルンのふえふき男」<sup>83</sup>は1984（昭和59）年4月に学習研究社から出版された『うそをついたらメメメのメの話』に収録されている。目次に「グリム・原作」と

あるように、グリム兄弟版の内容であるが、改変されている箇所もある。改変が顕著であるのは冒頭部分で、「ようふくやの あるじ」(37頁)がネズミに作った服を齧られたと言い、「パンやの あるじ」(37頁)もネズミにパンと粉の袋を齧られたと言う。笛吹き男は「いろいろな いろの まざった まだらの ふく」(42頁)を着ている。笛吹き男が子どもたちを連れ去る様子を、子守り娘が遠くから眺めていて、町の人々に伝える。町の人々は泣きわめきながら子どもたちを探す、ひとりも見つからない。人々は「やくそくを まもらなかったからだ」(60頁)、「そんな ことより 早く つれもどそう」(60頁)と話し合う。しかし子どもたちがどこへ行ってしまったのか不明のまま、話は終わる。小暮訳<sup>39</sup>ではネズミは物を齧るだけでなく、「町に わるい びょう気も」(38頁)蔓延させるという。これは黒死病(ペスト)のことであろう。しかし、黒死病がヨーロッパに蔓延したのは1300年代のことであり、ハーメルンで子どもたちが連れ去られたのは1284年の出来事であるとされているため、年代にずれが生じている。

おざわとしおの『ハーメルンのふえふき』<sup>40</sup>は1985(昭和60)年12月に偕成社から出版された絵本である。これは1984年にオーストリアで出版された絵本『ハーメルンのネズミ捕り男』(*Der Rattenfänger von Hameln*)を、装丁をまったく同じにしたまま邦訳したものである<sup>39</sup>。話の骨子はグリム兄弟版だが内容は著しく改変されている。笛吹き男は「まっ赤な マントを はおり、頭には、ながい羽のついた 赤い ぼうし」(6頁)を被って、「ハンス=ブンティング」(6頁)という名前を名乗る。「ハンス」はドイツで一般的な男性の名前で、「ブンティング」は「色とりどりの」という意味の**bunt**から、原著者が考えた名前であろう。再び町に来た笛吹き男は、市長の娘のマルグレートが来たのを確認してから子どもたちと共に町を出る。130人の子どもたちが消えてしまい、町の人々は市長を問い詰めるが、市長は「金貨百枚を ことわったのは、みんなで きめたことじゃないか。わたしだけが せめられるのは おかしい」と言い返す。それから数年後、穀物商の息子で目が見えないミッヒェルと、耳が聞こえず口も利けない家具屋のハンネスだけが帰って来る。ミッヒェルは途中で目が見えなくなったという。しかし、子どもたちがどこに消えたのかはわからずじまいで、チェコやハンガリーではなく地下の国へ連れて行かれたのだと言う人もいるという。

#### (4) いずれの版にも分類できない不明版(7話)

話が簡略化されすぎたり、改変されすぎたりして、いずれの版にも分類できない不明版は7話ある。そのうち話の簡略化が著しいのは2話<sup>83</sup><sup>88</sup>あり、話の改変が著しいのは5話<sup>61</sup><sup>77</sup><sup>79</sup><sup>81</sup><sup>87</sup>ある。まず話の簡略化が著しい話から内容を見ていくことにする。

建石修志の「ハメルンのふえふき」<sup>83</sup>は1983(昭和58)年に創育から出版された絵本『ハメルンのふえふき すなにもれたまち』に収録されている。大型絵本だが、紙面のほとんどを絵が埋めている。詞の文字も大きいため、本文の文字数は少なくなっている。そのため、話の内容は簡略化されたものとなっている。ネズミの害に困っているハーメルンの町に「これまで みたことも ない ふしぎな おとこ」(9頁)がやってきて、ネズミを退治する。市長が報酬を支払わないので笛吹き男は怒って「これから おこることは みんな おまえたちの みにくい ころの せいなんだ」(15頁)と言う。子どもたちは全員山腹の中へと消える。子どもたちの楽しそうな歌声や笑い声が山の中から聞こ

えてくる。子どもたちがいなくなった「それからの ハメルンは すっかり さびれてしまったと いうことです」という文で話は終わる。話の後には「考える力を育てる」として読者への質問が2つ書かれている。1つ目は「ふしぎなおとこは どうやって ねずみを たいじ したのでしょうか」(24頁)、2つ目は「ふしぎなおとこは なぜ ハメルンの こどもたちを つれて 行って しまったのでしょうか」(24頁)である。

平正夫の「ハメルンのふえふき」<sup>88</sup>は1985(昭和60)年10月にひかりのくにから出版された『表現力を伸ばす劇あそび脚本集』に収録されている。これは月刊雑誌『保育とカリキュラム』の別冊として出版されたもので、園児が演じることを想定した戯曲集である。内容は園児向けに簡略化され、改変されている。笛吹き男は町長と「指切りげんまん」(124頁)をして約束を交わす。報酬をもらえなかった笛吹き男は「お金のかわりに、みなさんの一番大切なものをいただくことにしましたよ」(125頁)と言い、町の人々が「大切なものってなんだろう」「大切なものってなんでしょう」(125頁)と話し合っていると、子どもたちが連れ去られる。この後の場面でも笛吹き男は子どもが大切なものであるということを何度も述べる。この劇では子どもが大切な存在であることが強調されているのである。子どもたちは消えてしまい、ひとりも帰ってこない。この本は、1987(昭和62)年11月に表紙以外まったく同じ内容で再版されている。

次に改変の著しい話を見ていく。

西本鶏介(1冊目)の「ハーメルンの笛吹き男」<sup>6</sup>は1973(昭和48)年5月に芸術生活社から出版された『世界童話集』に収録されている。この話はグリム兄弟版、ブラウニング版、ラング版のいずれの版であるか判断できない。笛吹き男は「黒い帽子をかぶり黒いマントを」(11頁)着ている。町に残る子どもは行列の1番最後にいた男の子のみで、「それっきり、あの男も、子どもたちも、二度と姿を見せませんでした」(14頁)という文で話は終わる。本文の後ろには、この話がドイツの伝説であること、イギリスのブラウニングが詩にしていること、「子供が何よりも大切なことを教えています」<sup>393</sup>ということが述べられている。

牧房雄の「舞踏劇：ハメルンの笛吹き」<sup>7</sup>は1980(昭和55)年に東芝EMIから出版された『舞踊劇：ハメルンの笛吹き 少年剣士 コザック剣士とカチューシャ娘』に収録されている。「舞踏劇」と書かれているように、これは歌のある劇の戯曲である。レコードが付属品として付けられ、戯曲の最後にはダンスの振りつけが図付きで細かく説明されている。話は「三角ぼうしの 赤い屋根／まあるいお洒落な 青い屋根／みんなが楽しく 暮らしてる／ハメルンの町は／すばらしい」(2頁)という歌で始まる。笛吹き男は笛の音を使ってネズミを町から連れ出す。町の人々が喜んでいると、笛吹き男はネズミを連れて町に戻ってくる。笛吹き男は「ねずみは心を入れかえて、みんなよいねずみになりました」(4頁)「ごほうびの代りに どうぞ許してやって下さい」(4頁)と町の人々に言う。ネズミたちも、もういたずらはしないと約束する。町の人々はネズミを許し、ネズミたちと仲良く暮らすことにする。話の最後は「いたずらねずみも 今日からは／みんなのお仲間 お友達／お水もくみます マキも割る／はたらきねずみは よいねずみ／…／仲よく歌って 踊りましょう」という歌で終わる。子どもたちは誰ひとり連れ去られることはなく、ネズミも退治されない。

杉山經一の『ハーメルンのふえふきおとこ』<sup>79</sup>は1981(昭和56)年10月にコーキ出版か

ら出版された絵本である。副題に「ドイツのはなし」とあるが、グリム兄弟版、ブラウニング版、ラング版のいずれの版であるかは判断できない。話の冒頭は「むかし むかしはしの そばの ハーメルンと いう まちで、 たくさんの すいしゃたちが ぎーごつとんと、むぎの こなを ひいていたころ」(2頁)という文章で始まる。ハーメルンの人々は市長と一緒に会議を開くが、解決策は見つからない。ある日、西のほうから見慣れない男がやって来てネズミを退治すると言うので、市長たちは喜んでネズミ退治を依頼する。市長は、ネズミが勝手にいなくなったのだらうと言って報酬を支払わない。笛吹き男は怒って町を立ち去ると、翌日の朝早く、「まだらもようの おそろしげな ふく」(18頁)を着て「ものすごい かおつき」(18頁)で笛を吹く。子どもたちが連れ去られる間、大人たちは仕事や用事に気が取られて気がつかない。町に戻って来るのは列から遅れてついていっていた小さな男の子ひとりだけである。人々は子どもたちを探して、外国の町まで使者を送るがどこにもいない。「いなくなった ハーメルンの こどもたちは、ひとりも もどっては きませんでした。そのときから もう ななひやくねんが すぎました」(32頁)という文章で話は終わる。

西本鶏介(3冊目)の「ハーメルンのふえふき男」<sup>87</sup>は1985(昭和60)年3月に学習研究社から出版された『名作百科』2巻に収録されている。西本訳(1冊目)<sup>60</sup>を、より幼い子ども向けに書き変えた話で、笛吹き男は「くろい ぼうしを かぶり、くろい マントを」(116頁)着ている。ネズミは1匹残らず溺死させられる。町に帰って来る子どもは行列の1番後にいた男の子ひとりだけである。子どもたちの行方については語られていない。解説には「イギリスの詩人ブラウニングも詩に書いている…神かくしという考え方は日本でも古くからありますが、それをたくみに生かしながら身勝手な人間の姿を鋭く描いて」<sup>394</sup>いと述べられている。あたかも笛吹き男が、人々に罰を与えに来た超自然的存在であるかのような書き方である。

筒井敬介の「ハーメルンの笛吹」<sup>88</sup>は1982(昭和57)年10月に東京書籍から出版された『何にでもなれる時間 筒井敬介児童劇集1』に収録されている。題名からわかるとおり、児童劇のための戯曲であり、内容は著しく改変されている。本格的な戯曲で、本文の前に大道具の絵や上から見た時の配置図、各登場人物の衣装などが詳細に描かれている。物語は老人が子どもたちに昔話を話して聞かせる場面から始まる。ネズミたちが我が物顔でハーメルンの町の食料を食べ尽くしている傍らで、町の人々はネズミの害に苦しんでいる。一方、市長の家では市長、市長夫人、貴族たち、議員たちが豪勢なパーティを開いている。市長たちはネコを飼っているので、ネズミの害に悩まされていない。そこに笛吹き男がやってくるが、笛吹き男が吹いた曲が気に入らないので市長たちは笛吹き男を追い出す。その後笛吹き男は笛を吹いてネコをハーメルンの町から連れ出し、その様子を町の人々や子どもたちが目撃する。ネコがいなくなったのでネズミの害が著しくなる。さびれかかった町を見て、市長は市民の暴動が起きないように、ブタ祭りを開催することにする。目隠しをした子どもたちが無事にブタを倒せたら、そのブタが人々に振舞われる。子どもたちは腹を空かせていて元気がなく、「働きたくないだよ」(120頁)と言って拒否するが、腹が減っている親たちは子どもたちを引きずりだして無理矢理棍棒を握らせる。人々は子どもたちのぶざまな姿をあざ笑う。そこにネズミたちがやってきて、ブタ祭りは中止となる。ブタを追いかけていた子どもたちは疲れて座り込んでしまう。その姿を笛吹

き男が見る。後日、人々は市長の家に詰めかけて、文句を言う。そこに笛吹き男がやってきたので、市長はネズミ退治を依頼する。笛吹き男がネズミを退治しても、市長は報酬を支払おうとしない。子どもたちが「市長はこのおじさんと手を握って約束したんだ」（142頁）と報酬を支払うように言うが、市長は支払わない。笛吹き男は子どもたちに、一緒にこの町から出て行こうと言って笛を吹く。子どもたちは喜んで笛吹き男の後へついて行き、笛吹き男と子どもたちはそのまま町から出ていく。その後ひとりの女の子だけが町に帰ってくる。家に病気の祖父がいるので介護のために帰ってきたのだ。少女は「でも、ほんとはみんなとどこまでもいっしょにいきたかった」（145頁）、「だけどあたいは、がまんして…歯をくいしばって、また、このきたない町に帰ってきたんだ」（145頁）と言う。そして語り手の老人は子どもたちに、嘘がどんなに恐ろしい出来事を引き起こすのか語り伝えてくれと頼む。筒井はこの作品を「ミュージカルドラマのつもりで…書いたもの」（97頁）と述べている。

#### 4) 分析と考察

##### (1) 邦訳が掲載されている媒体について

「ハーメルンの笛吹き男」の邦訳は第2期では主として児童雑誌に掲載されていたが、第3期になると絵本の形で出版されるようになる。第2期では12話が児童雑誌に掲載され、4話が絵本として出版された。一方、第3期では児童雑誌に掲載されたのは1話<sup>58</sup>のみで、17話<sup>56 59 63 65 67 71 72 73 75 76 79 80 82 83 84 85 89</sup>が絵本である。つまり第2期と第3期では、話を掲載している媒体が異なるのである。

第3期になると絵本が急増するのは、「ハーメルンの笛吹き男」の話が雑誌よりも絵本の題材として好まれたというより、当時の出版状況の変化によるものであろう。明治後期から大正期にかけて次々と創刊された子ども向け雑誌は、昭和初期に至るまで絵本を上回る出版状況であった<sup>395</sup>。しかしその後、1960年代に入ると児童文学の興隆とともに、絵本界も飛躍的な発展期を迎える<sup>396</sup>。

そもそも、大正期から戦前までは絵雑誌つまり児童雑誌が「絵本」と称され、本来の意味での絵本はほとんど存在しなかった<sup>397</sup>。雑誌が「絵本」と称されたのは、「子供向きの絵を主にした本」<sup>398</sup>という意味からである。絵本の始まりは幕末にまで遡るが、幕末から明治期の絵本は本ではなく1枚の絵であり、むしろ玩具の部類に含まれるものであった。その後、出版技術が進歩すると児童向けの雑誌が出版されるようになり、ここでようやく絵本は本の形になるのである<sup>399</sup>。

日本児童文化の研究者である永田桂子は「大正～戦前の『絵本』は『絵雑誌』を指していることが多かった」<sup>400</sup>と述べているが、昭和30年代の前半でもまだ「絵本」と「絵雑誌」は明確には区別されていなかった<sup>401</sup>。絵本について研究している村田あゆみはその例として下記のように述べている（いずれも傍点は村田による）。

たとえば、戦前に刊行が始まり現在も継続している小学館の雑誌「幼稚園」には副題として「小学館の幼児保育絵雑誌」（昭和29（1954）年7月号）と記される一方、昭和36（1961）年2月号には「小学館の幼児教育絵本」と記されている<sup>402</sup>。

「絵雑誌」と「絵本」が区別され、いわゆる「絵本」が多く出版されるようになるきっかけとなったのは、1953（昭和28）年に創刊された「岩波の子どもの本」シリーズである。このシリーズは海外絵本の翻訳を主としたもので、物語のおもしろさ、多様な画法、ページのレイアウトの仕方などがそれまでの絵本とは一線を画する「絵本」であった<sup>403</sup>。このシリーズに刺激を受け、1956（昭和31）年、福音館書店の松居直が月刊絵本「こどものとも」の刊行を開始し、日本の作家による絵本作りが行なわれるようになる<sup>404</sup>。

1956（昭和31）年、文部省が絵本について言及したことも「絵本」の出版が増えたきっかけの1つである。文部省が1956（昭和31）年に打ち出した『幼稚園教育要領』には、幼稚園教育の内容として「絵本・紙しばい・劇・幻燈・映画などを楽しむ」<sup>405</sup>、「絵本を喜んでみる」<sup>406</sup>というように、絵本が初めて取り入れられている<sup>407</sup>。これまで「低俗なもの」と人々に思われていた絵本が<sup>408</sup>、文部省の後押しもあって人々に受け入れられるようになった。つまり、絵本は玩具や消耗品ではなく、子どもの教養のための必需品であるという認識が共有されるようになったのである<sup>409</sup>。

1950年代から1960年代までの絵本出版社はまだ数社に限られていたが、1970年代に入ると多くの出版社が絵本出版を手掛けるようになる<sup>410</sup>。絵本作家であり絵本研究家でもある森久保仙太郎は、1970年代を「絵本氾濫期」または「絵本出版洪水時代」と呼んだ<sup>411</sup>。児童雑誌に代わっていわゆる絵本が普及し始めた1970年代は「絵本ブーム」と称される絵本の黄金期であった<sup>412</sup>。この時期の絵本の出版数は年間1000点を超すと言われるほどであった<sup>413</sup>。出版事情の変化に伴って、「ハーメルンの笛吹き男」の邦訳も、雑誌に掲載されていたものが絵本という形で出版されるようになったのである。

第3期では、海外絵本をそのまま訳したもの<sup>63</sup> <sup>72</sup> <sup>76</sup> <sup>84</sup> <sup>92</sup>も存在する。これらの絵本では、絵本の装丁、画面の構成、本の大きさ、挿絵などが、底本の海外絵本とまったく同じになっている。第3期の日本では、海外の絵本をそのまま入れることで、良質な絵本を人々に紹介しようとしたのである。

## (2) 石油ショックの影響について

1973（昭和48）年6月から1976（昭和51）年7月までの約3年間、「ハーメルンの笛吹き男」の邦訳は1冊も出版されていない。おそらく、オイルショックの影響で国内の用紙が不足したからであろう。1973（昭和48）年10月、日本で第1次オイルショックが起り、1960年代から続いた高度経済成長に終止符が打たれる。そのなかで、出版会も未曾有の危機に直面する。用紙不足と価格の急騰で、出版社は紙の手配に苦勞する<sup>414</sup>。そして書籍協会は各方面に用紙を節約するよう呼びかけたのである<sup>415</sup>。この時期に「ハーメルンの笛吹き男」の邦訳が出版されなかったのは、上記のような事情によるものといえよう。

オイルショックは1979（昭和54）年に再び日本を襲う。しかし、第1次オイルショックの経験を元に政府や経済界が「冷静に対応することができた」<sup>416</sup>ため、第2次オイルショックの被害は、第1次オイルショックほど悲惨ではなかった。その結果、第1次オイルショックの時とは異なり、「ハーメルンの笛吹き男」の邦訳は第2次オイルショックが起こった1979（昭和54）年に3話出版され、翌年にもさらに2話出版された。

1979（昭和54）年と翌年に邦訳が出版された理由として、1979（昭和54）年が国連総会の定めた国際児童年であることも考えられる。国際児童年は、1976（昭和51）年に国際連

合が定めたもので、1959（昭和31）年に国際連合が採択した「児童権利宣言」の20周年を記念するものであった<sup>417</sup>。国際児童年の推進機関であったユニセフ（国際連合児童基金）は、各国に国際児童年に関する国内委員会の設置を呼びかけ、日本でも1978（昭和53）年に総理府に国際児童年事業推進会議を設置することが閣議決定された。この推進会議では、「児童問題についての認識を深めるための啓発活動の実施」、「児童に関する国際施策の充実」、「児童の福祉向上のための国際協力の拡充」の3つが定められた。具体的な内容のなかに、児童のための文化事業の拡充と各種施設の整備があるためか、国際児童年の1979（昭和54）年には全国各地で児童図書展示即売会が開催され、児童図書展の数も過去最高となる<sup>418</sup>。第2次オイルショックが起こったにもかかわらず邦訳が多数出版されたのは、国際児童年による児童図書推進企画が出版を後押ししたからであろう。

### (3) 話の内容の改変について

#### ①改変の特徴

第3期の内容でとくに注目に値する改変は、下記の2点である。1点目は「子どもが大切である」という表現が出現すること、2点目はこれまで「町の大人たち」や「両親」というように一括りにして描かれていた親たちが、「父親」と「母親」に分けて描かれ、それぞれ異なった行動を取るようになることである。これら2点の改変について、邦訳のなかでどのように改変されているのかを確認し、その理由について考察していく。

#### ②子ども観の変容

第3期になると、第2期よりも子どもの大切さを強調した表現が出現するようになる。第2期までの邦訳でハーメルンの人々は、子どもたちが連れ去られ、町から消えてしまったことを悲しんだり後悔したりする。しかしそれはグリム兄弟版、ブラウニング版、ラング版の原典にも出現する程度の悲しみ方で、親たちにとって子どもたちがどれほど大切かという表現はさほど強調されていない。一方、第3期の邦訳では、お金よりも子どものほうが大切だという表現が出現する。原典や第2期までの邦訳に含まれていない表現が、わざわざ付け足されているのである。

小池訳（2冊目）[74](#)では、子どもたちのことを「お金よりも大切な」と初めて表現する。作中で、笛吹き男が子どもたちを連れ去るのを目撃した市長と町の大人たちは次のように言う（以下、下線は筆者による）。

小池訳（2冊目）[74](#)（戯曲）：

〔遠ざかっていく笛吹き男と子どもたちを茫然と見送りながら〕

市長 ああ、行ってしまった。

みんな 行ってしまった。

市長 あの男は、お金よりも、もっと大事なものを持ち去った。

みんな 子どもたち。子どもたち。かわいい子どもたち。（132頁）

ここではお金と子どもたちが比べられ、子どもの方がはるかに大切であると述べられている。市長と大人たちが報酬を支払うのを惜しんだせいで、お金よりも大切な子どもたち



が連れ去られてしまったということが強調されているのである。小池訳（2冊目）[74](#)には、この場面は違う台詞が出現する。市長は「約束どおり、お金をはらえばよかった」（120頁）と言い、役人たちも「そうだ。お金をはらえばよかった」（120頁）と言う。つまり小池は、子どもとお金を直接比較する表現に書き換えているのである。「お金よりも、もっと大事なもの」という台詞は、教科書に掲載された小池訳（3冊目）[74](#)でも同様に出現する。やはり小池は「お金よりも大切である」ということを強調したかったのであろう。子どもの価値については、平訳[88](#)でも述べられている。

平訳[88](#)（戯曲）：

〔約束の報酬を支払ってもらえないので〕

笛吹き 「お金のかわりに、みなさんの一番大切なものをいただくことにしましたよ」

…〔子どもたちが笛吹き男の傍に集まっていく〕

笛吹き 「大切なものってなんだかわかったでしょう」

町長 「けしからん、けしからん、子どもを返せ」

町の人（女） 「大事な子どもを返してちょうだい」

町の人（男） 「返せ返せ、子どもを返せ」

…

笛吹き 「ではみなさん、大切なものをいただいています」（125-126頁）

ここでは子どもが1番大切であると述べられている。子どもはお金や他の何よりも大切であるというのである。西本訳（1冊目）[6](#)の解説でも、この話は「子どもが何よりも大切なことを教えて」<sup>419</sup>いる話であると述べられている。

つまり第3期になると、「子どもは何ものにも代えがたい価値のある存在」として描かれるのである。なぜ第3期ではこのように子どもの大切さが強調されるのであろう。それは、この時期に子どもに対する価値観が大きく変わったからであると考えられる。

第3期は日本において家族像と子ども観が変化した時期であった。1960年代から1970年代前半までの高度経済成長期を転換期として日本の社会はおおきく変容し<sup>420</sup>、それとともに「子どもに対する大人のまなざし」<sup>421</sup>、つまり子ども観も変わっていった。高度経済成長期以前の日本では、農山漁村部で暮らす子どもも、都市部で暮らす子どもも、そのほとんどは労働の担い手であり、生産者であった。農山漁村部の子どもたちは、地域の共同体のなかで日常的に生産労働の担い手として特定の役割を担っていた<sup>422</sup>。都市部の子どもたちも、一部の富裕な階層の子弟を除くと職能集団のなかで自営業者や労働者の子弟として家業や家事の手伝いを担っていたのである<sup>423</sup>。そこでは子どもは「小さな大人」として扱われたが、これは別段特異なことではなかった。近代以前の社会では日本だけでなく全世界で子どもは「小さな大人」として扱われていたのである。フランスのフィリップ・アリエスは著作『〈子供〉の誕生』で、いわゆる「子ども」という概念は16世紀から18世紀ころに創出されたものであり、普遍的なものではなかったことを明らかにしている<sup>424</sup>。

「小さな大人」であった子どもが、大人とは別の存在であるいわゆる「子ども」として認識されるようになった背景には、社会の変化とそれに伴う家族のあり方の変化がある。

高度経済成長期に入った日本では、産業が近代化され、雇用労働者が急増した。それに加えて長期雇用性、年功序列が導入されたことで、日本男性に安定的な雇用が保障されるようになった。その結果、夫が家庭の外で働き、妻が家事や育児を担うといった性別役割分担が規範となる「近代家族」が生まれたのである<sup>425</sup>。

「近代家族」とは、その名のとおり近代に生まれた家族のことである。歴史家エドワード・ショーターは、近代の家族の姿が近代以前の家族の姿から変化したことを指摘し、その家族の特徴として次の3点を挙げた。1点目は男女が家柄や財産のためではなく恋愛感情によって結婚すること、2点目は母親が子どもを愛し慈しむこと、3点目は家族が他の領域から干渉を受けないことである。これら3つの特徴を持つ家族は近代家族と呼ばれるようになった。近代家族は産業化が進む社会のなかで生まれたのである<sup>426</sup>。日本ではそれは高度経済成長期にあたる。家族と教育の関連について研究している中澤智恵と余田翔平は、高度経済成長期をさして「まさに、近代家族の黄金期と言ってもよい」<sup>427</sup>と述べている。

近代家族については、ショーターの他に日本でも落合恵美子、西川裕子、山田昌弘など多くの家族社会学者がそれぞれ特徴を定義付けている<sup>428</sup>。それらのうち、子どもに対する姿勢について落合恵美子は近代家族の特徴として「子ども中心主義」を挙げ<sup>429</sup>、谷村賢治は近代家族は「むしろ子どもたちが中心なのである」<sup>430</sup>と述べている。高度経済成長期の日本では、とくに児童書の購入者である都市部の家族は子ども中心主義の家族へと変化したのである。

実は子ども中心主義の考え方は大正期にすでに導入されていた。当時は子ども中心主義ではなく「児童中心主義」と称された。玉川学園の創設者である小原国芳が「児童中心主義」を先導したことは第4章ですでに述べたとおりである<sup>431</sup>。小原はそれまでの大人中心の教育に対し、主体が児童である児童中心の教育をうたって新教育運動に取り組んだ。大正期の主義に「児童」が冠されているのは、この言葉が主として小学教育において使用されたからであろう。ただし、これらの児童中心主義の理念や運動は一部の人々にしか共有されておらず、大正期の「子ども期」の発見は、「知識人や有産階級の所産でしか」<sup>432</sup>なかった。いわゆる「子ども中心主義」が一般市民に広がるようになるのは、昭和の高度経済成長期になってからである。産業社会の到来とともに、都市部の一般市民のあいだにも「子ども期」が誕生するのである<sup>433</sup>。

子ども中心の家族への変化は、子どもの教育に尽力する「教育ママ」という言葉が1960年代に出現することからも読み取ることができる<sup>434</sup>。1960年代、子どもの教育に熱心になりすぎるいわゆる「教育ママ」現象がマスコミをはじめ幅広く社会の注目を集めた<sup>435</sup>。1960年代に生まれた「教育ママ」という用語は、1970年代にマスメディアにより頻繁に使われ<sup>436</sup>、それは社会問題を引き起こすほど加熱した。母親たちが子どもの教育に熱中したのは、高度経済成長によって雇用が増加した結果、夫がサラリーマンである家庭が増えたためである。これらの家族は、子どもに直接伝達すべき家業をもたない新中間層であるため<sup>437</sup>、子どもに家業を与えられない代わりに教育を与えようとしたのである。

また、1950年以降、1組あたりの夫婦の子ども数が平均2人と少なくなり、子どもを少なく産んでよりよく育てるという考え方が広く普及したことも<sup>438</sup>、教育ママが生まれた理由の1つと考えられる。さらにこの時期、三種の神器（電気冷蔵庫、洗濯機、掃除機）の普及にともない、家事労働の負担が軽減されるようになった。時間のゆとりが生まれた母親

たちは子どもに対する干渉が増し、育児や教育に力を注ぐようになるのである<sup>439</sup>。

このように第3期にあたる1960年代から1970年代にかけての日本では、家族のあり方や子ども観が大きく変わったのである。高度経済成長による産業の発展は、日本の家族を近代家族に変容させた。それまでは「小さな大人」として特別な配慮を与えられなかった子どもに「子ども期」が認められ、さらに子どもは家族の中心となる存在とみなされるようになったのである。第3期の邦訳に「子どもはお金よりも大切である」「子どもは何よりも大切な存在である」という表現が付け加えられたのは、当時の社会で子どもを家族の中心に据える近代家族のあり方が推奨されるようになったからであろう。子どもが親にとって何よりも大切なものと考えられるようになった結果、話のなかでも「子どもが何よりも大切である」ということが強調して描かれるようになるのである。

### ③ジェンダー観の刷り込み

注目に値する改変の2つめは、両親の描かれ方の変化である。これまでの邦訳では親たちは「大人たち」や「両親」と一括りにされていたのが、「父親」と「母親」それぞれの言動に分けて描かれるようになる。特にそれが顕著なのは、笛吹き男に子どもたちを連れ去られる場面である。4話<sup>65</sup> <sup>72</sup> <sup>86</sup> <sup>90</sup>ではそれぞれ下記のように書かれている（下線は筆者による）。

訳者不明（TSBブリタニカ）<sup>65</sup>：

[取り残された子どもが「おいしいお菓子よりも友達と遊びたい」と言うのを聞いて]

それをきいて、おかあさんたちは、かなしくなって、なきました。

それをきいて、おとうさんたちは、おこりました。

「しちょうが、あの、まほうのふえふき男を、おこらせたんじゃないかな」

「そうだ、そうにちがいない」（16頁）

渡辺訳<sup>72</sup>：

「かえっておいで！ もどっておいで！」

びっくりしたのは、おかあさんたちでした。

「あのふえふきに、ついていくんじゃないよ！」

あのふえは、まほうのふえなんだから！」

おかあさんたちは、なきながら、さげびました。

それでも、子どもたちは、だれも、おかあさんの声を、きいてはいませんでした。

(27頁)

…

「かえっておいで！ はやくしないと、かえれなくなるよ！」

おかあさんたちは、なきさげびました。（31頁）

…

きこえてくるのは、おかあさんたちの、かなしいなき声だけでした。

おとうさんたちは、ないたりはしませんでした。

ただ、ときどき、ほっと、ためいきをついて、心の中で、市長さんをうらんでいました。 (32頁)

…

かわいそうに、夜も昼も、山のふもとをあるいては、とびらをさがしている、おかあさんもいました。 (34頁)

上崎訳<sup>86</sup>：

おかあさんたちは、じめんに ぺたんと すわって なきだしました。

「ああ、ああ！ わたしの かわいい こどもは、どこへ 行って しまったの！」

おとうさんたちも、にぎりこぶしを ふるわせながら、いわを にらみつけて、

「こどもを かえせ！」

と、さげびました。 (68-70頁)

望月訳<sup>90</sup>：

なきさけぶ おかあさんも いました。 (63頁)

ここでは、子どもたちが消え去った後、泣くのは母親のみで、父親は泣かない。子どもたちが消え去った後、母親が地面に座り込んで泣くが、父親は泣かず拳を震わせて「子どもを返せ！」と叫んだり、悲しむ母親を父親が宥めたり、母親は泣くが、父親は泣かずに市長を睨みつけたりするのである。ここには、「女は泣き、男は泣かない」というジェンダーによるステレオタイプの見方が挿入されているのである。

神原文子によれば、高度経済成長期では「男の子は男らしく、女の子は女らしく」というジェンダー観にもとづく子育てが広く支持されていたこともあって、男子には、「個性や能力を発揮し社会で役立つ人間」になるために「勉強する」ことが期待され、女子には、「従順で親切な人間」になることが期待され、「あいさつや礼儀」「言葉づかい」などのしつけに重点がおかれていたという<sup>440</sup>。これらの邦訳でわざわざ母親と父親の行動を区別して書いているのは、近代家族における性別役割分担に必要なジェンダー観、内の世界で家事をする女性に求められる優しさや従順さと外の世界で働く男性に求められる強さや逞しさが、「泣く女」や「怒る男」という表現で入れられたのであろう。

## 5. 昭和期全体における受容のまとめ

昭和期の64年間で「ハーメルンの笛吹き男」の邦訳は85話出版された。太平洋戦争が終わる1945（昭和20）年以前は「ハーメルンの笛吹き男」の邦訳は4話しかなかった。出版物の統制が行なわれた1938（昭和13）年10月以前の第1A期には3話あり、統制以後の第1B期には1話のみある。戦後になると一気に増えて、昭和第2期と第3期でそれぞれ約40話ずつ出版されたのである。

第1期では、大正期に「ハーメルンの笛吹き男」が主として子ども向けの雑誌や本で出版されたのと同様に、4話のうち3話が子ども向け雑誌に掲載されたものである。いずれも大日本雄弁会講談社から出版されたもので、それぞれにカラーの絵が添えられている。内容の骨子はブラウニング版だが完全に忠実な話というわけではなく、当時の日本の情勢を

反映した内容に改変されている。日中戦争勃発以後に出版されたこれら3話の邦訳では、第1A期においても第1B期においても、市長への人々の態度が軟化している。ブラウニング版では、町の人々はネズミの害を解決できない市長を厳しく糾弾するが、第1期の邦訳ではその糾弾が削除されている。戦時中は国民が国や為政者を批判することなど許されなかったからであろう。第1A期では話の結末で、子どもが連れ去られるきっかけをつくった大人たちに対して、責任を厳しく追及したりしない。両親や大人たちに不信感を抱かせるような内容は排除されたのであろう。戦争が激化する第1B期になると結末はさらに改変され、子どもたちは全員無事に帰って来る。さらに、町の人々は笛吹き男に約束の報酬を支払う。つまり、大人は正しい行動を取ったことにされているのである。子どもが全員無事で笑顔で帰宅するのは、戦争に駆り出された子どもたちが無事に凱旋するよう願った親たちの願望が語られているのであろう。このように第1期の邦訳では、為政者は批判されず、両親は責任を追及されず、子どもたちは戻ってくるのである。この改変は第2期になると元に戻され、第1期と正反対の内容になる。

戦後である第2期は、人々が戦時中の自らの態度を深く反省した時代であった。特に児童文学者たちは、戦後を担う子どもたちを正しく導き教育しなければならないと考え、数多くの児童雑誌を創刊した。「ハーメルンの笛吹き男」の邦訳が一気に増えるのは、それらの雑誌でこの話が紹介されたからである。この時期の邦訳では、戦前の邦訳が為政者を批判しない内容であったのは異なり、市長は人々から厳しく糾弾される。人々はネズミの害を解決できないことに対して「市長を辞めさせるぞ」と脅したり、「子どもが消えたのは市長のせいだ」と子どもが消えた責任を追及したりする。人々が為政者を厳しく批判するようになるのである。これは戦争に対する反省から生まれた改変であろう。児童文学者たちはこの話を通して子どもたちに、為政者の言いなりにならず、その政策を正しく判断し、間違っているときは間違っていると言えるように育ててほしいと願ったのであろう。

さらに第2期の邦訳では、笛吹き男は心優しい人物で子どもの味方であると語られる。第1期では得体のしれないよそ者として描かれていた笛吹き男が、まるで正義の味方であるかのように描かれるのである。戦時中は「よそ者」、つまり「外国人」は敵であったため、よそ者である笛吹き男も怪しい謎の人物として描かれていた。戦後では、笛吹き男がよそ者であるか否かということよりも、笛吹き男の言動が正しいか否かに判断の基準が置かれている。ハーメルンの町のためにネズミを退治してくれた笛吹き男は、得体の知れない人間どころか、町を救ってくれた英雄なのである。そのため、町の人々は約束を破った市長を辞めさせて、笛吹き男を市長にしようとするのである。

高度経済成長が訪れた第3期では、日本の家族のあり方が変わってきて、新しい近代家族の価値観が「ハーメルンの笛吹き男」の邦訳にも現れるようになる。「近代家族」にあって、子どもはかけがえのないものとしてとらえられるようになる。その価値観に呼応するように第3期の邦訳には「子どもが大切だ」という言葉が出現するようになる。ここでは、子どもはお金よりも何よりも大切なかけがえのない存在であると強調されるのである。

また、第3期の邦訳では母親と父親の言動が区別されるようになる。子どもたちが町から連れ去られると、母親のみが涙を流し、父親は泣かない。高度経済成長によりサラリー

マンが増えた日本では、男が外で働き女が家を守るという性別役割分業が規範となった。その結果、近代社会が求める「男らしさ」「女らしさ」、いわゆるジェンダー観が邦訳のなかに盛り込まれるのである。

昭和期の邦訳は時代によって内容が改変されていった。平成期になると「ハーメルンの笛吹き男」はどのように改変されるのだろうか。それとも、改変されることはないのだろうか。次章では、平成期における「ハーメルンの笛吹き男」の邦訳について見ていくことにする。

## 第6章 平成期における「ハーメルンの笛吹き男」の邦訳

### 1. 邦訳の概観

平成期に「ハーメルンの笛吹き男」の邦訳は51話<sup>95</sup>～<sup>145</sup>存在する。そのうち1番多いのはブラウニング版で25話ある。2番目に多いのはいずれの版にも分類できない不明版で18話ある。1番少ないのがグリム兄弟版とラング版で、それぞれ4話ずつある。

平成期には戦争はなかったが、自然災害が多く、青少年の犯罪などが注目された。1991（平成3）年2月にバブルが崩壊すると、日本は就職氷河期に突入した。不況が続くなか、1995年（平成7）年1月には阪神淡路大震災が起こり、3月にはオウム真理教による地下鉄サリン事件が起こった。2000（平成12）年前後には、世間の注目を集める少年事件が多発し、犯行を起こした17歳前後の子どもたちは「キレる17歳」と呼ばれ、「17歳」が流行語大賞のトップテンの1つに選ばれた<sup>441</sup>。

平成期の邦訳をまとめたのが、下記の【表14】である。

### 2. 平成期の邦訳の一覧表【表14】（物語集のみ、邦訳者の名前が不明の場合は監修者の名前を入れた）

番号	出版年月	媒体	訳者／編者	話の題名	収録本	出版社	分類
<sup>95</sup>	1989年10月 (平成元年)	絵本	上地ちづ子	「ハメルンのふえふき」	『ハメルンのふえふき（こわいお話）』（世界子ども名作100第14巻）	学習研究会	B改変
<sup>96</sup>	1989年11月 (平成元年)	絵本	金関寿夫	(書名と同じ)	『ハーメルンの笛ふき』	ほるぷ出版	B改変
<sup>97</sup>	1990年2月 (平成2年)	本	桜井信夫	「ハーメルンのふえふき男のなぞ」	『オオカミにそだてられた子ども』（ほんとうにあった不思議な話3）	あすなろ書房	G忠実
<sup>98</sup>	1990年9月1日 (平成2)	戯曲	山崎和男	「ハンメルンの笛吹き」	『小四教育技術』9月号	小学館	不明
<sup>99</sup>	1990年9月10日 (平成2年)	戯曲	野上彰 (2冊目)	「ハンメルンの笛ふき」	『小学生小さい劇の本 名作劇 5・6年』	国土社	B改作
<sup>100</sup>	1991年10月 (平成3年)	絵本	香山美子	(書名と同じ)	『ハメルンのふえふき』（世界の昔話7）	チャイルド本社	B忠実
<sup>101</sup>	1992年5月 (平成4年)	絵本	森峰あきら	「ハーメルンのふえふき」	『お月さまのひとりごとのお話』（くもんの読み聞かせ絵本）	くもん出版	不明
<sup>102</sup>	1992年6月 (平成4年)	絵本	平田昭吾 (1冊目)	(書名と同じ)	『ハメルンのふえふき』（名作アニメ絵本シリーズ74）	永岡書店	B改変
<sup>103</sup>	1993年1月 (平成5年)	本	辻真先	「ハメルンのふえふき」	『本当にあったような世界のふしぎ話』（どきどき・わくわくシリーズ）	学習研究社	不明
<sup>104</sup>	1993年7月 (平成5年)	絵本	矢部美智代 (1冊目)	(書名と同じ)	『ハーメルンのふえふき』（新ディズニーアニメランド26）	講談社	B改作
<sup>105</sup>	1993年11月 (平成5年)	雑誌	大石真	「ハーメルンのふえふき男」	『2年の読み物特集』下	学習研究社	L改変

106	1993年、月不明 (平成5年)	絵本	矢部美智代 (2冊目)	(書名と同じ)	『ハメルンの ふえふき』 (ワンダー名作館6)	世界文化社	B改変
107	1994年5月 (平成6年)	絵本	西本鶏介 (4冊目)	(書名と同じ)	『ハメルンの ふえふき』 (おはなし世界旅行2)	チャイルド 本社	不明
108	1994年7月 (平成6年)	本	福光えみ子 (2冊目)	「ハメルンのふえふき」	『子どものための世界のお話』	新読書社	B改作
109	1995年、月不明 (平成7年)	本	矢部美智代 (3冊目)	「ハメルンの笛ふき ウィリー少年のために」	『こどものための世界の名作 愛と感動の物語』 (別冊家庭画報)	世界文化社	B忠実
110	1996年6月 (平成8年)	絵本	末吉暁子	(書名と同じ)	『ハーメルンのふえふきおとこ』 (世界名作えほんライブラリー)	フレーベル 社	G改変
111	1998年12月 (平成10年)	絵本	矢部美智代 (4冊目)	「ハーメルンの笛吹き」	『おはなしきかせてディズニー名作100話』 第9集	講談社	B改作
112	1999年3月 (平成11年)	戯曲	生越嘉治 (2冊目)	「ハーメルンの笛ふき」	『3~4年生の劇の本 II』	あすなろ書 房	B改作
113	2000年4月 (平成12年)	物語集	こわせたまみ	「ハーメルンの笛吹き」	『子どもの心に伝えたいお話356+1 10・11・12月』	フレーベル 館	B改変
114	2000年11月 (平成12年)	物語集	西本鶏介 (5冊目)	「ハーメルンのふえふき男」	『幼児のためのよみきかせおはなし集2』	チャイルド 本社	不明
115	2001年4月 (平成13年)	本	ときありえ	「ハメルンの笛ふき」	『世界のむかし話 二年生』 (学年別・新おはなし文庫)	偕成社	L忠実
116	2003年9月 (平成15年)	絵本	長田弘	(書名と同じ)	『ハーメルンの笛吹き男』	童話館出版	B忠実
117	2004年、月不明 (平成16年)	絵本	千葉幹夫 (1冊目)	「ハーメルンのふえふき男」	『よみきかせおはなし絵本3』 (むかしばなし・名作20)	成美堂出版	B改変
118	2005年11月 (平成17年)	絵本	不明	(書名と同じ)	『ハメルンのふえふき』 (おはなしチャイルドリックエストシリーズ 11月)	チャイルド 本社	L改変
119	2005年12月14日 (平成17年)	物語集	高橋啓	「笛吹き男」	『365日のベッドタイム・ストーリー』	飛鳥新社	不明
120	2005年12月16日 (平成17年)	本	富士川義之	「ハーメルンの笛吹き男」	『対訳ブラウニング詩集』	岩波書店	B忠実
121	2006年3月 (平成18年)	絵本	平田昭吾 (2冊目)	(書名と同じ)	『ハメルンのふえふき』 (よい子とママのアニメ絵本63)	ブティック 社	B改作
122	2008年、月不明 (平成20年)	本	おおつかのりこ	「ハーメルンのふえふき男」	『あかいろの童話集』 (アンドルー・ラング世界童話集 第2巻)	東京創元社	L忠実
123	2009年10月 (平成21年)	物語集	千葉幹夫 (2冊目)	「ハーメルンの笛吹き」	『母と子のおやすみまえの小さなお話365』	ナツメ社	不明
124	2010年3月 (平成22年)	絵本	池田香代子	(書名と同じ)	『ハーメルンの笛吹き男』	BL出版	G忠実



125	2010年11月 (平成22年)	物語集	上山智子	「ハーメルンの 笛ふき」	『母と子の読み聞かせ世界 のお話120』	ナツメ社	B改変
126	2010年12月 (平成22年)	物語集	西本鶏介 (6冊目)	「ハーメルンの 笛ふき」	『男の子がだ〜いすきな お話』(母と子の読み聞か せえほん)	ナツメ社	B改変
127	2011年3月 (平成23年)	物語集	田島信元 監修	「ハーメルンの 笛ふき男」	『子どもが眠るまえに読ん であげたい365のみじかい お話』	永岡書店	不明
128	2011年9月 (平成23年)	物語集	千葉幹夫 (3冊目)	「ハーメルンの 笛吹き」	『ママおはなしよんで幼子 に聞かせたいおやすみまえ の365話』	ナツメ社	不明
129	2011年12月 (平成23年)	物語集	主婦の友社編	「ハーメルンの 笛ふき」	『頭のいい子を育てるおは なし366』	主婦の友社	B改変
130	2012年9月 (平成24年)	物語集	西潟留美子	「ハメルンの笛 ふき男」	『考える力を育てるお話 366』	PHP研究所	不明
131	2012年12月 (平成24年)	物語集	千葉幹夫 (4冊目)	「ハーメルンの 笛ふき男」	『母と子の心がふれあう 名作のきらめき365話』	ナツメ社	B改変
132	2013年7月 (平成25年)	物語集	舟橋愛	「ハーメルンの 笛吹き男」	『おやすみまえのちいさな ちいさなお話90 考える力 を育むお話』	東京書店	不明
133	2014年12月3日 (平成26年)	物語集	長井理佳	「ハーメルンの ふえふき男」	『考える力を育てる 元気 な男の子のお話』(母と子 のおやすみまえの小さなお 話)	ナツメ社	不明
134	2014年12月26日 (平成26年)	物語集	早乙女忠 (2冊目)	「ハーメルンの 笛ふき」	『強くやさしい心が育つ！ 男の子に贈りたい名作』	PHP研究所	B忠実
135	2015年2月 (平成27年)	絵本	いもとよう こ	(書名と同じ)	『ハーメルンのふえふき』	金の星社	B改変
136	2015年6月 (平成27年)	物語集	秋田喜代美 監修	「ハーメルンの 笛吹き」	『こころを育てるおはなし 101』	高橋書店	不明
137	2015年11月 (平成27年)	物語集	こうのみほこ	「ハーメルンの 笛吹き男」	『0歳〜6歳よみきかせ考え る力を育てるお話90』	東京書店	不明
138	2016年1月 (平成28年)	雑誌	石津ちひろ	「ハーメルンの ふえふきおと こ」	『おひさま』2016年2/3月 号	小学館	不明
139	2016年3月 (平成28年)	物語集	芹澤健介	「ハーメルンの 笛ふき」	『考える力を伸ばす！ 心 を育てる！ 読み聞かせ 366話』	新星出版社	B改変
140	2016年4月 (平成28年)	本	間所ひさこ (2冊目)	「ハーメルンの ふえふき男」	『ジャックと豆の木など15 話』(教科書にでてくるせ かいのむかし話2)	あかね書房	B改変
141	2016年12月 (平成28年)	物語集	ささきあり	「ハーメルンの ふえふき」	『おんなのこのめいさくえ ほんベストセレクション 80』	西東社	不明
142	2017年2月 (平成29年)	物語集	小学館編	「ハーメルンの 笛吹き」	『心やさしく賢い子に育 つみじかいおはなし366』	小学館	不明

143	2018年6月 (平成30年)	本	高津美保子	「ハーメルンの 笛ふき男」	『飼育小屋のさげび声』 (怪談オウマガドキ学園 28)	童心社	G改変
144	2018年7月 (平成30年)	物語集	瀧靖之 監修	「ハーメルンの 笛吹き男」	『脳の専門家が選んだ「賢 い子」を育てる100のもの がたり』	宝島社	不明
145	2019年3月 (平成31年)	絵本	中脇初枝	(書名と同じ)	『ハーメルンのふえふき』 (はじめての世界名作えほ ん47)	ポプラ社	B改変

### 3. それぞれの邦訳の概要と改変箇所について

#### 1) 「ブラウニング版」の邦訳 (25話)

##### (1) 忠実な邦訳について (5話)

ブラウニング版の内容に忠実、もしくはほぼ忠実な話は5話<sup>100</sup><sup>109</sup><sup>116</sup><sup>120</sup><sup>134</sup>ある。

香山美子の『ハメルンのふえふき』<sup>100</sup>は1991(平成3)年10月にチャイルド本社から出版された絵本である。扉に「ブラウニングの物語詩より」とあるように、話の内容はブラウニング版に忠実である。ただし、聖書の1節を引用する場面やネズミが1匹だけ生き残る場面は省かれている。町に帰って来る子どももブラウニング版と同様「あしが わるくておくれてしまった おとこのこ」(32頁)である。教訓はない。

矢部美智代(3冊目)の「ハメルンの笛ふき ウィリー少年のために」<sup>109</sup>は1995(平成7)年に世界文化社から出版された『こどものための世界の名作 愛と感動の物語』に収録されている。この本は婦人向け雑誌『家庭画報』の別冊である。書名に「こどものための」とあるように、この本は読者である女性自身のためというよりも、子どもに読み聞かせるためのもので、母親が子どもに話を語る目的で発行されたものである。この本には全部で14話が収録されており、そのなかには出典が「グリム兄弟より」と書かれた話も2話収録されている。矢部訳(3冊目)<sup>109</sup>の出典はグリム兄弟ではなく「ロバート・ブラウニング」(3頁)になっている。ブラウニングの詩に忠実な邦訳で、改変箇所や省略箇所は皆無である。詩ではなく散文だが、ブラウニングの詩と同様、15連に分けられている。巻末にはブラウニングの生涯についてと、ブラウニング版とグリム兄弟版の内容の違いについての解説が載せられている。

長田弘の『ハーメルンの笛ふき男』<sup>116</sup>は2003(平成15)年9月に童話館出版から出版された絵本である。これは1936年にスイスで出版されたものを邦訳し、まったく同じ装丁で出版したものである。底本では詞に<sup>ことば</sup>ロバート・ブラウニングの詩がそのまま使用されており<sup>442</sup>、長田訳<sup>116</sup>はそれを忠実に邦訳している。本文はブラウニング版で、改変箇所や省略箇所は皆無である。ブラウニングの原詩と同様、本文は15連に分けられているが、詩ではなく散文の形で訳されている。

富士川義之の「ハーメルンの笛吹き男」<sup>120</sup>は2005(平成17)年12月に岩波書店から出版された『対訳ブラウニング詩集』に収録されている。書名のとおりに、ブラウニングの詩が左ページに、その邦訳が右ページに對になるように収録されている。ブラウニングの15連の詩が忠実に訳されており、改変箇所や省略箇所はない。平成期の邦訳のうち、もっともブラウニング版に忠実な訳といえる。

早乙女忠（2冊目）の「ハーメルンの笛ふき」<sup>[134]</sup>は2014（平成26）年12月にPHP研究所から出版された『強くやさしい心が育つ！ 男の子に贈りたい名作』に収録されている。この話は、早乙女訳（1冊目）<sup>[73]</sup>の文章をそのまま収録し直したもので、ブラウニング版に忠実な七七調の詩である。

ブラウニング版に忠実なこれら5話のうち4話<sup>[109]</sup> <sup>[116]</sup> <sup>[120]</sup> <sup>[134]</sup>では、省略されている場面は皆無である。昭和期までの邦訳では、ブラウニング版に忠実な訳であっても話の枝葉が改変されたり省略されたりしていた。たとえば、ネズミが1匹だけ生き残ってネズミの国へ帰る場面や、聖書の1節を引用する場面などは省略されることが多く、報酬の金額などはブラウニング版の「1000ギルダー」ではなく「1000円」や「金貨いっぱいのお金」というように改変されることが多かった。一方、平成期の邦訳では、5話中4話は省略箇所がなく、15の章分けも忠実に保持されている。残り1話（香山訳<sup>[100]</sup>）では場面の省略はあるものの、改変箇所はない。平成期になると、忠実な邦訳はより忠実な訳になっているといえる。平成期に至るまでに多くのブラウニング版が出版されてきたので、平成期には省略のない完全な訳を紹介することが可能となったのであろう。それによって、これまでに出版されたブラウニング版の話と差別化をはかり、より多くの読者を獲得しようとしたとも考えられる。

## (2) 改変された話について（14話）

ブラウニング版の改変版は下記の14話<sup>[95]</sup> <sup>[96]</sup> <sup>[102]</sup> <sup>[106]</sup> <sup>[113]</sup> <sup>[117]</sup> <sup>[125]</sup> <sup>[126]</sup> <sup>[129]</sup> <sup>[131]</sup> <sup>[135]</sup> <sup>[139]</sup> <sup>[140]</sup> <sup>[145]</sup>であり、平成期のブラウニング版25話の過半数を占めている。それぞれの話の内容は下記のとおりである。

上地ちづ子の「ハメルンの笛吹き」<sup>[95]</sup>は1989（平成元）年10月に学習研究会から出版された絵本『ハメルンのふえふき』に収録されている。この絵本はイタリアのファブリ社から出版された絵本を、装丁などをまったく同じにしたまま邦訳したものである。「ブラウニング・原作」（目次、5頁）と明記されているようにブラウニング版の内容だが、改変されている箇所もある。ブラウニング版では笛吹き男は赤と黄の縦じまの服を着ているが、ここでは笛吹き男は「へんなぼうしをかぶり、へんなくつをはいて」（10頁）いる。町から子どもたちが連れ去られた後、男の子がひとりだけ町に戻ってくるが、この子は生まれつき足が悪いのではなく、笛吹き男について行く途中で崖からうまく飛び移れなくて足の骨を折って歩けなくなるのである。市長は自分が笛吹き男との約束を守らなかったせいで子どもたちが連れ去られてしまったので、町の人たちにあわせる顔がないといってどこかに隠れる。子どもたちがどこへ連れて行かれたかは不明のままで話は終わる。これらの改変は、上地によるものではなく、ファブリ社によるものである。解説があり、そこでは日本女子大学家政学部児童学科教授の安藤美紀夫が、この話はハーメルンから子どもが消えた事件が元になっていること、子どもが消えた理由にはいくつも説があること、イギリスの詩人ブラウニングが再話したことなどについてを解説している。

金関寿夫の『ハーメルンの笛ふき』<sup>[96]</sup>は1989（平成元）11月にほるぷ出版から出版された絵本である。この絵本は1988年にロンドンで出版された絵本を、装丁を同じままにして邦訳し、出版したものである。話の骨子はブラウニング版だが、いずれの場面も加筆され、より具体的な内容に改変されている。笛吹き男の服装や、1匹だけ生き残るネズミの

話などはブラウニング版の内容だが、笛吹き男が再び町へやってくる日付やその時の笛吹き男の服装はグリム兄弟版の内容である。町に残る子どもは足が悪い子がひとりだけである。町長も娘を連れ去られてしまい、14日間家に閉じこもる。その後出てきた町長は人相が変わっている。子どもたちは「すばらしい不思議な国」(29頁)に連れて行かれたという。絵本の最後には「ほんとうはなにがおこったのか?」という文章が3ページにわたって掲載され、1284年にハーメルンから130人の子どもが消えたこと、1984年に事件から700年目を記念する行事が行なわれたこと、事件の真相についてはいくつもの説があり、近隣の大地主が農奴にするために誘拐させたという説、子ども十字軍に参加させるために連れ去ったという説、子どもたちは黒死病で死んだという説、子どもたちは戦闘に巻き込まれて死んだという説などがあるということだけでなく、当時のヨーロッパではネズミの害があるのは珍しくないこと、ドイツではグリム兄弟の話が有名であること、英語圏の子どもたちにはブラウニングの詩が良いだろうということなどが書かれている。「英語圏の子どもたちにはブラウニングの詩が良いだろう」というのは、この絵本が元々ロンドンで出版されたのでそう考えられたのであろう。金関は上記のようなコメントもそのまま訳している。

平田昭吾(1冊目)の『ハメルンのふえふき』<sup>[102]</sup>は1992(平成4)年6月に永岡書店から出版された絵本で、「名作アニメ絵本シリーズ」の1冊である。話の筋はほぼブラウニング版だが、下記の箇所が改変されている。約束の報酬は「1000ギルダー」ではなく「きんかをひとふくろ」(17頁)である。ネズミを操るのは笛吹き男の能力ではなく、「まほうのふえ」(15頁)の力によるものである。ネズミはすべて溺死する。報酬を支払ってもらえなかった笛吹き男は町から出て行き、その後「町のおまつりの日」(33頁)に再び町にやって来て子どもたちを連れ去る。町に戻ってくる子どもは「足の おそい 男の子が、ひとりだけ」(41頁)である。もっとも大きく改変されている箇所は話の結末で、山のふくろうが読者に向かって「子どもたちは、山のなかの 子どもの 国で、うそをつかない おとなに なって もどってくるよ」(45頁)と言う。解説ページではグリム兄弟版が簡潔に紹介されている。この絵本は縦横の長さが15cm程度で小さく、本屋の店先にある回転式ラックに置かれているものである。値段も360円と廉価で、大判の絵本に比べて、親が子どもに買い与えやすい本になっている。

矢部美智代(2冊目)の『ハメルンのふえふき』<sup>[104]</sup>は1993(平成5)年に世界文化社から出版された絵本である。「原作/ブラウニング」(扉)と書かれているが、ブラウニング版の内容にラング版の内容が一部混成されたものである。笛吹き男の要求する報酬についてはラング版の内容で、ネズミ1匹につき1マルクである。また、ラング版のように白いネズミが現れて、ネズミの数が「9せん9ひゃくの 9せんばいと 9じゅう9ひき」(19頁)と告げる。絵本の見返しにはブラウニングの詩の1節「世はすべて事もなし」と、ブラウニングについての簡潔な説明が書かれている。

こわせたまみの「ハーメルンの笛吹き」<sup>[113]</sup>は2000(平成12)年4月にフレーベル館から出版された『子どもの心に伝えたいお話356+1 10月・11月・12月』に収録されている。ブラウニング版の内容を見開き2ページに収まるように簡潔にまとめた話である。笛吹き男が自己紹介する場面、1匹だけネズミが生き残る場面、子どもたちが通った通りが舞楽禁止通りと名付けられる場面などは省略されている。笛吹き男は赤と黄の服を着て、さら

に「長い靴に変な帽子を」（16頁）被っている。子どもたちは全員連れ去られ、ひとりも帰ってこない。本文下部には解説があり、「ハーメルンの笛吹き男」の伝説について簡単に説明している。

千葉幹夫（1冊目）の「ハーメルンのふえふき男」[117](#)は2004（平成16）年に成美堂出版から出版された『よみきかせおはなし絵本3』に収録されている。話の内容はブラウニング版だが、改変されている箇所もある。ハーメルンでは「ねこも 犬も ねずみに ころされ」たと書かれている（101頁）。ネズミはすべて溺死する。報酬を支払ってもらえなかった笛吹き男は「わたしは、やくそくを まもらない 人が 大きらいです。こうかいますよ」と言う。子どもは全員連れ去られ、町に戻って来る子どもはひとりもない。

上山智子の「ハーメルンの笛ふき」[125](#)は2010（平成22）年11月にナツメ社から出版された『母と子の読み聞かせ 世界のお話120』に収録されている。見開き1ページの短い話で、ブラウニング版の話著しく短縮した話である。ブラウニング版では笛吹き男が報酬について話すが、上山訳[125](#)では笛吹き男が町へやって来る前に、市長が「ネズミを退治した者に金貨1000枚の賞金を与える」というお触れを出す。市長が市議会議員たちと会議をする場面、笛吹き男が自己紹介する場面、1匹だけネズミが生き残る場面、ネズミが消えて人々が喜ぶ場面などは省略されており、他の場面も簡略化されている。帰って来る子どもはひとりもおらず、「約束どおりに金貨をわたせばよかった」（227頁）とって市長が後悔し、大人たちが嘆き悲しむ場面で話は終わる。

西本鶏介（6冊目）の「ハーメルンの笛ふき」[126](#)は2010（平成22）年12月にナツメ社から出版された『男の子がだ〜いすきなお話』に収録されている。話の骨子はブラウニング版だが、改変されている箇所もある。ネズミ退治の報酬は、ブラウニング版では1000ギルダだが、ここでは笛吹き男の「望みどおりのお金」（85頁）となっている。1匹だけネズミが生き残る場面や、聖書の文が引用される場面などは省略されている。町に戻ってきた子どもは、ブラウニング版では足の悪い子だがここでは「行列のいちばん最後にいた男の子」（89頁）に変更されている。

主婦の友社編の「ハーメルンの笛ふき」[129](#)は2011（平成23）年12月に主婦の友社から出版された『頭のいい子を育てるおはなし366』に収録されている。1ページに収められた短い話で、ブラウニング版を簡略化した内容である。ただしここでは、笛吹き男は黄と赤の服ではなく「サーカスにいるみたいな服」（334頁）を着ている。子どもたちは全員消えてひとりも帰ってこない。大人たちは「約束を守らなかった罰だ」（334頁）と言って後悔する。本文の下部に「POINT」として「約束をやぶった代償は、とりかえしのつかないほど大きいものでした」（334頁）と書かれている。

千葉幹夫（4冊目）の「ハーメルンの笛ふき男」[131](#)は2012（平成24）年12月にナツメ社から出版された『母と子の心がふれあう名作のきらめき365話』に収録されている。ブラウニング版を簡略化した内容である。約束の報酬を支払ってもらえなかった笛吹き男は、「わたしは、約束を守らない人が大きらいです」（257頁）と言って笛を吹き、子どもたちを連れ去る。町に戻ってくる子どもはひとりもない。

いもとようこの『ハーメルンのふえふき』[133](#)は2015（平成27）年2月に金の星社から出版された絵本である。原作はグリム兄弟となっているが、内容はブラウニング版を改変したものである。この絵本では、報酬の支払いを求めた笛吹き男に対して、町長、議員、町

の人々がひどい言葉を投げかける。しかし笛吹き男は怒らず、冷静なままで笛を吹く。子どもたちは全員町から連れ去られ、ひとりも帰ってこない。この絵本はブラウニング版の教訓を前面に押し出しており、話の最後に「やくそくをしたならば／やくそくは まもらなければなりません」(30頁)と書かれ、カバーの見返しには次のような言葉が添えられている。「あなたへ……／人びとは困ったことがあると、なんとか救ってほしい！ そのためにはなんでもします！ やくそくします！／……というふうになります。／でも、いざその困ったことが去ってしまうと、けろりとわすれてしまいやくそくを守らない。／……ということがあります。／この『ハーメルンのふえふき』を教訓にしましょう！／いもとようこ」と書かれている。さらに帯にも中央に1番大きな文字で「やくそくは／まもらなければなりません」と書かれている。

芹澤健介の「ハーメルンの笛ふき」<sup>[139]</sup>は2016(平成28)年3月に新星出版社から出版された『考える力を伸ばす！ 心を育てる！ 読み聞かせ366話』に収録されている。1ページのみ短い本文で、内容はブラウニング版を簡略化したものである。ここでは笛吹き男は「サーカスのピエロのような服」(236頁)を着ている。町に戻ってくる子どもはひとりもいない。

間所ひさこ(2冊目)の「ハーメルンのふえふき男」<sup>[140]</sup>は2016(平成28)年4月にあかね書房から出版された『ジャックと豆の木など15話』に収録されている。間所の訳本は1969(昭和44)年にも出版されている<sup>[58]</sup>。1冊目の訳<sup>[58]</sup>は低学年向けのもので、ラング版が簡略化されたものであった。一方、2冊目の間所訳<sup>[140]</sup>はブラウニング版とラング版を混成し、さらに改変を加えた内容になっている。ただし、話の結末はブラウニング版であるためブラウニング版に分類した。笛吹き男は「はでな色のふくに、とんがりぼうし」(54頁)を被っている。報酬の額は、ラング版のようにネズミ1匹につき銀貨1枚である。間所訳(1冊目)<sup>[58]</sup>では町に帰って来る子どもはひとりもいないが、間所訳(2冊目)<sup>[140]</sup>では「足のわるい男の子」(57頁)が町に帰って来る。男の子は「みんなは楽しいところへ行ったのに、自分だけ取り残されてしまった」といって嘆いて話は終わる。これはブラウニング版の内容である。

中脇初枝の『ハーメルンのふえふき』<sup>[143]</sup>は2019(平成31)年3月にポプラ社から出版された絵本で、「はじめての世界名作えほん」シリーズの1冊である。この絵本はサイズが縦18cm、横19cmと小さく、本屋の店先にある回転式ラックによく置かれているものである。値段も350円と廉価で、大判の絵本より手軽で親が子どもに買い与えやすい本である。話の筋はブラウニング版で、比較的忠実な内容になっているが、子どもたちは全員洞穴の中に入り、町に帰って来る子どもはひとりもいない。この絵本は平成期の邦訳のなかで、1番最後に出版された邦訳である。

### (3) 改作された話について(6話)

ブラウニング版の改作版は下記の6話<sup>[99][104][108][111][112][121]</sup>ある。

野上彰(2冊目)の「ハンメルンの笛ふき」<sup>[99]</sup>は1990(平成2)年9月に国土社から出版された『小学生小さい劇の本 名作劇 5・6年』に収録されている。この本は書名からわかるように小学生のための脚本集で、収録されている脚本はいずれも上演時間が5分から15分程度の短いものである。野上は1946(昭和21)年にも「ハンメルンの笛吹き」<sup>[15]</sup>という

邦訳本を出版している。野上訳（1冊目）[103](#)はブラウニング版に忠実な内容の詩である。一方、今回の野上訳（2冊目）[109](#)は、同様に「原作 ブラウニング」と明記されているが、内容はブラウニング版をもとに大幅に改変したものである。はじめにネズミ捕り男のカールと犬使いのペーターが登場するが、2人ともネズミ退治に失敗する。困ったハーメルンの人々はヨーロッパ中に使いを出して、ネズミを退治してくれる人を募集する。スイスからネズミ退治のための薬が届くがやはりネズミを駆除することはできない。ある日、「赤と白のだんだらじま」（61頁）の服を着た笛吹き男がやってくる。彼はロシアからやってきたという。町長が「ネズミを1日で退治すれば200万円、2日ならば150万円、3日ならば100万円支払う」と言うので、笛吹き男は1時間で退治をするという。男が笛を吹くと多くのネズミが現れ、男の後について川の中へ入る。最後尾のネズミは足が悪く、松葉杖をついている。その後、約束の報酬を支払ってもらえなかった笛吹き男が笛を吹くと、子どもたちが全員、男の元へやってくる。子どもたちは「おかしの国」「ゆめの国」（66頁）に行くと口々に言いながら、2つに割れた岩の中に入って行く。町に戻ってくる子どもはひとりもいない。最後にナレーションが「あの子どもたちは、どこへ消えてしまったのでしょうか。けっして、しんぱいはありません」（66頁）と言って、ハンガリーにこの子どもたちの子孫がいると観客に向かって語る。

矢部美智代（1冊目）の『ハーメルンのふえふき』[104](#)は1993（平成5）年7月に講談社から出版されたディズニー絵本である。1965（昭和40）年に森いたる訳[52](#)が出版されているので、この絵本は日本で出版された2冊目のディズニー絵本となる。森訳[52](#)では笛吹き男が笛を吹いてチーズを出現させたり子どもたちが山の中の遊園地に行ったりする。矢部訳[104](#)では笛吹き男は笛を吹いてチーズを出したりはしない。しかしその後の展開は森訳[52](#)と同様である。市長と町の人々は笛吹き男を町から締め出し、市門の上に登って笛吹き男を嘲笑う。町の人々が嘘つきなので笛吹き男は「町の 子ども たちが かわいそうだ」（16頁）と言って笛を吹く。「なまけもののおとなに はたらかされて いた 子ども たち」（16頁）は笛吹き男の後をついて行き、山の中の「しあわせの くに」（25頁）で働かず、嘘もつかず、「いつまでも なかよく たのしく」（24頁）暮らす。絵が大きく配置され、本文の文字数が少ないためか、足の悪い子についてや山の中の様子については詳しくは語られない。挿絵では山の中に観覧車や滑り台やシーソーなどが描かれているが、文では「しあわせの くに」（24頁）とのみ書かれている。

福光えみ子（2冊目）の「ハメルンのふえふき」[108](#)は1994（平成6）年7月に新読書社から出版された『子どものための世界のお話』に収録されている。1950（昭和25）年に発行された福光訳（1冊目）[18](#)と似ているが、今回の訳のほうがブラウニング版に近い作品になっている。笛吹き男は1冊目[18](#)では「トンガリぼうし」を被り「だぶだぶの、ふくろのようなズボン」を履いていたが2冊目[108](#)ではズボンの色がブラウニング版と同じ赤色と黄色のズボンに書き変えられている。また、1冊目[18](#)で約束された報酬は、笛吹き男を市長にするということだったが、2冊目では2袋の金貨になる。報酬をもらえなかった笛吹き男は、「わたしはその金かがひつようです。ともだちがびょうきでこまっているのです」（95頁）と言う。笛吹き男が金貨を欲しがるのは、自分のためではなく友人のためなのである。その後町に帰って来る子どもは、1冊目[18](#)では「びっこのルネ」であったが、2冊目[108](#)では足が悪い「つえをついたフランク」である。「びっこ」という言葉は1981（昭和56）

年、『記者ハンドブック』の第4版に禁止語として記載される<sup>443</sup>。「おし」「つんぼ」「めくら」「びっこ」といった身体に関する差別語が増加したのがこの第4版であった。差別語を禁止語とするという記述はこの第4版においてのみあり、前後の版にはない<sup>444</sup>。

矢部美智代（4冊目）の「ハーメルンの笛吹き」<sup>[11]</sup>は1998（平成10）年12月に講談社から出版された『おはなしきかせてディズニー名作100話』の9巻に収録されている。ディズニー絵本の3冊目で、矢部が手掛けるディズニー絵本としては2冊目である。笛吹き男がネズミを溺死させる場面までの話の筋は矢部訳（1冊目）<sup>[104]</sup>とまったく同じだが、文章は新しく書き換えられている。

生越嘉治（2冊目）の「ハーメルンのふえふき」<sup>[112]</sup>は1999（平成11）年3月にあすなろ書房から出版された『3～4年生の劇の本』に収録されている。生越の戯曲は1987（昭和62）年<sup>[92]</sup>にも出版されているが、この戯曲<sup>[112]</sup>は1冊目の戯曲<sup>[92]</sup>とほぼ同じ内容である。ただし、漢字の表記や、細かい言い回しは書き換えられている。やはり主人公である笛吹き男は3人に増やされており、町に帰って来る子どもはいない設定になっている。

平田昭吾（2冊目）の『ハメルンのふえふき』<sup>[12]</sup>は2006（平成18）年3月にブティック社から出版された絵本である。この絵本は1辺が15cm程度の小型の絵本で、価格も約400円で廉価である。話の骨子はブラウニング版ではあるが、内容は大幅に改変されている。ハーメルンの町にネズミが増えた理由として、町長が町の傍にゴミ捨て場を作ったからだと言われている。そのため、話の冒頭では町長が町の人々から激しく責められる。笛吹き男がネズミを退治し終わると、町の人々は今度は町長と一緒に笛吹き男を非難する。笛吹き男は「こんな うそつきの町には そのうち おそろしいことが おこり、こうかいするぞ」（31頁）と捨て台詞を吐いて町から立ち去る。子どもたちは全員連れ去られ、町へ帰って来る子どもはひとりもいない。親たちは「笛吹き男との約束を守ってればこんなことにならなかったのに」と言って後悔する。町長は町の人々から「おまえが やくそくを やぶったからだ！」（45頁）と罵られ、町長の役職を解任させられる。

## 2) 「グリム兄弟版」の邦訳（4話）

### (1) 忠実な邦訳について（2話）

グリム兄弟版の内容に忠実、もしくはほぼ忠実な話は下記の2話<sup>[97]</sup><sup>[124]</sup>である。

桜井信夫の「ハーメルンのふえふき男のなぞ」<sup>[97]</sup>は1990（平成2）年2月にあすなろ書店から出版された『オオカミにそだてられて子ども』に収録されている。最初にグリム兄弟版の話を紹介した後、ハーメルンの新門にこの出来事について刻まれていること、子どもが消えたという6月26日はお祭りの日で、子どもたちは祭りの火をコッペン山の岩の上に灯そうとして、崖から落ちて事故死したという説があること、ネズミ捕り男や笛吹き男は実在していたこと、舞楽禁止通りが実際にあること、グリム兄弟の『ドイツ伝説集』やブラウニングの詩でこの伝説が有名になったこと、ハーメルンではこの伝説の市民劇があることなどが紹介されている。

池田香代子の『ハーメルンの笛吹き男』<sup>[124]</sup>は2010（平成22）年3月にBL出版から出版された絵本である。2009年にスイスで出版されたドイツ語の絵本を、装丁などまったく同じまま翻訳したもので、扉に「原作 グリム兄弟」、副題に「グリム兄弟『ドイツ伝説集』より」とあるように、グリム兄弟版の内容である。グリム兄弟版ではネズミの害について語られてい



ないが、ここでは町の中にネズミの数が増えて台所や貯蔵庫に現われる様子が書き加えられている。書き加えられた表現はあるが、話の筋や笛吹き男がハーメルンの町を訪れる日付、笛吹き男の服装、帰ってくる子どもたちの様子などについては、いずれもグリム兄弟版に忠実な内容である。舞楽禁止通りはここでは「たたかずの太鼓の道」と訳されている。原著者によるあとがきでは、この話がグリム兄弟の『ドイツ伝説集』に収録されていること、この伝説の真実については異なる解釈がいくつもあることなどが記されている。

## (2) 改変された話について (2話)

グリム兄弟版の改変版は下記の2話<sup>[110]</sup><sup>[143]</sup>である。

末吉暁子の『ハーメルンのふえふきおとこ』<sup>[110]</sup>は1996（平成8）年6月にフレーベル社から出版された絵本である。グリム兄弟版の内容の話だが、ここではネズミは「わるい びょうき」（2頁）を運んでくると語られている。町の人々が「このままではネズミに食べ物を食べられてしまって飢え死にしてしまう」と言って悩んでいると、笛吹き男がやってきてネズミ退治を申し出る。町に帰って来るのは「ふたりの おとこの こ」（24頁）で、ひとりは盲目でもうひとりは口が利けない子である。

高津美保子の「ハーメルンの笛ふき男」<sup>[143]</sup>は2018（平成30）年6月に童心社から出版された『飼育小屋のさけび声』に収録されている。この本は児童向けの文庫本で、怖い話を集めた「怪談オウマガドキ学園」シリーズの1冊である。話の筋はグリム兄弟版だが、改変されている箇所もある。話の冒頭にネズミの害の内容が加筆され、町の人々はネズミのフンで町の衛生状況が悪くなり伝染病がはやる恐れがあるのでネズミを退治しようとする。その後の内容はグリム兄弟版の内容だが、この本が「怪談」を集めた本であるため、笛吹き男は挿絵で虚ろな目をした不気味な男性として描かれている。町に戻ってきた子どもは「数人の子ども」（51頁）である。舞楽禁止通りについての場面や、教会のステンドグラスについての場面も語られている。

## 3) 「ラング版」の邦訳 (4話)

### (1) 忠実な邦訳について (2話)

ラング版の内容に忠実、もしくはほぼ忠実な話は下記の2話<sup>[113]</sup><sup>[122]</sup>である。

ときありえの「ハメルンの笛吹き」<sup>[113]</sup>は2001（平成13）年4月に偕成社から出版された『世界のむかし話 二年生』に収録されている。ラング版に忠実な訳である。子どもたちが消えた後の後日談まで訳されている。あとがきにあたる「『世界のむかし話』について」で、訳者ときは参考図書1冊に野上彰の『ラング世界童話全集』<sup>[68]</sup>を挙げている。これはラングの童話集をそのまま訳しており、ラング版に忠実な訳である。この忠実な訳を参考にしたため、とき訳<sup>[113]</sup>もラング版に忠実な訳となっているのであろう。

おおつかのりこの「ハーメルンのふえふき男」<sup>[122]</sup>は2008（平成20）年1月に東京創元社から出版された『あかいろの童話集』に収録されている。この本は「アンドルー・ラング世界童話集」の2冊目にあたり、ラングの「色の童話集」シリーズを忠実に訳した本である。省略された部分は一切なく、本の最後には各話の英語タイトルと出典がまとめて書かれている。

## (2) 改変された話について (2話)

ラング版の改変版は下記の2話<sup>105</sup><sup>118</sup>である。

大石真の「ハーメルンの ふえふき男」<sup>105</sup>は1993（平成5）年11月に学習研究社から出版された雑誌『2年の読み物特集』下巻に収録されている。「ドイツの でんせつ」（130頁）と書かれており、話の内容はラング版であるが改変されている部分もある。笛吹き男の服装は「黒い ぼうし」（131頁）に「黒い マント」（131頁）に改変され、持っている楽器はバグパイプではなく笛である。ネズミの王は登場せず、ネズミの総数はわからないうままである。子どもたちは全員山腹の中に消えてしまい、ひとりも帰ってこない。

訳者不明の『ハメルンのふえふき』<sup>118</sup>は2005（平成17）年11月にチャイルド本社から出版された絵本である。この本は「おはなしチャイルドリクエストシリーズ」の11月号で、約20cm四方のソフトカバーの絵本である。チャイルド本社は幼児教育に力を入れている出版社で、「おはなしチャイルドリクエストシリーズ」も未就学児を対象にした絵本である。「リクエスト」とあるように、読者から「もう一度読みたい！」という要望があった本が選ばれているので、この『ハメルンのふえふき』も保護者たちに人気であったと考えられる。内容はラング版だが、子どもたちはひとりも帰ってこない。

## 4) いずれの版にも分類できない不明版 (18話)

話が簡略化されすぎたり、改変されすぎたりして、いずれの版にも分類できない不明版は下記の18話<sup>98</sup><sup>101</sup><sup>103</sup><sup>107</sup><sup>114</sup><sup>119</sup><sup>123</sup><sup>127</sup><sup>128</sup><sup>130</sup><sup>132</sup><sup>133</sup><sup>136</sup><sup>137</sup><sup>138</sup><sup>141</sup><sup>142</sup><sup>144</sup>である。

山崎和男の「ハンメルンの笛ふき」<sup>98</sup>は1990（平成2）年9月に小学館から刊行された『小四教育技術』9月号に収録されている。この話は戯曲で、題名には「みんなが参加できる音楽劇脚本」（51頁）と書かれている。ハーメルンは「音楽の大好きな町」（52頁）で、町の人や子どもたちはいつも歌ったり踊ったりしているが、ある日市長が音楽を演奏したり歌を歌ったりすることを禁止する。町が静かになるとネズミが現れて、町中のものを食べ散らかす。笛吹き男がネズミを退治すると、市長は笛吹き男に、「おまえは、町で音楽をかけてにやっただかい人。お礼どころか、ろうや行きだ！」（56頁）と言う。笛吹き男が笛を吹くと、子どもたち、町の人、兵隊たちが踊り出す。市長は音楽を止めると叫ぶが、そのうち音楽につられて歌ったり踊ったりする。その様子を見た人々は、市長が決まりを破ったと言って牢屋に入れようとする。市長はやっと正気を取り戻し、音楽を禁止したことを後悔し許してくれと言うが、町の人々は許さず、牢屋に入れようとする。すると笛吹き男が、市長をかばって「ゆるしてあげよう ねえ みなさん」（58頁）と歌う。市長は、音楽がこんなに素晴らしいものだとは知らなかったと言って謝り、音楽を許すどころか、「音楽をうんとさかんにするおふれ」（58頁）を出す。さらに市長は笛吹き男に約束の100万円を支払う。しかし笛吹き男は「これは音楽の町のためにつかってください」（58頁）と言って辞退する。町の人々は笛吹き男に感謝をし、笛吹き男と町の人々と市長はみんなで楽しく歌ったり踊ったりしているところで話は終わる。

森峰あきらの「ハーメルンのふえふき」<sup>101</sup>は1992（平成4）年5月にくもん出版から出版された『お月さまのひとりごとのお話』に収録されている。出版社名からわかるようにこの本は学習塾「公文」の教育理念に基づいて出版された絵本である。公文教育研究会会長の公文公は本のはじめで、学力の高い子どもたちはいずれも高い読書能力を持っていること、

また胎児期の子どもには歌を聞かせたり読み聞かせをしてあげたりすると良いと述べ、「お子さまの読書能力を高めるために」読んでくださいと述べている。話の出典は「ドイツ伝説」と書かれているが、内容は著しく簡略化され、改変されている。ハーメルンの町ではネズミのせいで、「ペストというおそろしいびょう気」（103頁）が蔓延する。笛吹き男は「六月の聖ヨハネのおまつり」（102頁）のころにハーメルンの町にやってくる。この日はグリム兄弟版では、子どもたちが笛吹き男に連れ去られる日である。笛吹き男はネズミを川の中で溺死させ退治するが、市長や町の人々は約束の報酬を支払わず、「こんどのことは、どうせ、おまえのたくらみだったんだ」「おまえが、あのふえで、この町にねずみをよびよせたんだろう」「おまえは、きっとあくまのつかいにちがいない」と罵る。子どもたちには名前が付けられており、ハンス、ウィルヘルム、リーゼル、マリアなどといった名前である。子どもたちの後を大人たちは追いかけるが、山へ続く道の途中で追いつく。市長は笛吹き男に、約束の報酬を支払うから子どもを返してくれと頼む。笛吹き男が「もうおそい」（107頁）と返答すると同時に地震が起き、笛吹き男と子どもたちは地面の中に飲み込まれるようにして消える。

辻真先の「ハメルンのふえふき」<sup>[103]</sup>は1993（平成5）年1月に学習研究社から出版された『本当にあったような世界のふしぎ話』に収録されている。簡略化された話であるため、グリム兄弟版、ブラウニング版、ラング版のいずれの版を使用したのかは特定できない。ネズミの害に悩むハーメルンの人々は「町をすてて、にげ出すほかはない」（85頁）と言って嘆く。笛吹き男は「六月の、ある日」（87頁）に町にやってくる。子どもたちは、町長たちが教会へ行っている日曜日の朝に連れ去られる。町に帰って来たのは朝寝坊した子どもが2人だけである。

西本鶏介（4冊目）の『ハメルンの ふえふき』<sup>[107]</sup>は1994（平成6）年5月にチャイルド本社から出版された絵本である。西本はこれまでに「ハーメルンの笛吹き男」の邦訳を3冊出版しているが、この話はいずれの話とも内容が異なっている。表紙の見返しには「これは、グリムの『伝説集』に収められている、事実に基づいたお話です」と書かれているが、内容はグリム兄弟版とブラウニング版を混成し、さらに西本による改変が加えられたものである。話の冒頭ではブラウニング版と同様、町の人々が市長の元へ詰めかけるが、その後やってきた笛吹き男はグリム兄弟版の服装である「いろんな いろの まじった まだらふく」（10頁）を着ている。町に帰って来るのは行列の最後にいた男の子である。話の最後では町長と町の人々は「まい日 なみだを ながして／子どもたちの ぶじを」（32頁）祈る。

西本鶏介（5冊目）の「ハーメルンのふえふき男」<sup>[114]</sup>は2000（平成12）年11月にチャイルド本社から出版された『幼児のためのよみきかせおはなし集2』に収録されている。話の内容は著しく簡略化されているためいずれの版であるかは確定できない。町にやってきた笛吹き男の服装は「黒いぼうし」（79頁）と「黒いマント」（79頁）である。ネズミ退治の報酬を支払ってもらえなかった笛吹き男は怒って子どもたちを連れ去る。残った子どもは、行列の一番後ろにいた男の子のみである。消えた子どもたちの行き先については語られない。

高橋啓の「笛吹き男」<sup>[119]</sup>は2005（平成17）年12月に飛鳥新社から出版された『365日のベッドタイム・ストーリー』に収録されている。この本はアメリカの児童文学作家クリス

ティーン・アリソンの『365日ベツトタイム・ストーリー』（365 Bedtime Stories）<sup>445</sup>の邦訳である。アリソンは子どもへの読み聞かせについて大きな関心を寄せていた人物で<sup>446</sup>、前書きにあたる「読者のみなさんへ」で「もしもあなたがお母さん、お父さんなら、ぜひ、あなたのお子さんに、この本を読み聞かせてあげてください」と述べている。当時アメリカではストーリー・テリングに対する関心が高まっており<sup>447</sup>、そのためのハウ・ツー本も出版されていた。アリソンの本が出版されたのも、そのためであろう。話の内容は、「ハーメルンの笛吹き男」を基に改作された話である。ドイツではなくイギリスの話であるとされ、話の舞台はハーメルンではなく「ニュータウン」（289頁）に変更されている。笛吹き男は「虹の七色すべて」（290頁）が使われた服を着ており、町の議員や町長は笛吹き男に50ポンドの報酬を約束する。ネズミを率いる笛吹き男はそのまま川に入るのではなく、海へ行って小舟に乗り込む。潮が引くまで男が笛を吹き続けると、ネズミたちは港の泥に埋まって死ぬ。その後報酬をもらえず怒った笛吹き男が笛を吹くと、子どもたちは遊び場や学校から笛吹き男の元へやってくる。笛吹き男と子どもたちは森の奥へ消え、ひとりも町に帰ってこない。「ハーメルンの笛吹き男」は13世紀の伝説だが、当時、子どもたちは働き手であり、学校で学んではいなかった。アリソンは現代のアメリカの子どもたちにとって伝わりやすい話にしようとして、舞台を「ニュータウン」に変えたり、子どもたちが学校へ通っていることにしたりしたのであろう。

千葉幹夫（2冊目）の「ハーメルンの笛吹き」<sup>[123]</sup>は2009（平成21）年10月にナツメ社から出版された『母と子のおやすみまえの小さなお話365』に収録されている。1ページに収められた短い話で簡略化されているため、グリム兄弟版、ブラウニング版、ラング版のいずれの版であるか判断できない内容である。

田島信元監修の「ハーメルンの笛ふき男」<sup>[127]</sup>は2010（平成22）年3月に永岡書店から出版された『子どもが眠るまえに読んであげたい365のみじかいお話』に収録されている。本文は1ページに収められており、話は著しく短縮化されているためブラウニング版、グリム兄弟版、ラング版のいずれの話であるか判断することはできない。

千葉幹夫（3冊目）の「ハーメルンの笛吹き」<sup>[128]</sup>は2011（平成23）年9月にナツメ社から出版された『ママおはなしよんで幼子に聞かせたいおやすみまえの365話』に収録されている。話の骨子だけを書いた著しく短い話で、本文は1ページに収められている。

西潟留美子の「ハーメルンの笛ふき男」<sup>[130]</sup>は2012（平成24）年9月にPHP研究所から出版された『考える力を育てるお話366』に収録されている。1ページに収められた短い話で、内容が簡略化されているので、いずれの版であるか判断できない。子どもたちはひとりも帰ってこない。「大人たちがどこをさがしても、子どもたちは見つかりませんでした」（71頁）という文で話は終わる。市長や大人たちが後悔したり反省したりする様子は描かれていない。本文下部には「おはなし豆知識」としてこの話が実話をもとにしていること、「おはなしクイズ」としてハーメルンに押し寄せたのは何の大群であるかという質問が出されている。

舟橋愛の「ハーメルンの笛吹き男」<sup>[132]</sup>は2013（平成25）年7月に東京書店から出版された『おやすみまえのちいさなちいさなお話90 考える力を育むお話』に収録されている。この本は文庫本サイズの小さな本で、話は見開き1ページに収められている。話は著しく短縮され、いずれの版か判断できない。町に戻ってくる子どもはひとりもいない。この本

は2015（平成27）年11月に、『0歳～6歳 よみきかせ考える力を育てるお話90』という題名で再版されている。

長井理佳の「ハーメルンの笛吹き男」[\[13\]](#)は2014（平成26）年12月にナツメ社から出版された『考える力を育てる 元気な男の子のお話』に収録されている。この本は縦16cm、横12cmほどのハードカバーの小さな本で、持ち歩いてどこでも子どもに読み聞かせることができるように考えられている。100話の話を5つの章に分けて収録している。「ハーメルンの笛吹き男」は3章の「正義感と責任感を育てるお話」に分類されている。見開き2ページの短い話で、内容は簡略化されている。笛吹き男はグリム兄弟版と同様に、帽子を被っておそろしい顔つきをして子どもを連れ去るために町にやってくる。町に戻ってくる子どもは、ブラウニング版と同じ「足が不自由で〔行き〕おくれた子」（185頁）とラング版の「上着をとりにもどった子」（185頁）の2人だけである。

秋田喜代美監修の「ハーメルンの笛吹き」[\[136\]](#)は2015（平成27）年6月に高橋書店から出版された『こころを育てるおはなし』に収録されている。見開き1頁に収まる短いもので、内容が簡略化されているためいずれの版かは判断することはできない。町に帰って来る子どもはひとりもない。

このみほこの「ハーメルンの笛吹き男」[\[137\]](#)は2015（平成27）年11月に東京書店から出版された『0歳～6歳よみきかせ考える力を育てるお話90』に収録されている。手のひらサイズの本で、見開き1ページに話は収められている。ハーメルンにネズミが出て困っているとところに「笛を持った一人の男」（66頁）がやってきて金貨100枚でネズミ退治をすると言う。町の人々はネズミを退治してくれるなら金貨200枚でも良いと言うが、実際には報酬を支払わない。笛吹き男は黙って姿を消すと、その夜に子どもたちを連れ去る。町の人たちは「はらうから子どもたちを返してくれ！」（67頁）と叫ぶが、子どもたちは笛吹き男と一緒に山奥に消える。まるであらすじのような著しく短い話である。

石津ちひろの「ハーメルンのふえふきおとこ」[\[138\]](#)は2016（平成28）年3月に小学館から出版された『おひさま』2016年2/3月号に収録されている。簡略化された話である。町の人たちがネズミの害に困っていると「みしらぬ おとこ」（64頁）がやってきて、「りょうてに もてないくらいの きんか」（64頁）を払ってくれるのならばネズミを退治するという。しかし約束の報酬を支払ってもらえなかったので、笛吹き男は怒って子どもたちを連れ去る。町に戻ってくる子どもはひとりもない。

ささきありの「ハーメルンのふえふき」[\[14\]](#)は2016（平成28）年12月に西東社から出版された『おんなのこのめいさくえほんベストセレクション80』に収録されている。紙面のほとんどが絵で占められ、話は著しく簡略化されている。笛吹き男はラング版のような「赤いマントにみどりのズボン」（308頁）を履いているが、ネズミ退治の代金はグリム兄弟版、ブラウニング版、ラング版のいずれでもなく、「金貨をひとふくろ」（308頁）である。男は笛を「ヒュイットヒューイホイットホー」（390頁）と奏でる。報酬をもらえなかった笛吹き男は別の日にやってきて子どもを全員連れ去る。子どもはひとりも帰って来ず、どこへ行ったのかは不明のままである。いずれの版にも分類できない内容である。

小学館編の「ハーメルンの笛吹き男」[\[142\]](#)は2017（平成29）年2月に小学館から出版された『心やさしく賢い子に育つみじかいおはなし366』に収録されている。本文は1ページに収められ、話は簡略化されている。話の最後では、笛吹き男と子どもたちは山の中に現わ

れた「小さなドア」(146頁)の中に姿を消す。町に帰って来る子どもはひとりもいない。

瀧靖之監修の「ハーメルンの笛吹き男」<sup>[144]</sup>は2018(平成30)年7月に宝島社から出版された『脳の専門家が選んだ『賢い子』を育てる100のものがたり』に収録されている。この話はブラウニング版とラング版の筋が混成されたものなので、いずれの版であるか判断するのは困難である。ネズミ退治の報酬ははじめブラウニング版と同じような「金貨を1000枚」(304頁)だが、その後ラング版と同様に「[金貨をネズミ]1匹で1枚」(304頁)に変更される。ラング版に登場するネズミの王はここでは登場しないが、ラング版と同様に、ネズミの死骸がないと言って市長は報酬を支払わない。話の最後ではブラウニング版と同様に「足の悪い男の子」(307頁)だけが町に戻って来るが、山に消えた子どもたちが楽園に行ったに違いない、という内容は語られない。

#### 4. 分析と考察

##### 1) 邦訳が掲載されている媒体について

平成期になると邦訳が物語集に収録されるようになる。物語集とは、ここでは古今東西の昔話や伝説などを10話以上収録している本を指す。たとえば『母と子のおやすみまえの小さなお話365』<sup>[123]</sup>、『ママおはなしよんで幼子に聞かせたいおやすみまえの365話』<sup>[128]</sup>、『母と子の心がふれあう名作のきらめき365話』<sup>[131]</sup>といったものである。

物語集が出版されるのは平成期になってからで、平成期の邦訳51話のうち20話<sup>[113][114][119][123][125][126][127][128][129][130][131][132][133][134][136][137][139][141][142][144]</sup>が物語集に収録されている。収録されている話の数はそれぞれ異なるが、365話ないし366話が収録されている場合が多い。その場合、収録されている話にはそれぞれ日付が割り当てられ、子どもに毎日1話ずつ読み聞かせることが推奨されている。

昭和期では邦訳は単行本ないし単行本絵本の形で出版されたため、話を膨らませるために、ネズミの害についてや笛吹き男が笛を吹く様子についてなどが詳しく描写されている。一方、平成期の物語集ではそれぞれの話はいずれも1ページないし2ページに収められているため、話の筋に直接関係のない場面は省かれ、著しく簡潔な話に改変されている。しかし、なぜこれらの物語集が平成期に急増するのであろう。その理由について考察していく。

##### 2) 物語集が出現する理由について

###### (1) 読書推進運動

2000(平成12)年に出版された『子どもの心に伝えたいお話356+1 10・11・12月』<sup>[113]</sup>を皮切りに、物語集は相次いで出版された。2000(平成12)年はちょうど「子ども読書年」で、読書推進運動の一環としての読み聞かせをはじめ、全国での読書推進キャンペーンや講演会が実施された年である<sup>448</sup>。物語集が数多く出版されるようになるのは、おそらくこれらの読書推進運動の影響であろう。

1999(平成11)年、8月9日の参議院において、翌10日の衆議院において、2000(平成12)年を「子ども読書年」とする「子ども読書年に関する決議」が、それぞれ全会一致で採択された<sup>449</sup>。この決議を皮切りとして、2001(平成13)年には「子どもの読書活動の推進に関する法律」が、2005(平成17)年には「文字活字文化振興法」が制定され、2010

(平成22)年は「国民読書年」と定められた<sup>450</sup>。

これらの政策は主として2つの要因によって推進されたと考えられる。1つ目は出版界による読書推進運動である。1996(平成8)年を境に書籍や雑誌の売上金額が落ち込み、出版界はマイナス成長となった<sup>451</sup>。バブルが崩壊した1990(平成2)年でも出版界は6.8%の売上の伸びを保っていたため、当時「出版界は不況に強い」と思われていた。しかし、1995(平成7)年にパソコンソフト「windows95」が販売され、携帯電話が急速に社会に普及すると、人々が出版物にかかる時間や経費が減少し、書籍の売上が低下した<sup>452</sup>。そのため出版界は読書推進運動として、ブックスタート運動、大手出版社独自の読書推進キャラバン、雑誌愛読月刊、取次会社や書店の読み聞かせキャンペーン、大学生協の読書マラソンなど様々な運動を打ち出し<sup>453</sup>、人々に読書の大切さを訴えかけた。

2つ目は「朝の読書」である。「朝の読書」とは小学校、中学校、高校で、朝の始業前に生徒と教師がそれぞれ自分の読みたい本を10分間各自で読むという活動のことである。この活動は1988(昭和63)年4月、千葉県船橋学園女子学校(現・東葉高校)の教員であった林公によって提唱され、大塚笑子によって実践が開始された<sup>454</sup>。林は、学級崩壊状態のなか、荒みきった生徒たちの心を救い自立させるひとつの方法として読書に着目した。アメリカの小学校で10分間の黙読を続けるうちに、子どもたちの読書習慣と生活態度に大きな変化が生まれたという事例を知った林は、この例を参考に「朝の読書」を提唱したのである。当初学校側は受け入れに消極的だったが、大塚の実践によって取り組みが全校に広がっていった。「朝の読書」を行なった結果、「本が読めなかった子が読めるようになった」「集中力がついた」「読解力がついた」といった勉学に直結する結果の他に、「遅刻が減少した」「授業にスムーズに入れるようになった」といった生活態度に関する改善点もみられ、予想を超える効果が得られた。その経緯をまとめた『朝の読書が奇跡を生んだ』が1993(平成5)年12月10日に出版されると<sup>455</sup>、「朝の読書」はその20日後の12月30日に朝日新聞の天声人語で取り上げられ、翌1996年7月10日にNHK教育テレビで紹介されて一気に話題となった<sup>456</sup>。1996(平成8)年には実践校が100校、1997(平成9)年には200校、1998(平成10)年には300校、1999(平成11)年には900校となった<sup>457</sup>。読書の重要性が人々に認識されていったのである。

これらの流れのなかで2000(平成12)年に「子ども読書年」が制定されたのである。「子ども読書年」における活動は「政(推進議連)、官(国立国会図書館・文部省・厚生省・通産省・内閣官房内閣外政審議会)・民(読書年推進議会)の連携・強力による、かつてない大きな枠組みで進展した」<sup>458</sup>という。全国の子どもを対象にしたシンボルマークや標語の募集、読み聞かせ活動の全国展開、東京上野の国際子ども図書館の開館など、大規模な活動が行なわれるなかで<sup>459</sup>、読書は就学児にとってだけでなく、未就学児にとっても重要なものとされていく。絵本の読み聞かせの意義について研究している横山真貴子と水野千具沙は下記のように述べている。

2000年の「子ども読書年」以来、絵本と子どもをめぐる状況は大きく変わった。現在[2008年]、日本では年間2000冊近い絵本が出版され、0歳児検診などで赤ちゃんに絵本を手渡す「ブックスタート」が全国の1/3以上の自治体で実施されている(2007年11月30日現在、全国の1823の市区町村の内631で実施)<sup>460</sup>。

生まれたばかりの乳児に絵本を渡すということは、つまり親に絵本を渡すということである。それにより親たちは、子どもに絵本を与えることが重要だと認識するようになったのであろう。この時期には家庭での読み聞かせがブームとなり、読み聞かせ絵本が数多く出版されるようになる。

その流れに合わせて、読み聞かせを推奨する記事が雑誌に掲載されるようになり、読み聞かせのセミナーが全国で開かれる。2000（平成12）年6月に発行された『月刊 本の窓』には、「お子さんにぜひ、読み聞かせを」という題名で、小原乃梨子が読み聞かせの方法について寄稿している<sup>461</sup>。小原は声優で、当時、アニメ『ドラえもん』の野比のび太役をはじめとする様々なキャラクターの声を担当していた人物である。日本の誰でも知っているアニメーションで、当時まさに活躍していた声の専門家による呼びかけは、親たちに強く響いたことであろう。

読み聞かせの重視はその後も続く。2013（平成25）年には、元アナウンサーの景山聖子が「JAPAN絵本よみきかせ協会」を設立し、「絵本よみきかせマイスター資格」「絵本よみきかせセラピスト資格」などを作った。絵本の読み聞かせに関する心理学の研究自体は1970年代から行なわれていたが<sup>462</sup>、その重要性は一般の人々には「子ども読書年」を契機に知られていったのである。

「ハーメルンの笛吹き男」の邦訳が掲載されている物語集も、読み聞かせのための本である。物語集の書名には「読み聞かせ」「読んで聞かせたい」という語彙が多く出現し、本の冒頭には読み聞かせの大切さや、読み聞かせの方法などが説明されている。これらの本は読み聞かせブームに乗って、相次いで出版されたのである。

小原は母親たちからの「どんな本を読んであげたらいいでしょう」という質問に対して、「読み聞かせ初心者の親御さんには、たとえば小学館の『おひさま』のような短くていろいろなタイプのお話がたくさん載っている雑誌がおすすめです」<sup>463</sup>と答えている。読み聞かせをしたい親たちは、短い話がたくさん収録されており、さらにいつどの話を読めばよいのか日付まで指示をしてくれる物語集をこぞって購入したと思われる。

## (2) 非行としつけ

2000（平成12）年ごろは、青少年による凶悪犯罪が相次いで起きた時期でもある。1997（平成9）年5月に神戸で起きた「酒鬼薔薇事件」をはじめとして、2000（平成12）年は豊川市主婦殺人事件、西鉄バスジャック事件、岡山金属バット母親殺害事件、山口母親殺害事件、大分一家6人殺傷事件といった事件が起これ、犯人はいずれも15歳から17歳の青少年であった。これらの事件が報道されるなかで、家庭のしつけの問題がしきりに取沙汰された<sup>464</sup>。その結果、子どもたちの凶行の原因は、しつけによるものだとされたのである。

青少年による非行の問題については大正期から議論されてきた。しかし、大正期で論じられた青少年の不良の原因と解決策は、平成期のものとはまったく異なる。大正期の不良青少年は主として都市の労働層であり、彼らが非行に走る原因は2つあるとされている。1つ目は、彼らは精神的逸脱者もしくは異常者であり、遺伝的に欠陥があるためである。2つ目は、貧困や家庭の崩壊によるものである。この「家庭の崩壊」というのは、親子の仲が悪いというようなものではなく、「生計が成り立たない」や「両親が2人ともいない」



というものである。非行はしついでなんとかできるものとは考えられていなかったのである<sup>465</sup>。「家庭のしついで失敗が非行を生む」という考えは、大正期には裕福な階層向けの言説として登場した<sup>466</sup>。その後、高度経済成長を経て日本人の間に平等感が広がると、非行少年の階層差が見えにくくなり、どの子どももみな同程度、非行に走る危険性をもっていると認識されるようになる<sup>467</sup>。

それと並行して、1970年代に入るところから家庭と学校の力関係に変化が生じるようになる。多くの親が「自分たちこそが子どもの最終責任者である」と自覚し、「教育する家族」が社会全体に広がったのである。つまり高度経済成長期が終わるころ「家庭こそが子どものしついでを中心的な場である」という意識が親たちの間に浸透してきたのである<sup>468</sup>。1970年代終わりから1980年代初頭にかけて管理教育や体罰を告発するルポタージュや手記が数多く出版され、学校で起きた事件が新聞の社会面で大きく取りあげられ、学校や教師の責任や失態として厳しく糾弾されるようになったことも<sup>469</sup>、親たちの意識の変化を後押ししたといえる。

非行の原因がしついでの結果であると思われるようになり、どの子どもも非行に走る可能性を持つとされ、家庭こそがしついでの場合とみられるようになったことにより、非行に関する言説は親を脅かすようになった。もし子どもが非行に走ったら、それはすべて親の教育やしついでに原因があるというのである<sup>470</sup>。そうすると、親たちは万が一もしついでに失敗してはならないと、ますます我が子のしついでや教育に熱心になるのである<sup>471</sup>。教育社会学者の広田照幸は1999（平成11）年の著書で「現代は親こそが子供の問題に責任を持たねばならない時代である」<sup>472</sup>、「子供の教育に関する最終的な責任を家族という単位が一心に引き受けるようになってきたし、引き受けざるをえなくなってきたのである」<sup>473</sup>と述べている。

物語集の書名には、「賢い子」のほかに「心がふれあう」「やさしい心が育つ!」「こころを育てる!」「心やさしい」という語彙が数多く使われている。酒鬼薔薇事件で中学3年生の少年が逮捕されたとき、当時の首相橋本龍太郎は即座に「心の教育」の必要性を提唱した<sup>474</sup>。上記のような書名がつけられたのは、首相のこの発言が少なからぬ影響を及ぼしたからであろう。

## 2) 物語集以外の邦訳について

平成期の邦訳51話のうち、物語集以外の邦訳は30話存在する。そのうち、1番多いのは絵本で17話、2番目に多いのは単行本で8話、3番目に多いのは戯曲で3話、1番少ないのが雑誌で2話である。

絵本17話のうち、1番多いのはブラウニング版で忠実版が2話、改変版が7話、改作版が3話である。2番目に多いのはグリム兄弟版で忠実版が1話、改変版が1話である。同じく不明版が2話ある。1番少ないのはラング版で、改変版が1話のみである。

ブラウニング版の絵本は改変版が多いが、大幅な改変はなされていない。ブラウニング版では話の最後で足の悪い子が登場するが、平成期の絵本では笛吹き男について行く時に足を折ってしまった子<sup>[9]</sup>や足が遅い子<sup>[10]</sup>に改変されている。

昭和第3期に海外絵本が多く翻訳されたが、平成期でも海外の絵本をそのまま訳したものが出版されている。ブラウニング版の海外の絵本では、市長が「子どもを連れ去られて

しまう原因を作ってしまったので、みんなに合わせる顔がない」といって部屋に閉じこもる場面で話が終わる。ブラウニング版で大幅に改変されたものは、2006（平成18）年3月出版の平田昭吾（2冊目）の『ハメルンのふえふき』<sup>[121]</sup>である。ここでは町にネズミが増えたのは町長が町の傍にゴミ捨て場を作ったからだとされている。この町長は話の最後で、町長の役職を解任させられる。

グリム兄弟版の絵本で特筆すべきは2010（平成22）年3月にBL出版から出版された池田香代子の絵本『ハーメルンの笛吹き男』<sup>[124]</sup>である。この絵本はグリム兄弟版を忠実に訳出したもので、明治期から平成期まででグリム兄弟版に忠実な絵本は池田訳<sup>[124]</sup>のみである。池田訳<sup>[124]</sup>以前にグリム兄弟版に忠実な訳は9話存在するが、8話が単行本で、1話がドイツ語教科書に収録されている。「ハーメルンの笛吹き男」はドイツの伝説でありながら、ドイツのグリム兄弟版は絵本の形で出版されてこなかったのである。池田訳<sup>[124]</sup>はスイスで出版された絵本を翻訳したものである。訳者の池田香代子は『世界がもし100人の村だったら』や『ソフィーの世界』などを訳したドイツ語翻訳者であり、伝承文学研究者でもある。池田がドイツ語から直接訳出したことによって、はじめてグリム兄弟版に忠実な絵本が日本に紹介されたのである。ドイツの伝説でありながら、グリム兄弟版に忠実な絵本がその後も出版されていないことを考えると、ドイツ語から訳されたこの絵本が持つ意味は大きいといえる。

ラング版の絵本は改変版が1話<sup>[118]</sup>のみで、話の最後に帰って来る子どもたちが1人もいない内容に改変されている。

不明版の絵本2冊<sup>[101]</sup> <sup>[107]</sup>では、話は大幅に改変されている。学習塾「公文」の絵本<sup>[101]</sup>では、ネズミのせいでハーメルンの町にペストが蔓延し、話の最後には地震が起きて笛吹き男と子どもたちは地面のなかに飲み込まれる。西本訳<sup>[107]</sup>は表紙の見返しに「これは、グリムの『伝説集』に収められている」と書かれているにもかかわらず、内容はグリム兄弟版とブラウニング版が混成されたものである。

平成期では1辺が15cm程度の小型の絵本が出版されるようになる<sup>[102]</sup> <sup>[121]</sup> <sup>[143]</sup>。これらの絵本は本屋の店先にある回転式ラックに置かれているもので、いずれもブラウニング版の内容である。これらの絵本は値段が400円程度と廉価で、親が子どもに買い与えやすい本であるため、「ハーメルンの笛吹き男」は主としてこちらの絵本で知られるようになったのであろう。

単行本では忠実版が出版される傾向がある。単行本9話のうち、一番多いのはブラウニング版で忠実版が2話、改変版が1話、改作版が1話である。2冊目に多いのはグリム兄弟版で忠実版が1話、改変版が1話である。ラング版も同様に2話存在し、いずれも忠実版である。1冊少ないのは不明版で1話のみである。単行本9話のうち、過半数の5話がそれぞれの版に忠実な訳となっている。単行本で忠実なものうち2話<sup>[109]</sup> <sup>[120]</sup>は大人向けの本で、いずれもブラウニング版をそのまま忠実に掲載している。また、小学生向けの単行本でもブラウニング版<sup>[109]</sup>、グリム兄弟版<sup>[97]</sup>、ラング版<sup>[115]</sup>の忠実な訳がそれぞれ掲載されている。単行本では紙面を多く割り当てることができるので、結末などを省略したり短く改変したりせず、そのまま収録している。また、昭和期にすでに『ドイツ伝説集』の全訳<sup>[9]</sup>、『ブラウニング絵本』の翻訳<sup>[6]</sup>、「ラング世界童話集」シリーズの全訳<sup>[8]</sup>がそれぞれ出版されているので、訳者が忠実な内容を日本語で知ることができたことも、忠実な内容が収録された

原因のひとつと考えられる。

戯曲3話はいずれも大幅な改変が加えられた改作版である。主人公である笛吹き男が3人に増やされていたり<sup>[112]</sup>、話の冒頭でネズミ退治に失敗するネズミ捕り男カールと犬使い男ペーターが登場したりする<sup>[99]</sup>。さらに山崎訳<sup>[98]</sup>では市長が音楽を禁止して町が静かになったせいでネズミが現れる。市長は笛吹き男に「音楽を鳴らしたお前は大罪人だ」と言うが、男の笛につられて歌って踊ったので今度は自分が市民たちから責められる。最後には市長も音楽の素晴らしさを知って、ハーメルンを音楽が満ち溢れた町にしようとする。いずれの戯曲も大幅に改作されているのは、小学生が演じることを念頭に置いて脚色されたためと考えられる。学校劇で使用するためにはクラスの子どもたち全員に役が必要なので、主人公の笛吹き男の数を増やしたり、原典にない登場人物を増やしたりする必要があったのであろう。また、演技力の拙い子どもたちが楽しく演じられるように、「音楽」という要素をふんだんに取り入れて、音楽劇にしているもの<sup>[98]</sup>もある。

雑誌2話はラング改変版<sup>[109]</sup>と不明版<sup>[138]</sup>だが、いずれも話が短くなるように改変されている。媒体が雑誌で文字数が少ないためであろう。

物語集以外の邦訳は、絵本では改変され、単行本では忠実に訳され、戯曲では大幅に改作され、雑誌では短くされる傾向にあるといえる。

### 3) 話の内容の改変について

#### (1) 改変の特徴

平成期の内容でとくに注目に値する改変は、下記の2つである。1つ目は話が著しく簡略化され、教訓が削除される代わりに欄外にコメントが付与されることである。これは主として物語集において行なわれる改変である。2つ目は笛吹き男が思いやりの心を持つ人物として描かれるようになることである。これら2つの改変について、邦訳のなかでどのように改変されているのかを確認し、その理由について考察していく。

#### (2) 話の簡略化とコメントの付与

物語集は主として心の成長と賢さをうたい文句にしているが、そこで行われている改変は具体性のない簡略化のように思われ、一見、どこに教育的意図があるのか不明のものが多。それぞれの本文を検討すると、紙面が少なく話が簡略化された結果、子どもたちが町から消えた場面で話が終わり、子どもたちが消えたことに対してハーメルンの人々が悲しんだり、後悔したり、反省したりする場面が省略されている。そのため、町から子どもたちが消えてしまったことに対する後悔の念が語られず、この物語の教訓的な部分である「約束は守らなくてはならない」というメッセージが伝わらなくなっている。ただし、これらの話が収録されているページの下部には、小さな文字で下記のようなメッセージが添えられている（下線は筆者による）。

千葉訳（3冊目）<sup>[128]</sup>：

Advice 笛につられて子どもたちが行進する様は異様ですね。約束を守らない町の人々に罰を与えたのでしょう。（226頁）

主婦の友社編<sup>[129]</sup>：

POINT 約束をやぶった代償は、とりかえしのつかないほど大きいものでした。  
(334頁)

芹澤訳<sup>[139]</sup>：

POINT このお話のもとになった出来事は、ほんとうにあったこととして伝えられています。市長が約束を守らなかったせいですね。(236頁)

これらの短いメッセージのみによって、約束を守ることの大切さを読者に伝えようとしているのである。

本文に「約束は守らなくてはならない」という直接的な教訓を書かなかったのはなぜなのだろう。それは、賢い子というのは知識が多くある子ではなく、自分で考えることができる子だと考えられたからではないだろうか。橋本首相の発言を受けて、審議を始めた文部省の中央教育審議会は、1996（平成8）年、「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」という諮問に対する第1次答申のなかで、下記のように述べている。

我々はこれからの子供たちに必要となるのは、いかに社会が変化しようと、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力など自己教育力であり、また、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性であると考えた。たくましく生きるための健康や体力が不可欠であることは言うまでもない。我々は、こうした資質や能力を、変化の激しいこれからの社会を、[生きる力]と称することとし、知、徳、体、これらをバランスよくはぐくんでいくことが重要であると考えた<sup>475</sup>。

これからの子どもたちに必要となるのは、変化する社会で自ら課題を見つけ、自ら考え、主体的に判断し、行動する力であると提案されたのである。

上記のような理念を受けて、1998（平成10）年、学習指導要領が改訂され、「総合的な学習の時間」が新設された。この目的は、子どもたちに自ら学び考え、問題を解決する能力を身に付けさせることであった。当時、学校ではいじめや不登校が問題になっており、これらの問題に対応できるような、豊かな人間性を育む教育が求められていた<sup>476</sup>。

子ども向けの物語集を編纂し出版する際に、編集者や出版社は、改訂された学習指導要領の内容を意識したと思われる。そのため、物語集の本文からあえて直接的な教訓を省いたのではないだろうか。書かれたことをそのまま受け入れて、答えを暗記する能力ではなく、物語を読んだ子どもが自分で考える力を養えるよう配慮したのであろう。

物語集のなかには、目次の前に大学教授や医者などの識者からのコメントが掲載されているものがある。『脳の専門家が選んだ『賢い子』を育てる100のものがたり』<sup>[144]</sup>では、東北大学加齢医学研究所に所属する医学博士の瀧康之がコメントを寄せている。そのなかで瀧は「ところで賢い子とは、どんな子だと思いますか。私が考える賢い子とは、知的好奇心の高い子です。勉強ができるかどうかではありません」<sup>477</sup>と述べ、子どもの知的好奇心

心を伸ばすためには、親自身が楽しみながら本を読み聞かせると良いと助言している。

これらの物語集は読み聞かせのための本であり、母親が子どもに読み聞かせた後、母子で話の内容について語り合うことが推奨されている。母親と話し合うことで、子どもたちは自ら考える力を身に付けるのである。結果として、「ハーメルンの笛吹き男」は約束を守ることの大切さを子どもに教える話として、家庭教育に利用されるようになったのである。

### (3) 「思いやり」の強調

注目に値する改変の2つ目は、笛吹き男の描かれ方の変化である。昭和第1期までは笛吹き男は得体の知れない異邦人として描かれていた。それが昭和第2期になると、子どもを助ける正義の味方として描かれるようになった。平成期では、笛吹き男はさらに他者を思いやる人物として描かれるようになる。

1994（平成4）年の邦訳<sup>108</sup>では、ネズミ退治の報酬を支払ってもらえなかった笛吹き男は下記のように述べる（下線は筆者による）。

福光訳（2冊目）<sup>108</sup>：

「ああ、市長さん。やくそくがちがいます。わたしはその金がひつようです。ともだちがびょうきでこまっているのです。やくそくどおり二ふくろください」（95頁）

ここでは、笛吹き男はただ単に報酬が欲しいという理由で支払いを求めるのではなく、病気の友人のためにお金が必要だからという理由で、報酬の支払いを市長に依頼しているのである。本来、仕事の報酬を要求するのは正当な行為である。しかしここでは、笛吹き男が利己的な人物ではなく他人のために行動するとことのできる思いやりのある人物であることが強調されている。

笛吹き男はさらに、友人だけでなく約束を破った市長の味方もするようになる<sup>98</sup>。山崎訳<sup>98</sup>では、音楽嫌いの市長が町で楽器を演奏したり歌を歌ったりすることを禁止する。笛吹き男が笛の音でネズミを退治すると、楽器を演奏したから大罪人だと言って市長は笛吹き男を牢屋に入れようとする。笛吹き男が再び笛を吹くと、子どもたちや町の人や兵隊が踊り出し、それにつられて市長も歌ったり踊ったりする。以下は市長が踊り始めた場面である。少し長い場面だが、引用する（下線は筆者による）。

山崎訳<sup>98</sup>（戯曲）：

コール8 あっ、市長さんが歌ってる。

コール9 市長さんが楽器をひいている。

コール女 歌ってる、歌ってる！

コール男 おどってる、おどってる。

コール10 市長さんがきんしした音楽をやっている。

コール11 市長さんがきまりをやぶった。

コール12 ろうやだ、ろうやだ。

コール13 市長さんをろうやへ入れろ。

コールみんな 市長さんをろうやへ入れろ！

…

市長 ゆるしてくれ、ゆるしてくれ。

コールみんな ゆるさない、ゆるさない。ろうやへ、はいれ！

歌 (笛吹きが市長さんをかばって歌います)

ゆるしてあげよう ねえ みなさん

つめたいこおりが張っていた

心のなかに 春がきて

音楽の花が さいたのさ

ゆるしてあげよう ねえ みなさん (57-58頁)

市長のことを許さず牢屋に入れようとする町の人たちに、笛吹き男は「許してあげよう」と語りかけるのである。笛吹き男の説得により市長は許され、牢屋に入れられずにすむ。そして、市長が笛吹き男に報酬を渡す場面が下記である（下線は筆者による）。

山崎訳<sup>8</sup>（戯曲）：

市長 (金かのはいった袋を出して) さあ、笛吹きさん、百万円をとってください。  
い。

笛吹き いいえ。これは音楽の町のためにつかってください。 (58頁)

笛吹き男は市長を弁護するどころか、報酬をすべてハーメルンの町に寄付するのである。ここでは笛吹き男は思いやりのある素晴らしい人物に改変されている。これらの改変では「一度した約束は守らなければいけない」という教訓よりも、「思いやりを持って人のために行動すること」の方が大切だとされているのである。

これらの邦訳は、物語集に収められたものではなく、4、5歳向けの単行本や、小学校4年生のための戯曲に収められたものである。物語集では、読み聞かせにより親子の心の交流が生まれると宣伝されている。同様に平成期に出版された邦訳では、他人を思いやり、他人を許すという、他者との心の交流が重視されているのである。

## 5. 平成期における受容のまとめ

平成期では「ハーメルンの笛吹き男」は51話出版され、そのうち約4割の20話が物語集に収録されている。物語集は2000（平成12）年に初めて出版され、それ以後相次いで出版された。子どもに1日に1話ずつ読み聞かせることが前提として作られているため、物語集にはおよそ365話が収録されている。多くの話を収録するため、それぞれの話に割り当てられているのは主として1ページないし2ページのみである。そのため話の筋に直接関係のない場面は省かれ、著しく簡潔な話に改変されているのである。

昭和期では「ハーメルンの笛吹き男」の話は加筆されることが多かった。単行本や絵本に収録されるようになり、本文の文字数が増加したため、それぞれの訳者たちは、ネズミの害や笛吹き男の服装をより魅力的になるように加筆したり、原典にはない擬音語を付け

加えたり、子どもたちに固有の名前をつけたりした。一方、平成期では、話の筋のみを追う内容になっている。昭和期では邦訳に創意工夫が見られたのに対して、平成期ではまったく同じ文章を転載して出版したものが複数出現するのである。

物語集が2000（平成12）年を契機に出版されるようになる理由として、政府がこの年を「子ども読書年」と定めたことが挙げられる。2000（平成12）年以前から出版社によって行われた読書推進運動や、小学校、中学校、高校で行なわれるようになった「朝の読書」運動によって、当時、人々の間で読書の重要性が認識され始めていた。その流れのなかで「子ども読書年」が制定されると、家庭での子どもへの読み聞かせがブームとなる。物語集を買えば1冊で365話の物語を読み聞かせることができる。物語集は主として読み聞かせをする親たちに購入され、その需要を狙って数多く出版されるようになる。

また、2000（平成12）年ごろは青少年による凶悪犯罪が相次いで起きた時期でもある。高度経済成長が終わるころ、「家庭こそが子どものしつけの場である」という意識が親たちの間に浸透すると、非行の原因は親のしつけにあると認識されるようになる。子どもを非行に走らせないためには、「心の教育」が必要だとされ、「親と子の絆」が重視されるようになる。物語集の前書きをみると、ほぼすべての本に「子どもとの時間を楽しんでください」「話し合うことで子どもとの絆を深めてください」と書かれている。物語集に収録された話は、もはや物語自体を楽しむためではなく、親と子どもが交流をするためのツールとなっているのである。

平成期の邦訳51話のうち、物語集以外の邦訳は31話存在する。そのうち、1番多いのは絵本で17話、2番目に多いのは単行本で9話、3番目に多いのは戯曲で3話、1番少ないのが雑誌で2話である。

絵本17話のうち1番多いのはブラウニング改変版だが、これらの絵本には大幅な改変が施されていない。「足の悪い子」が「足の遅い子」に変えられたり、話の最後で市長が「子どもの失踪の原因を作ってしまったので、みんなに合わせる顔がない」といって部屋に閉じこもったりする、という程度の改変である。

平成期にはさらにコンパクトで安価な絵本が出現する。この絵本は本屋の店先にある回転式ラックに置かれており、親が子どもに買い与えやすい本である。そのためこれらの絵本は多くの子どもたちに読まれている可能性が高い。その内容はいずれもブラウニング版である。ドイツの伝説である「ハーメルンの笛吹き男」は平成期においてもやはりブラウニング版（イギリス）の内容で普及していくのである。

一方、平成期にはグリム兄弟版に忠実な絵本が初めて出版される。昭和期までにグリム兄弟版は10話存在するが、9話が単行本で、1話がドイツ語教科書版であった。2010（平成22）年に出版された池田香代子訳の絵本は、グリム兄弟版に忠実な唯一の絵本である。そのため、ドイツ語から訳されたこの絵本は大きな意味を持つといえる。

平成期に出版された単行本は、忠実版が多い。その理由は昭和期にグリム兄弟版、ブラウニング版、ラング版ともすべて原典に忠実な全訳が出版されたからであろう。

一方、戯曲はいずれも大幅な改変が加えられた改作版である。小学生が演じることを念頭において脚色されたものであるため、クラスの子どもたち全員に配役が与えられるように登場人物を増やしたり、演じる子どもたちが楽しめるように音楽劇にしたり、笛吹き男を人格者に改変したり、様々な工夫が施されているのである。

平成期では心の交流が重視されたためか、笛吹き男が思いやりの心を持つ人物として描かれるようになる。笛吹き男が報酬を要求するのは自分のためではなく病気で困っている友達のためであったり、怒っている町の人々に「市長を許してあげましょう」と語りかけたり、支払ってもらった報酬をそのままハーメルンの町に寄付したりするのである。親子間の心の交流だけでなく、他者との心の交流も大切であるということを伝えようとしているのである。物語集においても心の交流が重視されており、前書きでは脳科学者や発達心理学者などが「読み聞かせは子どもの情緒面の発達によい」と述べている。毎日読み聞かせることで親子の触れ合いが多くなり、子どもの情緒面での安定が得られるという。

物語集では「考える力を育てる」というスローガンが掲げられている。しかし、話の内容を最後まで語らず、約束を守らない市長や大人たちの行動が不幸を招いたと追求される話の結末は伏せられたままである。十分な情報が与えられていない状況では、そもそも考えることなど不可能である。もしかすると、優しい心を養うために、子どもを世間の悪に触れないように保護しているのかもしれない。いずれにせよ、物語集が掲げるスローガンは名ばかりで、効果の有無は確認できないもののように思われる。



## 第7章 結論

明治期から平成期までの「ハーメルンの笛吹き男」の邦訳を分析し、それらの改変箇所や特徴について考察してきた。145話の邦訳のうち、1番多いのはブラウニング版で70話、2番目に多いのは不明版で33話、3番目に多いのはラング版で22話、4番目に多いのはグリム兄弟版で19話、そして1番少ないのはホフマン版で1話のみである。「ハーメルンの笛吹き男」はドイツの伝説であるにもかかわらず、日本には主としてブラウニング版が紹介されているのである。

明治期に出版された「ハーメルンの笛吹き男」の邦訳は原文に忠実で、上流階層の人々に受容されたものであった。2話存在する明治期の邦訳のうち、1話はグリム兄弟版に忠実な訳で、もう1話はホフマン版に忠実なあらすじである。グリム兄弟版の邦訳はドイツ語を学ぶためのドイツ語教科書に掲載され、ホフマン版はオペラを紹介するための本に掲載されている。当時、ドイツ語やオペラを学んでいたのは知識層や上流階層の人間であったため、「ハーメルンの笛吹き」は明治期の日本ではまだ一部の人々にしか知られていなかったのである。そのため、これらの話のはのちの受容に影響を与えることはほとんどなかった。次にグリム兄弟版が出版されるのは昭和期のことで、ホフマン版はその後出版されていない。明治期では一般の人々には「ハーメルンの笛吹き男」はまだ広まっていなかったのである。

大正期になると「ハーメルンの笛吹き男」は人々に広く普及するようになる。大正デモクラシーが興った大正期では、子ども向けの歯磨き粉や子ども服などの子どものためのものが市場に出回るようになる。子ども向けの雑誌や本も相次いで創刊され、そのなかに「ハーメルンの笛吹き男」の邦訳も収録されたのである。大正期の邦訳7話のうち、過半数の5話が子ども向けの雑誌や本に掲載されている。子ども向けのこれらの話は、話の骨子は底本に忠実であるが、読者である子どもたちが理解しやすいよう改変されている。たとえば、お金の単位を「円」にしたり、「教会」という語を「公会堂」や「寺」にしたり、外国の地名や人名を削除したり、聖書からの引用を削除したりなどである。邦訳には笛吹き男の絵が添えられ、子どもたちにとって魅力的なものにしようと工夫されている。

大正期の邦訳のうち、約7割がブラウニング版の内容である。これは当時、日本でブラウニングへの関心が高まっていたからだと考えられる。中村正直によってブラウニングが日本に紹介された後、英文学者たちの間でブラウニング作品についての研究や、ブラウニング作品の訳出が盛んになった。彼らの論争は新聞にも掲載され、一般の人々にもブラウニングは知られていった。「ハーメルンの笛吹き男」は大正期になって本格的に受容され始めたのである。ただし、人々の間に普及した「ハーメルンの笛吹き男」はグリム兄弟版ではなくブラウニング版だったのである。

昭和期になると「ハーメルンの笛吹き男」はそれぞれの時代の価値観によって内容が改変されていく。第1期の邦訳では、人々はネズミの害を解決できない市長を批判したり、脅したりはしない。戦時中にあたるこの時期では、一般大衆が為政者を批判するなど許されないことであった。出版物の統制が行なわれる以前の第1A期では、約束を破ったせいで子どもたちが連れ去られてしまうことに対して、大人たちは責任を追及されない。市長や親を責めるような内容が削除されているのである。戦争が激化した第1B期になると、子どもたちは全員無事で笑顔で帰って来る。戦争に駆り出された子どもたちが無事に凱旋する

よう願った親たちの願望が読みとれるような内容に改変されているのである。

第2期は邦訳数をもっとも多く、41話もの邦訳が出版されるが、当時の学校劇ブームと保育教材としての紙芝居ブームの影響からか、戯曲や紙芝居という媒体でも受容されるようになる。話の内容も戦時中のものから大きく変わり、笛吹き男が報復する話から、笛吹き男が子どもたちを救う話に改変されている。笛吹き男は報酬を得られなかった報復として子どもを連れ去るのではない。約束を守らないような大人のもとで暮らすと悪影響を受けるので、子どもたちを連れ去るのである。子どもたちが消えた責任を市長は人々から厳しく追及される。戦時中とは異なり、一般大衆が為政者を批判するのである。これらの改変には、戦争への反省が込められていると考えられる。為政者に対して、間違っていることは間違っていると指摘すべきであったという人々の反省が、改変箇所から読み取れる。

第3期になり絵本の黄金期を迎えると「ハーメルンの笛吹き男」も一気に絵本として出版されるようになり、海外の絵本をそのまま訳したものも出版されるようになる。家族が「近代家族」となり、子どもが家族の中心である社会になったからか、この時期の邦訳では「子どもは大切である」という内容を強調する表現が目立つようになる。また、父親と母親の反応が区別して描かれるようになる。子どもたちが消え去った後、母親は泣くのに父親は泣かずに市長を睨みつけたり、子どもたちが消えた山の方を睨んだりする。「女（母親）は泣き、男（父親）は怒る」というジェンダーによる反応の相違が加筆される。近代家族が要求する「女らしさ」と「男らしさ」が付け加えられたのである。

平成期になると、話を1ページないし2ページに収めた短い邦訳が頻繁に出版されるようになる。そのため話も著しく簡略化され、昭和第3期に出現した「子どもが大切」といった表現や、子どもを失って嘆き悲しむ両親の姿は語られなくなる。またハーメルンの町の子どもたちは笛吹き男に連れ去られた後どこへ行ったのか分からないままである。町に帰って来る子どもはひとりもない。これらの話は1日1話ずつ子どもに読み聞かせることが前提で作られた物語集に収録されており、母親が子どもに読み聞かせた後、母子で話の内容について語り合うことが推奨されている。感想などを話し合うなかで物語について補完することができるため、あらすじのような短い内容でもよいと考えられたのかもしれない。物語集が相次いで出版されるようになるのは、青少年による凶悪犯罪が社会をにぎわせた時期である。子どもを凶行に走らせないためには家庭でのしつけや親子の心の触れ合いが重要だと言われるようになり、読み聞かせなどの家庭教育が重視されるようになる。平成期では、「ハーメルンの笛吹き男」はこれらの家庭教育の教材として利用され、親子のコミュニケーションツールとして利用されるのである。

平成期には、物語集に収録された短い邦訳の他に、絵本、単行本、戯曲、雑誌などの媒体で出版されている。絵本では改変され、単行本では忠実に訳され、戯曲では大幅に改作され、雑誌では短縮される傾向にある。とくに絵本はコンパクトで廉価なものが出版されるようになり、物語集と合わせて「ハーメルンの笛吹き男」が広く一般の人々に普及するようになる。

「ハーメルンの笛吹き男」の邦訳は、大正期以降、いずれの時代の邦訳も、1番多いのがブラウニング版である。その理由は、大正期のブラウニングブームの他に、ブラウニング版の内容が子どもに提供するのに適していると考えられたからであろう。グリム兄弟版、ブラウニング版、ラング版のうち、グリム兄弟版は物語としてではなく資料として集

められた話であり、子ども向けのものではない。ブラウニング版とラング版はいずれも子ども向けのものであるが、話の結末が異なる。ラング版では子どもたちはどこへ消えたのか不明であるが、ブラウニング版では子どもたちは素晴らしい楽園へ行ったと語られる。それゆえ読者である子どもにとっては、ブラウニング版のほうが魅力的だと判断されたのであろう。さらにブラウニング版には話の最後に、「約束は守らないといけない」という教訓が付記されている。大正期以降、主として子ども向けの媒体で出版された「ハーメルンの笛吹き男」は、昭和期には美しい挿絵入りの絵本になり、主として家庭で子どもに受容されるようになる。学校でも学校劇や教科書に採用され、約束を守ることの大切さを説く教訓話として道德教育に利用されるようになる。

「ハーメルンの笛吹き男」はドイツの伝説であるにもかかわらず、明治期から平成期までの邦訳全145話のうちグリム兄弟版は19話しか存在しない。そのうち忠実な訳は10話のみであり、8話が単行本、1話が絵本、1話が教科書である。グリム兄弟版に忠実な絵本は2010（平成22）年になって初めて出現するのみで、その後も出現していない。今後、令和期には池田香代子訳（レナーテ・レッケ著、リスベート・ツヴェルガー絵）の絵本のようなグリム兄弟版に忠実な絵本が出現することを期待したい。

平成期には「おやすみ前に母に読み聞かせてもらう話」としてダイジェスト版になった「ハーメルンの笛吹き男」は、広く一般の人々に普及するようになる。しかし、それによって危惧されることは、子どものころダイジェスト版でかじっただけで、この伝説を知っていると思いついでいる人々が増えることである。それらの人々はもしかすると、本来の西洋の伝説を知ることなく、一生を終えるのではないだろうか。このような筆者の危惧が、単なる杞憂であることを祈る。

これまで、日本における「ハーメルンの笛吹き男」の受容研究は皆無に近い状況であった。しかし筆者による調査の結果、日本には145話の邦訳が存在することが判明し、それらの邦訳の内容についても分析し、時代背景と照らし合わせながら考察することができた。本論では邦訳に焦点を当てて分析を行なったが、今後の課題は、雑誌、本、絵本に添えられた挿絵について調べることである。明治期から平成期までの「ハーメルンの笛吹き男」の邦訳を通観した本研究が、日本における伝承文学の受容史研究に、少しでも寄与できれば幸いである。

## 謝 辞

本論文の執筆にあたり、多くの方々からご支援とご指導を賜りましたことを、心より感謝申し上げます。

なかでも、恩師野口芳子先生にはひとかたならぬご指導をいただきました。至らぬ筆者に、終始忍耐強いご指導と心温まる激励をくださったことに対して、どれほど言葉を尽くしても感謝の気持ちを十分に表すことはできません。心から感謝の意を表します。

博士前期課程において、短い間ではありましたが心温まるご指導をくださった竹原威滋先生に、心より御礼申し上げます。また、多方面からご教示、ご鞭撻をいただいた梅花女子大学大学院の諸先生方に、心より御礼申し上げます。

資料の検索や収集にあたり、梅花女子大学図書館をはじめ多くの図書館および施設の方々にお力添えをいただきました。ドイツ国立図書館 (Deutsche Nationalbibliothek)、ライプツィヒ館 (Leipzig) のKathrin Schmiedel氏には、資料の調査、収集にあたって格別の便宜を図っていただきました。心から御礼申し上げます。

また、ドイツ伝承文学研究、児童文学研究の諸先輩方からは常にご助言や激励のお言葉をいただきました。心から御礼申し上げます。いつも温かい励ましの言葉をかけてくださった梅花女子大学大学院の院生の方々、とりわけ共に切磋琢磨してきた研究室のみなさんに感謝申し上げます。

ここでは書ききれないほど多くの方々からお力添えをいただきました。これまでお世話になったすべての方々に改めて感謝の意を表します。

最後に、筆者の院生生活を見守り、支え続けてくれた家族と、応援してくれた友人たちに心から感謝します。ありがとうございました。

2021年6月 蚊野千尋

## 注

- 1 たとえば下記のような研究が存在する。

阿部謹也『ハーメルンの笛吹き男—伝説とその世界』平凡社、1974年（2004年に筑摩書房が再版）

溝井裕一「異界が口を開けるとき —『ハーメルンの笛吹き男伝説』と夏至にまつわる民間信仰について」『ドイツ文学』第133号、日本独文学会、2007年、209-218頁。
- 2 笛吹き男は植民地への希望者を募る「植民請負人」であったとする説や、徴兵人だっという説などがある。子どもたちが町から消えた理由としては、子ども十字軍に参加したとする説や、戦争で死亡したという説、祭りの最中に崖から転落死したとする説などがある。これらの説については阿部謹也の『ハーメルンの笛吹き男 —伝説とその世界—』（注1参照）にまとめられている。
- 3 阿部謹也、注1参照。
- 4 先行研究については第1章第3節「先行研究について」で詳しく述べる。
- 5 拙論「日本における「ハーメルンの笛吹き男」の受容 —大正期（1912-1926年）を中心に—」『梅花児童文学』第27号、梅花女子大学大学院児童文学会、2019年、68-85頁。
- 6 拙論「日本における「ハーメルンの笛吹き男」の受容 —明治期から昭和期まで—」『昔話 研究と資料』第48号、日本昔話学会、2020年、77-93頁。
- 7 たとえば、下記の作品などが存在する。

漫画：CLAMP『ツバサ-RESERVoIR CHRoNiCLE-』講談社、2003-2009年。  
（主人公たちが旅の途中で立ち寄った町に、子どもたちを連れ去る女性が登場する）

渡辺道明『ハーメルンのバイオリン弾き』エニックス、1991-2001年。  
（主人公は笛ではなく、バイオリンやオルガンなどを奏でて敵と戦う）

アニメ：「仮面ライダーウィザード」東映、2012-2013年。  
（「ハーメルケイン」という名前の武器を使うキャラクターが登場する。笛の音で登場人物を連れ去る）

ゲーム：「グリムノーツ」スクウェア・エニックス、2016-2020年。  
（グリム兄弟やアンデルセンの童話をモチーフにしたスマートフォン用ゲームアプリ。「ハーメルンの笛吹き男」という名前のキャラクターが登場する）

ドラマ：「砂の塔～知りすぎた隣人」TBSテレビ、2016年。  
（児童連続殺人事件を「ハーメルン事件」と称している）

楽曲：Sound Horizon「エル絵本【魔女とラフレンツェ】」ベルウッド、2005年。  
（笛吹き男が笛の音で少女や女性を操り、連れ去るという内容の歌詞である）
- 8 はやみねかおる『笛吹き男とサクセス塾の秘密 —名探偵夢水清志郎事件ノート』講談社、2004年。他に、下記の作品などが存在する。

中山七里『ハーメルンの誘拐魔』角川書店、2016年。  
（「刑事犬養隼人」シリーズの3作目。少女たちの連続誘拐事件が起こり、その現場に「ハーメルンの笛吹き男」の絵葉書が残されている）
- 9 2018年8月15日から2021年6月10日までに行なった筆者の調査による。
- 10 鳥越信編『日本児童文学史年表』1-2巻、明治書院、1975年。
- 11 平倫子「『ハーメルンの笛吹き』伝説と子ども」『北星論集』第24号、北星学園大学、1987年、1-26頁。
- 12 小泉直美「『エンゲリン讀本』における邦訳されたグリム童話とドイツ伝説 —初出の邦訳を中心に—」『大阪国際児童文学振興財団研究紀要』第33号、2020年、43-54頁。
- 13 鳥越信編『日本児童文学史年表』1巻、注10参照、1頁。
- 14 同上、197頁。
- 15 同上、278頁。

- 16 同上、319頁。
- 17 同上。
- 18 詳しくは「第4章 大正期における『ハーメルンの笛吹き男』」参照。
- 19 詳しくは「第5章 昭和期における『ハーメルンの笛吹き男』」参照。
- 20 ロバート・ブラウニングの詩„The Pied Piper of Hamelin“の邦題は定まっておらず訳者によって異なる。「ハーメルンの笛吹き男」のpiedはドイツ語ではbuntで、「色とりどりの、カラフルな」という意味である（国松考二編『小学館 独和大辞典』小学館、1985年、419頁）。そのため本稿では邦題を「ハーメルンの色とりどりの服を着た笛吹き男」とする。
- 21 小泉直美、注12参照、50-51頁。
- 22 同上、51頁。
- 23 Dobbertin, Hans: *Quellensammlung zur Hamelner Rattenfängersage*. Göttingen: Schwartz, 1970, S. 1, 11-12.
- 24 カルワリオというのは、イエス・キリストが十字架に貼り付けにされたといわれている「ゴルゴダの丘」のラテン語読みの名称である。
- 25 碑文は断片のみが書き写されて残っており、複数人のドイツの研究者が碑文の復元を試みている。ここでは、ドイツで有力とされているクロークマンの論文とドバーティンの論文による解釈を紹介した。
- Krogmann, Willy: Der Rattenfänger von Hameln. In: *Rheinisch Westfälische Zeitschrift für Volkskunde*. Bd. 14, 1967, S. 136.
- Dobbertin, Hans: Die Jahreszahl der Kinderausfahrt. In: *Jahrbuch*. Hameln: Museumsverein, 1982/84, S. 87.
- 26 Dobbertin, Hans: *Quellensammlung zur Hamelner Rattenfängersage.*, wie Anm. 24, S. 3.
- 27 この資料は書籍ではなく、『金の鎖』（*Catena aurea*）の最後のページに書き込まれたものである（Schwedt, Georg: *Die Rattenfängerstadt Hameln an der Weser im Spiegel des Kupferstechers Merian*. Norderstedt: Books on Demand, 2016, S. 21）
- 28 Dobbertin, Hans: *Quellensammlung zur Hamelner Rattenfängersage.*, wie Anm. 24, S. 21-22.
- 29 *Ebd.*, S.21-22.
- 30 *Ebd.*, S.21
- 31 Brüder Grimm: Die Kinder zu Hameln. In: *Deutsche Sagen*, hrsg. v. Hans-Jörg Uther. Bd. 1, München: Diederichs, 1993, S. 216-218.
- 32 Browning, Robert: *The Poetical Works of Robert Browning*, hrsg. v. Jack, Ian and Rowena Fowler. Bd. 3, Oxford: Clarendon, 1988, S. 257-275.
- 33 Lang, Andrew (Hrsg.): The Ratcatcher. In: *The Red Fairy Book*. London: Longman, 1890, S. 208-214.
- 34 グリム兄弟は「メルヒェンは詩的であるが、伝説は史的である」と述べている（Brüder Grimm, wie Anm. 32, S. 15）
- 35 詳しくは本節第3項参照。
- 36 Brüder Grimm, wie Anm. 32, S.216-218.
- 37 ヴァイアーの名前には複数の表記があるが、本稿ではドイツ語表記でもっとも一般的な表記を採用した。ヴァイアーの別名は次のとおりである。Weyer, Weier, Wier, Wierus.
- 38 この作品はマイボームが自身と同名の祖父と一緒に発表した作品である。
- 39 出版年は不明である。おそらく、出版された本ではなく、ハーメルンの町で代々記録されている年代記のことであろう。
- 40 Brüder Grimm (Hrsg.) : *Deutsche Sagen*. Frankfurt a. M. : Deutscher Klassiker, 1994, S. 281. この本は注32の *Deutsche Sagen*, hrsg. v. Hans-Jörg Uther とは異なる本である。注31はウターによって再編された本であり、本文の注もウターによって改訂されている。一方、この注40のクラシック版 *Deutsche Sagen* の注はグリム兄弟が記したままになっているので、今回はこちらの本を使用した。

- 41 Brüder Grimm, wie Anm. 32, S. 293.
- 42 *Ebd.*, S. 216-218.
- 43 *Ebd.*, S. 218.
- 44 De Vane, William Clyde: *A Browning Handbook*. 2. Aufl., New York: Appleton-Century-Croft, 1955, S. 127.
- 45 野口忠雄「R. BrowningのThe Pied Piper of Hamelinについて」『北星論集』第28号、北星学園大学、1991年、66頁。
- 46 同上、68頁。
- 47 同上。
- 48 Browning, Robert: *The Pied Piper of Hamelin*. London: Geroge Routledge and Sons, 1888.
- 49 ここでいう「今から500年前」とは、この詩が書かれた「1842年から500年前」ということである。
- 50 Browning, Robert: *Selected poems of Robert Browning*, hrsg. v. Ishikawa, Rinshiro and Kenji Ishida, Tokyo: Kenkyu-sha, 1954, S. 96-106.
- 51 Furnivall, Frederick James: *A Bibliography of Robert Browning, from 1833 to 1881*. 2. Aufl., London: N. Trübner, 1881, S. 113. ファーニバルは手紙番号を47番としているが、これは49番の間違いである (Jacobs, Joseph: *The Familiar Letters of James Howell*. London: Nutt, 1892, S. 357)。
- 52 Jacobs, Joseph, wie Anm. 52, S. 357-358.
- 53 Dickson, Arthur: Browning's Source for the Pied Piper of Hamelin. In: *Studies in Philology*. Bd. 23, Heft 3, 1926, S. 335.
- 54 Furnivall, Frederick James, wie Anm. 52, S. 113.
- 55 Wanley, Nathaniel: *The Wonders of the Little World*. London: Basset, 1678, S. 598.
- 56 Furnivall, Frederick James, wie Anm. 52, S. 113.
- 57 Lang, Andrew, wie Anm. 34, S. 208-214.
- 58 *Ebd.*, PREFACE.
- 59 *Ebd.*
- 60 *Ebd.*, S. 208-214.
- 61 Marelle, Charles: Le preneur de rats. In: *Affenschwanz, et cetera: Variantes orales de contes populaires français et étrangers*. Braunschweig: George Westermann, 1888, S. 53-59.
- 62 *Ebd.*, S. 51-59.
- 63 *Archives Biographiques Françaises* (ABF)., Teil 1, S. 155.
- 64 Marelle, Charles: *Die französischen Märchen von Perrault, von Gustave Doré illustriert*. Braunschweig: Westermann, 1868.
- 65 *Archives Biographiques Françaises* (ABF)., wie Anm. 64, S. 157.
- 66 Marelle, Charles: Marelle: Le preneur de rats. In: *Affenschwanz, et cetera: Variantes orales de contes populaires français et étrangers.*, wie Anm. 62, S. 54.
- 67 *Ebd.*, S. 56.
- 68 *Notes and Queries*. Reihe. 7, Bd. 10. London: Office, 22, Took's Court, Chancery Lane, E.C. 1890, S. 501.
- 69 *Notes and Queries*. Reihe. 7, Bd. 9. London: Office, 22, Took's Court, Chancery Lane, E.C. 1890, S. 163.
- 70 *Notes and Queries*. Reihe. 7, Bd. 10, wie Anm. 69, S. 501.
- 71 *Ebd.*, S. 501.
- 72 四角で囲った番号は表6、10、11、12、13、14、巻末資料1、2にまとめた邦訳の通し番号である。
- 73 書名として「エンゲリン讀本」と表記されているため、本論ではEngelienを本来の発音に近いエンゲリンではなくエンゲリンと表記する。
- 74 「ハーメルン二迄ノ小兒等」を発見した小泉は、原典の題名を*Deutsches Lesebuch aus den Quellen zusammengestellt* として『原典から収集されたドイツ語読本』と訳している。しかし、本を実際に確認すると、aus (Aus) 以下は副題となっている。そのためここでは『ドイツ語読本—原典からの収

- 集』とする。
- 75 著者名として、『ドイツ語読本—原典からの収集』の扉には„A. Engeliien und H. Fechner“と記されている。彼らの名前について、小泉が„A. Engeliien“はアウグスト・エンゲリン (August Engeliien, 1832-1903) で、„H. Fechner“はハインリッヒ・フェヒナー (Heinrich Fechner, 1845-1909) であると述べている (小泉直美、注12参照、43頁)。その情報を元に、ドイツの人名事典でアウグスト・エンゲリンのミドルネームを確定した (Hinrichsen, Adolf: *Das literarische Deutschland. 2. Aufl.*, Berlin: Literarischen Deutschlands, 1891, S. 284)
- 76 小泉直美、注12参照、43-54頁。
- 77 中村道夫 (道四郎) 訳『エンゲリン第二讀本獨學自在』上巻、金刺芳流堂、1896年、165-169頁。
- 78 Engeliien, August und Fechner, Heinrich: *Deutsches Lesebuch: Aus den Quellen zusammengestellt.* Ausg. A, Teil 2. Tokyo und Osaka: Rikugokwan, 1886, S.91.
- 79 Juni (6月) が載っている明治期の独和辞書は、たとえば下記のものがある。  
 小田条次郎、藤井三郎、桜井勇作『字和袖珍字書』学半社、1872年、628頁。  
 福見尚賢、小栗栖香平纂訳『挿入圖畫獨和字典大全』朝香屋、1885年、485頁。  
 和田音吉郎訳『明治独和字典』六合館、1887年、386頁。  
 福島鳳一郎纂訳『挿圖和譯獨逸字彙』大倉書店、1889年、373頁。  
 田村化三郎纂訳『袖珍獨和字典』南江堂、1893年、165頁。
- 80 中村が使用したと判断した理由については、次項「中村が使用した辞書」で詳しく述べる。
- 81 福島鳳一郎纂訳、注79参照、1015頁。
- 82 同上、576頁。
- 83 同上、569頁。
- 84 KHM50「いばら姫」の邦訳 (中村道夫 (道四郎) 訳、注77参照、105-113頁)。
- 85 同上、107頁。
- 86 小田条次郎他、注79参照。信岡資生「日独二言語対訳辞書総覧 序」『成城大学経済研究』第133号、1997年、176-177頁。
- 87 山本松次郎編『袖珍字語譯囊』長崎出藍社、1872年。
- 88 川村文昌他共編『和譯獨逸辭典』春風社、1872年。
- 89 松田為常、瀬之口隆敬、村松経春編『獨和字典』アメリカ長老派協会、1873年。
- 90 京都中學獨逸學教官編『和譯獨逸辭書』村上勘兵衛、1873年。
- 91 和田音吉郎、風祭甚三郎纂訳『馱和辭彙』後學堂、1883年。
- 92 山本剛『獨逸文典字彙』英蘭堂、1884年。
- 93 福見尚賢、小栗栖香平纂訳、注79参照、1885年。
- 94 井上勤纂訳『獨和袖珍字彙』字書出版社、1885年。
- 95 和田音吉郎訳、『明治独和字典』注79参照。出版年を1886 (明治19) 年としている先行研究もあるが (信岡資生「日独二言語対訳辞書総覧 総目録1」『成城大学経済研究』第134号、1996年、161頁)、現物を確認すると1887 (明治20) 年であった。
- 96 福島鳳一郎纂訳、注79参照。
- 97 行徳永考纂訳『挿入圖畫獨和字書大全』金原寅作、1890年。
- 98 吉原秀雄訳『掌中獨和字彙』六合館、1892年。
- 99 田村化三郎纂訳、注79参照。後に書名が『改正増補獨和字典』に変わる (信岡資生「日独二言語対訳辞書総覧 総目録1」注95参照、160頁)
- 100 第2版。1872 (明治5) 年出版の初版は見つけることができなかった。
- 101 第3版。1886 (明治19) 年出版の初版は見つけることができなかった。
- 102 「お」は変体仮名の「於」である。
- 103 高橋五郎『和漢雅俗いろは辞典』長尾景弼、1879年、570頁。



- 104 「ナ」は「名詞」の意味。
- 105 物集高見『ことばのはやし』みづほや、1888年、1585頁（書名は変体仮名）。
- 106 広告が掲載されているのは、たとえば下記の本である。広告文はいずれも同じ内容となっている。  
 中村道夫（道四郎）訳『ゴルドン将軍傳直譯註釋』下巻、金刺芳流堂、1897年、広告2頁。  
 中村道夫（道四郎）訳『エンゲリン第三讀本直譯註解』下巻、金刺芳流堂、1898年、広告4頁。  
 大島國千代訳『フレデリック大王論直譯註釋』上巻、金刺芳流堂、1896年、広告1頁。  
 松尾豊文訳『ニューナショナル第四讀本直譯註釋』上巻、金刺芳流堂、1898年、広告4頁。
- 107 たとえば下記の本に広告は掲載されている。  
 中村道夫（道四郎）訳『ゴルドン将軍傳直譯註釋』下巻、注106参照、広告2-3頁。  
 大島國千代訳、注106参照、広告1-2頁。
- 108 上村直己『明治期ドイツ語学者の研究』多賀出版、2001年、139頁。
- 109 推移道人（中村道四郎）訳『すたんれー亜弗利加探檢譚直譯註釋』金刺芳流堂、1899年。
- 110 内閣官報局「出版條例」『法令全書 明治二年』内閣官報局、1887年、174頁。
- 111 谷川恵一「近代文献について—奥付の読み方」『日本古典籍講習会テキスト』第16号、国文学研究資料館、2019年、5頁。
- 112 奥付に筆名や雅号を記載するのが当たり前になるのは、明治末期から大正末期までの過渡期を経て以降のことである（同上、6頁）。
- 113 加藤千陰『仮名の鏡』栗原万寿、中村道四郎、1901年。
- 114 中村道夫（道四郎）訳『ボック氏第三讀本直譯註解』上之巻、金刺芳流堂、1898年、奥付裏頁。
- 115 同上。
- 116 中村道夫（道四郎）訳『ゴルドン将軍傳直譯註釋』下巻、注106参照、広告2頁。
- 117 大島國千代訳『ロングマン氏第三讀本直譯註釋』金刺芳流堂、1895年。
- 118 武田芦鴻訳『ロングマン氏第三讀本獨案内意譯附』金刺芳流堂、1898年、
- 119 武田芦鴻訳『ロングマン氏第三讀本獨案内意譯附』下之巻、金刺芳流堂、1899年。
- 120 武田芦鴻訳『ロングマン氏第三讀本獨案内意譯附』注118参照、奥付。武田芦鴻訳、『ロングマン氏第三讀本獨案内意譯附』下之巻、注119参照、奥付。
- 121 中村道夫（道四郎）訳『ボック氏第一讀本獨案内』金刺芳流堂、1895年。
- 122 中村道夫（道四郎）訳『エンゲリン第二讀本獨學自在』上巻、注79参照、奥付。
- 123 中村道夫（道四郎）訳『ゴルドン将軍傳直譯註釋』上巻、金刺芳流堂、1896年、奥付。
- 124 中村道夫（道四郎）『ボック氏第一讀本獨案内』注121参照、奥付。
- 125 芳進堂の公式ホームページは以下である（「芳進堂 ラムラ店」 URL : <http://www.ho-shindo.jp/> 最終アクセス日 : 2021年3月8日）
- 126 けやき舎編「大正十二年版 神楽坂出版社全四十四社の活躍」『神楽坂まちの手帖』第14号、けやき舎、2006年、27頁。
- 127 村達三郎『植物学要解』金刺兄弟出版部、1907年、奥付。
- 128 石橋延吉『東京地図 神田区之部』石橋延吉発行、1903年。
- 129 Hinrichsen, Adolf, Anm. 76, S. 284.
- 130 山口小太郎 „Die besten Lesebücher zum Unterricht der deutschen Sprache“, 日独書院編『ドイツ語学雑誌』第12巻第11号、日独書院、1909年、32-35頁。
- 131 上村直己、注108参照、2001年、180頁。
- 132 同上、180頁。
- 133 同上、186頁。
- 134 同上、186頁。
- 135 大村仁太郎他『独逸文法教科書』後編、独逸学協会出版部、1896年、viii-ix頁。
- 136 ドイツ語で下記のように書かれている。„*Grammatik der neuhochdeutschen Sprache*, 4. Aufl. Berlin

- 1892“ (同上)
- 137 ドイツ語で下記のように書かれている。„*Leitfaden für den deutschen Sprachunterricht*. 5. Aufl. Berlin 1884“ (同上)
- 138 上村直己『近代日本のドイツ語学者』鳥影社、2008年、74頁。
- 139 同上、76頁。
- 140 同上、74頁。
- 141 上村直己『明治期ドイツ語学者の研究』注108参照、182頁。
- 142 獨協学園百年史編纂委員会編『獨協百年』第5号、獨協学園百年史編纂委員会、1981年、195頁。
- 143 東京学院「東京学院学科課程表」(623-B6-3) 1899年(東京都公文書館蔵)。
- 144 上村直己『近代日本のドイツ語学者』注138参照、216-217頁。
- 145 上村直己『明治期ドイツ語学者の研究』注108参照、209頁。
- 146 西成彦『ラフカディオ・ハーンの耳』岩波書店、1998年、152-159頁。
- 147 上村直己『明治期ドイツ語学者の研究』注108参照、209頁。
- 148 同上、215頁。
- 149 たとえば奥付には、「出版兼発売人」として東京の出版社が5社、大阪の出版社が1社記載されている (A. Engeli, wie Anm. 79)
- 150 柴田環『世界のオペラ』共益商社、1912年、539頁。Hofmann, Friedrich: *Der Rattenfänger von Hameln, Oper in fünf Akten*. Leipzig: Bibliographisches, 1879.
- 151 柴田環、同上、539-548頁。
- 152 同上、1頁。
- 153 吉本明光編『三浦環』日本図書センター、1997年、47頁。
- 154 柴田環、注150参照、1頁。
- 155 田辺久之「三浦環 伝記資料考 —環の著作と瀬戸内晴美の『お蝶夫人』—」常葉学園短期大学編『常葉学院短期大学紀要』第14号、1982年、36頁。
- 156 同上、37頁。
- 157 田辺久之「三浦環伝記資料考 —帝劇時代—」常葉学園短期大学編『常葉学院短期大学紀要』第25号、1994年、55頁。
- 158 同上。
- 159 吉本明光編、注153参照、47頁。
- 160 同上、168頁。
- 161 同上、60-61頁。
- 162 田辺久之「三浦環 伝記資料考 —環の著作と瀬戸内晴美の『お蝶夫人』—」注155参照、38頁。
- 163 同上、37頁。
- 164 同上、37-38頁。
- 165 田辺久之「三浦環伝記資料考 —帝劇時代—」注157参照、55頁。
- 166 田辺久之「三浦環 伝記資料考 —環の著作と瀬戸内晴美の『お蝶夫人』—」注155参照、37-38頁。
- 167 田辺久之「三浦環伝記資料考 —帝劇時代—」注157参照、57頁。
- 168 武者小路公共『滞欧八千一夜』暁書房、1949年、208-214頁。
- 169 田辺久之「三浦環伝記資料考 —帝劇時代—」注157参照、57頁。
- 170 同上、58頁。
- 171 同上、57-58頁。
- 172 同上、38頁。
- 173 府川源一郎「アンデルセン童話とグリム童話の本邦初訳をめぐって」『文学』第9巻第4号、2008年、141頁。
- 174 野口芳子「明治期におけるグリム童話の翻訳と受容」大野寿子編『グリムへの扉』勉誠出版、2015

- 年、220頁。
- 175 野口芳子『グリム童話のメタファー』勁草書房、2016年、148頁。
- 176 川戸道昭／野口芳子／榎原貴教『日本におけるグリム童話翻訳書誌』ナダ出版センター、2000年、219-251頁。
- 177 同上、251頁。小泉直美、注12参照、50頁。
- 178 小泉直美、同上。
- 179 同上。
- 180 川戸道昭他、注176参照、251頁。
- 181 ヘルバート派は、ドイツの教育学者ヨハン・ヘルバート（Johann Friedrich Herbart, 1776-1882）の教育哲学、教育心理学に基づく教育学の一派である。これまでヘルバートは「ヘルバルト」と表記されてきたが、中山にならって現在の発音である「ヘルバート」表記を使用する（中山淳子『グリムのメルヒェンと明治期教育』臨川書店、2009年、12頁）
- 182 同上、7頁。
- 183 同上。
- 184 同上、49頁。
- 185 Otto, Franz: *Der Jugend Lieblings- Märchenschatz*. Leipzig und Berlin: Otto Spamer, 1880.
- 186 植田敏郎『巖谷小波とドイツ文学』大日本図書、1991年、432頁。
- 187 渋沢青花「童話作家協会の創立と解散まで」童話作家協会編『日本童話選集』丸善、1926年、116頁。
- 188 巖谷小波「少年文学身上話」『文章世界』博文館、1906年、15頁。
- 189 下川歌史『近代子ども史年表 明治・大正編』河出書房新社、2002年、305、309、323、325、328、335、351頁。
- 190 少年通俗教育会編『幼年百譚 お話の庫』春の巻、博文館、1916年、1頁。
- 191 同上、広告頁。
- 192 churchの項に「1. 教会」と書かれている（上野陽一他編『学生英和辞典』博報堂、1910年、122頁）。
- 193 Lang, Andrew, wie. 34.
- 194 『幼年百譚 お話の庫』には『グリム童話集』の話も収録されている。この本に『グリム童話集』の邦訳が収録されていることは、今まで明らかにされなかったので、新たな発見であるといえる。それゆえ、ここに話の一覧を記す。
- 「取替小僧」春の巻32-41頁（KHM83 幸運なハンス）
- 「魔法婆」春の巻164-204頁（KHM15 ヘンゼルとグレーテル）
- 「踊り靴」春の巻329-334頁（KHM21 灰かぶり）
- 「漁夫の妻」春の巻449-464頁（KHM19 漁師とその妻）
- 「小坊主物語」夏の巻1-7頁（KHM55 ルンペルシュティルツヒェン）
- 「金色銀色の髪」夏の巻21-27頁（KHM114 賢いちびの仕立て屋）
- 「三枚の葉」夏の巻57-62頁（KHM16 3枚の葉）
- 「金の鞴」夏の巻102-108頁（KHM1 カエルの王様、もしくは鉄のハインリヒ）
- 「豆と薪と藁」夏の巻341-344頁（KHM18 わらと炭とそら豆）
- 「骨の笛」夏の巻422-426頁（KHM28 歌う骨）
- 「星娘」夏の巻463-467頁（KHM153 星の銀貨）
- 「正直靴屋」夏の巻477-481頁（KHM39 小人の靴屋）
- 「大蕪の話」夏の巻492-494頁（KHM146 かぶ）
- 「三枚の羽根」秋の巻171-177頁（KHM63 3枚の羽根）
- 「猫と狐の話」秋の巻430-433頁（KHM75 狼と猫）

- 195 少年通俗教育会編「笛吹き爺さん」『幼年百譚 お話の庫』秋の巻、博文館、1916年、3頁。
- 196 大阪国際児童文学館編『日本児童文学大事典』第2巻、大日本図書、1993年、37-38頁。
- 197 大久保久雄「博文館編集者 南部亘国さんと蔵書のこと」『名著サプリメント』第3巻第10号（秋季増刊号）、名著普及会、1990年、28頁。
- 198 飯干陽『木村小舟と『少年世界』』あずさ書店、1992年、179頁。
- 199 大阪国際児童文学館編、注198参照、37-38頁。
- 200 少年通俗教育会編『幼年百譚 お話の庫』春の巻、注190参照、1頁。
- 201 幼年世界編集部編『お話の種』上編、博文館、1915年、4頁。
- 202 飯干陽、注198参照、16頁。
- 203 新井弘城「『少年少女譚海』創刊のころ」加太こうじ／上笙一郎編『児童文学への招待』南北社、1965年、412頁。
- 204 飯干陽、注198参照、12頁。
- 205 同上、178-179頁。
- 206 同上、179頁。
- 207 幼年世界編集部編、注201参照、4頁。
- 208 楠山正雄編『世界童話寶玉集』富山房、1919年、5頁。
- 209 Browning, Robert: *R. Browning: Selected Poems*, wie Anm. 51, S. 106.
- 210 楠山正雄編、注208参照、262頁。
- 211 同上、1頁。
- 212 同上。
- 213 日本児童文学学会編『児童文学事典』東京書籍、1988年、724頁。
- 214 同上、641頁。
- 215 竹迫祐子他『思い出の名作絵本 岡本帰一』河出書房新社、2001年、117頁。
- 216 同上。
- 217 文献書院『ブラウニング詩選』文献書院、1923年、1頁。
- 218 同上、106-107頁。
- 219 同上、106頁。
- 220 同上、106-107頁。
- 221 同上、1頁。本の形で出版されている2冊とは、帆足理一郎氏の『人生詩人ブラウニング』（洛陽堂1918）と齋藤勇の『サウル』（岩波書店1920）である。
- 222 斎田喬編『少年文学』第4号、イデア出版、1923年、1頁。
- 223 同上、11頁。
- 224 同上。
- 225 日本児童文学学会編、注213参照、139頁。
- 226 同上。
- 227 斎田喬編、注222参照、見返し頁。
- 228 同上。
- 229 同上、11頁。
- 230 JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. C05034686100、公文備考 昭和11年 B人事 卷18（防衛省防衛研究所）
- 231 岡邊白夜『山の大王』宏文堂、1925年、広告欄。
- 232 岡邊白夜『磐の王子』宏文堂、1926年、広告欄。
- 233 大日本雄弁会講談社『雄弁』第12巻第7号-第9号、大日本雄弁会講談社、1921年。
- 234 近藤宗男「ハムリンの『斑の笛吹き』」『西洋傳説 白鳥の騎士』イデア書院、161頁。
- 235 同上、裏表紙裏。

- 236 近藤宗男「ハムリンの『斑の笛吹き』」『どうして此世に服が来たか』玉川学園出版部、1930年。
- 237 メーテルリンク著、近藤宗男編『青い鳥』イデア書院、1924年。
- 238 シェイクスピア原作、近藤宗男編『シェイクスピア物語』イデア書院、1925年。
- 239 近藤宗男編『こどもラ・フォンテン』イデア書院、1927年。
- 240 近藤宗男『どうして此世に冬が来たか』玉川学園出版部、1930年。
- 241 近藤宗男『白鳥の騎士』玉川学園出版部、1930年。
- 242 近藤宗男『聖ジョージと龍』玉川学園出版部、1930年。
- 243 近藤宗男「読方学習態度建設の基礎問題」奈良女子高等師範学校附属小学校内学習研究会編『学習研究』第16巻第2号、目黒書店、1937年、138-140頁。
- 244 奈良女子高等師範学校附属小学校内学習研究会編『学習研究』第16巻第2号、目黒書店、1937年、76頁。
- 245 雑賀忠義「ハメリンのまんだら笛吹」『英語研究』ブラウニング号（第19巻第8号）、研究社、896頁。
- 246 上田正昭他監修『講談社日本人名大辞典』講談社、2001年、807頁。
- 247 『英語研究』注245参照、目次頁。
- 248 中国新聞社編『ヒロシマの記録 年表・資料篇』未来社、1966年、64-67頁。
- 249 下川耿史、注189参照、342頁。
- 250 山本昇「日本におけるロバート・ブラウニングの受容」『キリスト教と諸学』第11号、1997年、125-147頁。
- 251 表紙には「1923」（＝大正12年）とあるが、奥付および表題紙に押された帝国図書館の受入登録印にはいずれも「大正11年」と記されているため、大正11年の発行であると判断した。
- 252 小島伊佐美編『*Neues Deutsches Lesebuch mit Anmerkungen*』（獨逸新讀本）、南江堂、1913年、標題紙。
- 253 表題紙および奥付には「小島伊佐美」と記されているが、本名は「小島伊佐美」であるため拙論では後者の漢字に統一して表記する。
- 254 上村直己『近代日本のドイツ語学者』注138参照、337頁。
- 255 同上、338-339頁。
- 256 同上、340頁。
- 257 小島伊佐美『*Lesebuch des Deutschen*』（獨逸語教本）、鳴海屋書店、1911年。
- 258 小島伊佐美編『*Neues Deutsches Lesebuch mit Anmerkungen*』（獨逸新讀本）、注252参照、102頁。
- 259 Brümmer, Franz: *Lexikon der deutschen Dichter und Prosaisten von Beginn des 19. Jahrhundert bis zur Gegenwart*. Sechste völlig neu bearbeitete und stark vermehrte Aufgabe. Band. 1, Leipzig: Reclam., 1913, S.131.
- 260 Evers, M. und H. Walz :*Deutsches Lesebuch für höhere Lehranstalten*. Leipzig und Berlin: B. F. Teubner, 1899, S. 42-43.
- 261 1901年にBerlinで開催されたOrthographische Konferenz（正書法会議）で長音を示すhを削除することが決められた。ThoreはTore、TahlerはTalerなどに変更された（野口芳子「獨逸語教科書に採用されたグリム童話 一明治・大正期を中心に」『梅花女子大学心理こども学部紀要』第11号、2021年、21頁）。
- 262 上村直己『明治期ドイツ語学者の研究』注108参照、440頁。
- 263 同上、429頁。
- 264 1894（明治27）年入学（同上）。
- 265 登張竹風「ドイツ語懺悔」『登張竹風遺稿追想集』郁文堂出版、1965年、32頁。
- 266 上村直己『明治期ドイツ語学者の研究』注108参照、428-429頁。
- 267 金田鬼一編『*Deutsche Prosa*』（獨逸散文集）1巻、大日本圖書、1916年、奥付。

- 268 同上、凡例頁（緒言）。
- 269 同上。
- 270 岡倉由三郎『The Laurel Readers』（ろおれる・りいだ）3巻、大日本圖書、1914年、奥付。
- 271 佐藤喜之「博言学事始め 明治・大正の言語学 その1」『学苑』第762号、昭和女子大学、2004年、65頁。
- 272 平田論治「1901年度文部省外国留学生としての岡倉由三郎」『筑波大学教育学系論集』第42巻、第2号、1、3頁。
- 273 佐藤喜之、注271参照、64頁。
- 274 石川林四郎／石黒魯平『A School manual of English Composition』（中學校用英作文書）、興文社、1914年、緒言1頁。
- 275 日外アソシエーツ編『20世紀日本人名事典』日外アソシエーツ、2004年、67頁。
- 276 角元節子「『井上英和大辞典』『井上和英大辞典』編者 井上十吉」四国英語教育学会『紀要』第25号、2005年、26頁。
- 277 石川林四郎／石黒魯平『A School manual of English Composition』、注274参照、1頁。
- 278 同上、2-3頁。
- 279 角元節子、注276参照、22頁。
- 280 昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書』第30巻、1969年、291頁。
- 281 松村幹男「徳島の英語者井上十吉」『中国地区英語教育学会研究紀要』第15巻、中国地区英語教育学会、1985年、107頁。
- 282 渋谷新平編『英語の学び方』大阪屋号、1978年、36頁。
- 283 石川林四郎／石黒魯平『A Teachers' Manual of Notes on The Pacific Readers』（パシフィック、リーダーズ教師用）、第4巻、興文社、1920年、奥付。
- 284 石川林四郎／石黒魯平『The Pacific Readers』（ザ パシフィック リーダーズ）、改訂版第3巻、興文社、1921年、奥付。
- 285 石川林四郎／石黒魯平『The Pacific Readers』（ザ パシフィック リーダーズ）、改訂版第4巻、興文社、1921年、奥付。
- 286 豊田実『The Rose Readers for Girls' Schools』（ザ ローズ リーダーズ）、4巻、富山房、1922年、奥付。
- 287 山本昇、注250参照、125-147頁。
- 288 中村正直「善良ナル母ヲ造ル説」『明六雑誌』第33号、明六社、1875（明治8）年、2丁裏。
- 289 山本昇、注250参照、142頁。
- 290 昭和期を3期に分けて分析し、考察する方法については、下記の論文を参考にした。  
野口芳子「日本における『赤ずきん』の需要について ―昭和期を中心に―」『梅花児童文学』第27号、梅花女子大学大学院児童文学会、2019年、86-103頁。
- 291 河野誠哉「出版史の中の学習文化」『大学改革と生涯学習 ―山梨学院生涯学習センター紀要』、山梨学院生涯学習センター、2016年、67頁。
- 292 社史編纂委員会編『講談社の歩んだ50年（昭和編）』、講談社、1959年、530-532頁。
- 293 松村武雄「斑の笛吹」『獨逸神話傳説集』近代社、1928年、12-13頁。
- 294 Baring-Gould, Sabine: *Curious Myths of the Middle Ages*. London: Rivinhtons, 1886.
- 295 サビン・バリング＝グールド著、池上俊一監『ヨーロッパをさすらう異形の物語』下巻、柏書房、2007年、339頁。
- 296 日本児童文学学会編、注212参照、603頁。
- 297 楠山正雄「魔法の笛」『黄金ノ鶯鳥ト繪話』大日本雄弁会講談社、1941年、85頁。
- 298 日本児童文学学会編、注212参照、220頁。
- 299 同上、195頁。

- 300 菅忠道『自伝的児童文化史 戦前・戦中期編』ほるぷ教育開発研究所、1978年、198頁。
- 301 三宅興子編『日本における子ども絵本成立史』ミネルヴァ書房、1997年、18頁。
- 302 日外アソシエーツ編『日本出版文化史事典』日外アソシエーツ、2010年、119頁。
- 303 大石五雄『英語を禁止せよ』ごま書房、2007年、3頁。
- 304 同上、14頁。
- 305 同上、15-16頁
- 306 同上、16-17頁
- 307 同上、15頁。
- 308 同上、102-104頁。
- 309 楠山正雄編、注208参照、262頁。
- 310 楠山正雄「魔法の笛」注297参照、85頁。
- 311 下川耿史『近代こども史年表 昭和・平成編』河川書房新社、2002年、100頁。
- 312 小西正保『児童文学の伝統と創造』ハッピーオウル社、2005年、14頁。
- 313 邦訳を忠実版、改変版、改作版に分けて分析し考察する方法については下記の論文を参考にした。  
野口芳子「日本における『赤ずきん』の受容 ―平成期を中心に―」『梅花女子大学心理こども学部紀要』第10号、2020年、1-12頁。
- 314 野上彰「ハンメルンの笛吹き」『少女の友』実業之日本社、1946年、13頁。
- 315 楠山正雄編『思ひ出の國』東西社、1947年、挟み込み広告。
- 316 石井桃子他編『世界童話宝玉集』宝文館、1957年、277頁。
- 317 『キンダーブック』フレーベル社、1966年、裏表紙。
- 318 『三年の学習』学習研究社、1953年、7頁。
- 319 小出正吾『お話十二か月』実業之日本社、1950年、231頁。
- 320 Jackson, Wilfred: The Pied Piper. Walt Disney, 1933. (アニメーション映画)
- 321 Walt Disney Studio: The Pied Piper. London: Bodly Head, 1934.
- 322 浜田廣介編『二年生の世界童話』金の星出版、1953年、107頁。
- 323 同上、218頁。
- 324 久保喬『世界のむかし話三年生』偕成社、1957年、214頁。
- 325 安田浩『子ども人形劇集』白眉社、1958年、181頁。
- 326 大川悦生『世界むかし話』偕成社、1967年、125頁。
- 327 植田敏郎『幼年おはなし宝玉集 世界編』宝文館、1957年、281頁。
- 328 藤原定『グリム伝説集II』実業之日本社、1960年、奥付。
- 329 児童読書研究会編『魔法つかいと子ども』ポプラ社、1頁。
- 330 同上、182-183頁。
- 331 同上。
- 332 土家由岐雄『世界むかし話集』偕成社、1960年、目次。
- 333 堀尾青史『はなの小人』ポプラ社、1964年、157頁。
- 334 浜田廣介『カメレオンの王さま』主婦之友社、1952年、352頁。
- 335 那須辰造『ドイツ童話集』講談社、1964年、表見返し／裏見返し。
- 336 伊達豊『世界傳説めぐり』泰光堂、1958年、235頁。
- 337 Jackson, Wilfred, wie Anm. 321.
- 338 小西正保「戦後における絵本出版の衰退」日本児童文学者協会編『日本児童文学』第44巻第2号、日本児童文学者協会、1998年、14頁。
- 339 鳥越信「戦後児童文学の50年を概観する」日本児童文学者協会編『戦後児童文学の50年』文溪堂、1996年、9頁。
- 340 日本児童文学者協会編『日本児童文学』第18巻第1号、日本児童文学者協会、1972年、25頁。

- 341 同上。
- 342 同上。
- 343 小西正保「戦後における絵本出版の衰退」注338参照、14頁。
- 344 鳥越信、注339参照、9頁。
- 345 西田良子「戦後児童文学のあゆみ」『戦後児童文学の50年』日本児童文学協会、1996年、20頁。
- 346 同上。
- 347 小西正保「戦後における絵本出版の衰退」注338参照、15頁。日本児童文学者協会編『日本児童文学』第44巻第2号、日本児童文学者協会、1998年、14頁。
- 348 日本児童文学者協会編『日本児童文学』第44巻第2号、同上。
- 349 田中卓也「戦後における『少年倶楽部』の誌面構成と読者の様相」『共栄大学研究論集——共大研究』第11号、共栄大学国際経営学部、2013年、126頁。
- 350 伊藤（佐久間）りか「『清き誌上でご交際を』——明治末期少女雑誌投書欄に見る読者共同体の研究」『女性学』第4号、日本女性学会、1996年、114-141頁。
- 351 それぞれのページの文字数と行数を数え、おおまかな数を出した。わかち書きに伴う空白や、行の途中での改行があるため、実際の文字数はこれよりも少ない。
- 352 上田真弓／上間陽子「学校の演劇 —『学校劇』と日本の演劇史—」『琉球大学教育学部紀要』第83号、2013年、151頁。
- 353 同上、164頁。
- 354 日本児童演劇協会編『日本の児童青少年演劇の歩み—100年の年表』日本児童演劇協会、2005年、77頁。
- 355 文部省『学習指導要領一般編（試案）』日本書籍、1947年、14-15頁。
- 356 日本の学校で演劇はごく一部をのぞいて正課として扱われてこなかった。学校制度が始まり基本となる教科が設定された1872（明治5）年当時、演劇の社会的な地位は低く、教育的な価値をもって語られるようなものではなかった（西田良子、注345参照、160頁）当時の日本は「富国強兵」と「殖産興業」を目指し、学生領布の際には強い軍隊をつくることを目的として様々な科目がつくられた（平田オリザ『演劇のことば—ことばのために』岩波書店、2004年、26頁）。しかし演劇をやっても軍隊は強くないということから、演劇は正課として取り入れられなかったのである（西田良子、注345参照、160頁）。
- 357 日本児童演劇協会編、注354参照、77頁。
- 358 上田真弓／上間陽子、注352参照、164頁。
- 359 山中和佳子「戦後日本の小学校におけるたて笛およびリコーダーの導入過程 ——昭和20年代を中心に」『音楽教育実践ジャーナル』第7巻第2号、日本音楽教育学会、2010年、73頁。
- 360 文部省『学習指導要領音楽編（試案）昭和二十二年度』中等学校教科書、1947年。
- 361 文部省『学習指導要領音楽編（試案）昭和26年改訂版』教育出版、1951年。
- 362 同上。
- 363 山中和佳子、注359参照、74頁。
- 364 同上。
- 365 山中和佳子「戦後の音楽家教育におけるバロック式リコーダーの導入」『福岡教育大学紀要』第64号、第5分冊（芸術・保健体育・家政科編）、福岡教育大学、2015年、27頁。
- 366 山中和佳子「戦後日本の小学校におけるたて笛およびリコーダーの導入過程 ——昭和20年代を中心に」注359参照、80頁。
- 367 同上。
- 368 同上、82頁。
- 369 安部浩『子ども人形劇集』白眉社、1958年、194頁。
- 370 上田真弓／上間陽子、注352参照、165-168頁。



- 371 佐々木由美子、相澤京子「幼児紙芝居の普及における二つの研究会が果たした役割」『東京未来大学研究紀要』第10号、2017年、39-40頁。
- 372 内山憲尚「談話の偏重について」『幼児の教育』第47巻、文化書房博文社、1947年、9頁。
- 373 鬢櫛久美子「紙芝居研究の現状と課題」『子ども社会研究』第21号、日本子ども社会学会、2015年、192頁。
- 374 山本武則『紙芝居—街角のメディア』吉川弘文館、2000年、132頁。
- 375 日本児童文学者協会編『日本児童文学』第18巻第1号、注340参照、22頁。
- 376 同上、25頁。
- 377 同上。
- 378 同上、26頁。
- 379 中川あゆみ「1970年代の絵本——『絵本ブーム』と呼ばれた時代」鳥越信編『日本の絵本史III』ミネルヴァ書房、2002年、165頁。
- 380 長谷川潮「現代児童文学、その生成と発展 —60年代から70年代へ—」日本児童文学者協会編『戦後児童文学の50年』文溪堂、1996年、35頁。
- 381 上崎美恵子『はめるんのふえふき』金の星社、1984年、78頁。
- 382 生越嘉治『こども・ミュージカル 世界名作』あすなろ書房、1987年、22頁。
- 383 同上。
- 384 野上彰『むらさきいろの童話集』偕成社、1978年、304頁。
- 385 『たのしい幼稚園』12月号（第25巻第11号）、講談社、1969年、奥付頁。
- 386 小池タミ子『たのしい劇あそび20選』チャイルド本社、1977年、3頁。
- 387 小川一枝『赤ひげとぶどう酒商人ほか』家の光協会、1978年、204頁。
- 388 藤田圭雄『ハメルンの笛ふき』講談社、1978年、後書き頁。
- 389 小池タミ子、注386参照、7頁。
- 390 小池タミ子『もえろ天の火』東京書籍、1979年、10頁。
- 391 河村隆史『ドイツ伝説集・タンホイザー』東洋文化社、1981年、208頁。
- 392 Bartos-Höppner, Barbara: *Der Rattenfänger von Hameln*. Österreich: Annette Betz, 1984.
- 393 西本鶏介『世界童話集』芸術生活社、1973年、14頁。
- 394 西本鶏介『名作百科』学習研究社、1985年、123頁。
- 395 村田あゆみ「幼児の家庭における『絵本』環境 —昭和30~40年代の状況について—」『名古屋女子大学紀要』（人文・社会偏）第61号、2015年、273頁。
- 396 同上、274-275頁。
- 397 同上、273頁。
- 398 永田桂子『絵本という文化財に内在する機能』風間書房、2013年、2頁。
- 399 同上。
- 400 同上、34頁。
- 401 村田あゆみ、注395参照、273頁。
- 402 同上。
- 403 同上、274頁。
- 404 同上。
- 405 文部省『昭和31年度 幼稚園教育要領』フレーベル館、1956年、16頁。
- 406 同上。
- 407 村田あゆみ、注395参照、724頁。
- 408 近藤昭子「〈岩波の子どもの本〉の新しさと時代による限界」鳥越信編『日本の絵本史III』ミネルヴァ書房、2002年、82頁。
- 409 村田あゆみ、注395参照、274頁。

- 410 森久保仙太郎「日本の創作絵本のあゆみ——狭き視野からのモノローグ」日本児童文学者協会編『戦後児童文学の50年』文溪堂、1996年、184頁。
- 411 同上。
- 412 村田あゆみ、注395参照、724-725頁。
- 413 中川あゆみ、注379参照、165頁。
- 414 50年史編纂委員会編『日本雑誌協会 日本書籍出版協会 50年史』日本雑誌協会、2007年、20頁。
- 415 日外アソシエーツ編『日本出版文化史事典』注302参照、226頁。
- 416 財務省財務総合政策研究所財政史室編『昭和財政史 昭和49～63年度』第1巻、東洋経済新報社、2005年、130頁。
- 417 厚生労働省『厚生白書（昭和54年版）』厚生労働省、1979年、序章、第1節。
- 418 日外アソシエーツ編『日本出版文化史事典』注302参照、245頁。
- 419 西本鶏介『世界昔話集』芸術生活社、1973年、14頁。
- 420 中井考章「高度経済成長期の子ども」高橋勝・下山田裕彦編著『子どものく暮らし>の社会史』川島書店、1995年、81頁。
- 421 同上、103頁。
- 422 同上、82頁。
- 423 同上。
- 424 フィリップ・アリエス著、杉山光信／杉山恵美子共訳『<子供>の誕生』みすず書房、1980年。
- 425 中澤智恵／余田翔平「〈家族と教育〉に関する研究動向」『教育学研究』第95巻、日本教育社会学会、2014年、179頁。
- 426 千田有紀『日本型近代家族』勁草書房、2011年、10-11頁。
- 427 中澤智恵／余田翔平、注420参照、179頁。
- 428 エドワード・ショーター著、田中俊宏訳『近代家族の形成』昭和堂、1987年。  
落合恵美子『近代家族とフェミニズム』勁草書房、1989年。  
西川祐子「近代国家と家族モデル」『ユスティティア』第2号、ミネルヴァ書房、1991年。  
山田昌弘『近代家族のゆくえ——家族と愛情のパラドックス』新曜社、1994年。
- 429 落合恵美子、注423参照、6頁。
- 430 神原文子『現代家族と生活経営』ミネルヴァ書房、1995年、30頁。
- 431 「第3章 明治期における『ハーメルンの笛吹き男』」参照。
- 432 中井考章、注420参照、84頁。
- 433 同上、85頁。
- 434 小針誠「高度経済成長期における家族と家族のおこなう教育 ——大衆社会における家族の格差と子ども教育の不平等——」『同志社女子大学 学術研究年報』第62巻、2011年、73頁。
- 435 同上、73頁。
- 436 同上。
- 437 石黒万里子「家族における子ども中心主義の展開」『子ども社会研究』第21巻、2015年、34頁。
- 438 神原文子「〈教育する家族〉の家族問題」『家族社会学研究』日本家族社会学会、第12巻第12-2号 2001年、201頁。
- 439 中井考章、注420参照、95頁。
- 440 神原文子「〈教育する家族〉の家族問題」注438参照、201頁。
- 441 入賞に対するコメントとして、下記のように述べられている。「豊川の主婦殺害事件、福岡から広島にまたがった高速バス乗っ取り事件、岡山のバットによる母親殺害事件。2000年に起ったこれらの凶悪な事件は、揃って犯人の年齢が十七歳で、また犯行動機が不可解であったことから、『一七歳』がキーワードとなり、少年法の改正論議とともに、その心の問題が多くのメディアで取り沙汰された。人間関係の拒絶、社会参加の拒否などの特徴をもつ『引きこもり』の現象も注目された」

- (「第17回 2000年 授賞語」(サイト名:「ユーキャン 新語・流行語大賞」、URL:  
<https://www.jiyu.co.jp/singo/index.php?eid=00017>、アクセス日:2021年6月1日)
- 442 絵本では、文章の部分を「詞」(ことば)という。
- 443 共同通信社編著『記者ハンドブック 第四版』共同通信社、1981年。
- 444 趙凌梅「日本語における差別語概念の変遷 —1960年代以降の差別語問題から考える—」博士論文、2016年、69頁。
- 445 Allison, Christine: *365 Bedtime Stories*. New York: Broadway, 1998.
- 446 クリスティヌ・アリソン著、高橋啓訳『365日のベッドタイム・ストーリー』飛鳥新社、2005年、カバーそで。
- 447 同上、516頁。
- 448 50年史編纂委員会編『日本雑誌協会 日本書籍出版協会 50年史』日本雑誌協会、2007年、27頁。
- 449 同上、201頁。
- 450 白根恵子「『朝の読書』の現状と課題」『佐賀女子短期大学研究紀要』第45号、2011年、29頁。
- 451 50年史編纂委員会編、注448参照、33頁。
- 452 同上、28頁。
- 453 同上、30頁。
- 454 白根恵子、注450参照、30頁。
- 455 船橋学園読書教育研究会編『朝の読書が奇跡を生んだ』高文研、1993年。
- 456 朝日新聞社編「天声人語 朝の読書体験」『朝日新聞』1993年12月30日、1面。葉袋秀樹「朝の読書の実践と普及のための活動 —1987~1997年度—」『日本生涯教育学会論集』第35号、2014年、65頁。
- 457 白根恵子、注450参照、30頁。
- 458 50年史編纂委員会編、注448参照、202頁。
- 459 同上。
- 460 横山真貴子/水野千具沙「保育における集団に対する絵本の読み聞かせの意義 —5歳児クラスの読み聞かせ場面の観察から—」『教育実践総合センター研究紀要』第17号、2008年、41頁。
- 461 小原乃梨子「お子さんにぜひ、読み聞かせを」『月刊 本の窓』6月号、小学館、2000年、20-23頁。
- 462 今井靖親/金貞蘭「幼児への読み聞かせに関する母親の考え」『教育実践研究指導センター研究紀要』第5号、1996年、57頁。
- 463 同上、21頁。
- 464 広田照幸『日本人のしつけは衰退したか』講談社、1999年、8頁。
- 465 同上、135頁。
- 466 同上、136頁。
- 467 同上、139頁。
- 468 同上、116頁。
- 469 同上、118頁。
- 470 同上、143頁。
- 471 同上、145頁。
- 472 同上、147頁。
- 473 同上、181頁。
- 474 同上、8頁。
- 475 中央教育審議会答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について(第1次答申)」1996年。
- 476 島根県教育センター浜田教育センター「『主体的な学習』の在り方を見直すための一考察」、2016年、7頁。
- 477 瀧靖之監修『脳の専門家が選んだ『賢い子』を育てる100のものがたり』宝島社、2018年、4-5頁。

## 参考文献

### 使用テキスト

1. グリム兄弟版 Brüder Grimm: *Deutsche Sagen*, hrsg. v. Hans-Jörg Uther. Bd. 1-3, München: Diederichs, 1993.
2. グリム兄弟版 Brüder Grimm (Hrsg.) : *Deutsche Sagen*. Frankfurt a. M. : Deutscher Klassiker, 1994.
3. グリム兄弟 (英語) 版 Ward, Donald (Hrsg., und übersetzt von.): *The German Legends of the Brothers Grimm*. Bd. 1-2, Philadelphia: Human, 1981.
4. ブラウニング版 Browning, Robert: *Selected poems of Robert Browning*, hrsg. v. Ishikawa, Rinshiro and Kenji Ishida, Tokyo: Kenkyu-sha, 1954.
5. ブラウニング版 Browning, Robert: *The Poetical Works of Robert Browning*, hrsg. v. Jack, Ian and Rowena Fowler. Bd. 3, Oxford: Clarendon, 1988.
6. ラング版 Lang, Andrew: *The Red Fairy Book*. London: Longmanns, Green, 1890.

### 参考文献

7. 朝日新聞社編「天声人語 朝の読書体験」『朝日新聞』1993年12月30日、1面。
8. 阿部謹也『ハーメルンの笛吹き男 一伝説とその世界一』平凡社、1974年。
9. 新井弘城「『少年少女譚海』創刊のころ」加太こうじ／上笙一郎編『児童文学への招待』南北社、1965年。
10. 飯干陽『木村小舟と『少年世界』』あずさ書店、1992年。
11. 石川晴子「占領下の翻訳絵本——アメリカからの新しい絵本の波」鳥越信編『日本の絵本史III』ミネルヴァ書房、2002年、36-56頁。
12. 石川林四郎／石黒魯平『A School manual of English Composition』（中学校用英作文書）、興文社、1914年。
13. 石川林四郎／石黒魯平『A Teachers' Manual of Notes on The Pacific Reader』（パシフィック、リーダーズ教師用）第4巻、興文社、1920年。
14. 石川林四郎／石黒魯平『The Pacific Readers』（ザ パシフィック リーダーズ）、改訂版第3巻、興文社、1921年。
15. 石川林四郎／石黒魯平『The Pacific Readers』（ザ パシフィック リーダーズ）、改訂版第4巻、興文社、1921年。
16. 石黒万里子「家族における子ども中心主義の展開」『子ども社会研究』第21巻、2015年、33-47頁。
17. 石橋延吉『東京地図 神田区之部』石橋延吉発行、1903年。
18. 伊藤（佐久間）りか「『清き誌上でご交際を』——明治末期少女雑誌投書欄に見る読者共同体の研究」『女性学』第4号、日本女性学会、1996年、114-141頁。
19. 井上勤纂訳『獨和袖珍字彙』字書出版社、1885年。
20. 今井靖親／金貞蘭「幼児への読み聞かせに関する母親の考え」『教育実践研究指導センター研究紀要』第5号、1996年、57-65頁。
21. 巖谷小波編『少年世界』第8巻第3号、博文館、1902年。

22. 巖谷小波編『少年世界』第8巻第7号、博文館、1902年。
23. 巖谷小波編『少年世界』第8巻第12号、博文館、1902年。
24. 巖谷小波『文章世界』博文館、1906年。
25. エドワード・ショーター著、田中俊宏訳『近代家族の形成』昭和堂、1987年。
26. 上田正昭他監修『講談社日本人名大辞典』講談社、2001年。
27. 上田真弓／上間陽子「学校の演劇 —『学校劇』と日本の演劇史—」『琉球大学教育学部紀要』第83号、2013年、151-176頁。
28. 上野陽一他編『学生英和辞典』博報堂、1910年。
29. 内山憲尚「談話の偏重について」『幼児の教育』第47巻、文化書房博文社、1947年。
30. 大石五雄『英語を禁止せよ』ごま書房、2007年。
31. 大久保久雄「博文館編集者 南部亙国さんと蔵書のこと」『名著サプリメント』第3巻第10号（秋季増刊号）、名著普及会、1990年。
32. 大阪国際児童文学館編『日本児童文学大事典』第2巻、大日本図書、1993年。
33. 大島國千代訳『ロングマン氏第三讀本直譯註釋』金刺芳流堂、1895年。
34. 大島國千代訳『フレデリック大王論直譯註釋』上巻、金刺芳流堂、1896年。
35. 岡倉由三郎『The Laurel Readers』（ろおれる・りいだ）3巻、大日本圖書、1914年。
36. 岡邊白夜『磐の王子』宏文堂、1926年。
37. 小田条次郎、藤井三郎、桜井勇作『孝和袖珍字書』学半社、1872年。
38. 落合恵美子『近代家族とフェミニズム』勁草書房、1989年。
39. 小原乃梨子「お子さんにぜひ、読み聞かせを」『月刊 本の窓』6月号、小学館、2000年、20-23頁。
40. 角元節子「『井上英和大辞典』『井上和英大辞典』編者 井上十吉」四国英語教育学会『紀要』第25号、2005年、21-30頁。
41. 加藤千陰『仮名の鏡』栗原万寿、中村道四郎、1901年。
42. 金田鬼一編『Deutsche Prosa』（獨逸散文集）1巻、大日本圖書、1916年。
43. 蚊野千尋「日本における「ハーメルンの笛吹き男」の受容 —大正期（1912-1926年）を中心に—」『梅花児童文学』第27号、梅花女子大学大学院児童文学会、2019年、68-85頁。
44. 蚊野千尋「日本における「ハーメルンの笛吹き男」の受容 —明治期から昭和期まで—」『昔話 研究と資料』第48号、日本昔話学会、2020年、77-93頁。
45. 上村直己『明治期ドイツ語学者の研究』多賀出版、2001年。
46. 上村直己『近代日本のドイツ語学者』鳥影社、2008年。
47. 川戸道昭「グリム童話の発見」川戸道昭／野口芳子／榊原貴教『日本におけるグリム童話翻訳書誌』ナダ出版センター、2000年、5-50頁。
48. 川戸道昭／野口芳子／榊原貴教『日本におけるグリム童話翻訳書誌』ナダ出版センター、2000年。
49. 河野誠哉「出版史の中の学習文化」『大学改革と生涯学習 —山梨学院生涯学習センター紀要』、山梨学院生涯学習センター、2016年、67-87頁。
50. 川村文昌他共編『和譯獨逸辭典』春風社、1872年。

51. 神原文子『現代家族と生活経営』ミネルヴァ書房、1995年。
52. 神原文子「〈教育する家族〉の家族問題」『家族社会学研究』日本家族社会学会、第12巻第12-2号、2001年、197-207頁。
53. 行徳永考纂訳『挿入圖画獨和字書大全』金原寅作、1890年。
54. 京都中學獨逸學教官編『和譯獨逸辭書』村上勘兵衛、1873年。
55. 共同通信社編著『記者ハンドブック 第四版』共同通信社、1981年。
56. 国松考二編『小学館 独和大辞典』小学館、1985年。
57. けやき舎編「大正十二年版 神楽坂出版社全四十四社の活躍」『神楽坂まちの手帖』第14号、けやき舎、2006年、26-27頁。
58. 小泉直美「『エンゲリン讀本』における邦訳されたグリム童話とドイツ伝説 ―初出の邦訳を中心に―」『大阪国際児童文学振興財団研究紀要』第33号、2020年、43-54頁。
59. 厚生労働省『厚生白書（昭和54年版）』厚生労働省、1979年。
60. 小島伊佐美『Lesebuch des Deutschen』（獨逸語教本）、鳴海屋書店、1911年。
61. 小島伊佐美編『Neues Deutsches Lesebuch mit Anmerkungen』（獨逸新讀本）、南江堂、1913年。
62. 小島新生編『出版新体制の全貌』出版タイムス社、1941年。
63. 50年史編纂委員会編『日本雑誌協会 日本書籍出版協会 50年史』日本雑誌協会、2007年。
64. 小西正保「戦後における絵本出版の衰退」日本児童文学者協会編『日本児童文学』第44巻第2号、日本児童文学者協会、1998年、14-21頁。
65. 小西正保『児童文学の伝統と創造』ハッピーオウル社、2005年。
66. 小針誠「高度経済成長期における家族と家族のおこなう教育 ――大衆社会における家族の格差と子ども教育の不平等――」『同志社女子大学 学術研究年報』第62巻、2011年、71-81頁。
67. 近藤昭子「〈岩波の子どもの本〉の新しさと時代による限界」鳥越信編『日本の絵本史III』ミネルヴァ書房、2002年、81-104頁。
68. 近藤宗男編『こどもラ・フォンテン』イデア書院、1927年。
69. 近藤宗男『聖ジョージと龍』玉川学園出版部、1930年。
70. 近藤宗男『どうして此世に冬が来たか』玉川学園出版部、1930年。
71. 近藤宗男『白鳥の騎士』玉川学園出版部、1930年。
72. 齋藤勇『サウル』岩波書店、1920年。
73. 財務省財務総合政策研究所財政史室編『昭和財政史 昭和49～63年度』第1巻、東洋経済新報社、2005年。
74. 佐々木由美子、相澤京子「幼児紙芝居の普及における二つの研究会が果たした役割」『東京未来大学研究紀要』第10号、2017年、39-48頁。
75. 佐藤喜之「博言学事始め 明治・大正の言語学 その1」『学苑』第762号、昭和女子大学、2004年、58-69頁。
76. サビン・バリング＝グールド著、池上俊一監『ヨーロッパをさすらう異形の物語』下巻、柏書房、2007年。

77. シェイクスピア原作、近藤宗男編『シェイクスピア物語』イデア書院、1925年。
78. 下川耿史『近代子ども史年表 明治・大正編』河出書房新社、2002年。
79. 渋谷新平編『英語の学び方』大阪屋号、1978年。
80. 島根県教育センター浜田教育センター「『主体的な学習』の在り方を見直すための一考察」、2016年。
81. 社史編纂委員会編『講談社の歩んだ50年（昭和編）』講談社、1959年。
82. 少年通俗教育会編『幼年百譚 お話の庫』春の巻、博文館、1916年。
83. 昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書』第30巻、1969年。
84. 白根恵子「『朝の読書』の現状と課題」『佐賀女子短期大学研究紀要』第45号、2011年、29-34頁。
85. 推移道人（中村道四郎）訳『すたんれー亞弗利加探検譚直譯注釋』金刺芳流堂、1899年。
86. 鈴木重貞『ドイツ語の伝来』教育出版センター、1975年。
87. 千田有紀『日本型近代家族』勁草書房、2011年。
88. 大日本雄弁会講談社『雄弁』第12巻第7号、大日本雄弁会講談社、1921年。
89. 大日本雄弁会講談社『雄弁』第12巻第8号、大日本雄弁会講談社、1921年。
90. 大日本雄弁会講談社『雄弁』第12巻第9号、大日本雄弁会講談社、1921年。
91. 平倫子「『ハーメルンの笛吹き』伝説と子ども」『北星論集』第24号、北星学園大学、1987年、1-26頁。
92. 高橋五郎『和漢雅俗いろは辞典』長尾景弼、1879年。
93. 竹迫祐子他『思い出の名作絵本 岡本帰一』河出書房新社、2001年。
94. 武田芦鴻訳『ロングマン氏第三讀本獨案内意譯附』金刺芳流堂、1898年、
95. 武田芦鴻訳『ロングマン氏第三讀本獨案内意譯附』下之巻、金刺芳流堂、1899年。
96. 田中卓也「戦後における『少年倶楽部』の誌面構成と読者の様相」『共栄大学研究論集——共大研究』第11号、共栄大学国際経営学部、2013年、121-138頁。
97. 田辺久之「三浦環 伝記資料考 一環の著作と瀬戸内晴美の『お蝶夫人』」常葉学園短期大学編『常葉学院短期大学紀要』第14号、1982年、31-45頁。
98. 田辺久之「三浦環 伝記資料考 三 一東京音楽学校時代 後編」常葉学園短期大学編『常葉学院短期大学紀要』第18号、1987年、1-16頁。
99. 田辺久之「三浦環 伝記資料考 五 一海外公演」常葉学園短期大学編『常葉学院短期大学紀要』第24号、1993年、51-68頁。
100. 田辺久之「三浦環伝記資料考 一帝劇時代」常葉学園短期大学編『常葉学院短期大学紀要』第25号、1994年、43-62頁。
101. 谷川恵一「近代文献について—奥付の読み方」『日本古典籍講習会テキスト』第16号、国文学研究資料館、2019年、1-19頁。
102. 田村化三郎纂訳『袖珍獨和字典』南江堂、1893年。
103. 中央教育審議会答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について（第1次答申）」1996年。
104. 中国新聞社編『ヒロシマの記録 年表・資料篇』未来社、1966年。
105. 趙凌梅「日本語における差別語概念の変遷 一1960年代以降の差別語問題から考え

- る一」博士論文、2016年。
106. 東京学院「東京学院学科課程表」(623-B6-3) 1899年(東京都公文書館蔵)。
  107. 獨協学園百年史編纂委員会編『獨協百年』第5号、獨協学園百年史編纂委員会、1981年。
  108. 登張竹風「ドイツ語懺悔」『登張竹風遺稿追想集』郁文堂出版、1965年。
  109. 豊田実『The Rose Readers for Girls' Schools』(ザ ローズ リーダーズ)、4巻、富山房、1922年。
  110. 鳥越信編『日本児童文学史年表1』、明治書院、1975年。
  111. 鳥越信編『日本児童文学史年表2』、明治書院、1975年。
  112. 鳥越信「戦後児童文学の50年を概観する」日本児童文学協会編『戦後児童文学の50年』文溪堂、1996年、8-19頁。
  113. 内閣官報局『法令全書 明治二年』内閣官報局、1887年。
  114. 中井考章「高度経済成長期の子ども」高橋勝・下山田裕彦編著『子どもの〈暮らし〉の社会史』川島書店、1995年、81-108頁。
  115. 中川あゆみ「1970年代の絵本——「絵本ブーム」と呼ばれた時代」鳥越信編『日本の絵本史III』ミネルヴァ書房、2002年、165-181頁。
  116. 中澤智恵／余田翔平「〈家族と教育〉に関する研究動向」『教育学研究』第95巻、日本教育社会学会、2014年、171-205頁。
  117. 永田桂子『絵本観・玩具観の変遷』高文堂、1987年。
  118. 永田桂子『絵本という文化財に内在する機能』風間書房、2013年。
  119. 中村正直「善良ナル母ヲ造ル説」『明六雑誌』第33号、明六社、1875年。
  120. 中村道夫(道四郎)訳『エンゲリン第二讀本獨學自在』上巻、金刺芳流堂、1896年。
  121. 中村道夫(道四郎)訳『ゴルドン將軍傳直譯註釋』上巻、金刺芳流堂、1896年。
  122. 中村道夫(道四郎)訳『ゴルドン將軍傳直譯註釋』下巻、金刺芳流堂、1897年。
  123. 中村道夫(道四郎)訳『エンゲリン第三讀本直譯註解』下巻、金刺芳流堂、1898年。
  124. 中村道夫(道四郎)訳『ボック氏第三讀本直訳註解』上之巻、金刺芳流堂、1898年。
  125. 中山淳子『グリムのメルヒェンと明治期教育』臨川書店、2009年。
  126. 中山七里『ハーメルンの誘拐魔』角川書店、2016年。
  127. 奈良女子高等師範學校附屬小學校内學習研究會編『學習研究』第16巻第2号、目黒書店、1937年。
  128. 西成彦『ラフカディオ・ハーンの耳』岩波書店、1998年
  129. 西田良子「戦後児童文学のあゆみ」『戦後児童文学の50年』日本児童文学教会、1996年、20-34頁。
  130. 日本児童演劇協会編『日本の児童青少年演劇の歩み—100年の年表』日本児童演劇協会、2005年、77頁。
  131. 日本児童文学学会編『児童文学事典』東京書籍、1988年。
  132. 日本児童文学者協会編『日本児童文学』第18巻第1号、日本児童文学者協会、1972



年。

133. 日外アソシエーツ編『20世紀日本人名事典』日外アソシエーツ、2004年。
134. 日外アソシエーツ編『日本出版文化史事典』日外アソシエーツ 2010年。
135. 野口忠雄「R. BrowningのThe Pied Piper of Hamelinについて」、『北星論集』第28号、北星学園大学、1991年、65-101頁。
136. 野口芳子「明治期におけるグリム童話の翻訳と受容」大野寿子編『グリムへの扉』勉誠出版、2015年、211-241頁。
137. 野口芳子『グリム童話のメタファー』勁草書房、2016年。
138. 野口芳子「日本における『赤ずきん』の需要について ―昭和期を中心に―」『梅花児童文学』第27号、梅花女子大学大学院児童文学会、2019年、86-103頁。
139. 野口芳子「日本における『赤ずきん』の受容 ―平成期を中心に―」『梅花女子大学心理こども学部紀要』第10号、2020年、1-12頁。
140. 野口芳子「獨逸語教科書に採用されたグリム童話 ―明治・大正期を中心に―」『梅花女子大学心理こども学部紀要』第11号、2021年、10-21頁。
141. 信岡資生「日独二言語対訳辞書総覧 序」『成城大学経済研究』第133号、1996年、157-198頁。
142. 信岡資生「日独二言語対訳辞書総覧 総目録1」『成城大学経済研究』第134号、1996年、139-164頁。
143. 長谷川潮「現代児童文学、その生成と発展 ―60年代から70年代へ―」日本児童文学者協会編『戦後児童文学の50年』文溪堂、1996年、35-54頁。
144. 林浩康「子ども観の歴史的変遷」『北星学園大学社会福祉学部北星論集』第34号、北星学園大学、1997年、55-71頁。
145. はやみねかおる『笛吹き男とサクセス塾の秘密 ―名探偵夢水清志郎事件ノート』講談社、2004年。
146. 平田オリザ『演劇のことば―ことばのために』岩波書店、2004年。
147. 平田諭治「1901年度文部省外国留学生としての岡倉由三郎」『筑波大学教育学系論集』第42巻、第2号、1-13頁。
148. 鬢櫛久美子「紙芝居研究の現状と課題」『子ども社会研究』第21号、日本子ども社会学会、2015年、185-202頁。
149. フィリップ・アリエス著、杉山光信／杉山恵美子共訳『〈子供〉の誕生』みすず書房、1980年。
150. 府川源一郎「アンデルセン童話とグリム童話の本邦初訳をめぐって」『文学』第9巻第4号、2008年、140-151頁。
151. 福島鳳一郎纂訳『挿圖和譯獨逸字彙』大倉書店、1889年。
152. 福見尚賢、小栗栖香平纂訳『挿入圖畫獨蘇字典大全』朝香屋、1885年。
153. 福光えみ子他編『子どものための世界のお話』新読書社、1994年。
154. 船橋学園読書教育研究会編『朝の読書が奇跡を生んだ』高文研、1993年。
155. 帆足理一郎『人生詩人ブラウニング』洛陽堂、1918年。
156. 松尾豊文訳『ニューナショナル第四讀本直譯註釋』上巻、金刺芳流堂、1898年。
157. 松田為常、瀬之口隆敬、村松経春編『獨和字典』アメリカ長老派協会、1873年。

158. 松村幹男「徳島の英語者井上十吉」『中国地区英語教育学会研究紀要』第15巻、中国地区英語教育学会、1985年、107-111頁。
159. 溝井裕一「異界が口を開けるとき —『ハーメルンの笛吹き男伝説』と夏至にまつわる民間信仰について」『ドイツ文学』第133号、日本独文学会、2007年、209-218頁。
160. 葉袋秀樹「朝の読書の実践と普及のための活動 —1987～1997年度—」『日本生涯教育学会論集』第35号、2014年、61-70頁。
161. 三宅興子編『日本における子ども絵本成立史』ミネルヴァ書房、1997年。
162. 宮地裕也編『こくごー』下巻、光村図書出版、2011年。
163. 武者小路公共『滞欧八千一夜』暁書房、1949年。
164. 村田あゆみ「幼児の家庭における『絵本』環境 —昭和30～40年代の状況について—」『名古屋女子大学紀要』（人文・社会偏）第61号、2015年、271-285頁。
165. 村達三郎『植物学要解』金刺兄弟出版部、1907年。
166. メーテルリンク著、近藤宗男編『青い鳥』イデア書院、1924年。
167. 物集高見『ことばのはやし』みづほや、1888年。
168. 森久保仙太郎「日本の創作絵本のあゆみ——狭き視野からのモノログ」日本児童文学者協会編『戦後児童文学の50年』文溪堂、1996年、184-194頁。
169. 文部省『学習指導要領一般編（試案）』日本書籍、1947年。
170. 文部省『学習指導要領音楽編（試案）昭和二十二年度』中等学校教科書、1947年。
171. 文部省『学習指導要領音楽編（試案）昭和26年改訂版』教育出版、1951年。
172. 文部省『昭和31年度 幼稚園教育要領』フレーベル館、1956年。
173. 山口小太郎 „Die besten Lesebücher zum Unterricht der deutschen Sprache“、日独書院編『ドイツ語学雑誌』第12巻第11号、日独書院、1909年。
174. 山田敏弘『国語教師が知っておきたい日本語音声・音声言語』改訂版、くろしお出版、2013年。
175. 山中和佳子「戦後日本の小学校におけるたて笛およびリコーダーの導入過程 —昭和20年代を中心に—」『音楽教育実践ジャーナル』第7巻第2号、日本音楽教育学会、2010年、73-83頁。
176. 山中和佳子「戦後の音楽家教育におけるバロック式リコーダーの導入」『福岡教育大学紀要』第64号、第5分冊（芸術・保健体育・家政科編）、福岡教育大学、2015年、27頁。
177. 山本剛『獨逸文典字彙』英蘭堂、1884年。
178. 山本武則『紙芝居—街角のメディア』吉川弘文館、2000年。
179. 山本昇「日本におけるロバート・ブラウニングの受容」『キリスト教と諸学』第11巻、1997年、125-147頁。
180. 山本松次郎編『袖珍亭語譯囊』長崎出藍社、1872年。
181. 幼年世界編集部編『お話の種』上編、博文館、1915年。
182. 横山真貴子／水野千具沙「保育における集団に対する絵本の読み聞かせの意義 —5歳児クラスの読み聞かせ場面の観察から—」『教育実践総合センター研究紀要』第17号、2008年、41-51頁。

183. 吉原秀雄訳『掌中獨和字彙』六合館、1892年。
184. 吉本明光編『三浦環』日本図書センター、1997年。
185. 渡辺道明『ハーメルンのバイオリン弾き』エニックス、1991-2001年。
186. 和田音吉郎、風祭甚三郎纂訳『歌辭彙』後學堂、1883年。
187. 和田音吉郎訳『明治独和字典』六合館、1887年。
188. CLAMP『ツバサ —RESERVOIR CHRoNiCLE—』講談社、2003-2009年。
189. JACAR (アジア歴史資料センター) 編、Ref. C05034686100、公文備考、昭和11年、B人事、巻18 (防衛省防衛研究所)
190. *Archives Biographiques Françaises (ABF)*., Teil 1.
191. Allison, Christine: *365 Bedtime Stories*. New York: Broadway, 1998.
192. Baring-Gould, Sabine: *Curious Myths of the Middle Ages*. London: Rivinhtons, 1886.
193. Bartos-Höppner, Barbara: *Der Rattenfänger von Hameln*. Österreich: Annette Betz, 1984.
194. Browning, Robert: *The Pied Piper of Hamelin*. London: Geroge Routledge and Sons, 1888.
195. Brümmner, Franz: *Lexikon der deutschen Dichter und Prosaisten von Beginn des 19. Jahrhundert bis zur Gegenwart*. Sechste völlig neu bearbeitete und stark vermehrte Aufgabe. Band. 1, Leipzig: Reclam, 1913.
196. De Vane, William Clyde: *A Browning Handbook*. 2. Aufl., New York: Appleton-Century-Croft, 1955.
197. Dickson, Arthur: Browning's Source for the Pied Piper of Hamelin. In: *Studies in Philology*. Bd. 23, Heft 3, 1926, S. 327-336.
198. Dobbertin, Hans: *Quellensammlung zur Hamelner Rattenfängersage*. Göttingen: Schwartz, 1970.
199. Dobbertin, Hans: Die Jahreszahl der Kinderausfahrt. In: *Jahrbuch*. Hameln: Museumsverein, 1982/84.
200. Engeli, August und Fechner, Heinrich: *Deutsches Lesebuch: Aus den Quellen zusammengestellt*. Ausg. A, Teil 2. Tokyo und Osaka: Rikugokwan, 1886.
201. Evers, M. und H. Walz :*Deutsches Lesebuch für höhere Lehranstalten*. Leipzig und Berlin: Teubner, 1899.
202. Furnivall, Frederick James: *A Bibliography of Robert Browning, from 1833 to 1881*. 2. Aufl., London: N. Trübner, 1881.
203. Hinrichsen, Adolf: *Das literarische Deutschland*. 2. Aufl., Berlin: Literarischen Deutschlands, 1891.
204. Hofmann, Friedrich: *Der Rattenfänger von Hameln, Oper in fünf Akten*. Leipzig: Bibliographisches, 1879.
205. Jacobs, Joseph: *The Familiar Letters of James Howell*. London: Nutt, 1892.
206. Krogmann, Willy: Der Rattenfänger von Hameln. In: *Rheinisch Westfälische Zeitschrift für Volkskunde*. Bd. 14, 1967.
207. Marelle, Charles: *Die französischen Märchen von Perrault, von Gustave Doré illustriert*. Braunschweig: Westermann, 1868.
208. Marelle, Charles: Le preneur de rats. In: *Affenschwanz, et cetera: Variantes orales de contes*

- populaires français et étrangers*. Braunschweig: George Westermann, 1888, S. 53-59.
209. *Notes and Queries*. Reihe. 7, Bd. 9. London: Office, 22, Took's Court, Chancery Lane, E.C. 1890.
210. *Notes and Queries*. Reihe. 7, Bd. 10. London: Office, 22, Took's Court, Chancery Lane, E.C. 1890.
211. Otto, Franz: *Der Jugend Lieblings- Märchenschatz*. Leipzig und Berlin: Otto Spamer, 1880.
212. Schwedt, Georg: *Die Rattenfängerstadt Hameln an der Weser im Spiegel des Kupferstechers Merian*. Norderstedt: Books on Demand, 2016.
213. Verstegan, Richard: *Restitution of Decayed Intelligence*. London: Iohn Bill, 1628.
214. Wanley, Nathaniel: *The Wonders of the Little World*. London: Basset, 1678.

参考資料 (映像・音楽・ゲーム)

215. 「仮面ライダーウィザード」東映、2012-2013年。
216. 「グリムノーツ」スクウェア・エニックス、2016-2020年。
217. 「砂の塔 ―知りすぎた隣人」TBSテレビ、2016年。
218. Jackson, Wilfred: *The Pied Piper*. 1933. Walt Disney.
219. Sound Horizon 「エルの絵本 【魔女とラフレンツェ】」ベルウッド、2005年。
220. Walt Disney Studio: *The Pied Piper*. London: Bodly Head, 1934.

#### 図版出所一覧

- 図1 『幼年百譚 お話の庫』 少年通俗教育會訳、博文館、1916年、106頁。蚊野千尋所蔵。
- 図2 『世界童話寶玉集』 楠山正雄編、富山房、1919年、255頁。日本近代文学館所蔵。
- 図3 『少年文学』 第4号、矢崎忠蔵訳、イデア書院、1923年、2頁。国立国会図書館所蔵。
- 図4 『山の大王』 岡邊白夜著、宏文堂、1925年、123頁。三康図書館所蔵。

【巻末資料1】邦訳の一覧表

番号	出版年月	媒体	訳者／編者	話の題名	収録本	出版社	分類
明治期							
1	1896年8月 (明治29年)	教科書	中村道夫 (道四郎)	「ハーメルン二迄ノ小兒等」	『エンゲリン第二讀本獨學自在』上巻	金刺芳流堂	G忠実
2	1912年5月 (明治45年)	本	柴田環	「ハメルンの鼠取」	『世界のオペラ』	共益商社	ホフマン 版忠実
大正							
3	1916年10月 (大正5年)	本	少年通俗教育 會	「笛吹き爺さん」	『幼年百譚 お話の庫』秋の巻	博文館	L改作
4	1919年12月 (大正8年)	本	水谷勝	「魔法の笛」	『世界童話寶玉集』	富山房	B改変
5	1923年1月 (大正12年)	本	文献書院	「ハメリンの笛吹」	『ブラウニング詩選集』(世界名著梗概叢書13)	文献書院	B忠実
6	1923年9月 (大正12年)	雑誌	矢崎忠藏	「笛吹き翁さん」	『少年文学』第4号	アイデア書院	B改変
7	1925年2月 (大正14年)	本	岡邊白夜	「鼠捕りの男」	『山の大王』(宏文堂童話集3)	宏文堂	L忠実
8	1925年11月 (大正14年)	本	近藤宗男	「ハムリンの『斑の笛吹き』」	『西洋傳説 白鳥の騎士』	アイデア書院	B忠実
9	1926年11月 (大正15年)	雑誌	雑賀忠義	「ハメリンのまんだら笛吹」	『英語研究』ブラウニング号(第19巻第8号)	研究社	B忠実
昭和第1期							
10	1928年8月 (昭和3年)	本	松村武雄	「斑の笛吹」	『獨逸神話傳説集』(神話伝説大系)	近代社	B改変
11	1934年11月 (昭和9年)	雑誌	濱田廣介 (1冊目)	「魔法の笛」	『幼年俱樂部』(第9巻第11号)	大日本雄弁 会講談社	B改変
12	1938年1月 (昭和13年)	絵本	楠山正雄	「魔法の笛」	『世界お伽噺』(講談社の絵本52)	大日本雄弁 会講談社	B改変
13	1941年4月 (昭和16年)	絵本	北村壽夫	「魔法の笛」	『黄金ノ鷲鳥ト繪話』(講談社の絵本175)	大日本雄弁 会講談社	B改作
昭和第2期							
14	1946年5月 (昭和21年)	雑誌	光吉夏彌	「ハメリンの笛吹き」	『少年クラブ』5月号	大日本雄弁 会講談社	B改変
15	1946年6月 (昭和21年)	雑誌	野上彰 (1冊目)	「ハンメルンの笛吹き」	『少女の友』第29巻第5号	実業之日本 社	B忠実
16	1947年6月 (昭和22年)	本	楠山正雄	「魔法の笛」	『思ひ出の國』(世界童話集)	東西社	B忠実
17	1948年10月 (昭和23年)	雑誌	尾関岩二	「名作物語 ハムリンの笛吹き」	『ひかりのくに 三・四年生』10月号	ひかりのくに 昭和出版	B忠実
18	1950年3月 (昭和25年)	本	福光えみ子 (1冊目)	「ハメルンのふえふきおじいさん」	『子供に読んで聞かせるお話の本』春の巻	羽田書店	B改作
19	1950年9月 (昭和25年)	本	小出正吾 (1冊目)	「ハンメルンの笛ふき」	『お話十二か月 10-12月の巻』(世界童話の泉)	実業之日本 社	B改作
20	1951年12月 (昭和26年)	本	由木明	「まんだらまんとのふえふきおとこ」	『たからのこぼこ』	小峰書店	B改変
21	1952年1月1日 (昭和27年)	戯曲	青沼三朗	「笛吹き(ハメルン)」	『中学学校劇全集』第1巻	小学館	B改作

22	1952年1月10日 (昭和27年)	本	浜田廣介 (2冊目)	「ハメルンのふえふき」	『カメレオンの王さま』(ひろすけ家庭童話文庫)	主婦之友社	L改変
23	1952年9月1日 (昭和27年)	紙芝居	大川秀夫	「ハメルンの笛吹きおじさん」	(書名なし)	教育画劇	B改作
24	1952年9月1日 (昭和27年)	雑誌	宮脇紀雄	「ふしぎな ふえふき」	『一年ブック』9月号(第2巻第6号)	秀文社	B改変
25	1953年7月 (昭和28年)	雑誌	加藤省吾	「ふえふきおじさん」	『三年の学習』7月号(第8巻第4号)	学習研究社	B改変
26	1953年9月 (昭和28年)	本	大木雄二 (1冊目)	「ふえふきおじさん」	『二年生の世界童話』(世界童話名作選)	金の星出版	B改作
27	1954年2月 (昭和29年)	絵本	土家由岐雄 (1冊目)	「ふえふきおじさん」	『ふえふきおじさん』(小学館の幼年絵本18)	小学館	不明
28	1954年9月 (昭和29年)	雑誌	(不明)	「ふしぎな ふえふき」	『一年ブック』9月号(第4巻第9号)	学習研究社	不明
29	1955年12月 (昭和30年)	本	植田敏郎 (1冊目)	「ハメルンのネズミとり」	『世界児童文学選1』(日本児童文庫47)	アルス	G忠実
30	1956年6月 (昭和31年)	本	植田敏郎 (2冊目)	「ハメルンの子どもたち」	『ドイツむかしばなし 五年生』	宝文館	G忠実
31	1956年11月1日 (昭和31年)	雑誌	寺脇信夫	「ふしぎなふえふき」	『二年の学習』11月号	学習研究社	不明
32	1956年11月25日 (昭和31年)	本	植田敏郎 (3冊目)	「はめるんのふえふき」	『幼年おはなし宝玉集 世界編』	宝文館	G忠実
33	1956年12月 (昭和31年)	雑誌	大木雄二 (2冊目)	「ふしぎなふえふき」	『幼稚園ブック』12月号(第8巻第13号)	学習研究社	不明
34	1957年2月 (昭和32年)	本	久保喬	「ハンメルンのふえふき」	『世界のむかし話三年生』	偕成社	B改作
35	1957年3月 (昭和32年)	本	大平千枝子	「魔法の笛」	『世界童話宝玉集』下巻	宝文館	B忠実
36	1957年6月 (昭和32年)	雑誌	花山明	「ハンメルンのふえふき男」	『たのしい三年生』(第1巻第7号)	大日本雄弁会講談社	B改変
37	1957年10月 (昭和32年)	本	(不明)	「魔の笛」	『世界名著ものがたり(六年生)』	東西文明社	B忠実
38	1957年12月 (昭和32年)	本	山室静	「ハメルンの笛吹き男」	『魔法つかいと子ども』(世界のむかし話2)	ポプラ社	G改変
39	1958年6月 (昭和33年)	本	伊達豊	「ハメルンのふえふき男」	『世界伝説めぐり』(私たちの本だなシリーズ五年生)	泰光堂	L改作
40	1958年8月 (昭和33年)	戯曲	安田浩	「ハメルンの笛吹き」	『子ども人形劇集』	白眉社	B改作
41	1960年2月 (昭和35年)	本	藤原定	「魔法の笛にさらわれた子どもたち」	『グリム伝説集II』	実業之日本社	G忠実
42	1960年、月不明 (昭和35年)	本	土家由岐雄 (2冊目)	「ハメルンの笛吹き」	『世界むかし話集』(児童世界文学全集12)	偕成社	L忠実
43	1961年6月 (昭和36年)	本	酒井朝彦	「はーめるんのふえふき」	『世界むかし話集』(幼年世界文学全集12)	偕成社	B改変
44	1961年9月 (昭和36年)	雑誌	豊田次雄	「ふえふきおじさん」	『ひかりのくに』(第16巻第9号)	ひかりのくに 昭和出版	B改変
45	1962年、月不明 (昭和37年)	絵本	土家由岐雄 (3冊目)	(書名と同じ)	『ふえふきおじさん』	小学館	不明

46	1963年12月 (昭和38年)	本	川崎大治	「ハーメルンのふえふき」	『世界のおとぎ話』(幼年絵 童話全集17)	偕成社	不明
47	1964年5月 (昭和39年)	雑誌	おのかおる	「ふしぎなふえふき」	『あそび』	児童福祉会	不明
48	1964年6月 (昭和39年)	絵本	那須辰造	「ハンメルンのふえふき」	『ドイツ童話集』(世界の童 話8)	講談社	L改変
49	1964年、月不明 (昭和39年)	本	塩谷太郎	「ハメリンのネズミとり」	『オクスフォード 世界の民 話と伝説5 ドイツ編』	講談社	G改変
50	1964年、月不明 (昭和39年)	本	堀尾青史	「ハンメルンのふえふき」	『はなの小人』(世界名作童 話全集36)	ポプラ社	L忠実
51	1965年4月 (昭和40年)	本	植田敏郎 (4冊目)	「はめるんのこどもたち」	『白鳥のみずうみ』(世界の どうわ19)	偕成社	G忠実
52	1965年11月 (昭和40年)	絵本	森いたる	「ふしぎな 笛吹き」	『ふしぎな 笛吹き』(講談 社のディズニー絵本69)	講談社	不明
53	1966年12月 (昭和41年)	雑誌	柴野民三	「ハメルンの ふえふき」	『キンダーブック』12月号 (第21集第9編)	フレーベル 館	B忠実
54	1967年3月 (昭和42年)	本	大川悦生 (1冊目)	「ハーメルンのふえふき」	『世界むかし話』(カラー 版・世界の幼年文学4)	偕成社	B改作
昭和第3期							
55	1968年5月 (昭和43年)	本	大川悦生 (2冊目)	「ハメルンの笛吹き」	『きょうのおはなしなあに』 冬の巻	ひかりのく に昭和出版	B改変
56	1968年7月 (昭和43年)	絵本	土家由岐雄 (4冊目)	「ふえふきおじさん」	『海外の絵話』(世界の童 話30)	小学館	L改作
57	1969年10月 (昭和44年)	本	生源寺美子	「ハメルンのふえふき」	『お話の森3・4月』	牧書店	G改変
58	1969年12月 (昭和44年)	雑誌	間所ひさこ (1冊目)	「ハメルンのふえふき」	『たのしい幼稚園』12月号 (第25巻第11号)	講談社	L改変
59	1970年、月不明 (昭和45年)	絵本	岸田耕造	(書名と同じ)	『ふえふきおじさん』	高橋書店	B改作
60	1973年、月不明 (昭和48年)	本	山主敏子	「ハメルンの笛ふき男」	『世界のこわい話』	偕成社	G改変
61	1973年5月 (昭和48年)	本	西本鶏介 (1冊目)	「ハーメルンの笛吹き 男」	『世界昔話集』	芸術生活社	不明
62	1976年7月 (昭和51年)	本	浜田廣介 (3冊目)	「ハメルンのふえふき」	『浜田廣介全集』第10巻	集英社	L改変
63	1976年9月 (昭和51年)	絵本	矢川澄子	(書名と同じ)	『ハメルンの笛ふき』	文化出版局	B忠実
64	1977年3月 (昭和52年)	本	大庭千尋	「ハメリンの魔法の笛吹 き 童詩 (W・M・少 年のために)」	『ブラウニング詩集』	国文社	B忠実
65	1977年5月 (昭和52年)	絵本	不明	「ハーメルンのふえふき」	『フェアリ子ども世界名作シリー ズ』24	TBSブリタニ カ	B改変
66	1977年8月 (昭和52年)	戯曲	小池タミ子 (1冊目)	「ハメルンの笛吹き」	『たのしい劇あそび20選』 (保育実用書シリーズ)	チャイルド本 社	L改作
67	1977年、月不明 (昭和52年)	絵本	宮城まり子	(書名と同じ)	『ハメルンの笛ふき』(まん が世界昔ばなし11)	TBSブリタニ カ	L改作
68	1978年2月 (昭和53年)	本	野上彰 (2冊目)	「ハンメルンの笛ふき」	『むらさきいろの童話集』 (ラング世界童話集10)	偕成社	L忠実



69	1978年6月 (昭和53年)	本	瀬川昌男	「ハメルンの ふえふき」	『しあわせのハンス』(世界のむかし話③ ドイツ編)	朝日ソノラマ	L改作
70	1978年9月 (昭和53年)	本	小川一枝	「ハメルンのふえふき」	『赤ひげとぶどう酒商人ほか』(世界の民話6 ドイツ編)	家の光協会	L改作
71	1978年11月 (昭和53年)	絵本	藤田圭雄	(書名と同じ)	『ハメルンの笛ふき』(講談社の絵本3)	講談社	L改作
72	1979年7月 (昭和54年)	絵本	渡辺和雄 矢崎節夫文	「ハメルンのふえふき」	『ハメルンのふえふき』(国際版少年少女世界童話全集第8巻)	小学館	B改変
73	1979年10月 (昭和54年)	絵本	村野四朗	(書名と同じ)	『ハーメルンのふえふき男』(ファミリー絵本27)	岩崎書店	B忠実
74	1979年11月 (昭和54年)	戯曲	小池タミ子 (2冊目)	「ハメルンの笛吹き」	『もえろ天の火』(東書児童劇シリーズ童話劇集2)	東京書籍	L改作
75	1980年12月 (昭和55年)	絵本	早乙女忠 (1冊目)	(書名と同じ)	『ハーメルンのふえふき』(世界のメルヘン絵本27)	小学館	B忠実
76	1980年、月不明 (昭和55年)	絵本	石原ちひろ	「ハーメルンの笛吹き男」	『ヒルダおばさんのおとぎばなし 親指トム そのほかのお話』	アスカコーポレーション	B忠実
77	1980年、月不明 (昭和55年)	戯曲	牧房雄	「舞踊劇：ハメルンの笛吹き」	『舞踊劇：ハメルンの笛吹き少年剣士 コザック剣士とカチューシャ娘』	東芝EMI	不明
78	1981年6月 (昭和56年)	本	河村隆史	「ハーメルンの子供たち」	『ドイツ伝説集・タンホイザー』(世界民話童話翻訳シリーズ18)	東洋文化社	G忠実
79	1981年10月 (昭和56年)	絵本	杉山經一	(書名と同じ)	『ハーメルンのふえふきおとこ』(絵本ファンタジア44)	コーキ出版	不明
80	1982年9月 (昭和57年)	絵本	西本鶏介 (2冊目)	(書名と同じ)	『ハンメルンのふえふき』	チャイルド本社	B忠実
81	1982年10月 (昭和57年)	戯曲	筒井敬介	「ハーメルンの笛吹き」	『何にでもなれる時間 筒井敬介児童劇集1』(東書児童劇シリーズ)	東京書籍	不明
82	1983年12月 (昭和58年)	絵本	竹村早雄	「ハメルンの ふえふき」	『ながぐつをはいたねこ』(母と子の幼稚園知育百科名作コース3)	集英社	B忠実
83	1983年、月不明 (昭和58年)	絵本	建石修志	「ハメルンのふえふき」	『ハメルンのふえふき すなにもうもれたまち』(創育の名作絵本6)	創育	不明
84	1984年3月 (昭和59年)	絵本	山下喬子	「ハメルンの笛吹き」	『ハメルンのふえふき』(学習版/世界名作童話全集 第17巻)	小学館	B忠実
85	1984年4月 (昭和59年)	絵本	小暮正夫	「ハーメルンのふえふき男」	『うそをついたらメメメの話』(愛蔵版 ふれあい世界名作 1巻)	学習研究社	G改作
86	1984年11月 (昭和59年)	本	上崎美恵子	(書名と同じ)	『はめるんのふえふき』(せかいの名作ぶんこ39)	金の星社	B改変
87	1985年3月 (昭和60年)	本	西本鶏介 (3冊目)	「ハーメルンのふえふき男」	『名作百科』2巻(学研こどもの特選シリーズ 「世界の名作」下巻)	学習研究社	不明

88	1985年10月 (昭和60年)	戯曲	平正夫	「ハメルンのふえふき」	『表現力を伸ばす劇あそび脚本集』(月刊保育とカリキュラム10月号別冊)	ひかりのくに	不明
89	1985年12月 (昭和60年)	絵本	おざわとしお	(書名と同じ)	『ハーメルンのふえふき』	偕成社	G改作
90	1987年2月 (昭和62年)	本	望月正子	(書名と同じ)	『ハーメルンのふえふき』	国土社	G改変
91	1987年4月 (昭和62年)	本	桜沢正勝 鍛冶哲郎	「ハーメルンの子供たち」	『ドイツ伝説集(上)』	人文書院	G忠実
92	1987年10月 (昭和62年)	戯曲	生越嘉治 (1冊目)	「ハーメルンのふえふき」	『こども・ミュージカル 世界名作』	あすなる書房	B改変
93	1988年7月 (昭和63年)	本	小沢正	「ハメルンの笛吹き」	『幼児に読んであげるおはなしのポケット』(世界の名作選集)	ひかりのくに	B改変
94	1988年、月不明 (昭和63年)	教科書	小池タミ子 (3冊目)	「ハメルンのふえふき」	『小学国語』4年下	大阪書籍	L改作
平成期							
95	1989年10月 (平成元年)	絵本	上地ちづ子	「ハメルンのふえふき」	『ハメルンのふえふき(こわいお話)』(世界こども名作100第14巻)	学習研究会	B改変
96	1989年11月 (平成元年)	絵本	金関寿夫	(書名と同じ)	『ハーメルンの笛ふき』	ほるぷ出版	B改変
97	1990年2月 (平成2年)	本	桜井信夫	「ハーメルンのふえふき 男のなぞ」	『オオカミにそだてられた子ども』(ほんとうにあった不思議な話3)	あすなる書房	G忠実
98	1990年9月1日 (平成2)	戯曲	山崎和男	「ハンメルンの笛吹き」	『小四教育技術』9月号	小学館	不明
99	1990年9月 (平成2年)	戯曲	野上彰 (2冊目)	「ハンメルンの笛ふき」	『小学生小さい劇の本 名作劇 5・6年』	国土社	B改作
100	1991年10月 (平成3年)	絵本	香山美子	(書名と同じ)	『ハメルンのふえふき』(世界の昔話7)	チャイルド本社	B忠実
101	1992年5月 (平成4年)	絵本	森峰あきら	「ハーメルンのふえふき」	『お月さまのひとりごとのお話』(くもんの読み聞かせ絵本)	くもん出版	不明
102	1992年6月 (平成4年)	絵本	平田昭吾 (1冊目)	(書名と同じ)	『ハメルンのふえふき』(名作アニメ絵本シリーズ74)	永岡書店	B改変
103	1993年1月 (平成5年)	本	辻真先	「ハメルンのふえふき」	『本当にあったような世界のふしぎ話』(どきどき・わくわくシリーズ)	学習研究社	不明
104	1993年7月 (平成5年)	絵本	矢部美智代 (1冊目)	(書名と同じ)	『ハーメルンのふえふき』(新ディズニーアニメランド26)	講談社	B改作
105	1993年11月 (平成5年)	雑誌	大石真	「ハーメルンのふえふき男」	『2年の読み物特集』下	学習研究社	L改変
106	1993年、月不明 (平成5年)	絵本	矢部美智代 (2冊目)	(書名と同じ)	『ハメルンのふえふき』(ワンダー名作館6)	世界文化社	B改変
107	1994年5月 (平成6年)	絵本	西本鶏介 (4冊目)	(書名と同じ)	『ハメルンのふえふき』(おはなし世界旅行2)	チャイルド本社	不明

108	1994年7月 (平成6年)	本	福光えみ子 (2冊目)	「ハメルンのふえふき」	『子どものための世界のお話』	新読書社	B改作
109	1995年、月不明 (平成7年)	本	矢部美智代 (3冊目)	「ハメルンの笛ふき ウ イリー少年のために」	『こどものための世界の名 作 愛と感動の物語』(別冊 家庭画報)	世界文化社	B忠実
110	1996年6月 (平成8年)	絵本	末吉暁子	(書名と同じ)	『ハーメルンのふえふきおと こ』(世界名作えほんライブ ラリー)	フレーベル 社	G改変
111	1998年12月 (平成10年)	絵本	矢部美智代 (4冊目)	「ハーメルンの笛吹き」	『おはなしかせてディズニ ー名作100話』第9集	講談社	B改作
112	1999年3月 (平成11年)	戯曲	生越嘉治 (2冊目)	「ハーメルンの笛ふき」	『3~4年生の劇の本 II』	あすなる書 房	B改作
113	2000年4月 (平成12年)	物語集	こわせたまみ	「ハーメルンの笛吹き」	『子どもの心に伝えたいお話 356+1 10・11・12月』	フレーベル 館	B改変
114	2000年11月 (平成12年)	物語集	西本鶏介 (5冊目)	「ハーメルンのふえふき 男」	『幼児のためのよみきかせお はなし集2』	チャイルド 本社	不明
115	2001年4月 (平成13年)	本	ときありえ	「ハメルンの笛ふき」	『世界のむかし話 二年生』 (学年別・新おはなし文庫)	偕成社	L忠実
116	2003年9月 (平成15年)	絵本	長田弘	(書名と同じ)	『ハーメルンの笛吹き男』	童話館出版	B忠実
117	2004年、月不明 (平成16年)	絵本	千葉幹夫 (1冊目)	「ハーメルンのふえふき 男」	『よみきかせおはなし絵本 3』(むかしばなし・名作 20)	成美堂出版	B改変
118	2005年11月 (平成17年)	絵本	不明	(書名と同じ)	『ハメルンのふえふき』(お はなしチャイルドリクエスト シリーズ 11月)	チャイルド 本社	L改変
119	2005年12月14日 (平成17年)	物語集	高橋啓	「笛吹き男」	『365日のベッドタイム・ス トーリー』	飛鳥新社	不明
120	2005年12月16日 (平成17年)	本	富士川義之	「ハーメルンの笛吹き 男」	『対訳ブラウニング詩集』	岩波書店	B忠実
121	2006年3月 (平成18年)	絵本	平田昭吾 (2冊目)	(書名と同じ)	『ハメルンのふえふき』(よ い子とママのアニメ絵本63)	ブティック 社	B改作
122	2008年、月不明 (平成20年)	本	おおつかのり こ	「ハーメルンのふえふき 男」	『あかいろの童話集』(アン ドルー・ラング世界童話集 第2巻)	東京創元社	L忠実
123	2009年10月 (平成21年)	物語集	千葉幹夫 (2冊目)	「ハーメルンの笛吹き」	『母と子のおやすみまえの小 さなお話365』	ナツメ社	不明
124	2010年3月 (平成22年)	絵本	池田香代子	(書名と同じ)	『ハーメルンの笛吹き男』	BL出版	G忠実
125	2010年11月 (平成22年)	物語集	上山智子	「ハーメルンの笛ふき」	『母と子の読み聞かせ世界の お話120』	ナツメ社	B改変
126	2010年12月 (平成22年)	物語集	西本鶏介 (6冊目)	「ハーメルンの笛ふき」	『男の子がだ〜いすきなお 話』(母と子の読み聞かせえ ほん)	ナツメ社	B改変
127	2011年3月 (平成23年)	物語集	田島信元 監修	「ハーメルンの笛ふき 男」	『子どもが眠るまえに読んで あげたい365のみじかいお 話』	永岡書店	不明

128	2011年9月 (平成23年)	物語集	千葉幹夫 (3冊目)	「ハーメルンの笛吹き」	『ママおはなしよんで幼子に聞かせたいおやすみまへの365話』	ナツメ社	不明
129	2011年12月 (平成23年)	物語集	主婦の友社編	「ハーメルンの笛ふき」	『頭のいい子を育てるおはなし366』	主婦の友社	B改変
130	2012年9月 (平成24年)	物語集	西潟留美子	「ハメルンの笛ふき男」	『考える力を育てるお話366』	PHP研究所	不明
131	2012年12月 (平成24年)	物語集	千葉幹夫 (4冊目)	「ハーメルンの笛ふき男」	『母と子の心がふれあう名作のきらめき365話』	ナツメ社	B改変
132	2013年7月 (平成25年)	物語集	舟橋愛	「ハーメルンの笛吹き男」	『おやすみまへのちいさなちいさなお話90 考える力を育むお話』	東京書店	不明
133	2014年12月3日 (平成26年)	物語集	長井理佳	「ハーメルンのふえふき男」	『考える力を育てる 元気な男の子のお話』(母と子のおやすみまへの小さなお話)	ナツメ社	不明
134	2014年12月26日 (平成26年)	物語集	早乙女忠 (2冊目)	「ハーメルンの笛ふき」	『強くやさしい心が育つ! 男の子に贈りたい名作』	PHP研究所	B忠実
135	2015年2月 (平成27年)	絵本	いもとようこ	(書名と同じ)	『ハーメルンのふえふき』	金の星社	B改変
136	2015年6月 (平成27年)	物語集	秋田喜代美 監修	「ハーメルンの笛吹き」	『ここを育てるおはなし101』	高橋書店	不明
137	2015年11月 (平成27年)	物語集	こうのみほこ	「ハーメルンの笛吹き男」	『0歳~6歳よみきかせ考える力を育てるお話90』	東京書店	不明
138	2016年1月 (平成28年)	雑誌	石津ちひろ	「ハーメルンのふえふきおとこ」	『おひさま』2016年2/3月号	小学館	不明
139	2016年3月 (平成28年)	物語集	芹澤健介	「ハーメルンの笛ふき」	『考える力を伸ばす! 心を育てる! 読み聞かせ366話』	新星出版社	B改変
140	2016年4月 (平成28年)	本	間所ひさこ (2冊目)	「ハーメルンのふえふき男」	『ジャックと豆の木など15話』(教科書にでてくるせかいのむかし話2)	あかね書房	B改変
141	2016年12月 (平成28年)	物語集	ささきあり	「ハーメルンのふえふき」	『おんなのこのめいさくえほんベストセレクション80』	西東社	不明
142	2017年2月 (平成29年)	物語集	小学館編	「ハーメルンの笛吹き」	『心やさしく賢い子に育つみじかいおはなし366』	小学館	不明
143	2018年6月 (平成30年)	本	高津美保子	「ハーメルンの笛ふき男」	『飼育小屋のさけび声』(怪談オウマガドキ学園28)	童心社	G改変
144	2018年7月 (平成30年)	物語集	瀧靖之 監修	「ハーメルンの笛吹き男」	『脳の専門家が選んだ『賢い子』を育てる100のものがたり』	宝島社	不明
145	2019年3月 (平成31年)	絵本	中脇初枝	(書名と同じ)	『ハーメルンのふえふき』(はじめての世界名作えほん47)	ポプラ社	B改変

【巻末資料2】邦訳の分類表

	冊数	単行本	冊数	雑誌	冊数	絵本	冊数	戯曲	冊数	紙芝居	冊数	物語集	冊数	教科書	冊数
G忠実	10	29 30 32 41 51 78 91 97	8	-	-	124	1	-	-	-	-	-	-	1	1
G改変	7	38 49 57 60 90 143	6	-	-	110	1	-	-	-	-	-	-	-	-
G改作	2	-	-	-	-	85 89	2	-	-	-	-	-	-	-	-
G小計	19		14		0		4		0		0		0		1
B忠実	22	5 8 16 35 37 64 109 120	8	9 15 17 53	4	63 73 75 76 80 82 84 100 116	9	-	-	-	-	134	1	-	-
B改変	31	4 10 20 43 55 86 93 140	8	6 11 16 24 25 36 44	7	12 65 72 95 96 102 106 117 135 145	10	-	-	-	-	113 125 126 129 131 139	6	-	-
B改作	17	18 19 26 34 54 108	6	-	-	13 59 104 111 121	5	21 40 92 99 112	5	23	1	-	-	-	-
小計	70		22		11		24		5		1		7		0
L忠実	6	7 42 50 68 115 122	6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
L改変	6	22 62	2	58 105	2	48 118	2	-	-	-	-	-	-	-	-
L改作	10	3 39 69 70	4	-	-	56 67 71	3	66 74	2	-	-	-	-	94	1
小計	22		12		2		5		2		0		0		1
不明	33	46 61 87 103	4	28 31 33 47 138	5	27 45 52 79 83 101 107	7	77 81 88 98	4	-	-	114 119 123 127 128 130 132 133 136 137 141 142 144	13	-	-
小計	33		4		5		7		4		0		13		0
ホフマン版	1	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
合計	145		53		18		40		11		1		20		2